ノ

【野】音ヤ埜に作る同じ、説文に「郊外也」易經の同人の疏に「野ハ是レ曠遠ノ處」詩經の魯頌の傳に「邑外ヲ郊トイヒ、郊外ヲ野トイフ」周禮秋官の「縣士掌野」の註に「地、王城ヲ距ル二百里以外三百里ニ至ルヲ野トイフ」大野・荒野・原野・郊野・平野などと熟す、また音讀するときは質朴にしてかざらざる義、論語に「質勝文則野」鄙野・朴野・疎野・質野などと熟す
また民閒の義、晉書に「朝野清晏」

【能】材藝ある者をいふ、書經大禹謨に「莫奭汝爭能」漢書の高祖傳に「能薄」註に「師古曰ク、能ハ材ヲ謂フナリ、能ハ本獸ノ名、形熊ニ似、足鹿ニ似タリ、物タル堅中ニシテ強力ナリ、故ニ人ノ賢材アル者、皆之ヲ能トイフ」また耐と通ずるときは音タイ漢書鼂錯傳に「胡貊之人、性能寒、揚粵之人、性能暑」

【能化】能く人を敎化する義にて僧の師の稱、その化せらるる弟子を所化といふ、

【農桑】農業と養蠶とをいふ、漢書揚雄傳に「世世以ー爲ー業」

【能士】材能ある人、荀子王霸篇に「足以容天下之ー士ー」

【農穡】種ゑつくるを農といひ、取り入るるを穡といふ、稼穡と義同じ、左傳襄九年に「庶人力於ーー」註に「種ヲ農トイヒ、收ヲ穡トイフ」演書食貨志に「厲山氏子アリ、農トイフ、能ク百穀ヲ植ウ、後世因リテ耕ス者ヲ名ヅケテ農トイフ」

【能書ハ筆ヲ擇バズ】(能書不擇筆)上手の書家は筆の「ヨシアシ」を擇ぶことなしとの義、能一に善に作る、唐書歐陽詢傳に「褚遂良非精筆佳墨、未嘗輒書、嘗問虞世南曰、吾書孰與詢、答曰、吾聞、詢不擇紙筆皆得、如志、君豈得比、また王肯堂筆麈に「ーーーーー、浪語也、古來唯稍率更令不擇筆、然晉人遺意至歐陽漸失矣、また升菴集に「太白可謂能書不擇筆矣」

【凌霄花】(ーーー)を見よ、

【能仁】釋迦牟尼をいふ、釋迦を飜して能仁と爲し、牟尼を譯して寂默と爲す、能仁は是れ姓、寂默は是れ字、姓は慈悲の物を利するに從ひ、字は智慧の理に冥さに取る、祖庭事苑に「梵云釋迦此言ーーニ

【濃濃】濃正音はヂョウ淡の反にして「コマヤカ」「オホシ」「厚シ」などの訓あり、ーーは露多き貌、詩經小雅に「零露ーー」

【農ハ國ノ本】帝範に「夫食爲人天、農爲國本」農業は政の根本たる義、

【濃抹】色をこくぬること、蘇軾の西湖の句に「淡妝ーー也相宜」也一に兩に作る、

【野ニ青艸ナシ】(野無青艸)左傳に「室如懸罄」ーーーーこと、また晉中興書に「中原喪亂、鄉人共ニ郗鑒ヲ推シ主トナシ千餘家ト難ヲ魯國ノ澤山ニ避ク、百姓饑饉シ野ニ青艸ナシ、野鼠蟄燕ヲ掘リ之ヲ食フ」

【上ルトキハ抗ガルガ如ク下ルトキハ墜ツルガ如シ】(上如抗下如墜)歌聲の高き者は、抗擧するが如く、その下れるものは、墜堕するが如きをいふ、禮記の樂記に歌者上如抗下如墜と墜はもと隊に作る、同じ、

格百五則

農之子恒爲農(國語)

論農曰、深耕熟耨、正畛均端、除草務盡、良農之事、必強於人、(賈思勰齊民要術序)

農不如工、工不如商、刺繡文不如倚市門(史記貨殖傳)

農事傷則饑之本也、女工害則寒之源也(劉劭新論)

飲且食兮、寧而庶、無不足兮、奚所望、(韓愈送二李愿一序)

八

【巴】 郡名、漢・南宋は益州に、晉は梁州に屬す、今の四川重慶府巴縣の西なり、隋は巴郡の下に、巴縣あり、唐宋以後縣名とす、今の重慶府巴縣の治これなり、また唐・五代・宋・元・明は州名にもあり、今の四川保寧府巴州の治これなり、

【笳】 「ハタガシラ」伯に通用す、笳は借字、左傳成二年に「五伯之笳也」註に「夏伯昆吾、商伯大彭・豕韋、周伯齊桓・晉文〇或曰、桓・文・宋襄・秦穆・楚莊」疏に「伯者長也、言爲諸侯之長也、鄭康成云、笳者把也、言把持王者之政教、故其字或作伯或作笳也」(霸者)を見よ、

【梅篇】 梅に篇は和歌にはよく詠ずれども漢土にてはその例少し、唐の王維の早春行に「紫梅發初遍、黃鳥歌猶澁」などややこれに近し(篇)を參看せよ、

【佩韋】 韋は、柔かなるもの、その緩なるを取りて、性の急なるを矯むるなり(韋ヲ佩ビ)を見よ、

【俳優】 戲劇をなす人、ワザヲギ、孔子家語に「定公與齊侯、會於夾谷、孔子攝行相事」(中略)——俳儒戲於前ニ漢書嚴助傳に「東方朔・枚皐不根持論、上頗——嗇之」俳倡に同じ、

【梅雨】 「ツユ」の雨、初學記に「梅熟スル時ニ雨フルヲ梅雨トイフ」庚溪詩話に「江南五月梅熟シ、時時霖雨旬ニ連ル之ヲ黃梅ノ雨トイフ」埤雅に「江湘二浙四五月閒、梅欲黃落、則水潤土濕柱礎皆汗、蒸鬱成雨謂之——」

【貝葉】 錦字箋に「西域——ヲ以テ經ヲ寫ス、故ニ經ヲ以テ一ト——トナス」と、——は梵語貝多羅葉の略、天竺の多羅樹の葉、紙に代へ、針にて經文を刻みつく、葉の長さ四五尺、幅五六寸、固く厚く二つに折れて萬年青の葉の如し、酉陽雜俎に「貝多ハ摩伽陀國ニ出ヅ、長サ六七尺、冬ヲ經テ凋マズ、コノ樹三種アリ、西域ノ經書ヨノ三種ノ皮葉ヲ用フ」

【灰ヲ飲ミ胃ヲ洗フ】 (飲灰洗胃)心を改めて善にうつるといふ義、南史の荀伯玉傳に「若許某自新、必呑刀刮腸、飲灰洗胃云云」

【枚ヲ銜ム】 (銜枚)喧囂カマビスシ)を止むるなり、枚は形箸に似たる者、兩端に小さ紐をつけ、横さまに口にふくみて、頭後に繋ぐときは、言ふこと能はず、周禮秋官に「——氏」あり、楚辭に「願——而無言」言分」また國語に「令左軍——ヲ浮江、五里以須、亦令右軍——ヲ臨江、五里以須」史記高祖本紀に「夜——擊項梁大破之」

【敗荷】 枯れやぶれたる蓮の葉(翻毛)を見よ、

【裴楷】 晉の人、字は叔則、秀の從弟、容儀俊爽時人以て玉人と稱す、雅書に博渉し、少しくて王戎と名を齊うす、武帝の時、散騎侍郎に累官し、後ち中書令に遷り、開府儀同三司に終る、

【媒介】 人と人との閒に立ちて取り持つ者をいふ「ナカウド」唐書に「古今用人必因——」

【枚皐】 字は少孺、漢の淮陰の人、乘の子、武帝の時、郎に拜せらる、談諧を好み、賦頌を善くす、又極めて敏捷なり、時に以て東方朔に比す、揚雄曰く、軍旅の際、戎馬の閒、飛書馳檄には則ち枚皐を用ふべしと、

【裴行立】 唐の貞元中桂管觀察使となり、善政民に及び、盜遁れ、奸革まる、民その德に懷き祠を立てて祀る、

【裴休】 字は公美、唐の孟州の人、文章を能くし、楷書に工なり、人と爲り醞藉にして進止雍閒なり、嘗て鹿を餽る者あり、諸生共に之を瞰む、休食はずして曰く、蔬食なほ足らず、今一たび肉を啖はば後ち何を以てか繼がんと、賢良方正に舉げられ相に拜す、宣帝かつて曰く、此れ眞の儒者なりと、

【廢居】 品物を貿易して利を占むるをいふ、漢書の食貨志に「富商轉穀百數——居邑」の註に「穀ハ車ナリ、或ハ廢置スル所ロアリ、或ハ居蓄スル所ロアリ、邑中ニ居キ、以テ時ニ乘ジテ利ヲ射ルナリ」

【枚擧】 枚は數なり、物を數へ擧ぐるをいふ、書經無逸の傳に「周公言自殷王中宗、及高宗、及祖甲、及我周文王、及云者、因其先後次第、而——之辭也」

【敗軍ノ將ハ以テ勇ヲ言フベカラズ】 敗軍せし者は、再び軍事を說くべからざる義、史記の淮陰侯傳に「韓信趙ヲ破リテ趙王歇ヲ禽ニス、信乃チ軍中ニ令スラク、廣武君ヲ殺スナカレ、能ク生得スル者アラバ、千金ニ購ハント、是ニ於テ廣武君ヲ縛シテ戲下ニ致ス者アリ、信乃チ其ノ縛ヲ解キ、東鄉シテ坐セシメ、西鄉シテ對シテ、之ニ師トシ事フ、廣武君ニ問ヒテ曰ク、僕北、燕ヲ攻メ、東、齊ヲ伐タント欲ス、何若シテカ功アラント、廣武君辭謝シテ曰ク、臣聞ク、敗軍之將不可以言勇、亡國之大夫不可以圖存ト、今、臣ハ敗亡ノ虜ナリ、何ゾ大事ヲ慮ルニ足ランヤト」呉越春秋に「范蠡曰、臣聞亡國之臣不敢語政、敗軍之將不敢語勇」

【梅花】 (梅)を見よ、

【俳徊】（ハイカイ）「タチモトホル」ためらひて進まざる貌、漢書高后紀に「——往來」

【裴頠】（ハイ）晉の人、字は逸民、秀の子弘雅にして遠識あり、博學稽古、惠帝の時、國子祭酒となり、尚書侍中に遷る、後ち趙王倫のために害せらる、晉の俗虛無を尚ぶ、頠、崇有論を著し以て之を矯ひ（談藪）を參看せよ、

【梅花粧】（バイカショウ）歲時紀麗の竹葉酒——の注に「宋ノ武帝ノ女壽陽公主、人日臥於含章簷下、梅花落公主額上、成五出之花、拂之不去、皇后留之、自後有——是也」婦女が額の上に梅花を貼するをいふ、

【梅花道人】（バイカドウジン）（吳鎭）を見よ、

【梅花ノ風】（バイカノカゼ）二十四番花信風の第一なり（二十四番）また（楝花ノ風）を見よ、

【梅花ノ國】（バイカノクニ）梅樹の多くある地をいふ、徐渭の詩に「萬樹——、垂簾試一凭」

【拜官】（ハイカン）就官に同じ、官に就く時、君前に拜す、故に拜といふ、夢溪筆談に「三司副使已上——則拜舞于階上」

【梅花無盡藏】（バイカムジンゾウ）梅が香の盡くるなきをいふ、陸放翁の詩に「要識——、人人襟袖帶香歸」

【稗官小說】（ハイカンショウセツ）稗官は小官なり、小說は細碎の言なり、漢書の藝文志に「小說家者流、蓋出於稗官、街談巷語、道聽塗說者之所造也」とあり、細米を稗となす、街談巷語は細碎の言なり、王者閭巷の風俗を知らんと欲す、故に稗官を立てて、之を稱說せしむるなり、

【梅逸臣】（バイイツシン）（梅聖俞）を見よ、

【媒孽】（バイゲツ）麴餅を媒といふ、漢書司馬遷傳に「——其短」の註に「媒ハ酒酵ナリ、孽ハ麴ナリ、其ノ罪ヲ釀成スルヲイフ」孽は糵に同じ、

【佩弦】（ハイゲン）弦はその物の急なるに取りて、その心の緩なるを矯むるなり（韋ヲ佩ビ）を見よ、

【賣劍買牛】（バイケンバイギュウ）（劍ヲ賣リ）を見よ、

【廢錮】（ハイコ）身を終るまで仕ふること能はざらしむるなり、禁錮に同じ、仕進の路を塞ぐなり、漢書息夫躬傳に「皆免——」

【賣國】（バイコク）己が私の利を得んがために國を他に與へ、若くは國の不利なることをなすをいふ、史記の蘇秦傳に「左右——、反覆之臣也」また晉の世家にも「鄭人或賣其國於秦」また宋史に「文天祥曰、奉國與人是亦一亡之臣也、賣國者、有所利而爲之」

【賣婚】（バイコン）「ヨメイリ」する時に、男の家より、女の家へ資を與ふること、史通に「山東士人尚門閥、嫁娶必多取資

漢書の藝文志に「小說家者流、蓋出於稗官」街談巷語、道聽塗說者之所造也」とあり、細米を稗となす、街談巷語は細碎の言なり、王者閭巷の風俗を知らんと欲す、故に稗官を立てて、之を稱說せしむるなり、

【梅逸臣】（バイイツシン）（梅聖俞）を見よ、

【媒孽】（バイゲツ）麴餅を媒といふ、漢書司馬遷傳に「——其短」の註に「媒ハ酒酵ナリ、孽ハ麴ナリ、其ノ罪ヲ釀成スルヲイフ」孽は糵に同じ、

【佩弦】（ハイゲン）弦はその物の急なるに取りて、その心の緩なるを矯むるなり（韋ヲ佩ビ）を見よ、

【賣劍買牛】（バイケンバイギュウ）（劍ヲ賣リ）を見よ、

【廢錮】（ハイコ）身を終るまで仕ふること能はざらしむるなり、禁錮に同じ、仕進の路を塞ぐなり、漢書息夫躬傳に「皆免——」

【賣國】（バイコク）己が私の利を得んがために國を他に與へ、若くは國の不利なることをなすをいふ、史記の蘇秦傳に「左右——、反覆之臣也」また晉の世家にも「鄭人或賣其國於秦」また宋史に「文天祥曰、奉國與人是亦一亡之臣也、賣國者、有所利而爲之」

【賣婚】（バイコン）「ヨメイリ」する時に、男の家より、女の家へ資を與ふること、史通に「山東士人尚門閥、嫁娶必多取資

【梅妻鶴子】（バイサイカクシ）梁雨軒詩話に「宋ノ林和靖、西湖ノ孤山ニ住ス、梅花ヲ植エ鶴ヲ畜フ、常ニ曰フ、鶴ヲ子ト爲シ、梅ヲ妻ト爲スト」（疎影橫斜）を見よ、

【買山錢】（バイサンセン）（山ヲ買フ錢）を見よ、

【梅酸ノ渴】（バイサンノカツ）太平記卷十五に見ゆ、祖庭事苑に「梅林止渴、魏武帝與軍士失道、大渴而無水、遂令曰、前有梅林、結子甘酸可以止渴、士卒聞之、口中水出遂得及前原」

【倍蓰】（バイシ）倍は一倍、蓰は五倍なり、孟子滕文公上に「或相——、或相什佰、或相千萬」

【裴秀】（ハイシュウ）字は季彥、潛の子、少くして學を好み、八歲能く文を屬す、時に語りて曰く、後進領袖有——と、三國の時、魏に仕へて黃門侍郎散騎常侍となる、嘗て官制を改定し、及び禹貢地圖を作る、累封せられて濟川侯に至る、

【癈疾】（ハイシツ）治すべからざる不具の病を謂ふ、禮記禮運に「矜寡孤獨——者有所養」明律の便說には「——トハ癈瘂・聾・腰脊癱瘓・二枝ヲ折ルヨイフ」（篤疾）を參看せよ、癈は固疾なり、廢に通用す、

【倍日幷行】（バイジツヘイコウ）（日ヲ倍シ）を見よ、

【拜賜ノ師】（ハイシノシ）再敗の兵をあざけり稱す、左傳に「及秦師——、戰于彭衙、秦師敗績、晉人謂秦——之——是より先き、秦の將孟明、晉と戰ひ、敗れて虜と爲り、宥されて歸る、時に若從君惠而免之、三年將拜君賜といひしに本づく、

【陪臣】（バイシン）陪は重なり、臣の臣をいふ「マタグライ」論語季氏篇に「陪臣執國命、三世希不失矣」禮記曲禮に「列國之大夫入天子之國曰某士、自稱曰陪臣某」左傳僖十二年にも「——敢辭」註に「諸侯ノ臣、天子ニ稱シテ——トイフ」

【敗醬】（ハイショウ）「ヲミナヘシ」古今醫統に「苦蔗菜、マター——草トモイフ」と見ゆ、

【媒妁】（バイシャク）媒は謀なり、妁は酌なり、二姓を媒合斟酌して結婚せしむる義、婚姻の「ナカダチ」白虎通に「男不自專娶、女不自專嫁、必由父母須——何遠恥防淫佚也」孟子滕文公上に「不待父母之命、——之言、鑽穴隙相窺、踰牆相從、則父母國人皆賤之」

【梧杓ニ勝ヘズ】（ゴヒョウニタエズ）（不勝梧杓）已に醉ひてまた飮むこと能はざるをいふ、史記項羽紀に「沛公——不能辭」

【拜首】（ハイシュ）空首に同じ、拜頭手に至るをいふ、書經に「皐陶

——稽首國言」稽首は、拝頭、地に至るなり、

【拝受】人より贈られたる物を拝して受くる義、禮記の玉藻に「大夫親賜ニ士一ニ」論語郷黨篇に「康子餽レ藥、拝而受レ之、曰、丘未レ達、不レ敢嘗」

【蛫出】後を追ひて續續と出づるをいふ、後漢書に「名臣——」

【背師】諧誦(ソラヨミ)に同じ、魏志王粲傳に「粲與レ人共行、讀二道邊碑一、人問曰、卿能誦記乎、對曰、能、因使レ背而誦レ之、不レ失二一字一」楊基の詩に「九齡六經已畢讀、掩卷——無二製肘一」

【枚乘】漢の淮陰の人、呉王濞の郎中となる、王異謀あり、切諫すれども納れられず、去りて梁に之く、景帝の時、弘農の都尉に拝し、病を以て免す、武帝即位し、安車蒲輪を以て之を徴す、道にして卒す、子の皋字は少孺、詼諧を好み、賦を善くす、

【陪乘】お相手に乘るをいふ、戰國策に「安陵君進ンデ曰ク、臣入リテハ則チ席ヲ編ネ、出デテハ則チ陪乘ス」註に「編ハ連ナリ、王ト席ヲ連ヌルヲイフナリ、陪ハ陪侍ナリ、王ノ乘車ニ乘ルナリ」

【裴松之】字は世期、明帝の人、劉宋に仕へ、中書侍郎となる、墳籍を博覽し、身を立つること倹素なり、陳壽の三國志に注す、その子駰は史記に注す、

【倍稱之息】二倍の利息なり、晁錯の論貴粟に「賦斂不レ時、朝令而暮改、當二其有一者半一、賈而賣、亡者取——二穀ある者は賤賣して急用に應じ、穀無き者は人に稱貸して加倍の息を取らるるなり、

【配食】神として合せまつる義、配享に同じ、晉書陸雲傳に「神、浚儀令、稱二神明一去、官百姓思レ之、圖二畫形像一——縣社——」

【背水之陣】敵前に在り、水後に在り、退くときは、則ち水に溺る、故に進んで退かず、誓て敵を破らんと欲するなり、兵法に所謂之を死地に陷しいれて而して後生き、之を亡地に置きて而して後存ずといふ義に同じ、韓信背水の陣を以て、趙を破り、趙王歇を擒にせしと、史記の淮陰侯傳に見ゆ、また尉繚子にも「背水陳爲二絶地一向二阪陳一爲二廢軍一」

【孛星】「ハハキボシ」その現はるるは災異の前兆として忌む、妖孛または彗孛と連用す、漢書音義に「妖星ヲ——彗星・長星トイヒ、マタ欃槍トイフ」爾雅の註に「之ヲ孛トイフハ、ソノ形孛孛トシテ掃帚ニ似タルヲイフ」(彗星)を見よ、

【梅聖俞】名は堯臣、聖俞はその字詢の從子、宋の宣州

宣城の人、仁宗召し試み、國子監直講と爲り、都官員外郎に遷る、唐書を修するに預る、嘉祐五年書成り未だ奏せずして卒す、年五十九、堯臣詩に工、歐陽修以て詩友となす、家貧にして飲酒を喜み、物と忤ふなし、賢士大夫多く之に從ひ游ぶ、嘗て孫子を註す、また宛陵集四十巻あり(宛陵集)を見よ、

【拝石】(奇石ヲ)を見よ、

【敗績】軍の大に敗るるをいふ、大敗するときは、其の功績を失ふ、故にいふ、左傳の莊十一年に「大ニ崩ルルヲ——トイフ」とあり、崩とは岸のくづるるが如く、大敗するをいふ、轉じては軍に限らず、すべて事の敗るるにもいふ、

【沛然】盛大流行の貌、孟子離婁上篇に「——德敎溢レ乎四海一」また雨の盛んなる貌、同書梁惠王上篇に「天油然作レ雲、——下レ雨」沛一に霈に作る、同じ、

【霈然】前條を見よ、

【胚胎】事の「キザシ」なり、始の義、爾雅の註に「——未成、亦物之始也」

【梅道人】(吳鎭)を見よ、

【賈餗天】餗は米を煮て作る「アメ」宋祁の寒食の詩に「簫聲吹暖——」劉禹錫の詩に「餗市喧簫鼓」寒食の節の天氣を——といふ「アメヤ」が笛を吹きて賣りゆくこと我が邦にもこの風俗あり、

【杯蛇角影】(盃中ノ)を見よ、

【沛澤】沛は草の水に生ずるをいふ、草木茂りて禽獸の棲みかくるる處なり、孟子滕文公下に「園囿汚池——多、而禽獸至レ公羊傳僖四年に「大陷二于——之中一」

【擺脫】除き去るなり、擺は開なり、撥なり、推し開く義、韓偓の送"入入"道詩に「忸怩非二壯志一——是良圖」また宣和書譜に「李邕——舊習筆力一新」

【貝多羅葉】(貝葉)を見よ、

【背馳】そむき馳する義、反對するをいふ、曹植の詩に「今我唯困蒙、群士所——」

【盃中ノ蛇影】疑心暗鬼を生ず、といふに同じ、晉書の樂廣傳に「樂廣河南ノ尹ニ遷ル、嘗テ親客アリ、久闊復タ來ラズ、廣其ノ故ヲ問フ、答ヘテ曰ク、前ニ座ニ在リテ酒ヲ賜フ、コトヲ蒙ル、飲ムニ方リテ忽チ盃中蛇アルヲ見テ、意甚ダ之ヲ惡ム、既ニ飲ミテ而シテ疾ム、時ニ河南ノ廳事ノ壁上ニ角弓アリ、漆畫モテ蛇ヲ作ル、廣意ノ盃中ノ蛇ハ、即チ角弓ナラント、復タ前處ニ設酒シ、客ニ謂ヒテ曰ク、盃中復タ見ル所ロアリヤ不ヤ、答ヘテ曰ク、見ル所ロ初ノ如シト、廣乃チ其ノ所

以ヲ告グ、客豁然トシテ意解ケ、沈痾頓ニ愈ユ」とあり、角弓は角を以て弓を飾るなり、

【拝座】（ハイザ）　權貴の人に阿り事ふる故事、晉書に「石崇與潘岳、諂事賈謐、康成君、每出崇降車路左、望塵而拜」また賢者を尊ぶをいふ、圓機活法に「漢ノ孔光、黄賢ニ過フ、座ヲ望ミテ拝ス、故ニ——ト曰フ」

【拝除】（ハイヂョ）　官を拜命する義、後漢書の第五倫傳に「刺史太守ノ——、京師及ビ道洛陽ニ出ヅル者ハ、宜シク皆召見スベシ、因リテ博ク四方ヲ問ヒ、兼テ以テ其ノ人ヲ觀察スベシ」と、漢書田蚡傳の註に「凡ソ除ト言フ者ハ、故官ヲ除去シテ新官ニ就カシムルナリ」

【梅天】（バイテン）　入梅のそらをいふ、圖繪寶鑑に「非陰非霽如——」

【敗天公】（バイテンコウ）　「ヤブレガサ」本艸綱目に「——ハ、弘景曰ク、此レ乃チ人ノ蔵クトコロノ竹笠ノ敗ルルモノ、李時珍曰ク（中略）雩天論ニイフ、天ノ形笠ノ如クニシテ地ノ表ヲ冒フ、則チ天公ノ名、蓋シ此ニ取ル」

【買田問舍】（バイデンモンシャ）　新井白石が室鳩巣に與ふる書翰に見ゆ、これは晉書故事に魏志陳登傳を引きて、「陳登字ハ元龍、許汜與劉備、在劉表座上、備與表論天下人物、汜曰、陳元龍湖海之士、豪氣未除、昔見元龍、無主客禮、久不相與語、自上大床、臥、使客臥下床、備曰、君求田問舍、言無可采、元龍何緣與君語、求田問舍は天下の亂を救はんとはせずして自ら一身の安を求めんと欲する義、求を買にかへ用ひたるなり、北史にも「田ヲ求メ舍ヲ問フハ、昔賢ノ鄙ムトコロ」

【裴度】（ハイド）　字は中立、聞喜の人、唐の貞元の初、進士となり、中書侍郎に至り、兵を督して淮蔡を討平し、晉國公に封じ、中書令を加へらる、開成三年卒す、文忠と諡せらる、度身を以て天下の輕重に係る者三十年、四朝に歴事し、全徳を以て終始す、

【廢居】（ハイキョ）　賤しき業を爲す者をいふ、肉を屠りて賣るも倡れざる義、戰國策に「太公望、齊之逐夫朝歌之——也」

【悖徳】（ハイトク）　悖は逆なり、徳にそむきもとる義、孝經に「不愛其親而愛他人者、謂之悖徳、不敬其親而敬他人者、謂之悖禮」

【買櫝還珠】（バイトクカンシュ）　（櫝ヲ買ヒ)を見よ、

【媒ニ因ラズシテ親ム】（バイシンジュ）　（親ハ媒ニ)を見よ、

【拝年】（ハイネン）　年賀にまはる義、熙朝樂事に「正月元旦、夙ニ興キ盥嗽シテ黍糕ヲ啖フヲ年糕トイフ、家ノ長少畢ク拝シ姻友簽ヲ投ジテ互ニ拝スルヲ——トイフ」

【媒婆】（バイバ）　「ナカウドババ」訓蒙字會に「媒妁、俗呼男曰媒人、女曰——、總稱中人」男女の媒妁人をすべて中人といふとの義なり、

【杯盤狼籍】（ハイバンラウゼキ）　酒席の紛亂せるさま、史記滑稽傳に「履舃交錯、——、堂上燭滅」（狼籍）を見よ、

【肺附】（ハイフ）　至親の義、猶ほ肝肺の相附くが如し、漢書劉向傳に「臣幸得托——」また唐書に「戴胄敢納セシ所ロ、即チ薬ヲ削ル、帝曰ク、胄ノ我ニ於ケル——ノ親アルニ非ズ、惟忠賁ノ激スルトコロノミ」と、敢は陳なり、納は進なり、善を陳べ諫を納るるをいふ、

【肺腑】（ハイフ）　猶ほ骨肉といふが如し、親戚の義、史記惠景閒侯者年表に「諸侯子弟若——」また漢書中山王傳に「臣雖薄、也、得蒙——」また衛青傳に「青幸得以——待、罪行閒」

【媒嫌】（バイケン）　（ナカウドヲンナ）青箱記に「使」——通意」とあり、媒婆に同じ、

【梅福】（バイフク）　字は子眞、漢の九江壽春の人、少くして長安に學び、尚書穀梁春秋に明かに、郡の文學となり、南昌尉に補せらる、上書して事を言ふ、王莽政を專にするに及び、福一朝妻子を棄てて去る、人傳へて以て仙となす、その後ち人福を會稽に見る者あり、姓名を變じて吳の市門の卒となれりといふ、

【廢物】（ハイブツ）　無用の物なり、吳越春秋に「不能報讐、畢爲——

【佩文韻府】（ハイブンインフ）　四百四十四卷、清の聖祖皇帝康熙四十三年に「張玉書・陳廷敬・李光地等七十六人、勅命に從ひて編纂に著手し、五十年十月成る、別に康熙五十五年御定の韻府拾遺一百十二卷ありて合刻せり、この書、韻府群玉・五車韻瑞に載するところのものは之を韻藻といひて前に列し、兩書に未採のものは別に增の字を標して後に列し、每語、經史子集の次を以てその出據を注す、清の鄧愷の編せし——約編三十冊はこの書を節約せしものなり、

【賣文活ヲ爲ス】（バイブンクワツヲナス）　（文ヲ賣リ)を見よ、

【敗北】（ハイボク）　北は幽陰の處、故に軍敗るるを北といふ、史記項羽紀に「當ル所ロノ者ハ破レ、擊ツ所ロノ者ハ服ス、未ダ嘗テ敗北セズ」一說に、北は背なり、敗走するをいふと、荀子議兵篇の注に「北ハ乖敗ノ名、故ニ敗走ヲ以テ北トナス」

【賣名】（バイメイ）　（名ヲ賣ル)名を世に衒ふ義、莊子天地篇に「子非獨弦哀歌賣名聲于天下者乎」

【梅林渴ヲ止ム】（バイリンカツヲヤム）　（梅酸ノ)を見よ、

【拝領】（ハイリョウ）　人より贈られたる禮物を受くるをいふ、類書

簗要に「拝シテ人ノ禮ヲ領クルヲ——トイフ」拜受に同じ、

【悖禮】 禮にもとるをいふ、孝經に「不レ敬二其親一而敬二他人一者謂二之悖禮一悖徳」を參看せよ、

【梱】 正字通に「木ヲ斷リテ背ニ孔ヲ穿チ、官衙ニ之ヲ設ケテ號召ノ節トナス、或ハ竹ヲ以テ筒ヲ作リ、兩頭ニ節ヲ留メ旁ニ小孔ヲ穿ツ之ヲ擊ツニ聲アリ云云」六書故に「字邦ニ从フハ、聲ノ邦邦然タルヲ謂フ」

【望】 「モチヅキ」即ち陰暦十五夜の滿月、釋名に「望者月滿之名也、月大十六日、小十五日、日在レ東、月在レ西、遙相望也」蘇軾の後赤壁賦に「是歳十月之望」既望は十六夜なり、

【芒鞋】 「ワラグツ」草鞋に同じ、鶴林玉露に「有二尼悟道詩一云、盡日尋レ春不レ見レ春、——蹈遍隴頭雲、歸來笑撚二梅花一嗅、春在二枝頭一已十分、蘇は鞋と同じ、

【忘憂ノ物】 酒をいふ(愁ヲ忘ル)(惟酒以テ)を見よ、

【方以智】 字は昌公、鹿起また密之と號す、桐城の人、明の崇禎十三年の進士、翰林檢討に官す、盡を善くす、山水元人の派を得たり、淡烟點染、筆三昧に入る、博學にして藝能多し、甲申の後、僧と爲り、名を宏智、字を無可と改め、別に藥地和尚と號す、恥嗒枯寂、貧士も堪ふる

こと能はざる者あり、著すところ通雅・古今性說・一貫問答・物理小識等あり、

【褒衣博帶】 褒は大裾なり、褒は俗字、博帶は幅廣き帶、儒者の服なり、漢書儒不疑傳に「不疑冠二進賢冠一(中略)——、盛服至二門上一謁」

【鴈羽之嗟】 臣民征役に勞してその父母を養ふことを得ざるを嗟くなり詩經唐風鴈羽篇の首章に「肅肅鴈羽、集二于苞栩一、王事靡レ盬、不レ能レ蓺二稷黍一、父母何怙、悠悠蒼天、曷其有レ所」肅肅は羽の聲、鴈は鳥の名、雁に似て大なり、後趾なし「ノガン」曷其有所は何の時か我をしてその所を得しめんやといふ意、序に「鴈羽ハ時ヲ刺ルナリ、君子征役ニ從ヒ、ソノ父母ヲ養フコトヲ得ズ、而シテ此ノ詩ヲ作ルナリ」

【望雲】 子が旅にて親を慕ふをいふ、唐書狄仁傑傳に「狄仁傑、幷州ノ法曹參軍ヲ授ケラル、親ハ河陽ニ在リ、仁傑太行山ニ登リ、反顧シテ白雲ノ孤飛スルヲ見テ、左右ニ謂ヒテ曰ク、吾ガ親ソノ下ニ舍セリト、顧望スルコト久之シ、雲移リテ乃チ去ル」

【鮑永】 東觀記に「漢ノ——、字ハ君長、上黨ノ人ナリ、少クシテ志操アリ、後母ニ事ヘテ至孝ナリ、妻嘗テ母ノ前ニ於テ狗ヲ叱ス、永之ヲ去ル、官尚書僕射タリ、後チ

東陽侯ニ封ゼラル、

【彭越】 漢の昌邑の人、常に鉅野澤中に漁す、陳勝項梁——少年相聚る、越に請ひ長たらしめ、諸侯の散卒を收めて千餘人を得たり、沛公昌邑を擊つ、越兵を以て之を助く、是より漢の遊兵となり楚を擊ち、項羽を垓下に敗る、功を以て梁王に封ぜらる、韓信・黥布と共に同功一體の人と稱せらる、後ちその叛を告ぐる者あり、廢せられて庶人となり、巳にして殺さる、

【方圓合ヲ殊ニシ、鉤繩態ヲ異ニス】 (方圓殊合鉤繩異態)楚辭に見ゆ、方と圓とは、其の性同じからず、鉤は曲、繩は直、其の態異にして合ふべからざるなり、

【帽ヲ落ス】 (孟嘉)を見よ、

【方ヲ刓リ、圓ト爲ス】 (刓方爲圓)刓は削なり、六書故に「削去二隅角一也」と、方正を改め圓滑となすの義、楚辭に「刓レ方以爲二圜兮一、常度未レ替」とあるは、人己れをして行を改めしめんとするも、常に操る所ろの正道を守りて、易はらずとの意なり、

【茅ヲ誅ス】 (誅茅)誅は剪除するなり草茅を除き去るなり、楚辭の卜居に「寧誅二草茅一以力耕乎」

【訪ヲ止ムルハ自修ニ若クナシ】 (止訪莫レ若自修)人の己をそしるを止むるは自ら德を修めてそしらるる本を去るに若かずとの義、魏志、王昶引くところの諺なり、上に「救二寒無一若二重裘一」の句あり、

【訪ヲ止ムルハ身ヲ修ムルニ如クハ莫シ】 (寒ヲ救フハ)を見よ、

【芳ヲ百世ニ流ス】 (流芳百世)芳名を後代に傳ふるをいふ、晉書に「晉ノ桓溫生レナガラニシテ大志アリ、嘗テ枕ヲ撫シ歎ジテ曰ク、男子芳ヲ百世ニ流スコト能ハズンバ、亦當ニ臭ヲ萬年ニ遺スベシト」

【暴ヲ以テ暴ニ易フ】 (以暴易暴)亂暴なる人を以て亂暴なる人に代ふるらしむるも、益なきをいふ、史記の伯夷傳に「武王已ニ殷ノ亂ヲ平ゲ、天下周ヲ宗トス、而シテ伯夷叔齊之ヲ恥ヅ、義、周ノ粟ヲ食ハズシテ首陽山ニ隱レ、薇ヲ采リテ之ヲ食フ、餓エテ且ニ死ナントスルニ及ビテ歌ヲ作ル、其ノ辭ニ曰ク、登二彼西山一兮、采二其薇一矣、以レ暴易レ暴兮、不レ知二其非一矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣、ト遂ニ首陽山ニ餓死ス」とあり、武王の暴臣を以て、殷紂の暴主に易ふるをいふ、

【貌ヲ以テ人ヲ取ル、之ヲ子羽ニ失ス】 (以貌取人、失之子羽)人は容貌のみにて取るべからざるをいふ、史記の仲尼弟子列傳に「孔子曰、吾以言取レ人失二之宰予一、

以貌取人失之子羽ニ

【萌芽】（バウガ）事の端緒をいふ、草木の初めてもえ出づるに喩ふ、漢書劉向傳に「詩始ー（ハジメ）ー」

【榜歌】（バウカ）舟人のうたふ歌、瓊顒士の句に「ーー天際聞（ニ）」榜は舟をこぐ「カイ」なり、歌ひつつ「カイ」を使ふを歌榜といふ、張說の句に「綠渚轉（テ）歌榜（チ）」

【烹醢】（ハウカイ）烹は「カマイリ」醢は「ヒシホ」にすること、古の刑法、殺戮の義、史記魯仲連傳に「吾將使（ト）紂王（チウオウ）ーー（セ）梁王（ニ）」

【咆哮】（ハウカウ）大いなる聲してほゆる義「ドナル」抱朴子に「ー者不必（シモ）勇（ユウナラ）淳謹者不必怯（シモナラ）」また虎のほゆる聲、常建の句に「日入聞虎咽（シ）、空山滿ーー」

【彭亨】（ハウカウ）膨脹するなり、彌明石鼎聯句に「豕腹脹（レタ）ーー」廣韻に膨脖に作る、義同じ、

【方孝孺】（ハウカウジュ）字は希直、一の字は希古、克勤の仲子なり、明の寧海侯城の人、少くして宋濂に從ひて學ぶ、洪武二十五年、薦を以て召され、漢中の敎授に除せらる、蜀の獻王其の賢を聞き、聘して世子の師となし、尊ぶに殊禮を以てす、召對するに名いはず、其の讀書の廬を號して正學といふ、惠帝位に即くに及び、召して翰林博士と爲し、侍講に遷る、建文四年、燕兵の執ふる所となり、獄に下さる、成祖孝孺をして登極の詔を草せしむ、孝孺筆を地に投じ、且つ罵りて曰く、死せんことは即ち死せんのみ、詔は草すべからずと、燕賊簒位の四字を大書す、成祖怒り命じて之を市に磔せしむ、孝孺慨然として死に就く、時に年四十六、著す所ろ遜志齋集二十四卷あり（遜志（シ）齋集）を見よ、

【方孝孺ノ篤厚】（ハウカウジュノトクコウ）明史に「方孝孺、宋景濂ノ門ニ在リテ高弟タリ、濂貶所ニ卒ス、私居シテ念及ビ、或ハ其ノ手蹟ヲ見或ハ談濂ノ事ニ及ブ毎ニ、輒（スナハチ）涕泣ス、既ニシテ漢中ニ官スルトキ、其ノ家存スルコト能ハズ、蜀王ニ言ヒテ厚ク之ヲ撫恤ス、舟發ニ次スル毎ニ、必ズ往キテ墓下ニ祭リ、慟哭時ヲ移シテ方ニ去レリ」

【方岳】（ハウガク）宋ノ人、字ハ巨山、秋崖ト號ス、詞翰ニ長ズ、小蘇アリ世ニ行ハル、方澄孫之ニ序シテ曰ク、奇奇怪怪ノ文、ソノ人ノ如ク、磊磊落落ノ氣、ソノ文ノ如シト」

【放學】（ハウガク）學課の終りて休みとなりたる義、陸游の詩に「貧看忘郊還（リル）家飯（ニスルテ）、恰似兒童ーー（ノ）時」

【暴客】（バウカク）外寇をいふ、易經繫辭に「重門擊柝（チ）、以禦（ノ）ーー（ニ）」

【包咸】（ハウカン）字は子良、漢の會稽の人、東海に客たり、赤眉の得るところとなる、晨夜經を誦して自若たり、賊異みて之を遣る、光武中興、鄉里に歸り孝廉に擧げられ、郎中に除す、入りて太子に論語を授け、大鴻臚に累遷す、明帝位に即き、咸に師傅の恩あるを以て、特に俸祿を加賜す、咸皆散じて諸生の貧しき者に與ふ、

【榜眼】（バウガン）進士の試に應じて第二番に及第せしをいふ、雲麓漫鈔に「世目狀元第二人（ヲ）爲ーー（ト）ニまた王禹偁の送朱嚴詩に「ーー科名釋褐初」

【方技】（バウギ）醫術の類をいふ、またその書をいふ、漢書藝文志に「侍醫李柱國校（テ）ーー（ニ）醫書を校正せしをいふ、晉書にも華於「圖緯ーー之書（ニ）莫不（ルハ）詳悉（セ）ニ」

【忘機】（バウキ）世の中のうるさき機事をうちわすれて心しづかなる義、李白の句に「陶然共（ニ）ーー（ヲ）」機とは、世に處するに巧なる心術などをいふ、

【冕期】（バウキ）禮記の曲禮に「八十九十ヲ耄（モウ）トイヒ、百歲ヲ期（シ）トイフ」とあり、書經大禹謨に「ーー（シンジン）倦（ム）于勤（ニ）」

【怱怱】（バウバウ）自ら矜（ホコ）りて、氣の傲かなる貌、詩の大雅蕩篇に「咨女殷商汝（ノ）ーー（シ）于中國（ニ）斂怨以爲（スルヲ）德（トス）」怱は咆に、怱は咻に作る、同じ、

【旁求】（バウキウ）「アマネクモトメル」書經太甲に「ーー（ス）俊彥（ヲ）ニ」

【庖犧氏】（パウギシ）太昊庖犧氏、支那の太古三皇の世の初に出てし皇帝なり、庖犧は一に伏義とも書く、養犧牲（ヲ）以庖厨故曰庖犧（トアレバ）とあれば、庖犧とは其の德に由りて名づけたるものにして、伏義は、音を借りたるものなり、

【忘却】（バウキャク）忘るる義、却は俗語の助字、夢遊錄に「舞袖弓彎渾（シ）ーー（ス）、羅緯空度（シ）九秋霜」

【包舉】（バウキョ）裹を以て物を包むが如く、悉く取るをいふ、賈誼の過秦論に「席（シ）卷天下（ヲ）ーー（ス）宇內（ヲ）ニ」

【鮑魚】（バウギョ）「ヒモノ」また「シホヅケ」の魚なり、玉篇に「漬魚ナリ」と、臭氣あり、孔子家語に「與（ニ）不善人居（ルハ）、如（シ）入（ルガ）ーー之肆（ニ）、久而不（ルハ）聞（カ）其臭（ノ）ニ」とあり、惡人と交るときは知らず識らず惡に化せらるるに喩ふ、

【魴魚赬尾】（バウギョセイビ）赬は赤なり、本は頼に作る、魴の尾は、本と白きものなり、而るに赤くなるは、勞すること甚しきが故なり「所謂魚勞則尾赤（ク）、人勞則髮白（シ）」の意に同じく、人の勞苦の甚しきに比す、詩の周南汝墳篇に「ーーー、王室如燬（グヮイ）、雖（モ）ーー則如燬（グヮイ）、父母孔邇（シ）」とあるは、今や勞苦の甚しき王室（殷紂）の虐政酷烈燬くが如きに由ると雖も、父母たる西伯（周文）近きに在れば、亦以て心を慰むべしとの意、

【放勳】（ハウクン）堯帝の名、書經堯典に「曰若稽（ノ）古帝堯（ハ）曰（ク）ーー（ト）ニ」史記五帝紀にも見ゆ、

【方外】（ハウグワイ）方は猶ほ道の如し、斯の道に由らざる者をいふ、莊子の太宗師に「孔子曰彼遊（ブ）方之外（ニ）者也、而丘遊（ブ）

方之內」者也」彼は子桑戸、孟子反・子琴張三人を斥す、また方域外の義にも用ふ、楚辭に「窺ー一之荒忽兮」司馬相如の難蜀父老文に「棄生滄濊、洋溢乎ー一」に即ち中國の外なる蠻夷の地をいふ、

【包荒】 易の泰卦に「九二ー用馮河、不遐遺」と、荒穢を包含するは、宰相の度量あるなり、不遐遺とは遐遠を以て之を遺棄せざるをいふ、

【彷徨】 次條を見よ、

【彷徉】 一に彷徨、また方皇に作る、徘徊の義、莊子に「芒然ー一乎塵垢之外」逍遙乎無爲之業」また史記刺客傳に「彷徨不能去」

【葆光】 葆は蔽(カクス)なり、知をおほひかくして、顯はさざる義、莊子の齊物論に「注焉而不滿、酌焉而不竭、而不知其所由來、此之謂葆光」

【包括】 「カネアハセ」て、ひとつにくくる、西京雜記に「賦家之心、ー一宇宙」

【抱關擊柝】 抱關は門番なり、擊柝は、柝(ヒヤウシギ)を擊ちて、夜を警する者をいふ、皆賤役なり、孟子萬章下に「辭尊居卑、辭富居貧、惡乎宜乎、抱關擊柝」荀子榮辱篇に「ーーーー、而不自以爲寡」

【旁觀】 スル者ハ審カナリ】 利害の外に身を置く者はその判斷公平に、理を見ること明かなれども、局に當る者は迷を生じ易し(當局者)を見よ、鹽鐵論にも「從旁議者易是、其當局則亂」とあり、

【報瓊】 人我に贈るに、微物を以てすれば、我當に之に報ゆるに、重寶を以てすべしとの義、詩の衞風木瓜篇に「投ー我以木瓜、報之以瓊琚」とあるに本づく、瓊は玉の美なるもの、琚は佩玉の名、書言故事に「惠ヲ受ケテ報謝スルナキヲ、報瓊ニ乏シキヲ、愧ヅトイフ」

【忘形】 己の形體あることを忘るる義、莊子に「故養志者ー一」とあり、淮南子に「遺形去智」とある、遺形に同じ、圓機活法に「孟郊性介ニシテ諧合スルコト少シ、韓愈一見シテーーノ交ヲ爲ス」李白の詩に「ーー到爾汝ニ」

【旋倪】 旋は老人、倪は弱小の義、小兒をいふ、孟子に「反ー其ーー」

【望霓】 渴望の切なる意(大旱ノ)を見よ、

【望溪集】 清の方苞撰す、その弟子王兆符程崟二人の編するところ、方望溪文抄中に收む、苞は經學に深く、最も禮に精し、その文縱橫奔放の致無しと雖も、法度謹嚴にして浮華冗漫の病なし、蓋し亦歸有光(震川)の流なり、後ち劉大櫆姚鼐等皆この風を追ひ、遂に桐城

派の一派を開けり、而して苞は實にその宗たり(方苞)を見よ、

【萌孽】 萌は芽なり、孽は芽の旁出する者、ヒコバエ、物の發生するをいふ、孟子告子上に「是其日夜之所息、雨露之所潤、非無ーー之生」

【望月】 十五夜の月なり、類書纂要に「望ハ十五日ナリ、月半ノ夜、月圓ニシテ日ト對望ス、望ハ月滿ツルノ名ナリ」後赤壁賦に「是歲十月之望」

【方言】 地方の土語なり、揚子方言の標題に「輶軒使者、絕代語釋、別國方言」とあり、また唐の王維の詩に「因入見風俗入境問方言」

また書名十二卷方言一萬一千九百餘字を解說す、世に揚子ーーと稱するは、後漢の末、應劭風俗通義を作り、その序文に於てこの書を揚雄の自著となせるに本づく、

【邦彥】 彥は美士なり、詩の鄭風に「彼其之子、邦之彥兮」また漢書敍傳に「尊實趙趙、邦家之彥」尊は王尊なり、

【放言高論】 ほしいままに言論する義、文章軌範侯字集の小序に「ーーーー、筆端不窘束」

【貌言ハ華ナリ、至言ハ實ナリ】 史記商君傳に「貌言華也、至言實也、苦言藥也甘言疾也、貌言とは飾りて實なき言をいふ、

【房玄齡】 字は喬松、臨淄の人、父彥謙、隋に仕へて監察御史となる、道を直くし常を守り、介然孤立、涇陽令に終る、玄齡幼にして警敏、墳典を貫綜し善く文を屬し、草隷に工なり、唐の太宗渭北を徇ふる時、策を杖き上謁し、一見舊の如し、府の記室となり征伐に從ひ、獨り人物を收めて幕府に置く、累官して尚書左僕射となる、相位に居ること十五年、公に任じ節を竭す、世その賢を稱す、貞觀二十二年薨ず、年七十一、大尉を贈り、文昭と諡せらる、新唐書に「房玄齡家ヲ治ムルニ、法度アリ、常ニ諸子ノ驕侈ニシテ、勢ニ席リ人ヲ凌ガンコトヲ恐レ、乃チ古今ノ家誡ヲ集メ、書シテ屏風ト爲シ、各各一具ヲ取ラシム、曰ク、意ヲ此ニ留ムレバ、以テ躬ヲ保ツニ足レリ、漢ノ袁氏ノ、累葉忠節ナルハ、吾ガ心ニ尚ブ所ロナリ、爾宜シク之ヲ師トスベシト」

【方壺】 海中に在る仙山、拾遺記に「海中ノ三山ハ一ヲ方壺方丈ト名ヅケ、二ヲ蓬壺蓬萊トイヒ、三ヲ瀛洲トイフ、形壺ノ如ク、上廣ク下狹シ」列子湯問篇に「渤海ノ東ニ大壑アリ、ソノ中ニ五山アリ、一ニ曰ク岱輿、二ニ曰ク員嶠、三ニ曰クーー、四ニ曰ク瀛洲、五ニ曰ク蓬萊ソノ山高下周旋三萬里(中略)居ル所ロノ人ハ皆仙聖

ノ種ナリ」

【旁午】 一縦一横なり、猶ほ交横といふが如し、漢書霍光傳に「使者——」

【亡國ノ音】 滅亡せし國の音樂にて淫靡なる音樂をいふ、禮記の樂記に「鄭衛之音亂世之音也、比於慢矣、桑閒濮上之音、亡國之音也、其政散、其民流、誣上行私而不可止也」の註に「比ハ近也、桑閒濮上ハ、衛ノ地、濮水ノ上、桑林ノ閒ナリ、張子曰ク、鄭衛ノ地、大河ニ濱シテ、沙地土薄シ、故ニ其ノ人氣輕浮ニシテ、其ノ地平下ナリ、故ニ其ノ質柔弱ナリ、其ノ地肥饒、耕耨ヲ費サズ、故ニ人心怠惰ス、其ノ人ノ情性此ノ如シ、其ノ聲音亦然リ、故ニ其ノ樂ヲ聞キテ、人ヲシテ此ノ如ク慢セシムルナリト」韓非子に「衛靈公將之晉、至濮水之上、閒鼓新聲者、使師涓撫琴而寫之、去之晉、以新聲示平公、師曠撫止之曰、此亡國之聲也、師延與紂爲靡靡之樂也、及武王伐紂、師延走濮水而自投、聞此聲者、必于濮水之上」

【亡國ノ大夫ハ以テ存ヲ圖ル可カラズ】 大夫は政を執る者なり、滅亡せる國の大夫は、國家を存立することを謀る資格なしとの義、敗軍ノ將)を見よ、

【暴虎馮河】 虎を「テウチ」にするを暴虎といひ、河を「カチワタリ」するを馮河といふ、暴虎馮河は、極めて危きことに喩ふ、詩經の小雅小旻に「不敢暴虎、不敢馮河」と論語述而に「子曰ク——、死シテ悔ナキ者ニハ吾ハ與ミセザルナリ」

【亡魂】 死人の「タマシヒ」後漢書段穎傳に「以慰忠將之——」

【茅坤】 字は順甫、鹿門と號す、明の歸安の人、嘉靖十七年の進士、才文武を兼ね、禮部主事を歷て、大名兵備副使となる、忌む者の中つるところとなりて落職し、萬曆二十九年卒す、坤古文を善くし、最も唐順之に服す、順之唐宋諸家の文を喜ぶ、著すところの文編唐宋人は韓・柳・歐・三蘇・王・曾八家の外取るところなし、故に坤また唐宋八大家文鈔一百六十四卷を撰び、盛んに行はる、詳しくは、明史文苑傳を見よ、

【望湖樓下水如天】 蘇軾の望湖樓題壁の詩の句なり、曰く「黑雲翻墨未遮山、白雨跳珠亂入船、卷地風來忽吹散、——————」

【茅柴酒】 うすき惡酒をいふ「カヤ」や「シバ」の忽ち盡えつくるが如く酒に力なきをいふ、韓子蒼の詩に「三年逐客臥江皐、自與田工釀小糟、飲慣茅柴譜苦硬、不知如蜜有香醪」事物紺珠に「薄酒世謂之茅柴飲易

醒、言如茅柴焰易過也」陔餘叢考には「酒之劣者、俗即之——」此語、蓋亦起於宋時、東坡詩幾思壓茅柴、禁網日夜急、曰壓茅柴、蓋酒之新釀、用茅柴而醅之耳

【苞桑】 桑の本の根なり、易經否卦に「其亡其亡、繫于——」疏に「苞ハ本ナリ、凡ソ物、桑ノ苞本ニ繫グバ即チ牢固ナリ」——之計は根本を固くする「ハカリゴト」

【莽蒼】 (——)を見よ、

【包藏禍心】 (禍心ヲ)を見よ、

【方冊】 書籍をいふ、方策に同じ、陸倕の石闕銘に「布在——無彰器用」

【方策】 方は木版なり、策は竹簡なり、中庸に「文武之政布在——」古は紙なく事あれば、之を木版または竹簡に書す、故に——は書物の義なり、

【忙懆】 「イソガワシ」懆は殺の俗字、笑殺、妬殺の殺に同じく助字なり、一說に助字のときは音サイ 馬樸臣の詩に「——隣家小兎女」

【邵山】 (北邙ノ)を見よ、

【鮑參軍集】 十卷、宋の鮑照撰す(照——ニ昭ニ作ル)(鮑照)を參看せよ、

【方山冠】 古の樂人の服せし冠の名、後漢書輿服志に「——制似進賢、前高七寸、後高三寸、纓長八寸、似進賢冠、五采縠爲之、祠宗廟、天子八佾、四時五行樂人服之、冠衣各如其行方之色」また蘇軾の方山子傳に「見其所著帽、方屋而高、曰此豈——之遺像乎、因謂之方山子」冠頂を屋といふ、

【賓山ニ入リテ空手ニシテ歸ル】 (入賓山空手歸)(賓ノ山ニ)を見よ、

【放肆】 己の欲する儘にする義、關尹子に「一餉至徹——乎大海」

【望子】 目標(メジルシ)なり、廣韻に「青帘酒家——」

【髦士】 髦は俊なり、俊士をいふ、詩の小雅に「烝我——」儀禮士冠禮に「——攸宜」爾雅の釋言には「髦ハ選ナリ」と、疏に「毛中ノ長毫ヲ髦トイフ、士ノ俊選ナル者ナリ」

【方舟】 二舟を比ぶるなり、比舟に同じ、爾雅に「大夫——士特舟」莊子山木に「——而濟于河」

【堡聚】 衆を聚めて保守するをいふ、左傳に「我徹邑用不敢——」

【防秋】 匈奴を防ぐをいふ、秋氣至り、弓弩用ふべし、匈奴常に以て軍を出すの候とす、故にいふ、舊唐書の陸

貸傳に「河隴陷蕃已來、西北邊常以重兵守備、謂之——」高適の九曲詞に「青海只今將飲馬、黄河不用更防秋」

【茅茨剪ラズ、采椽斷ラズ】（茅茨不剪采椽不斷）宮殿の「ソマツ」なるをいふ、采は柞木なり、字採に作る、本木に從ふ、茅を以て屋を覆ひ、採を以て椽（タルキ）と爲すは、質素の甚しきをいふ、墨子に「堯堂高三尺、土階三等、茅茨不翦、采椽不刊」また韓非子、五蠹篇に「堯之王天下也、茅茨不翦、采椽不斷、糲粢之食、藜藿之羹、冬日麑裘、夏日葛衣、雖監門之服養不厭於此矣」とあり、また漢書の藝文志に「墨家者流ハ、蓋シ清廟ノ守ニ出ヅ、茅屋采椽是ヲ以テ儉ヲ貴ブ」また帝王世紀にも類語あり、一解に采椽は山より采り來りたる木をそのまま斧斤を施さずして「タルキ」とするなりと、

【亡是公】亡は無なり、音ブ是の公無しといふ義にて、假設の人名（烏有）を見よ、

【貌執】禮貌もて接待するの義、荀子に「——之士者、百餘人」

【芒刺背ニ在リ】（芒刺在背書言故事に「恐懼シテ安カラザルヲイフ、漢ノ宣帝、高帝ノ廟ニ謁ス、霍光驂乘ス、上內ニ之ヲ嚴憚ス、芒刺ノ背ニ在ルガ如シ」と、註に「芒刺ハ、草端ナリ、草端其ノ背ヲ刺シテ、安カラザルガ若シ」この事もと漢書霍光傳に見ゆ、

【放心】放逸せる心なり、孟子告子上篇に「學問之道無他、求其放心而已矣」とあり、孟子のこの語、蓋し書經の畢命に「雖收放心閑之維難」とあるに本づく、

【保眞】眞を保つ義、天より與へられし眞性を保ちて失はざるをいふ、楚辭卜居に「寧超然高舉、以保眞乎」

【庖人】「レウリ」する人、穆天子傳に「命——熟之」

【榜人】舟子なり「センドウ」張協の七命に「——奏採菱之歌」古傳考器に「——ハ舟師ナリ」船梢・撐夫皆同じ、

【鮑謝】（鮑照）を見よ

【方城】西漢に廣陽國——縣あり、東漢は幽州涿郡——縣あり、晉は幽州范陽國——縣あり、東漢に屬す、今の直隸順天府固安縣の南十五清里、また北魏以後の——縣は、今の河南南陽府裕州治なり、

【彭城】西漢の縣、楚國に屬す、東漢・晉は徐州——國——縣あり、南宋以後隋までは——郡——縣あり、唐は河南道徐州——縣あり、今の江蘇徐州府銅山縣治是れなり、

【保障】保は堡に同じ、障は蔽ひ扞ぐなり、城堡の義、左傳定十三年に「成孟氏之——也、無成是無孟氏也」ま

た租稅を輕くして人民を保護する政治をいふ、史記趙世家に「簡子使尹鐸爲晉陽、請曰、以爲——乎、以爲——乎、簡子曰、——哉、尹鐸損其戶數」

【亡狀】（——）を見よ、

【放生會】憐ひおける魚鳥の類を放ちて慈悲を積むを主とする佛事の會、乾淳佛時記に「四月八日ハ佛ノ誕日タリ、諸寺各浴佛會アリ、コノ日西湖ニテ——ヲナス、小舟ニテ龜魚螺蚌ヲ競賣シ放生セシム」と、唐の肅宗天下に詔して放生池を置くこと八十一と史に見ゆ（放生）を參看せよ、

【彭殤ヲ齊ウス】駿斎雜話「朝かほの花一時」の條に引けり、長壽と短命とを同視するをいふ、莊子の齊物論に「天下莫大於秋毫之末、而大山爲小、莫壽乎殤子、而彭祖爲夭」と、彭祖は莊周が長壽者に名づけし假名なり、逍遙遊にも「彭祖乃今以久特聞」とあり、殤とは禮記に生れてより三月以上十九年までに死する者を無服殤下殤中殤長殤に分てり（彭祖）を參看せよ、

【旁若無人】眼中に人無きなり、史記刺客傳に「高漸離擊筑、荆軻和而歌、於市中相樂也、已而相泣、旁若無人者」旁ニ人を見よ、

【亡酒】酒席を逃れ避くる義、史記齊悼惠王世家に「諸呂有一人醉亡酒」

【卯酒】「アサノムサケ」卯時の酒なり、白樂天に卯時酒の詩あり、

【苞苴】藁にて包みたるを苞といひ、下に藉くを苴といふ、贈物をいふ、それより賄賂の義に轉用す、說苑の君道篇に「苞苴行耶、讒夫昌耶、宮室營耶、女謁盛耶、何不雨之極也」類書纂要に「苞苴餽遺也」事文類聚に「杜衍爲相、——貨賄不敢到其門、時號清白宰相」

【茅茹】易の泰卦に「拔茅連茹」とあり、茹は茅根の相牽連するもの、以て君子の進んで仕ふるに、その朋類と牽援するに喩ふ、衆賢——は賢者の引援して朝に仕ふるをいふ、

【望舒】月の馭者なり楚辭に「前——使先驅——」

【尨茸】毛などの亂るる貌、左傳僖五年に「狐裘——」

【苞苴ヲ以テ家ヲ汚サズ】（不以苞苴汚家）圓機活法に「韋詵、休日、樓ニ登リ、人ノ圃ニ於テ瘞藏スル有ル者ヲ見ル、諸ヲ吏ニ訪フニ、曰ク、參軍裴寬ガ居ナリト、與ニ僧ニ來ラシム、詵狀ヲ問フ、答ヘテ曰ク、寬ハ義苞苴ヲ以テ家ヲ汚サズ、適〻人有リ、鹿ヲ以テ餉ト爲シ、致シ去ル、敢テ自ラ欺カズ、故ニ之ヲ瘞ムト、詵嗟異シ、乃チ引キテ判官ト爲ス」苞苴は、賄賂なり、

【望蜀】 貪る心の厭くなきをいふ(隴ヲ得テマタ蜀ヲ見ヨ、

【飽食暖衣】 孟子滕文公上に「人之有道也、——逸居而無教、則近於禽獣、聖人有憂之、使契爲司徒、敎以人倫」聖人ハ堯なり、倫は序なり、

【望諸君】 樂毅燕を去り趙に之く、趙之を覩津に封じ、號して——といふ、

【方寸】 心をいふ、列子に「吾見子之心矣、方寸之地虚矣幾聖人也」また通鑑の漢獻帝紀に「徐庶母、爲操所獲、庶辭備指其心曰、本欲與將軍共圖王覇之業者、以此方寸之地也、今已失老母、方寸亂矣、無益於事、請從此別、遂詣操」馮道の詩に「但教——無諸惡、狠虎叢中也立身」

【方寸ノ木モ岑樓ヨリ高カラシムベシ】 (方寸之木、可使高於岑樓)比較の法をあやまるときは、至りて卑き者も、至りて高き者よりも尚ほ高しとすることあるをいふ、孟子告子下に「不揣其本而齊其末、——雖——樓——岑樓は樓の高く鋭くして、山に似たるもの、

【放生】 魚鳥等の生物を放つをいふ、列子說符篇に「邯鄲民正旦、獻鴈于趙簡子、簡子曰、正旦放生、示有恩也」(放生會)を參看せよ、

【庖正】 「クリヤ」をつかさどる官、左傳哀元年に「爲之——以除其害」註に「——ハ膳羞ヲ掌ルノ官」

【房星】 晉書天文志に「房四星、亦曰天駟、爲天馬、主車駕、

【方枘圓鑿】 (圓鑿)を見よ、

【鮑照】 字は明遠、南北朝の時の東海の人なり、最も詩に長ず、元嘉中に河濟俱に清みしかば河清頌を作る、その詩甚だ工なり、詩評にいふ、詩を作るもの詞格の清美ならんとを欲せば、當に鮑照と謝靈運との詩を看るべしと、鮑謝と並べ稱す、宋に仕へて臨海王の參軍となる、杜詩にいふ「俊逸鮑參軍」と、後ち亂兵の爲めに殺さる、著すところ鮑參軍集十卷あり、

【烹鮮】 太平記卷二十に見ゆ、老子の語に本づき國政の義とす(大國ヲ治ムルハ)を見よ、

【茫然】 氣を喪ふ貌、莊子に「子貢——自失」

【鮑宣ノ妻】 後漢書列女傳に「鮑宣ノ妻桓氏字ハ少君、宣嘗テ少君ノ父ニ就キテ學ブ、父ソノ清苦ヲ奇トス、故ニ女ヲ以テ之ニ妻ス、裝送資賄甚ダ盛ンナリ、宣悅ビズ、妻ニ謂ヒテ曰ク、少君ハ富驕ニ生レ美飾ニ習フ、而シテ吾ハ實ニ貧賤ナリ、敢テ禮ニ當ラズト、妻曰ク、

大人、先生ノ德ヲ修メ約ヲ守ルヲ以テ、故ニ賤妾ヲシテ侍シテ巾櫛ヲ執ラシム、既ニ君子ニ奉承ス、惟命是從ハント、宣笑ヒテ曰ク、能ク是ノ如クナラバ、是レ吾ガ志ナリト、妻乃チ悉ク侍御服飾ヲ歸シ、更ニ短布裳ヲ著ケ、宣ト共ニ鹿車ヲ挽キ鄉里ニ歸リ、姑ヲ拜シ禮畢リ、甕ヲ提ゲテ出デテ汲ム、婦道ヲ修行ス、鄉邦之ヲ稱ス」大人はその父を稱す、鹿車は小車の挽くべきもの、

【彭祖】 列仙傳に「彭祖殷大夫也、姓錢名鏗、帝顓頊之玄孫、陸終氏之中子、歷夏至殷末八百餘歲、常食桂芝、善導引行氣、歷陽有——仙室云云」荀子の注に「——堯ノ臣、虞夏商周ヲ經テ、壽七百歲」

【忘足】 履がよく足に適して、ただ履の行くを覺えて足の行くを忘るる義、莊子達生篇に「忘足履之適也、忘要帶之適也、忘是非心之適也」

【茅塞】 茅が「コミチ」を塞ぐ如く心の欲に蔽はるる義、孟子盡心下に「——子之心矣」とあるに本づく、

【彭祖ノ壽】 (彭祖之壽)列仙傳に「彭祖謂鏗、帝顓頊之玄孫、至殷之末世、年已七百餘歲、而不衰、少好恬靜、惟以養神治生爲事、王聞之以爲大夫稱、疾不與政、專善於補導之術」高姓統譜には「——ハ古ノ陸終氏ノ第三子、錢鏗ナリ、堯ヨリ夏殷ヲ歷テ、大彭ニ封ゼラルル、

【滂沱】 大雨の貌、詩經の小雅漸漸之石「月麗于畢、俾——矣」畢は星の名なり、月の畢星にかかるは、大雨の兆なり、また涙の多く流るる貌、詩經陳風澤陂に「寤無爲、涕泗——」

【方內】 四方の內なり、史記孝文紀に「——安寧」

【眊悼】 老幼をいふ、八十を眊といふ、老いて目昏きの義、七年を悼といふ、未だ人と成らず、其の死亡する殊に悼むべきの義に取る、漢書に「——之人刑罰所不加」

【飽暖ハ淫欲ヲ生ズ】 事林廣記に「飽暖生淫欲、飢寒發善心」とあり、飽くまで食ひ、暖に衣て安逸なるときは、おのづから淫欲を生ずるなり「沃土之民不材、淫也、瘠土之民、無不務義勞也」といふも、意は同じ、

【望塵】 客の來るを候つ義、車馳せ塵起るを以て、遙に人の來るを知るなり、晉書に「——而拜」

【方丈】 和尚の「キマ」をいふ、釋氏要覽に「方丈蓋寺院之正寢也、唐顯慶年中、勅王玄策往西域、至毗耶黎城東北四里許、維摩居士宅、示疾之室遺址、疊石爲之、玄策躬以手版縱橫量之得十笏、故號方丈」とあ

るに本づく、杜甫の詩に「方丈渾連ル水」
また三神山の一(蓬萊)を見よ、
また一丈四方の義、孟子盡心下に「食前方丈、侍妾數百人、我得志不爲也」
【抱住】「ダキトメル」仕學大乘に「毋胡氏妻祭氏——之」
【亡匿】「ニゲカクレル」(亡匿)を見よ、
【庖丁牛ヲ解ク】(庖丁解牛莊子の養生主篇に「庖丁文惠君ノ爲メニ牛ヲ解ク、手ノ觸ルル所ロ、肩ノ倚ル所ロ、足ノ履ム所ロ、膝ノ踦ル所ロ、砉然嚮然、刀ヲ奏ムルニ中ラザル莫シ、桑林ノ舞ニ合ヒ、乃チ經首ノ會ニ中ル、文惠君曰ク、譆善哉、技蓋シ此ニ至ルカト、庖丁刀ヲ釋テ對ヘテ曰ク、臣ノ好ム所ロノ者ハ、道ナリ、技ヨリ進ム矣、始メ臣ガ牛ヲ解クノ時、見ル所ロ牛ニ非ザルモノナシ、三年ノ後、未ダ嘗テ全牛ヲ見ズ、良庖ハ歲ニ刀ヲ更ム、割スレバナリ、族庖ハ月ニ刀ヲ更ム、折スレバナリ、今臣ガ刀十九年ナリ、解ク所ロ數千牛ナリ、而シテ刀刃新タニ硎ヨリ發スルガ若シ、彼ノ節ニハ閒アリテ、而シテ刀刃ハ厚キコトナシ、厚キコトナキヲ以テ閒アルニ入ル、恢恢乎トシテ其レ刀ヲ遊ブニ於テ必ズ餘地アリ、是ヲ以テ十九年ニシテ、刀刃新タニ硎ヨリ發スルガ若シト、文惠君曰ク、善イ哉、吾レ庖丁ノ言ヲ聞キテ生ヲ養フコトヲ得タリト」
【方底圓蓋】四角なる底に、圓き蓋(フタ)互に相合はざるに喩ふ、顏氏家訓に「使疎薄之人而節量親厚之恩、猶方底而圓蓋、必不合矣」(圓鑿)を參看せよ、
【暴殄】殄は絶なり、——はあらしてたち亡す義、書經に「——天物」
【暴天物】拾遺の(天物ヲ)を見よ、
【茅土】古、諸侯に封ぜらるる者には、天子より其の方色の土を取り、苴くに白茅を以てして授け賜ふ、故に封土を——といふ、李陵の與蘇武一書に「足下嘗享——之薦、受千乘之賞」と、轉じて諸侯の義にも借り用ふ、蔡邕の獨斷に「天子大社以所封之方色、苴以白茅、授之、謂之授——」方色土とは東は青、南は赤、西は白、北は黑、中央は黃色の土なり、
【房杜姚宋】四人共に唐の賢宰相なり、房喬字は玄齡、杜如晦字は克明、竝に太宗に仕へて相たり、姚崇字は元之、宋璟字は廣平、竝に玄宗に仕へて相たり、錦字箋に「唐ノ世ノ賢相、前ハ房玄齡・杜如晦ヲ稱シ、後ハ姚崇・宋璟ヲ稱ス」

【亡匿】「ニゲカクレル」史記留侯世家に「更姓名——下邳」匿一音「デヨク」
【忘年ノ交】書言故事に漢書を引きて「禰衡逸才アリ、少クシテ孔融ト交ル、時ニ衡未ダ二十ニ滿タズ、而シテ融已ニ五十、忘年ノ交ヲ爲ス」註に「賢者ノ交、惟ダ才德ヲ以テシ、年ノ長幼ヲ計ラズ」と、南史の何遜傳にも見ゆ、
【澎湃】波濤の相觸れて戾るさま、またその際に生ずる聲をもいふ、司馬相如の上林賦に「沸乎暴怒洶涌——」
【方苞】「ハタガシラ」一方の長なり、卒正・連帥・屬長を統ぶる者、禮記王制に「千里之外設——」また「十國以爲連、連有帥」今は布政使の別名に用ふ、
【旁皇】廣く下に徬り及ぶ義、漢書司馬相如傳に「大漢之德——」
【旁礴】混同して一つにする義、莊子の逍遙遊篇に「之人也之德也、將旁礴萬物以爲一」の註に「旁礴猶ホ混同ノゴトシ」また轉じて、みちひろがることに用ふ、韓文の送廖道士序に「氣之所窮、盛而不過、必蜿蟺扶輿、磅礴而鬱積」旁は磅に同じ、
【磅礴】前條を見よ、
【忘八】「ケイセイカヒ」幼學須知に「八ノ花柳(いろざと)入ノ王祭不共」共は供に同じ、
【芒芒】無知の貌、孟子公孫丑上に「——然歸」一に罷倦(ツカレヤム)の貌とも解す、また多き貌、東晳の補亡詩に「——其稼」
【望望】去りて顧みざる貌、孟子公孫丑上に「——然去之」また人を見送る貌、禮記問喪に「其往送也、——然」
【賓馬香車】「リッパ」なる馬や車なり、武平一景龍文館記に「上已禊於渭濱、沈佺期詩、——清渭濱、紅桃碧柳禊堂春」
【方伯】「ハタガシラ」一方の長なり、卒正・連帥・屬長を統ぶる者、禮記王制に「千里之外設——」また「十國以爲連、連有帥」今は布政使の別名に用ふ、
【旁皇】廣く下に徬り及ぶ義、漢書司馬相如傳に「大漢之德——」
【旁礴】混同して一つにする義、莊子の逍遙遊篇に「之人也之德也、將旁礴萬物以爲一」の註に「旁礴猶ホ混同ノゴトシ」また轉じて、みちひろがることに用ふ、韓文の送廖道士序に「氣之所窮、盛而不過、必蜿蟺扶輿、磅礴而鬱積」旁は磅に同じ、
【磅礴】前條を見よ、
【忘八】「ケイセイカヒ」幼學須知に「八ノ花柳(いろざと)入ノ王祭不共」共は供に同じ、

ノ中ニ入ルヲイフ、ソノ心已ニ孝弟忠信禮義廉恥ノ八字ヲ忘ル、故ニ——ト名ヅグ」亡八官は「タイコモチ

【放飯流歠】 食ふこと、放肆にして、節する所ろなく、飲むこと流しこむ如くにするなり、禮記の曲禮に「毋放飯、毋流歠」

【放飯流歠シテ齒決スルナキヲ問フ】 大飯長歠は不敬の大なるものなり、乾肉は手にて割くべし、齒にて決するは不敬なり、されども齒決は不敬の小なるものなり、自ら放飯流歠の大不敬を行ひながら無齒決の義を人に問ふは、これ當に先づ務むべき所ろを知らざるなり、孟子盡心下に「不能三年之喪而緦小功之察、放飯流歠而問無齒決、是之謂不知務」禮記の曲禮に「濡肉齒決、乾肉不齒決」

【芳菲】 草又は花の「ヨキニホヒ」あるを云ふ、庾肩吾の詩に「春日生——」また芳草の茂生する貌、

【褒美】 ほむる義、後漢書東平王傳に「制書——、班之四海」

【抱負】 物を抱き負ふ義、後漢書儒林傳に「四方學士莫不——填篋雲會京師」轉して人の志を懷抱せる義にも用ふ、——遠大などいふ如し、

【盤夫石】 幽明錄に「武昌ノ北山上ニ石アリ、狀人ノ立テル如シ、古傳ニイフ、昔貞婦アリ、其ノ夫役ニ從ヒ遠ク國難ニ赴ク、子ヲ携ヘ此ノ山ニ餞送シテ夫ヲ望ミ化シテ石ト爲ル因リテ名ヅク」この事神異經にも見ゆ、欽明帝の時、大伴佐手彦が妻佐用姫、夫の遣唐使となりて、唐土へ渡る時、別を悲み、其の船を戀ひて、松浦に來りて死し、其の屍化して石と爲るといふ傳說に似たり、

【方物】 その地方の土に生ずる所ろの物をいふ、書經に「無有遠邇、畢獻——」また方は猶ほ別の如し、物は名なり、衆くの物を一つ一つ別ち名づくる義、史記五帝記に「民神雜糅不可——也」一解に——は仿佛に同じと、

【仿佛】 一に髣髴、また彷彿に作る、ぼんやりとして、明かならざる貌、揚雄の甘泉賦に「——其若夢」

【髣髴】 「サモニタリ」說文に「若似ナリ」後漢書馮衍傳「以至人之——」に前條を見よ、

【方物スベカラズ】 〔不可方物〕方は別なり、物は名なり、混亂して別ち名つくべからざるをいふ、國語に「民神雜糅、——」〔方物〕を見よ、

【方便】 大藏法數に「方ハ方法ヲイヒ、便ハ便宜ヲイフ、猶ホ善巧ノ如キナリ、眞實ニ對スルノ語、所謂權道ナリ、無著論ニ、衆生ノ色身ノ相ニ執著スルヲ破セント欲ス、故ニ佛、喩ヲ假リテ微細ニ分析シ善巧シテ說ク」維摩經に「以無量方便饒益衆生」品字箋に「釋氏——法門アルハ方ニ隨ヒ便入スルノ傍門ナリ、正法ノ門ハ莊嚴高廣ニシテ、行クモ到リ易カラズ、一大城ノ四門ノ如シ、特ニ四角ノ旁方ニ於テ便ニ隨ヒテ門ヲ開キ近キニ就テ入ラシム、故ニ——トイフ」通鑑に「晉王休祐性剛狠、上積不能平、欲——除之」の胡三省の註に「方略ヲ施シ、便利ニ乘ジテ之ヲ殺サントスルナリ」

【褒貶】 褒は美を稱揚するなり「ホムル」貶はしりぞけおとす義、杜預の左傳序に「春秋雖以一字爲——、然皆須數句以成言」

【茅菰】 竹の皮にて作りたる笠、茅一に萌に作る、簑笠なり、國語に「首戴——」身衣機楗」機楗は簑なり、

【抱朴子內外篇】 八卷、晉の葛洪撰す、洪字は稚川、抱朴子と號す、神仙道術を好みてその祕奧を得たり、羅浮山に入りて丹を煉り、山に在ること七年、遂にこの書を著し、年八十一にして卒す、この書內篇は神仙修煉符錄の諸事を論じ、純然たる道家の言なり、外篇は、時政の得失、人事の臧否を論じ、多く排偶の體を作し、詞旨辨博にして名理あり、故に隋志に、內篇を道家に入れ、外篇を雜家に入る、然れども外篇の大旨も亦黃老を以て宗となす、故に簡明目錄には內外二篇を併せて道家類に入れたり、

【報本反始】 物の由りて出でたる根本に反り報ゆる義、禮記の郊特牲に「社稷——所以報本反始也」社は后土(ツチノカミ)なり、民をして之を祀らしめ以て農を祈るなり、

【暴慢】 暴は粗厲なり、慢は放肆なり、論語泰伯篇に「動容貌、斯遠——矣」

【方命】 〔命ニ方フ〕を見よ、

【亡命】 命は名なり、名籍(コセキ)を脫して逃亡するをいふ、「カケオチ」漢書張耳傳に「少時嘗——遊外黃」卓氏藻林には「君命ヲ弃テテ、外ニ游ブノ徒ヲイフ」揚雄の解嘲に「范雎魏之——也」

【方面】 一方面を引き受くる大將をいふ、後漢書の馬融傳に「方面重寄」註に「四方ノ一面ニ當ルナリ」また方向の義、李白の明堂賦に「九夷八狄順——而來奔」また一方の土の義、石闕銘に「區宇久安、——靜息」また顏面の方形なるをいふ、後漢書高獲傳に「爲人尼首——」

【方羊】（ハウヤウ）労苦のさま、一解に遊戯なり、左傳に「如魚頽（ノゲイ）尾（ナルシテ）衝（スルガ）流而——（ニ）」また彷徉に通ず、徘徊に同じ、史記吳王濞傳に「外隨（ヒ）大王後車（ニ）彷徉（セン）天下（ヲ）」

【烹羊】（ハウヤウ）羊を烹る、漢書楊敞傳の楊惲與（ニ）孫會宗書（ニ）「臣之得罪已三年矣、田家作苦、歲時伏臘、烹羊魚（ヲ）羔、斗酒自勞（ハウヤウ）」

【滂洋】（ハウヤウ）「ユタカ」に多きなり、盛大の貌、漢書禮樂志に「福——（トシテ）、澤汪濊（タリ）」

【亡羊】（バウヤウ）莊子に「臧ト穀ト二人、相與ニ羊ヲ牧シテ俱ニソノ羊ヲ亡フ、臧ニ奚ヲ事トセシカト問ヘバ、則チ曰ク簡ヲ挾ミテ書ヲ讀メリト、穀ニ奚ヲ事トセシカト問ヘバ則チ曰ク、博塞（すごろく）シテ以テ遊ベリト、二人ノ者ノ事業ハ同ジカラザルモ、ソノ——ニ於テハ均シキナリ（——之嘆）」を參看せよ、

【旺洋】（バウヤウ）猶ほ望羊の如し、仰ぎ視る貌、一に遠く視る貌と解す、莊子秋水に「河伯始旋（ヲ）其面目（ヲ）——（ヲ）向（ヒ）若而歎（メ）」若は北海若といふ海神なり、旺は本望に作る、同じ、

【望羊】（バウヤウ）遠く視るをいふ、史記仲尼世家に「眼如（シ）——（ニ）（旺洋）」を見よ、

【亡羊之歎】（バウヤウノタン）學問の道、多岐多端にして、一も得る所ろなきを歎ずるなり、列子說符篇に「楊子ノ隣人羊ヲ亡セリ、既ニ其ノ黨ヲ率キ、又楊子ノ豎ニ請ヒテ之ヲ追フ、楊子曰ク、嘻一羊ヲ亡ス、何ゾ追フ者ノ衆キヤト、隣人曰ク、岐路多ケレバナリト、既ニシテ反ル、問フ羊ヲ獲タルカト、曰ク、之ヲ亡セリト、曰ク奚ゾ之ヲ亡セルト、曰ク岐路ノ中ニ、又岐アリ、吾レ之ク所ロヲ知ラズ反ル所以ナリト、楊子曰ク、大道ハ、多岐ヲ以テ羊ヲ亡ヒ、學者ハ、多方ヲ以テ生ヲ喪フ」

【貌瘦】（ハウソウ）セタリト雖モ、天下肥ユ（貌雖瘦天下肥）唐書韓休傳に「玄宗、鏡ニ臨ミ、默然トシテ樂マズ、左右曰ク、韓休ガ相ト爲リシヨリ、陛下殊ニ瘦セタリト、上曰ク、吾ガ貌瘦セタリト雖モ、天下必ズ肥エタルナラント」

【方輿】（ハウヨ）地をいふ、坤輿に同じ、宋玉の賦に「方地爲輿（ト）、圓天爲蓋（ト）」

【茅容】（バウヨウ）後漢書に「茅容字ハ季偉、陳留ノ人ナリ、年四十餘、野ニ耕ス、時ニ等輩ト雨ヲ樹下ニ避ク、衆皆簀踞シテ相對ス、容獨リ危坐シテ愈〻恭シ、郭泰字は林宗見テ之ヲ異トシ因リテ留リテ寓宿ス、旦日容鷄ヲ殺シ饌ヲ具ヘ、ラク己ノ爲メニ設クルナラント、既ニシテ母ニ供シ、自ラ草蔬以テ客ヲト同ジク飯ス泰起チテ拜シテ曰ク、卿ハ賢ナル哉ト、因リテ勸メテ學バシメ、辛ニ以テ德ヲナス」

【炮烙ノ刑】（ハウラクノケイ）銅柱に炭を注ぎ、之を炭火の上に加へ、罪ある者をして、行かしむれば、輒ちすべりて火中に墮ちて焚死す、極めて殘酷の刑なり史記殷紀に「紂乃重（ネ）辟刑（ヲ）有（ツ）炮烙之法（ニ）」

【保釐】（ホウリ）天子の親兵なり、釐は整與なり、保は保護なり、——はわが近衛兵に當る、歐文の王產章畫像記に見ゆ

【忙裡閑ヲ偸ム】（ボウリカンヲヌスム）多忙中に閑を求めて樂む義、江湖長翁集に「同陳宰貢簿遊靈山、宰云、吾輩可謂忙裡偸閑、苦中作樂、遂以八字爲韻、作詩八首」

【茅栗】（バウリツ）「シバグリ」栃栗に同じ、莊子に「先生居山林、食——（ニ）」

【方略】（ハウリャク）計策なり、漢書霍去病傳に「願（ミル）——如何（ヲ）耳」

【擄掠】（ラウリャク）擄は笞掠（ムチウツ）なり、擄掠に同じ、史記李斯傳に「趙高治（スル）斯（ヲ）——千餘」

【亡慮】（バウリョ）亡音ブ無に同じ（無慮）を見よ、

【暴戾恣睢】（バウレイシキ）兇暴惡戾にして、行を恣にし、目を仰ぎて怒り視るをいふ、史記伯夷傳に「——、聚黨數千人、橫行天下（ニ）、また禮書には「暴慢恣睢」とあり、

【彭蠡湖】（ハウレイコ）荊州記にいふ「——ハ即チ洞庭湖ナリ、又宮亭湖ト名ヅク、宮亭湖ノ廟神甚ダ靈驗アリ、途旅ノ經過スルモノ、祈禱セザルハナシ、能ク湖中ヲシテ風ヲ分チ帆ヲシテ南北セシム、又分風湖ト名ヅク」と（洞庭湖）を參看せよ、

【彭蠡ノ濱ニハ魚ヲ以テ犬ニ食ハシム】（彭蠡之濱、以魚食犬）物多きときは貴からざるに喩ふ（崑山）を見よ、

【茅鹿門】（バウロクモン）（茅坤）を見よ、

【播越】（ハエツ）遠方に放たれ「サスラフル」なり、流離に同じ、左傳に「不穀震蕩、——竄在荊蠻（ニ）」

【巴猿】（バエン）巴峽の猿をいふ、荊州記に「三峽猿、鳴至（レバ）三聲（ニ）聞者皆淚（ヲ）、白居易の舟夜贈內詩に「三聲猿後垂（レ）鄉淚（ヲ）、一葉舟中載（スル）病身（ヲ）」本朝文粹三、江澄明の山水策に「胡雁一聲、秋破（ル）商客之夢（ヲ）、——三叫、曉露行人之裳（ヲ）」謝朓の渭賦に「瑤臺霜滿（チ）、一聲之玄鶴唳（ク）天、巴峽秋深五夜之哀猿叫（ブ）月（ニ）」（巴峽）を參看せよ、

【馬援】（バエン）字は文淵、後漢の茂陵の人、少くして大志あり、嘗て賓客に謂つて曰く、丈夫志を立つる、窮しては當に益〻堅かるべく、老いては當に益〻壯なるべしと、建武中拜して伏波將軍となる、交趾を擊ちて還る、曰

く男兒、要は當に邊野に死し、馬革を以て屍を裹むべきのみと、武陵五溪蠻反す、拔年八十餘自ら行かんと請ひ、較に據り顧眄して以て用ふべきを示す、帝笑つて曰く、矍鑠たるかな是の翁やと、進んで壺頭に營す、利を失ひ病みて卒す、女は明帝の后となり德後宮に冠たり、崩じて明德と謚す、

【馬遠】 宋の畫家、字は欽山、遠の弟、その先は河中の人、後ち錢塘に居る、光寧兩朝に仕へ、畫院待詔を授けらる、山水人物花鳥すべて妙に臻り、畫院に獨歩す、子麟また畫を能くす、然れども父に及ばず、

【齒ヲ見ハサズ】 (不見齒)微笑するのみをいふ、大笑するときは、齒の本をあらはし、常の笑には齒をあらはし、微笑には齒を露はさず、禮記に「三年未嘗見齒」

【齒ヲ切リ腕ヲ搤ス】 (切齒)を見よ、

【破屋數間】 狹小なる陋屋(アバラヤ)をいふ、韓愈の寄盧仝詩に「玉川先生洛陽裏、一一一而已矣、一奴長鬚不裹頭、一婢赤脚老無齒」詩は古文眞寶に出づ、參看せよ、

【齒堅チ舌存ズ】 剛者は亡び、柔者は存ずるに喩ふ、說苑に「常樅、疾アリ、老子往イテ問ウテ曰ク、先生疾甚シ、敎ヲ弟子ニ遺スコトナキカト(中略)常樅乃チ其ノ口ヲ張リ、老子ニ示シテ曰ク、吾ガ舌存ゼルカト、老子曰ク亡セリト、存ゼリト、吾ガ齒存ゼルカト、老子曰ク亡セリト、老子曰ク夫レ舌ノ存ズルヤ、豈ソノ柔ヲ以テニアラズヤ、齒ノ亡スルヤ、豈ソノ剛ヲ以テニアラズヤト、常樅曰ク、嘻是レノミ天下ノ事已ニ盡キタリト」また孔叢子にも「齒堅剛、卒盡相磨、舌柔順、終以不弊」

【馬革ヲ以テ屍ヲ裹ム】 (以馬革裹屍)烈士の戰場に死するをいふ、後漢書馬援傳に「男兒要當死于邊野、以ーーーー還葬耳、何能臥床上在兒女子手中耶」

【博士】 漢書の百官表に「博士ハ、秦ノ官、古今ニ通ズルコトヲ掌ル、秩六百石ニ比ス、員多キハ數十人ニ至ル、武帝ノ建元五年、初メテ五經博士ヲ置ク」また成帝紀に「儒林ノ官ハ四海ノ淵源ナリ、宜シク皆古今ニ明カニシテ、故ヲ溫ネ、新キヲ知リテ、國體ニ通達スベシ、故ニ之ヲ博士トイフ」

【馬家ノ五常】 兄弟そろひて才名高き者を稱す(白眉)を見よ、

【巴峽】 巴東の三峽をいふ、楊子江の上流に在りて四川省に屬す、晉の無名氏の女兒子と題する詩に「巴東三峽、猿鳴悲、夜鳴三聲淚沾衣」三峽とは廣溪峽巫峽西陵峽なり、猿聲の悲を說くこと此の詩に始まる、南史梁紀に「元帝元年武陵王紀率巴蜀之衆東下遣護軍將軍陸法和屯ーーー以拒之」沈佺期の詩に「西南出ーーー不與衆山同」陳子昂の詩に「寧知ーーー路、辛苦石尤風」

【破顏】 顏を和げて、少しく笑ふをいふ、五燈會元に「惟勁菜會者破顏微笑」とあり、白樂天の詩にも「一放狂歌一破顏」

【馬銜】 馬の「クツワ」說文の註に「ーーハ、之ガ行ヲ制スル所以ナリ、金ニ从ヒ行ニ从フ會意文字ナリ」また海神の名、木華の海賦に「海童ーー皆神名」

【籌ヲ帷幄ノ中ニ運ラス】 (籌策ヲ帷幄)を見よ、

【謀定マリテ後ニ戰フ】 謀計を決定して、然る後に戰を初むる義、唐書李光弼傳に「光弼用兵、謀定而後戰、能以少衂衆」

【謀婦人ニ及ブ】 (謀及婦人)男兒は自ら事を成すべし、婦人に謀り及ぶは漏洩の恐あり、故に之を譏りていふ、左傳桓十五年に「桓公曰、ーーー、宜其死也」

【衡、敲ニ懸クルトキハ欺クニ輕重ヲ以ラス可カラズ】 (衡敲懸不可欺以輕重)正直の人は欺くべからざるに喩ふ、禮記の經解篇に「禮ノ國ヲ正スニ於ケルヤ、猶ホ衡ノ輕重ニ於ケル、繩墨ノ曲直ニ於ケル、規矩ノ方圓ニ於ケルガ如キナリ、故ニ衡誠ニ懸ルトキハ、欺クニ輕重ヲ以テスベカラズ、繩墨誠ニ陳ブルトキハ、欺クニ曲直ヲ以テスベカラズ、規矩誠ニ設クルトキハ、欺クニ方圓ヲ以テスベカラズ、君子禮ヲ審カニスレバ、詖ルニ姦詐ヲ以テスベカラズ」

【馬遼】 宋の畫人、世榮の子、家學の妙を得、山水人物花果禽鳥、疏澹極めて工に、毛羽燦然、飛鳴生動の態眞に逼る、弟遠亦畫に妙なり、

【馬牛ニシテ襟裾ス】 學識なきものを譏りていふ、唐の韓愈の符讀書城南詩に「人不通古今馬牛而襟裾」

【波及】 餘波のうるほひ及ぶ義、左傳の僖二十三年に「楚子經之曰、公子若反晉國、則何以報不穀、對曰、子女玉帛、則君有之、羽毛齒革則君地生焉、其波及晉國者君之餘也、其何以報君」とあり、其の餘波、晉國に及ぶ者は、楚國享用の餘剩藥物なりとの意、

【破鏡】 鏡をわる、夫婦の離別の事にいふ神異經に「昔夫婦相別ルルアリ、鏡ヲ破リ、各、其ノ半ヲ執ル、後チ其ノ妻、人ト通ズ、鏡化シテ鵲トナリ、飛ビテ夫ノ前ニ至ル、後人鏡ヲ鑄ルニ、背ニ鵲ノ形ヲ爲スハ此ヨリ

始マル」丹鉛總錄に、洞山語錄を引きて「——不重照、落花難上枝」また片われ月をいふ、古詩に「何當大刀頭——飛上天」

【博愛】偏私することなく博く衆をめぐみ愛する義、韓愈の原道に「——之謂仁行而宜之之謂義」また國語の周語下の「言仁必及人」の韋昭の註に「博愛於人爲仁」とあり、論語學而篇に「子曰、汎愛衆而親仁」とある汎愛も——と義同じ、新書修政語上に「帝舜曰、德莫高於博愛人、而政莫高於博利人」

【莫哀】古の豪壯なる歌曲の名、その詞今は知るべからず、杜甫の短歌行贈王郎司直に「王郎酒酣拔劒斫地歌——我能拔劒抑塞磊落之奇才」明の高啓の詩に「三孟勸君歌——、歸時應過黃金臺」

【白衣】史記儒林傳に「公孫弘以春秋——爲天子三公——は白丁に同じ、また無位無官の人をいふ、後漢書鄭均傳に「時號爲——尚書」とあるは官職なくして、尚書の祿を食むを以ての故にいふ、

【博依】詩をいふ、詩は博く物理に依託して作るものなるによりていふ、禮記の學記に「不學——不能安詩」

【白衣宰相】南史に「永明十年、陶弘景脫朝服、上表辭祿、詔許之、賜以東帛、敕所在月給茯苓時號——高青邱の詩に「————住山中」

【白衣酒ヲ送ル】(白衣送酒)續晉陽春秋に「陶潛嘗テ九月九日ニ酒無シ、宅邊東籬ノ下、菊叢ノ中ニ於テ菊ヲ摘ミ、把ニ盈テ、其ノ側ニ坐ス、未ダ幾ナラズシテ、白衣ノ人ノ至ルヲ望ミ見ル、乃チ王弘ノ酒ヲ送ルナリ、即チ便チ就キテ酌ミ、醉ヒテ後チニ歸ル」

【伯夷叔齊】孤竹君の二子なり、父叔齊を立てんと欲す、父卒するに及び、伯夷曰く父の命なりと、遂に逃る、叔齊も亦逃る、國人その中子を立つ、周の武王殷を伐たんとて西伯の木主を載せて以て行く、——馬を叩へて諫めて曰く、父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ孝といふべけんや、臣を以て君を弑す、仁と謂ふべけんやと、左右之を殺さんと欲す、太公曰く義士なりと、扶けて之を去らしむ、王すでに殷を滅し、天子となり、天下周を宗とす、————之を恥ぢ首陽山に隱る、歌を作りて曰く、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣と、遂に餓ゑて死す、

【白雨】清異錄に「關中雹ヲ謂ヒテ——トイフ」また驟雨をいふ、蘇軾の詩に「——跳珠亂入船」

【白羽扇】白き鳥の羽の扇、諸葛亮、司馬懿と、渭濱に戰ふや、——を持して三軍を指揮す、衆軍その進止に隨ひぬ、

【白雲鄉】天帝の居をいふ、莊子の天地篇に「乘彼白雲至于帝鄉」蘇軾の潮州韓文公碑に「公昔騎龍——」

【白雲孤飛】客中親を思ふ故事(望雲)を見よ、

【博影】(影ヲ搏ツ)を見よ、

【博奕】博は局戲、奕は圍碁なり論語陽貨篇に「飽食終日無所用心、難矣哉、不有——者乎、爲之猶賢乎已」

【白ヲ舉グ】(舉白)白は罰杯なり、說苑の善說篇に「魏ノ文侯大夫ト酒ヲ飮ム、公乘不仁ヲシテ、觴政ヲ爲サシム、曰ク、飮ンデ噿サザル者ハ、浮スルニ太白ヲ以テセヨト、文侯飮ンデ盡ク噿サズ、公乘不仁白ヲ舉ゲテ君ニ浮ス、君視テ應ゼズ、侍者曰ク、不仁退ケ、君已ニ酔ヘリト、公乘不仁曰ク、周書ニ曰ク、前車ノ覆ルハ、後車ノ戒ト、蓋シ其ノ危キヲイフ、人臣タル者易カラズ、君タルモ亦易カラズ、今君已ニ令ヲ設ク、令行ハレズシテ可ナランヤト、君曰ク善シト、白ヲ舉ゲテ飮ム、飮ミ畢リテ曰ク、公乘不仁ヲ以テ上客トナセト」觴政とは人に酒を飮すに其の式を正す職なり、轉じて、單に酒杯の意にも用ふ、漢書の班氏敍傳に「諸侍中皆引滿舉白、談笑大噱」一說に、白は酒杯、罰杯は轉義なりと、【魄ヲ奪フ】(奪魄)魄は人の精爽なり、精神を喪ふをいふ、左傳に「原叔必有大咎、天——之——矣」

【白屋】白茅にて屋をふきたる家にて、貧家をいふ、轉じて庶人の稱とす、韓詩外傳に「窮巷——之士、周公所先見者、四十九人」漢書蕭望之傳に「恐非周公相成王、躬吐握之禮致——之意」註に「——ハ賤人ノ居ル所ロナリ」賈島の雪晴晚望の詩に「樵人歸——寒日下危峰」

【白頭】白き「オピダマ(楚ハ——)」を見よ、

【伯牙琴ヲ絕ツ】(伯牙絕琴)說苑、列子等に見ゆ(知音)を見よ、

【白雁】古今詩話に「北方ノ白雁、秋深クシテ乃チ來レバ則霜降ル、之ヲ霜信ト謂フ」

【白眼】睥睨(ニラミツケル)する意、晉書阮籍傳に「籍字ハ嗣宗禮敎ニ拘ハラズ、能ク青——ヲナス、禮俗ノ士ヲ見レバ、——ヲ以テ之ニ對ス、嵇喜ノ來ルニ及ビテ卽チ籍——ヲナス、喜懌バズシテ退ク、喜ノ弟康之ヲ聞キ、乃チ酒ヲ齎シ、琴ヲ挾ミテ造ル、籍大ニ悅ビ乃チ青眼ヲ見ハス、是レニ由リ、禮法ノ士、之ヲ疾ムコ

ト雖ノ若シ」(阮籍)を參看せよ、

【伯顏】 元の人、世祖に仕へ中書左丞相に拜す、裁決流るるが如し、省中咸服して曰く、眞の宰相なりと、自ら將とし、宋を伐ちて之を降す、累遷して太傅に至り、卒して淮南王に封じ、忠武と謚せらる、元史に「伯顏深略善斷將二十萬衆、若將一人、諸帥仰之如神明」

【白金】 銀なり、說文に「銀ハ——ナリ」爾雅に「——之ヲ銀トイフ、ソノ美ナル者之ヲ鎰トイフ」

【莫逆】 意氣投合して心に逆ふことなき交をいふ、莊子の大宗師篇に「四人相視而笑、莫逆於心、遂相與爲友」

【白居易】 字は樂天、香山居士と號す、その先は太原の人、後ち華州下邽に徙る、大曆七年七月生る、九歲にして聲律を暗識し、敏悟人に絕す、貞元十四年進士に擢んでられ、ついで翰林學士と爲る、事に因りて江州の司馬に貶せらる、その後諸官を歷て會昌の初め、刑部尙書を以て致仕す、大中元年卒す、年七十五、尙書右僕射を贈られ、文與と謚す、白氏長慶集七十五卷の著あり、

【白魚跳リテ武王ノ舟ニ入ル】 太平記卷十七に見ゆ、史記の周本紀に「武王渡河、中流白魚躍入王舟中、武王俯取以祭」注に「馬融曰ク、魚ハ介鱗ノ物、兵ノ象ナリ、白ハ殷ノ正色、王ノ舟ニ入ルハ殷ノ命、周ニ歸スルノ象ナリ」この故事によりて敵國の我に歸服する兆とす、

【璞玉渾金】 璞玉は、玉の未だ琢かざる者、渾金は、金の未だ煉らざる者、人の性質の美にして文飾なきに比す、晉書の山濤の傳に「山濤字ハ巨源、少有器量、介然不群(中略)王戎目濤如——人皆欽其寶、莫知名其器」

【白玉盤】 月の異名、李白の詩に「小時不識月、呼作白玉盤」

【白玉樓】 圓機活法に「李長吉將ニ卒セントス、夢ニ人ノ一版書ヲ持スルヲ見ル、曰ク、天上ノ白玉樓成ル君ヲ召シテ記ヲ爲ラシムト、シバラクアリテ氣絕ス」この事、書言故事にも見ゆ、長吉は唐の李賀の字、この故事によりて、文人の死を——中の人となるといふ、

【白魚舟ニ入ル】 前の(白魚跳リテ)を見よ

【白駒ノ隙ヲ過グルガ如シ】 (如白駒之過隙)人の一生は白駒の馳せ過ぐるを、壁の隙間より「チラリ」と見るが如くに、疾きものなるに喩ふ、莊子の知北遊篇に、

「人、天地ノ閒ニ生ズル、白駒ノ郤(スキマ)ヲ過グルガ若ク、忽然タルノミ」とあり、郤は隙に同じ、また漢書の張良傳に「人、一世ノ閒ニ生ズル、白駒ノ隙ヲ過グルガ如シ」とあり、一說に、白駒は日影をいふと、亦通ず、

【白華ノ嘗、白茅束ヌ】 夫婦相須ちて用を爲すの義、詩の小雅に「白華嘗兮、白茅束兮、之子之遠、俾我獨兮」白華を漉して嘗となせば、白茅を以て之を束ぬ、二物至りて徵なるも、亦必ず相須ちて用を爲すに、何ぞこの子は遠かりて、我をして獨り居らしむるやと、夫婦の離別を怨みたるなり、

【擘窠ノ字】 大字をいふ、淵鑑類函一百九十五卷に「顏眞卿請乞御書題放生池碑額表曰、臣今謹據石擘窠大書一本隨表奏進」一解に篆文の一體なりと、

【伯兄】 「オホアニ」伯氏また長兄に同じ、孟子に「鄉人長於——一歲」

【白圭ヲ三復ス】 (三復白圭)一日に三たび白圭の詩を反復吟咏するは、言を謹まんとを欲するなり、論語先進に「南容——一ニ」とあり、詩の大雅抑の篇に「白圭之玷、尙可磨也、斯言之玷、不可爲也」とあり、玷は音テン缺なり(南容ハ)を參看せよ、

【白圭隣ヲ經ニス】 經は低くして水を受くる處なり、白圭といへる人水を治め堤を築きて之を隣國に注ぎ、以て自國の水害を免れたるなり、柳宗元の興州江運記に「白圭經隣、孟子不與」また孟子告子下篇に「白圭曰、丹之治水也、愈於禹、孟子曰、子過矣、禹之治水、水之道也、是故禹以四海爲壑、今吾子以隣國爲壑」

【邈乎】 (——一)を見よ、

【白虹日ヲ貫ク】 (白虹貫日)史記の鄒陽の上書に「昔者荊軻、慕燕丹之義、白虹貫日」の註に「燕ノ太子丹、秦ニ質タリ、始皇之ヲ遇シテ禮無シ、丹亡ゲテ去ル、故ニ厚ク荊軻ヲ養ヒ、秦王ヲ刺サシム、精誠天ニ感ジテ、白虹之ガ爲メニ日ヲ貫クナリ」又曰く「白虹ハ兵ノ象、日ハ君ナリ」と、白虹は日傍の氣暈なり、——一ーは、國君兵を被るの兆なり、戰國策に「專諸之刺王僚也、彗星襲天、聶政之刺韓傀也、——一ー」

【白黑】 清濁の義に用ふ、漢書薛宣傳に「所ノ貶退稱道、——分明」また王莽傳に「遞相賊賂、——紛然」

【博古圖】 三十卷、宋の大觀中王黼等敕を奉じて撰す、書中收むるところの古器、眞贋雜糅して、辨證疎謬多しと雖も、銘字器形の存在して考古の資とすべきものなきにあらず、この書具には宣和——といふ、黼

字は将明、開封祥符の人」

【白虎通義】（白虎通）を見よ、

【白滾水】「ニエタツク湯、熱湯また滾湯に同じ、小說に用ふる語、

【貌姑射之山】仙人の棲めりといふ山、莊子逍遙游に「——、有神人居焉、肌膚若氷雪、淖約若處子」注に「貌ハ遠ナリ」山海經に「盧其山之南三百八十里、曰姑射之山無草木多氷」

【白賊】秋をいふ、爾雅に見ゆ、註に「氣白クシテ收メ殺ス」

【白象】米を搾みて正白ならしむるをいふ、漢書惠帝紀「鬼薪——」の字あり、死罪を犯す者は、之をして薪を取り宗廟に給せしむ、故に鬼薪といふ、女の罪人には、米を搾みて顆粒を缺かず端正なる者のみを取らしむ、かくすること三年にして、後ちに之を殺す、

【博山】「カウロ」宋陶穀清異錄に「——ハ香爐ナリ、海中ノ——ニ象ル、下盤ニ湯ヲ貯ヘ、潤氣香ヲ蒸ス、海水ノ四モニ環ルニ象ル」錦字箋に「長安ノ巧工丁諴、九層——香爐ヲ作リ、鏤ムニ奇禽怪獸ヲ以テス、皆自然ニ能ク動ク云云」樂史の太平寰宇記に「華岳三峯アリ、直上數千仞、基廣クシテ峯峻シ、巒秀嶺表ニ迄ル、削成ス

【白山黑水】長白山と、黑龍江とをいふ、金史世紀に「生女直地、有混同江·長白山、混同江亦號黑龍江、所謂——是也」

【伯氏】いちばん年上の兄なり、下の（——ハ壎）を見よ、

【麥秋】陰曆の四月をいふ、禮記の月令に「是ノ月（孟夏）ヤ麥秋至ル」註に「秋ハ百穀成熟ノ期、此レ時ニ於テハ夏ナリト雖モ、麥ニ於テハ即チ秋ナリ、故ニ——ト云フ」白居易の詩に「洛下——月、江南梅雨時」

【白獸樽】晉書禮志に「正月元會——ヲ殿庭ニ設ケ、樽蓋上ニ白獸ヲ施シ、若シ能ク直言ヲ獻ズル者アレバ、此ノ樽ヲ發シテ酒ヲ飲マシム」

【麥秀ノ歌】殷の箕子が故の殷の墟を過ぎて作りし歌なり、曰く「麥秀漸漸兮、禾黍油油兮、彼狡童兮、不與我好兮」史記殷紀に見ゆ、これより故國の亡滅せしを歎ずるを「麥秀ノ歎」といふ、

【柏舟ノ操】寡婦の節操のすぐれたるを稱す、衞の太子共伯早く死す、その妻共姜義を守る、父母奪ひて之を嫁せんと欲す、共姜乃ち柏舟の詩を作り、以て自ら誓ふ、詩は詩經に出づ、

【白氏長慶集】七十一卷、一名白氏文集、唐の白樂天の詩文集なり、その友元稹の序あり、長慶は、穆宗の朝の年號、樂天の詩は平易を旨とす、故に白俗の嘲あれども、平心に論ずれば、中唐以來の一大家たるを失はず文も亦頗る駢儷に長じ、達意を主とせり、わが國にては高野山西南院の舊藏本は、唐の會昌四年（仁明天皇承和十一年）の寫本なればその傳來の久しきを知るべし、佐世の目錄には白氏文集七十卷及び白氏長慶集二十九卷を著錄せり、

【白日閑過スル莫レ】唐の林寬の少年行に「白日莫レ閑過青春不再來」とあり、少年の時は再び來らず、故に光陰を空しく過す勿れとの義、

【伯氏ハ壎ヲ吹キ、仲氏ハ篪ヲ吹ク】（伯氏吹壎仲氏吹篪）兄弟の「ナカヨキ」をいふ伯は兄、仲は弟なり、壎は土にて作りたる笛なり、大鴛子の如し、上を銳にし底を平にす、六孔あり、篪は竹にて作る、長一尺四寸圍三寸、七孔あり、一の孔は上に出づ、徑三分、すべて八孔、横に之を吹く、壎篪は、その形異にして聲音も別なれども、此を合吹するときは善く和調す、以て兄弟の體異なれども、その心相親愛するに喩ふ、詩の何人斯篇に「——、——、——及爾如貫」とあり、如貫とは兄弟は連屬して離れざるをいふ、

【白氏文集】（白氏長慶集）を見よ、

【白刃】刀の「ヌキミ」中莆に「——可レ蹈也」徐幹の法象論に「季路遭レ亂正レ冠結纓而後死——之難」

【白刃ヲ冒ス】（冒白刃）敵の陣に勇み入る義、漢書司馬遷傳に「流涕沫血飲泣張空拳冒白刃北首爭死敵」

【白狀】自ら罪狀を愬ふるなり、白は告なり、漢書丙吉傳に「遽歸府見吉——」

【柏上桑】古今注に「柏上ノ桑者ハ秦氏ノ女、邯鄲ノ人ナリ、名ハ羅敷、桑ヲ柏上ニ採ル、王、臺ニ登リ、見テ之ヲ悅ビ、因リテ酒ヲ飲ミ、奪ハントト欲ス、羅敷乃チ箏ヲ彈ジ、——ノ歌ヲ作ル、羅敷善ク蠶桑、採レル桑城南隅、使君從レ南來、五馬立踟躕、使君謝羅敷、寧可共載不、羅敷前致レ辭、使君一何愚、使君自有婦、羅敷自有夫、東方千餘騎、夫壻居上頭」

【白沙泥ニ在レバ之ト皆黑シ】（蓬麻中ニ）を見よ、

【柏酒】柏葉酒に同じ、邪氣をはらふといふ、荊楚歲時記に「正月一日、長幼悉ク衣冠ヲ正シ次ヲ以テ拜賀シ椒柏酒ヲ進メ、桃湯ヲ飲ミ、屠蘇酒·膠牙餳ヲ進ムト云云」

【白首北面】才德は年の老少にはよらぬもの、白髮になりても不才者はなほ人に就き學ぶなり、賈瓊曰、夫

子十五爲ル人師ト(夫子は文中子)陳留王孝逸ハ先達之傲者矣(陳留は郡の名、その先達たるを以て文中子に傲慢なり)然白首北面豈年ヲ以テセンヤ(師たる者南に面して坐し、弟子北面して師に向ふ、年少者も才徳あれば、人の師となり、年老い頭白き者も、知る所ろなければ、就學す、年齢を以て論ずべきにあらず)

【貌諮孤】(——)を見よ、

【莫須有】宋の秦檜、岳飛の罪を誣いて之を殺さんとす、韓世忠檜に詣りて曰く、飛の罪明かならずと、檜曰く、明かならずと雖も、——云云と、世忠曰く、——の三字は何を以て天下を服せんと、——とは「有ルカモ知レヌ」といふ義なり、世に之を三字獄といふ、詳しくは宋史岳飛傳を見よ、

【白水眞人】錢の異稱、漢書に「王莽、錢文ニ金刀アルヲ以テノ故ニ、改メテ貨泉トナス、或ハ貨泉ノ字ヲ以テ、——トナス」とあり、卯金刀は即ち劉の字にて、漢の氏なり、故に之を改めたるなり、

【白晳】晳は容色の潔白なるをいふ、左傳昭二十六年に「——蠆盡眉」また魏書崔浩傳に「織妍——」晳は析に從ひ白に從ふ、說文に「人色白也」

【白石先生】葛洪神仙傳に「——常煮白石爲糧、因就白石山居、時人故號曰「——」を見よ、

【白雪】調の高き詩賦をいふ(陽春——)を見よ、

【白戰】徒手にて戰ふ義にて、詩人が互に才を鬪はしめんとてするなり、詩轍に「——ハ詩人才ヲ鬪ハシムルコトニテ歐陽永叔・蘇子瞻ナド好ンデセシコトナリ、物ニ體スル語ヲ忌ムトテ、雪ノ詩ナレバ玉・月・梨・梅・棘・絮・鶴・皓・素・銀・鹽・袁安・東郭ナドイフヤウノコトヲ禁ズルナリ云云」田機活法に「蘇東坡汝陰ニ守タリ、雪ヲ得テ聚星堂ニ會飲ス、客ニ約シテ詩ヲ賦シ歐公ノ體ニ效ヒテ鹽玉鶴鷺等ヲ以テ比ト爲サズ、皓白素鮮等ノ字ヲ使ハズ、ソノ落句ニ云フ、汝南先賢有ル故事、醉翁詩話誰續說、當時號令君聽取、——不許持寸鐵ニテ」

【搏戰】手にて對ひ戰ふなり、漢書李陵傳に「陵——攻之」

【漠然】ぼんやりとして心の空しき貌、淮南子に「聖人內修其本而不外飾其末、——無爲而無不爲也、澹然無治而無不治也」

【貌然】貌は遠なり、及ぶべからざる貌、漢書嚴助傳に「——甚惡」

【莫大】大なること此の上なしと云ふ義、漢書の賈誼傳の「莫大諸侯」の註に「莫大トハ最大ヲイフ、其ノ國ヨリ大ナル者、有ルコト無キヲイフナリ」易經繫辭に「法象莫大乎天地ニ」

【剝啄】客の「コツコツ」と戸を叩く音、またその足音にもいふ、韓愈の耕錄に「門無——、松影參差」韓愈の——行に「剝剝啄啄、有客至門、我不出應、客去而嗔」また鳥の木を啄む音にもいふ、

【白癡】癡は說文に「不慧(ばか)也」左傳に「周子有兄不慧、不能辨菽麥、故不可立」の注に「菽麥ハ別チ易シ、故ニ以テ癡者ノ候(しるし)ト爲ス、不慧ハ蓋シ世ニ所謂ノ白癡ナリ」

【白丞】「マヒル」漢書賈誼傳に「——大都之中」

【伯仲叔季】兄弟の順序なり、伯は長兄、仲はその次、叔は又その次、季は末弟なり、論語微子篇に「周有八士、伯達・伯适・仲突・仲忽・叔夜・叔夏・季隨・季騧」朱註に「或ハ曰ク宣王ノ時ノ人、蓋シ一母四乳シテ八子ヲ生ムナリ」

【伯仲之間】兄弟の次第に喩へて甚だしき優劣の差なきにいふ、魏の文帝の典論に「傅毅之於班固、伯仲之間耳」

【爆竹】昔時わが國にて正月十五日に清涼殿の庭にて

行はせられし左義長の火はこれに本づく、荊楚歲時記に「正月一日、雞鳴而起、先於庭前——以辟山臊惡鬼」注に「神異經ニ、西方深山中ニ人アリ、ソノ長ケ尺餘、一足、性人ヲ畏レズ、之ヲ犯セバ人ヲシテ寒熱セシム、名ヅケテ山臊トイフ、竹ヲ以テ火中ニ著ケ燃ス」

【白著】彰明なり「イチジルシ」漢書馮奉世傳に「威功——爲世使表」

【白帝城】漢光武の時、公孫述成都に據り、自ら白帝と稱す、白は西方の色なればなり、因りて更に巴郡を名づけて——といふ、

【白鳥】鶴又は鷺の如き白羽の鳥をいふ、孟子梁惠王上に「——鼂鼂」また蚊の異名、金樓子に「齊桓公臥柏寢、謂仲父曰、——營營、是必餓耳、開碧紗櫥進之、——蚊也」

【白田】畑なり、晉書傳玄傳に「白田ノ收、十餘斛ニ至リ、水田數十斛ニ至ル」畠の和字に符合す、

【白顚】馬の額に白毛あるをいふ、詩經秦風車鄰に「有車鄰鄰、有馬——」後世はこれを的額といふ、

【薄田】瘠せたる田地、三國志の蜀志諸葛亮傳に「成都ニ桑八百株、——十五頃ニ

【幕天席地】 志氣の大いなるをいふ(天ヲ幕トシ)を見よ、

【白徒】 白は空なり、——は軍隊の素養なき者、漢書鄒陽傳に「驅——之衆」この注に「素ヨリ軍旅ニ非ザリシ者ヲイフ、猶ホ白丁トイフガ如シ」と、邦語に事に經驗なき者を「シロウト」といふは——の義か、管子七法にも「以敎卒練士擊——」とあり、

【白頭翁】 草の名、和名「オキナグサ」

また「シラガ」の老人、劉廷芝の詩に「寄言全盛紅顏子、應憐半死——」、此翁白頭眞可憐、伊昔紅顏美少年」

また「ヒヨドリ」の一名、白頭鳥ともいふ、

【白頭新ノ如ク、傾蓋故ノ如シ】 (白頭如新傾蓋如故)白頭如新とは幼時より白髪の老人となるまで交りても、意氣合はざるときは、昨今相識りたる人の如く冷淡なるをいふ、傾蓋如故とは、忽ち相逢ひ蓋を傾けて語るも、能く心を知り得れば故舊の友人の如く、親密となるをいふ、史記鄒陽の傳に出づ、下に「何則知與不知也」とあり(說苑に二の如字、皆而の字に作る古通用す(傾蓋)を見よ、

【白頭吟】 西京雜記に「司馬相如茂陵ノ女子ヲ聘シ、妾ト爲サント欲ス、卓文君——ヲ作リ、以テ自ラ絕ツ、皚如山上雪、皎若雲閒月、良人有兩意、故與相訣別ト、マタイフ凄凄重凄凄、嫁娶不須啼、願得一心人、白頭不相離ト、相如之ニ感ジテ乃チ止ム」

【白波】 盜賊の異稱なり、後漢書に「靈帝中平元年ニ、張角反ス、皇甫嵩之ヲ討ズ、角ノ餘賊、西河ノ白波谷ニ在リ、時俗白波賊ト號ス」とあるに本づく、シラナミ」

【皤皤】 人の敬を受けて心に留めざる貌、詩經大雅抑篇に「誨爾諄諄、聽我——」

【漠漠水田白鷺飛】 唐の王維の積雨輞川莊作(七律、唐詩別裁集卷ノ十三ニ出ヅ)の前聯の句、下に「陰陰夏木囀黃鸝」の句あり、この句もと李嘉祐の五言の句に、漠漠陰陰の二疊字を冠したるのみなれどもこの疊字あるがために水田の廣き狀、夏木の深きありさまを寫して宛然目に在り、

【白白地】 「アキラカ」である、明白、また顯明の義、語錄又は小說等に用ふる俗語、

【白髮三千丈】 憂愁の餘、白髮の長きさまを夸張していへるなり、李白の照鏡見白髮詩に「——、綠愁如箇長、不知明鏡裏、何處得秋霜」

【白飯青菊】 人に招かれて、己の僕や馬まで「モテナシ」を受けたるを辱——之與といふ、杜詩に「肯訪

浣花老翁無錢君酤酒滿眼酤(酤は買なり、獨人竹筒もて酒を買ふ、筒上に、繩を穿つの眼あり、酒滿ちて筒眼に近づくを滿眼酤といふ)與奴白飯馬青芻」と、芻は芻の俗字、馬にはましむる草なり

【白賁】 賁は飾なり、白色のかざり、易經賁卦に「——无咎」とあるは、質素なれば、過失の咎なきをいふ、

【白眉】 兄弟中の卓越する者をいふ、轉じて群を拔き、衆に超ゆるものをも稱す、蜀志に「馬良字季常、襄陽宜城人、兄弟五人、字皆用常字、並有才名、鄉里爲之諺曰、馬氏五常、——最良、良眉中有白毛、故以稱之」とあるに本づく、五常とは、兄弟五人、皆字に常の字を用ふ、故にいふ、良は、昭烈帝の時、侍中となる、

【薄氷ヲ履ムガ如シ】 (如履薄氷)春氷を涉るといふに同じ、極めて危きに喩ふ、詩經小雅小旻に「戰戰兢兢、如臨深淵、如——」戰戰は恐るるなり、兢兢は戒しむるなり深淵に臨むが如しとは、墜ちんことを恐るるなり、薄氷を履むが如しとは、陷らんことを恐るるなり、

【白傅】 白樂天をいふ、唐書の傳に據るに、樂天は開成の初に、太子大傅となりたり、故にいふ、

【拍浮】 水をおよぐ、樂善錄に「少年恃其善——、解衣

【莫府】 【幕府】 莫は幕に通ず、次條を見よ、

漢書の李廣傳の註に「晉灼曰ク、衞青匈奴ヲ征シテ大ニ克ツ、就チ大將軍ニ幕中ニ拜セラル、故ニ幕府トイフ」史記の註に「大將軍ノ府ヲ幕府トイフ、軍ノ至ル所ロ、幕ヲ以テ將軍ノ居處ヲ構ヘ、其ノ中ニ在リテ事ヲ治ムルガ故ナリ」

【薄福】 「フシアハセ」薄命に同じ、北史李諧傳に「諧子庶死、見夢于其妻曰、我——、託劉氏爲女」

【博物志】 十卷、舊本晉の張華撰と題す、實は原本は散佚して傳はらず、後人華の遺文を採りて編を成し、又他說を雜取して之に附益せしなり、地理畧・地・山・水・山水總論より典禮考・樂考・服飾考・器名考・物名考・異聞・史補・雜說に至るまで凡數十目に分ち記せり、和版あり、

【博物新編】 三集、英國の醫士合信著す、一集には、地氣論・熱論・水質論・光論・電氣論を載せ、二集には、天文略論・地球論を載せ、三集には鳥獸略論を載す、

【博物君子】 博識の人をいふ、左傳昭元年に「晉公聞子產之言曰——也」史記の吳世家に「嗚呼又何其閎覽、——也」

【博文約禮】 論語の雍也篇に「子曰君子博學於文、約之以禮亦可以弗畔矣」とあり、朱註に「君子ハ學ハソノ博カランコトヲ欲ス、故ニ文ニ於テ考ヘザルナシ、守ハソノ要ナランコトヲ欲ス、故ニソノ動クヤ必ズ禮ヲ以テス、此ノ如クナルトキハ、以テ道ニ背カザルベシ」また同君子罕篇に「博我以文待我以禮」

【白描】 「スミガキ」の畫、遊生八牋に「設色(ゑのぐをつける)ニ各殊其極ニ、水墨ともいふ、

【白璧ノ微瑕】 すべて事、大體完美にして些しの疵あるに喩ふ、梁の蕭統の陶淵明集序に「一一一惟在閒情一賦ニ史記龜策傳に「黃金有疵、白玉有瑕」

【白鳳】 晏殊の詩に「閑思北海銀宮畔、誰從丹山白鳳凰」

【蘇軾の詩】 「鵝毛垂馬駿、自作騎ニ一ニ

【白鳳ヲ吐ク】 (吐白鳳)圓機活法に「前漢ノ揚雄、甘泉賦ヲ作リテ成ル、白鳳ヲ吐クト夢ム」

【瀑霖】 (一一)を見よ、

【白廡】 詔書をいふ、翰林志に「唐ノ中書、黃白二麻ヲ用ヒ、綸命ヲ爲ル、ソノ後チ翰林專ラ一ヲ掌リ、中書獨リ黃麻ヲ用フ」唐會要に「凡ソ赦書德音立后建儲大誅討三公宰相ヲ拜免シ、將ヲ命ズルニハ、竝ニ一ヲ用フ」と、白居易の詩「一一紙上書德音京畿盡放今年稅」

【薄命】 不幸の義「フシアハセ」列子に「北宮子厚於德、薄於命、汝厚於命薄於德ニ汝は南宮子を斥す、北史に「時人傷其一一ニ王昌齡の長信秋詞に「眞成一一久尋思、夢見君王覺後疑」蘇軾の一一佳人の詩に「自古佳人多命薄」

【白面ノ書生】 年若くして事務に經驗なき者をいふ、晉書に見ゆ、高陽王隆の語、また宋書沈慶之傳に「欲伐國而與一一一謀之、事何由濟」

【莫邪】 昔の名劍の名(干將)を見よ、

【怕痒樹】 百日紅の一名「サルスベリ」その枝の「マタ」を「クスグル」ときは各枝皆うごく故に名づくといふ、痒一に癢に作る(百日紅)を見よ、

【白楡】 「ニレ」の木、古樂府に「天上何所有歷歷種一一ニ(楡)を參看せよ、

【伯樂】 古の善く馬を御せし人、莊子音義に「一一姓ハ孫、名ハ陽、善ク馬ヲ馭ス」石氏星經に「一一ハ天ノ星ノ名、天馬ヲ典ルコトヲ主トス、孫陽善ク馭ス、故ニ以テ名ト爲ス」韓愈の雜說四に「世有一一、然後有千里馬ニ曹子建の求自試表に「騏驥長鳴、一一昭其能ニ

【伯勞】 鳥の名、モズ鵙に同じ、形「ツグミ」より小に、首大きく、眼薄黑く、大きくして銳く、邊黑くして麁に似たり、背蒲黑くして末曲り尖りて銳し、頭と脊とは赤褐にして、兩翼は淡黑背にて黑斑白點あり、小鳥又は蟲を捕へ食す、

【博浪沙】 地名、河南陽武縣の南に在り、韓人張良五世韓に相たるを以て、韓亡びて後ち爲めに仇を報ぜんとす、たまゝ〳〵秦の始皇東遊して一一中に至る、良乃ち力士をして鐵槌を操りて始皇を狙擊せしむ、誤りて副車に中つ、始皇驚き、求むれども得ず、天下に令して大に索む、詳しくは史記を見よ、

博浪沙　陳　孚

一聲車中膽氣豪　祖龍社稷已驚搖　如何十二金人外　猶有民閒鐵未銷

【陳琴】 は元人なり、十二金人は、始皇が天下の兵器を銷して金人十二をつくりたること、史記に見ゆ、その典を用ひたるなり、

【伯樂既ニ沒シ驥ハタダ焉クニ程ラン】 (伯樂既歿今驥將焉程兮)伯樂は古の善く馬を相せし人なり、驊驥伯樂に過はされば其の才力を程り盡る所ろなきを云ふ、賈相明君に過はされば、其の智能を施すこと能はざるの意、この語楚辭に出づ、

【伯樂ノ一顧】 賢人の知遇を辱うするに喩ふ、戰國策に「蘇代曰ク、客伯樂ニ謂フモノアリ、曰ク、臣駿馬アリ賣ラント欲ス、市ニ立ツコト三旦ナレドモ人與ニ言フナシ、願クハ之ヲ一顧セヨ、請フ一朝ノ費ヲ獻ゼント、伯樂乃チ之ヲ旋視シ、去リテ之ヲ顧ミル、一旦ニシテ馬價十倍ス」(千里ノ馬ハ)を參看せよ、

【白樂天】 (白居易)を見よ、

【白樂天牡丹詩】 帝城春欲暮、喧喧車馬度、共道牡丹時、相隨買花去、家家習爲俗、人人迷不悟、有一田舍翁、偶來買花處、低頭獨長歎、此歎無人悟、一叢深色花、十戶中人賦、

【博覽】 博く書を讀み古今の事理を明むる義、漢書成帝紀の贊に「一一古今、容受直辭、公卿稱職、奏議可述」晉書阮籍傳に「一一羣籍、尤好莊老」

【柏梁體】 七言にして毎句韻を押する詩の體をいふ、三輔黃圖に「武帝嘗置酒其上(柏梁臺の上なり)詔群臣和詩」詩は古詩源に出づ、滄浪詩話に「漢武帝與群臣共賦七言、毎句用韻、後人謂此體爲一一一ニ

【柏梁臺】 漢の武帝の築きし臺の名、柏を以て梁となすによりて名づく、漢書武帝紀に「元鼎二年春起一一ニ

【白龍魚化豫且ニ制セラル】（白魚龍化被豫且制）貴人も微行をなすときは、賤者の爲めに辱めらるる義、化一に服に作る、說苑に「吳王欲從民飮、伍子胥諫曰、不可、昔白龍下清冷之淵、化爲魚、漁者豫且射中其目、白龍上訴天帝、天帝曰、當是時、若安置而形、白龍對曰、我下清冷之淵、化爲魚、天帝曰、魚固人所射也、若是豫且何罪、夫白龍天帝貴畜也、豫且宋國賤臣也、白龍不化、豫且不射、今棄萬乘之位而從布衣之士、飮酒、臣恐其有豫且之患矣、王乃止」莊子外物篇に「神龍失水、陸居、爲螻蟻所制」とあるも意同じ、

【白道社】（——）を見よ、

【白鹿洞書院】南唐の時の學館にして朱熹之を再興せり、錦字箋に「廬山五老峰ノ下、唐李渤、兄涉トコノ洞中ニ隱ル、嘗テ一ノ白鹿ヲ養ヒ、故ニ名ヅク」玉海に「唐李渤與兄涉俱隱白鹿洞後爲江州刺史、卽洞創齋舍、南唐昇元中因洞建學館、置田以給諸生學者大集、以李善道爲洞主、掌教授」宋史の朱熹傳に「熹除知南康軍、訪白鹿洞書院遺址、奏復其舊、爲學規、俾守之」

【白露霜ト爲ル】露が凝りて霜となるをいふ、詩經秦風蒹葭に「蒹葭蒼蒼、白露爲霜」注に「蒹葭ハ薍ナリ」

楚辭に「皇天平分四時兮、窮獨悲此凜秋、白露降以霑兮、奄離披此梧楸」

【樗櫨侏儒】樗櫨は梁上の短柱「マスガタ」なり、樗一名は枅、櫨一名は槤、禮記の雜記の注に「樗櫨ニ山ヲ刻ムヲ山節トイフ」侏儒一に株樕に作る、一名は梲「ウダチ」「ツカバシラ」韓愈の進學解に「——樑閎店楔」

【破瓜之年】女子十六歲の稱とし、一說には男子六十四歲の稱とす、孫綽情人碧玉歌に「碧玉破瓜時、郎爲情顚倒、感君不羞恨、廻身就郎抱」とあるは前の例なり、事文類聚に「呂洞賓、謁張洎留詩云、功成當在破瓜年、洎年六十四卒」とあるは、後の例なり、隨園詩話に「破瓜、或解以爲月事初來、如瓜破、則見紅瀉者、非也、蓋瓜縱橫破之成二八字」とありされば破瓜は、八八の義にて、男女を論ぜず、十六歲と六十四歲とに通じて稱す可きが如し、

【葩經】詩經の異稱、韓愈の進學解に「詩正而葩」とあるに本づく、怡情小品に「載在——可考」

【瀟橋ニ柳ヲ折ル】人と離別するをいふ、二輔黃圖に「瀟橋在長安東、跨水作橋、漢人送客至此橋、折柳贈別」竹添井井の棧雲峽雨日記にも「辰牌抵瀟橋、古昔長安送行者、至此折柳爲別、今猶存、老柳數株、其纖弱者、亦毵毵可愛、河底皆白沙、水行其上、如鳴環珮、古人云、詩思在灞橋驢背、蓋不誣也」とあり、灞水は陝西省西安府藍田縣より出て北に折れて咸寧縣に至り渭水に合す、羅鄴の窓の詩に「何處離人不斷腸、灞橋斜日裊垂楊」

【灞橋ノ詩思】全唐詩話に「相國鄭綮詩ヲ善クス或ヒト曰ク、相國近ゴロ新詩アリヤ否ヤト、對ヘテ曰ク、詩思在灞橋風雪中、驢子背上、此何以得之」綮字は蘊武、昭宗の乾寧の初、相に拜す、前條を參看せよ、

【婆娑】舞ふ貌、詩經陳風東門之枌に「子仲之子、——其下」こまたフミマハル貌、杜甫の詩に「方知不才者、生長愚——」

また衣の揚る貌、張衡の思玄賦に「修初服之——」

また安坐なり、黃庭經に「金鈴朱帶坐——」

また琴の聲の委曲なる貌、嵇康の琴賦に「紆餘——」

【破碎】物をうち碎く義、史記、義縱傳に「義縱自河內遷爲南陽太守、至郡遂案寧氏、盡——其家」

【禖祭】「イクサノマツリ」師旅止まる所ろにて軍神をまつるなり、禮記王制に「禖於所征之地」詩經大雅皇矣に「是類是禖」類は軍の止まるところにて行ふ室內の祭の名、

【巴山】隋の縣名、荊州清江郡に屬す、今の湖北宜昌府長陽縣の西に在り、

【破產】產業を失ふをいふ、李白の過下邳圮上」詩に「子房未虎嘯、——不爲家」また李白の詩に「昨日——今朝空」

【把子】矢の「マト」明李呈芬の射經に「的ハ箭ノ侯、世俗通ジテ呼ンデ——ト爲ス」把一に靶に作る、同じ、

【馬史】司馬遷の史記をいふ、隋書に「遠寇——班書」班書とは、班固の漢書をいふ、

【馬矢】馬糞なり、廣韻に「屎モト矢ニ作ル」とあり、左傳文公十八年に「埋之馬矢之中」

【馬耳東風】聖賢の敎も、耳に入らざるに喩ふ蘇軾の詩に「青山自是絕世、無人誰與爲容、說向市朝公子、何殊馬耳東風」李白の詩に「世人聞之皆掉頭、有如東風射馬耳」

【馬氏文通】十卷、清の丹徒の人馬建忠撰す、文通とは文章の通則といふ意にて、西洋の文典に倣いて作る、その引據するところの例は、大抵周秦漢の經傳より撰し、編纂頗る整齊なり、

【波臣】魚の異名、莊子の外物篇に「莊周顧視車轍中、

有、鮒魚焉、周問之曰、鮒魚來、子何爲者邪、對曰、我東海波臣也」の註に「波臣ハ猶ホ水官トイフガ如シ」

【婆心】（老婆心）を見よ、

【巴人調】（巴調）を見よ、

【初アラザルナシ、克ク終リアルコト鮮シ】（靡不レ有レ初、鮮克有レ終）詩經大雅蕩に出づ、上に「天生二烝民一、其命匪レ諶」とあり、諶は信なり、天の衆民を生ずるや、その命信ずべからざるものあり、蓋しその命を降すの初め不善あることなし、而るに人能く善道を以て自ら終ふること少し是を以てこの大亂を致せりとの意、

【始有ル者ハ必ズ終有リ】（有レ始者必有レ終）揚子法言に「有レ生者必有レ死、有レ始者必有レ終、自然之道也」とあり、司馬光の註に「天常ニ春ニシテ、秋ナラズ、日常ニ朝ニシテ、暮レザレバ、則チ人長生シテ死セズ」

【始メテ俑ヲ作ル人、後ナカランカ】太平記卷二十八に見ゆ、孟子の梁惠王上に「仲尼曰、始作レ俑者、其無レ後乎、爲二其象一人而用レ之也」とあるに本づく、俑は葬に從ふ木偶人なり、古の葬る者は、草を束ねて人をつくりて從衛となす、之を芻靈といふ、略〻人の形に似たるのみ、而るに中古之に易ふるに俑を以てす、面目はなはだ人に似たり、故に孔子はその不仁を惡んで、その必ず後なからんと言はれしなり、

【霸者】孟子公孫丑上に「力ヲ以テ仁ヲ假ル者ハ霸タリ、德ヲ以テ仁ヲ行フ者ハ王タリ」註に「力ハ土地甲兵ノ力ヲイフ、仁ヲ假ルトハ、本是ノ心無クシテ、其ノ事ヲ借リ以テ功トスル者ナリ、齊桓、晉文ノ若キ是ナリ云云」わが國にては源頼朝・德川家康の如きこれなり、また孟子盡心上に「霸者之民、驩虞如」（霸）を見よ、

【馬上殘夢ヲ續グ】朝早く出て立ち、馬上にてうとうととと眠りながら行くをいふ（早行）を見よ、

【馬上ニ之ヲ得タリ】（馬上得之）兵馬の力にて天下を得たる義（寧ロ馬上）を見よ、

【波旬】法華音義に「此云二惡者一、謂二常有一惡意一、成二就惡法一也」名義集に「——ハ訛ナリ、正ニハ波卑夜トイフ、釋迦出世ノ時ノ魔王ノ名ナリ、奈ニハ殺者ト言フ、常ニ人ノ慧命ヲ斷ゼント欲ス、故ニ亦惡中ノ惡ト名ヅグ」

【馬食】箸を用ひず、直ちに口を食器につけて食ふことと馬の如くするをいふ、史記范雎傳に「坐二須賈於堂下一、置二芻豆其前一、令二兩鯨徒夾而一レ之」芻は藁を一寸ばかりに切りたるもの「スサ」

【馬軾】明人、字は敬瞻、正統の閒、天文生より漏刻博士に官す、軾書を讀み、氣節を負ひ、尤も詩盡に工な

り、修撰岳正と友とし善し、天順の初、正は曹石の中つるところとなり、欽州に左遷せらる、舊知親友敢て別を餞する者なし、軾獨り詩を爲りて之を送る、その盡郭熙を宗とし、高古にして法あり、

【芭蕉】暖國產の草、莖の圓、尺に及び虛軟なること芋莖の如く、皮重りて之を包む、高五七尺、葉長大にして丈に及び幅一二尺、頂上に大なる一花を下垂す、實は食ふべし、廣志に「——一曰二芭苴一、或曰二甘蕉一、異物志に「——莖如二芋魁一、取鍛煮之、如二絲可一レ紡績爲二絺綌一」僧懷素本傳に「家貧ニシテ紙ノ書ス可キナシ、常ニ故里ニ於テ——萬餘株ヲ種エ以テ揮灑ニ供ス、ソノ所ヲ號シテ綠天ト曰フ」

夏日雜題　陸　游

午夢初回理二舊琴一、竹爐重灶海南沈、茅簷三日蕭蕭雨、又展芭蕉數尺心、

【皤然】「マシロ」なる貌、主に頭髮の白きに用ふ、皤皤とも連用す、南史范縝傳に「縝年二十九、髮白——」また權德輿の泗水詩に「呂叟年八十、——持二釣鉤一」

【馬前】騎馬の前なり、多く君主又は貴人に用ふ、禮記に「君車將レ駕、則僕執レ策立二於——一」左傳に「楚師將レ去レ宋、申犀稽二首於王之——一」

【馬足ノ塵】馬の足にて蹴たつる塵をいふ、費禹の句に「飄飄——」とあり（朝ニハ富兒ノ門ヲ）を見よ、

【坡陀】爾雅釋地に「——不レ平」とあり、玉篇には險阻也」とあり、

【波蕩】心、波の如くにゆれ搖くをいふ劉琨の表に「齊人——無二所レ繫レ心」

【播蕩】「サスラヒ」て所を失ふなり、播は逋なり、遷なり、播越に同じ、左傳に「夏氏之亂、成公——」

【旌ヲ搴ル】（搴旌）搴は音ケン抜き取るなり、李陵の答蘇武書に「然猶斬二將——一追二奔逐一北」

【旌ヲ萬里ノ外ニ縣ク】（縣旌萬里之外）縣は懸に同じ、遠くの外國に出征する義、漢書陳湯傳に「遂二陷一レ康居一、居二五重城一、寧二歙侯之旗一、斬二郅支之首一、縣二旌萬里之外一、揚二威昆山之西一」

【肌香シク體輕シ】（仙姿玉質）を見よ、

【膚凝脂ノ如シ】（膚如凝脂）膚の白く美しきをいふ、凝脂は脂寒くして凝れるものなり、詩經衞風碩人に「手如二柔荑一、——如二蝤蠐一、齒如二瓠犀一、螓首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」すべて容貌の美なるを言ふ、茅の始めて生ずるを荑といふ、柔にして白きをいふ、頷は頸なり、蝤蠐は木蟲の白くして長き者、瓠犀は瓠

中の子（ヒサゴノサネ）方正潔白にして比次整齊なるなり、蠖は蟬の如くにして小に、その額廣くして方正なり、蛾は蠶蛾なり、倩は口輔の美なるなり、盼は黑白の分明なるなり、

【膚撓マズ】（不膚撓）太平記卷二十二に見ゆ、孟子公孫丑上に「北宮黝之養勇也、不膚撓、不目逃」とあり、膚撓とは、肌膚刺されて撓み屈するをいふ、目逃とは目刺されて睛を轉じ、逃避するをいふ、

【破膽】（膽ヲ破ル）甚き怖るるなり、韓非子存韓に「趙民一ニ、荊人孤疑、膽ヲ破ル」を見よ、

【馬端臨】一字は貴與、江西樂平の人、廷鷺の子、年十九、心を學問に潛め、博く經書を極む、蔭を以て承事郎に補す、咸淳中進士第一たり、宋亡び鄉里に隱居敎授す、遠近之を師とす、人と言論するに寧寧として倦まず、著すところ大學集傳・多識錄・文獻通考等あり、世に行はる、

【蜂】格物論に「蜜蜂ニ三種アリ、皆一日ニ兩衙ス、一種林木ノ上ニ在リテ房ヲ作ル、一種人家ニ在リテ窠ヲ作ル、ソノ蜂甚ダ小ニシテ微黃蜜皆濃美ナリ、一種ハ黑色、房ヲ作リテ巖崖高峻ノ處ニ在リ、人跡ノ到ル可キニアラズ、ソノ蜜ヲ石蜜トイフ、土蜂ハ即チ穴居スル者、最モ大ナリ、亦蝝ト名ヅク、皆蜜尾、能ク人ヲ螫ス、一種ハ細腰、蜾蠃ト名ヅク、又蒲蘆ト名ヅク、又蠮螉ト曰フ、ソノ負フ所ロヲ觀ルニ、但螟蛉ノミナラズ或ハ蟢子、蝶シテ之ヲ斃シ、因リテ一小卵ヲソノ上ニ產シ、ソノ卵ノ化シテ成ルヲ俟チ、漸ク負フ所ロノ蟲ヲ食フ、久ウシテ乃チ寖大ニ、翼ヲ生ジテ飛ビ去ル、ソノ聲頻我頻我ト云フ者ニ似タリ」關尹子に「聖人師蜂立君臣、師蜘蛛立綱罟」楊萬里の蜂兒詩に「蜜蜂不食人閒倉、玉露爲酒花爲糧、作蜜不忙採花忙、蜜成猶帶百花香」

【把持】手に「シカ」と持つこと、白虎通に「霸ハ迫ナリ、把ナリ、諸侯ヲ迫脅シテ、其ノ政ヲーース」

【八佾】佾は舞列なり、天子は八、諸侯は六、大夫は四、士は二、佾毎に人數は其の佾の數の如し、或はいふ、すべて佾毎に八人なりと、論語八佾篇に「八佾舞於庭ニ」

【八音】金・石・絲・竹・匏・土・革・木なり、金を鐘とし、石を磬とし、絲を絃とし、竹を管とし、匏を笙とし、土を壎とし、革を鼓とし、木を柷敔とす、次條を參看せよ、また法界次第に、如來所出の音聲に、八種あることを說く、一、極好音、二、柔輭音、三、和適音、四、尊慧音、五、不女音、六、不誤音、七、深遠音、八、不竭音、是れなり、

【八音ヲ遏密ス】（遏密八音）遏は絕、密は靜なり、天子の喪の爲めに、音樂を絕ち止めて靜かならしむるをいふ、書經舜典に「三載四海ーーーーニとあり、堯の德を思慕して、此の如くせしなり、八音の解は前條を見よ、

【八藥宰相】唐書蕭瑀傳贊に「自瑀遜ーニ凡ーーーー、名德相望、與唐盛衰、世家之盛、古未有也」

【八埏】埏は地の極まるところ、「ハテ」ーーは國土の「カギリ」淮南子に「九州之外乃有ーーー、亦八千里」正韻に「埏ハ地ノ際ナリ、ーーハ地ノ八際ナリ」

【八殥】淮南子地形訓に「九州ノ外、乃チ八殥アリ、八殥ノ外、而シテ八紘アリ、八紘ノ外、乃チ八極アリ」註に「殥ハ猶ホ遠ノゴトキナリ」

【蜂ヲ師トス】（師蜂張仲才文始眞經に「聖人ーーー立君臣、師蜘蛛立網罟、師拱鼠、制禮、師戰蟻、制兵」蟻は蟻なり、

【蜂ヲ撥ル】（撥ー蜂ー誰カ知ラン僞言）を見よ、

【八垓】垓は界なり、國のはて、ーーは、八方の國のはて、王安石の句に「書成不得斷國論、但此空語傳ーーニ」

【八議】唐律に「議親・議故・議賢・議能・議功・議貴・議勤・議賓」とあり、これ元來周禮の秋官の八辟に本づくもの

にて、この八の中にあたる者、罪あるときは、常人は罰をうくるも、この八の中にあたる者は之を議して宥免せらるることあるをいふ、潘翰譜駿河大納言の條に「八議のうちその二つを重ねさせ給ふ御身」とある、二つは親と貴とを斥す、

一解に議は誹謗罵詈して侮蔑を加ふるなりと、周禮小司寇に「以八辟ーニ邦法ーニ附ーニ刑罰ーニ、一曰議親之辟、二曰議故之辟、三曰議賢之辟、四曰議能之辟、五曰議功之辟、六曰、議貴之辟、七曰、議勤之辟、八曰、議賓之辟」鄭註に「麗ハ附ナリ、親ハ宗室罪アレバ先ヅ請フナリ、故ハ舊知ナリ、功ハ大勳アル者ナリ、云云」

【八功德水】彌陀如來の報土に在る池中の水に八の功德あり、一は澄淨ニは、清冷、三は甘美、四は輕輭、五は潤澤、六は安和、七は除患、八は增益なり、无量壽經に「ーーーー滿ニ清淨香潔、味如ニ甘露ニ」

【破竹ノ勢】（破竹勢）積威の加はる所ろは力を勞せずして容易に敵を破るをいふ、晉書杜預の傳に「今兵威已ニ振ヒ、譬ヘバ如ク破竹ヲ、數節之後、皆迎ヘテ刃而解」

【八關齋戒】關は八惡を禁閉して諸の罪過を生ぜしめざるをいふ、一に八支齋法ともいふ、八戒とは、不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不飮酒・不ニ坐ニ高廣大牀ニ（高

一尺六寸闊四尺長八寸を過ぐる牀に坐せず）不レ善ニ華盛瓔珞一不レ習ニ歌舞妓樂一是れなり、菩薩處胎經に「八關齋是諸佛父母」

【八元八愷】　史記の五帝本紀に「昔、高陽氏ニ才子八人アリ、世ニ其ノ利ヲ得タリ、之ヲ八愷ト謂フ、高辛氏ニ才子八人アリ、世ニ之ヲ八元トイフ、此ノ十六族ノ者ハ、世ニ其ノ美ヲ濟シ、其ノ名ヲ隕サズ」註に「愷ハ和ラグナリ、元ハ善ナリ」元愷各ニ親族アリ故ニ族ト稱スルナリ、濟ハ成スナリ」又左傳の文十八年には、八元の名を伯奮・仲堪・叔獻・季仲・伯虎・仲熊・叔豹・季貍八愷の名を、蒼舒・隤敳・檮戭・大臨・龍降・庭堅・仲容・叔達」とせり、

【八叉手】　事文類聚に「唐ノ溫庭筠、才思艶麗、小賦ニ工ナリ（中略）凡ソ八タビ手ヲ叉シテ、八韻成ル」とあり、この事は揶言にも見ゆ、轉じて詩才の敏なるを稱するに用ふ、溫八叉ともいふ（溫庭筠）を見よ、

【八十ノ三歳兒】　俚諺なり、老人の心は再び幼兒の如くなるをいふ、淡書文帝紀に「七八十翁嘻戲如ニ小兒一」とあるに同じ、

【八儁】　韓非子顯學に「孔子之後、儒分爲レ八」とあり、——とは子張氏・子思氏・顔氏・孟氏・漆雕氏・仲良氏・孫氏・樂正氏なり、

【蓮】　（荷花）を見よ、

【八代】　東漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋をいふ、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「文起ニ八代衰一道濟ニ天下之溺一」また五帝三王の世を——又は八世といふと小學紺珠の註に見ゆ、

【八大地獄】　一に等活、二に黑繩、三に衆合、四に叫喚、五に大叫喚、六に焦熱、七に大焦熱、八に無閒、また八熱地獄ともいふ、

【八道】　朝鮮國は、京畿・江原・咸鏡・平安・黃海・忠清・慶尚・全羅の八道に分つ、

【八陣圖】　諸葛孔明の作りし陣形の名、三國志蜀志諸葛亮傳に「亮長ニ于巧思一、損益連弩木牛流馬皆出ニ其意一、推ニ演兵法一作ニ——一」咸得ニ其要一云」また水經注に「諸葛亮所造——、東跨ニ故壘一、皆累ニ細石一爲レ之、自ニ壘西去一、聚石八行、行相去二丈、因曰ニ八陣一」（吳子ガ八陣）を參看せよ、

【八方天】　佛敎の說、東方帝釋天、東北伊舍那天、南方閻魔天、東南火天、西方水天、西南羅刹天、北方毘沙門天、西北風天、

【八蠻】　蠻は南夷の名、——は爾雅の疏に「天竺・嗄首・焦僥・跂踵・穿胸・儋耳・狗軹・旁春」また書經旅獒に「通ニ道于九夷——一」解に八とは多きの稱、一に非るなりと、

百蠻とも熟す、

【八不淨物】　僧家にて貯ふべからざる八種の財物をいふ、即ち田宅を持し、草木を種植し、稻穀を刈り貯へ、奴婢・雞犬を畜へ、藏を建て財寶を貯へ、什具を備へ、屏障を莊彩し、鐵銅の釜鍋を用ひて自ら煮爨するにいふ、大藏法數に「佛在世ノ時、諸弟子ヲ誡メ、乞食自活シ少欲知足ニシテ此等ノ物ヲ畜フルヲ許サズ云云」末法燈明記に「彼時比丘漸貪畜——一一一」

【破陣樂】　（七德ノ舞）を見よ、

【八王日】　佛敎の說、立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の日をいふ、人閒の事を司る諸神の交代する日なりといふ、大藏法數に「春秋——者、是天地陰陽交代日也、此之八日、帝釋輔臣案行天下、比校善惡、定生注死、增滅罪福、樂善者若能避禁持齋致レ生、善處也」

【跋】　文體の名（題跋）を見よ、

【閥閱】　伐は功を積むなり、閱は經歷なり、貴族を稱す、淡書の車千秋傳に「無ニ他材能術學一、又無ニ伐閱功勞一」とあり、伐は閱に同じ、史記の功臣年表に「明」其等曰伐積レ日曰レ閱」

【髮ヲ斷チ身ヲ文ル】　（斷髮）を見よ、

【伐柯】　柯は斧の柄なり、斧の柄を伐る者は、その柯を伐るために執れるところの柄の寸法を標準として之を伐るなり、以て人の則るべきものは目前に在りとの意、詩經豳風伐柯篇に「伐レ柯伐レ柯、其則不レ遠」また國語に「先人有レ言伐レ柯者、其則不レ遠、今君王不レ斷、其忘會稽之恥乎」

また右の伐柯篇に「伐レ柯如何、匪レ斧不レ克、取レ妻如何、匪レ媒不レ得」とあるによりて、婚姻の媒人（ナカウド）を伐柯といふ、

【抜河】　「ツナヒキ」の戲をいふ、唐封演聞見錄に——は古、之を牽鉤棄といふ、漢の風俗、常に正月望日を以て之を爲す、相傳ふ楚將に吳を伐たんとす、以て戰を敎ふるとを爲す、古は篾纜を用ふ、今の民は則ち大麻繩の長さ四五十丈なるを以て兩頭に小索數百條を繫ぎ前に挂け、二朋を分ち兩勾齊しく挽く、大組の中に當りて、大旗を立て界となし、震鼓叫口すれば便ち相牽引す、却く者を以て輸と爲す、名つけて——といふと、錦字箋に景龍文館記を引きて「唐ノ中宗景龍四年、淸明ノ日、梨園ニ幸シ、三品以上ニ命ジ、抛球抜河セシム、僕射韋巨源・少師唐休璟唐一ニ康ニ作ル衰老シテ組ニ隨ヒテ地ニ蹈レ輿ツコト能ハズ、上及ビ皇后

妃主臨ミ觀テ大ニ笑フ」

【八戒】（ハツカイ）優婆塞（信士ト譯ス）優婆夷（信女ト譯ス）が月の六齋日（八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日ヲイフ）に持つ戒法をいふ、即ち一に不殺生戒、二に不偸盜戒三に不邪婬戒四に不妄語戒、五に不飲酒戒（以上五戒ニ同ジ）六に不坐高廣大牀戒七に不著花鬘瓔珞戒八に不習歌舞戲樂戒これなり、一一は具には八關齋戒といふ、關は禁なり、八罪を禁閉して犯さしめざる義なり（八關齋）を見よ、

【廿日草】（ハツカグサ）わが國にて牡丹の異名とす、詞花集に、關白前太政大臣の歌「咲きしより散り果つるまで見し程に、花のもとにて二十日經にけり」白樂天の牡丹芳と題する詩に「花開花落二十日、一城之人皆如レ狂」とあるに本づく、

【八家文】（ハツカブン）（唐宋一一一）を見よ、

【髮冠】（ハツカムリ）ヲ衝ク】（髮衝冠）（怒髮冠）を見よ、

【發揮】易の乾卦文言に「六爻一一旁通情也」の疏に「發越揮散旁通萬物之情也」と、情義を通じて發明する所ろあらしむるなり、李德裕の易州候臺記に「博采（ハツキ）舊史一一新意一」

【發鳩ノ山ニ精衛ト申ス人】（ハツキウ）太平記卷三十四に見ゆ、されども誤れり、精衛は鳥の名なり人にあらず（精衛海ヲ塡ム）を見よ、

【八旗兵】（ハツキヘイ）清の兵制、太祖の時、始めて八旗の制を立つ（滿洲八旗・蒙古八旗・漢軍八旗ノ三種アリ、實ハ二十四旗ナリ）毎三百人に一佐領を置き、五佐領に一參領を置き、五參領に一都統を置く、即ち七千五百人を領す、各都統に一旗を授く、旗は各その色を異にす、鑲黃旗・正白旗・鑲白旗・正藍旗・正黃旗・正紅旗・鑲紅旗・鑲藍旗是れなり、

【八區】（ハック）八方の場所なり、天下の義、晉書の樂歌に「勳格宇宙、化動一一」

【八苦】（ハック）涅槃經に「一ニ生苦、二ニ老苦、三ニ病苦、四ニ死苦、五ニ愛別離苦、六ニ怨憎會苦、七ニ求不得苦、八ニ陰盛苦」

【拔牟】（バツボウ）「ムレ」を拔きて「スグレタル」義、絕羣、超羣、冠羣、等皆同じ、梁書劉顯傳に「聰明特達出類一レ」

【八荒】（ハツクワウ）八方の荒忽極遠の地なり、賈誼の過秦論に「併呑八荒之心」また八方なり、天下といふ如し、杜詩に「一一開寰域」

【八紘】（ハツクワウ）類書纂要に「八紘ハ八方ノ綱維ナリ天地を維ぎて之が綱紀となるの義なり、淮南子の地形訓に「九州之外、乃有八澤、八澨之外、而有八紘、八紘之外、乃有八極」

【八卦】（ハツケ）卦一章「クワイ」易の「ウラナヒ」の算木の面にあらはれたる兆象をいふ、乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤の八をいふ、伏羲氏造りしのところ、易の繫辭に「四象生一一

☰乾 ☱兌 ☲離 ☳震
☴巽 ☵坎 ☶艮 ☷坤

【八景】（ハツケイ）瀟湘一一は今の湖南省に在り、夢溪筆談に「度支員外郎宋迪、工畫尤善爲平遠山水、其得意者、有平沙落雁・遠浦歸帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晩鐘・漁村夕照・謂之一一、好事者多傳之」瀟湘（ヤウ）を參看せよ、わが近江八景金澤八景などはこれに擬へて定めたるなり、

【八股】（ハツコ）明代以後今日まで擧業に應ずる者の用ふる文章の體の名なり對句を用ひて八ッ股に說き廣くるによりて名づく、頗炎武の日知錄に「經義ノ文、流俗之ヲ一一ト謂フ、蓋シ成化以後ニ始マル、股トハ對偶ノ名ナリ、天順以前ハ、經義ノ文ハ、傳註ヲ敷衍スルニ過ギズ、或ハ對、或ハ散、初ヨリ定格ナシ、其ノ單句ノ題モ亦甚ダ少シ、成化二十三年ノ會試、樂天者保天下ノ文、起講先ヅ三句ヲ提ゲ、即チ樂天ヲ講ズ、四股、過接四句、復保天下ヲ講ズ、四股、復四句ヲ收メテ大結ヲ作ス、弘治九年ノ會試、責難於君謂之恭ノ文、亦然リ、毎四股中、一反一正、一虛一實、一淺一深、ソノ兩對題、扇扇格ヲ立テ、則チ毎扇ノ中、各四股アリ、次第スルノ法、亦復之ノ如シ、故ニ今人相傳ヘテ之ヲ一一ト謂フ」

【跋胡】（バツコ）進退に窮する義、詩經の豳風狼跋篇に「狼跋其胡載疐其尾」胡は頷下のたれ肉なり、注に「老狼ニ胡アリ、進メバ則チソノ胡ヲ躡ミ、退ケバ則チ其ノ尾ニ跲ク 進退自由ヲ得ザルヲイフ」說文に「胡ハ牛頷垂也」

【跋扈】（バツコ）權勢を恣にして上を陵ぐ貌、後漢書梁冀傳の註に「扈ハ雕ナリ、水未ダ至ラザルニ先ダチテ雕ヲ作リ、魚ノ入ルヲ候フ、水退キ小魚獨リ留ル、大ナル者ハ雕ヲ跳跋シテ出ヅルヲ以テ、驕橫上ヲ犯スニ喩フ」通鑑五十三の後漢質帝紀に「帝梁冀ヲ目シテ曰ク、此レ跋扈將軍也」とありて、註に「跋扈ハ猶ホ跳梁ノ如シ、按ズルニ爾雅ニ山卑ニシテ大、扈跋スル者、蹊隧ニ由ラズシテ行ク、言フ心ハ强梁ノ人、正路ニ由ラズ、山卑ニシテ大ナレバ、跋ンデ之ヲ踰エント欲ス、故ニ跋扈トイフ」

【八殺】（ハッサツ） 黍・稷・稻・粱・禾・麻・菽・麥をいふ、

【跋扈將軍】（バッコ） 暴風の異名、南部烟花記に「隋ノ煬帝、舟ヲ泛ブ、忽チ陰風頗ル緊シ、敕シテ曰ク、此ノ風——ト謂フベシ」（跋扈）を參看せよ、

【發作】（ハッサ） 風雨などの起るをいふ、韓愈の南海神廟碑に「雷風怪雨、——無節」

【八彩重曈】（ハッサイトウドウ） 春秋元命包に、堯の眉は、八彩、舜の目は重曈とあり、劉峻相經序に「八彩ノ光眉、四曈ノ麗目、斯レ實ニ天時ノ特達、聖人ノ符表ナリ」

【八索九丘】（ハッサクキュウ） 古書をいふ（三墳五典）を見よ、

【八相】（ハッソウ） 佛敎にて應身の如來、世閒に出づるに八種の相を現すをいふ、祖庭事苑に「——一受胎、二降生、三處宮、四出家、五成佛、六降魔、七說法八涅槃」一解に、住胎・嬰孩・愛欲・樂苦・行降魔・成道・轉法輪の——をいふ、

【拔山ノ力】（バッサンノチカラ） 山をも拔く大力をいふ、項羽垓下に敗れし時、歌ひて曰く「力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝兮、騅不逝兮、可奈何、虞兮虞兮奈若何」史記項羽本紀に見ゆ、

【八宗】（ハッシュウ） 古く我が國に弘通せし敎門なり、即ち俱舍・成實・律・法相・三論・華嚴・天台・眞言これなり、この中華嚴までの六宗は奈良朝に起り、天台・眞言の二宗は平安朝に起る、今日存ずるは、法相・天台・眞言の三宗のみ、

【八史經籍志】（ハッシケイセキシ） 三十卷、漢書隋書、唐書（新舊）以下 宋遼金元明の八史中の藝文志若くは經籍志を集めて、合刻せしもの、目錄の學を研究するには極めて便なり、

【發軔】（ハツジン） 發車に同じ、軔（テコ）は車を止むる物、將に行かんとするときは之を發す、故に始めて啓行するを、發軔といふ、楚辭の離騷に「朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎縣圃」とあり、蒼梧は舜を葬りし處なり、縣圃は神山なり、崑崙の上に在り、轉してすべて事の端を發するに用ふ、沈德潛の唐宋八大家文讀本の序に「既因門弟子請、出向時讀本、粗加點定、俾讀者視爲入門軌途之志——也」

【帕首】（バッシュ） 帕は布にて額をまくもの「ハチマキ」條に同じ、二儀實錄に「禹會塗山之夕、大風雷震、有甲步卒千餘人、其不被甲者、以紅絹帕抹其額、自此遂爲軍容之服」韓文の送鄭尙書序に「——袴褶」とあり、また同人の元和聖德詩に「以錦纏股以紅——」とあり、帕の字音ハのときは「ハラオビ」

【八駿】（ハッシュン） （周ノ穆王ノ）を見よ、

【發蹤指示】（ハッショウシジ） 史記蕭相國世家に「夫獵追殺獸兎者狗也、——者人也」と、按ずるに、漢書には蹤を縱に作る、顏師古曰く「縱ヲ解キテ狗ヲ放ツヲイフ」指示とは獸の所在を指示するをいふ、說文を按ずるに蹤字なし、古は皆縱を以て蹤となす、

【發燭】（ハッショク） 「ツケギ」をいふ、輟耕錄に「杭人松木ヲ削リテ、小片トナス、其ノ薄キコト紙ノ如シ、硫黃ヲ鎔シテ木片ノ頂ニ塗ルコト分許、名ヅケテ發燭トイヒ、又焠兒トイフ、蓋シ以テ火ヲ發シ、及ビ燭燈ノ用ニ代フルナリ」

【拔萃】（バッスイ） 拔は特起なり、衆中より特に拔き出づるなり、孟子公孫丑に「出於其類拔乎其萃」とあるに本づく、韓文の與崔羣二書に「出群——」

【八政】（ハッセイ） 書經の洪範に「三、八政、一曰食、二曰貨、三曰祀、四曰司空、五曰司徒、六曰司寇、七曰賓、八曰師」とあり、食貨は民の生を養ふ所ろ、祭祀は本に報ずる所以、司空は土を掌りて其の居を安んじ、司徒は敎を掌りて其の性を成す、司寇は禁を掌りて其の姦を治め賓は諸侯遠人を禮し、往來交際する所以、師は殘を除き暴を禁ずる所以なり、

【伐性之斧】（バッセイノフ） 女色の人心を蕩してその性命を害ふに喩ふ、枚乘の七發に「皓齒蛾眉命曰——伐性之斧」また呂氏春秋本性に「出則以車入則以輦、務以自佚命之曰——」

る、顏師古曰く「紲ヲ解キテ狗ヲ放ツヲイフ」指示とは獸の所在を指示するをいふ、說文を按ずるに蹤字なし、古は皆縱を以て蹤となす、

【發燭】（ハッショク） 「ツケギ」をいふ、輟耕錄に「杭人松木ヲ削リテ、小片トナス、其ノ薄キコト紙ノ如シ、硫黃ヲ鎔シテ木片ノ頂ニ塗ルコト分許、名ヅケテ發燭トイヒ、又焠兒トイフ、蓋シ以テ火ヲ發シ、及ビ燭燈ノ用ニ代フルナリ」

【拔萃】（バッスイ） 拔は特起なり、衆中より特に拔き出づるなり、孟子公孫丑に「出於其類拔乎其萃」とあるに本づく、韓文の與崔羣二書に「出群——」

【八政】（ハッセイ） 書經の洪範に「三、八政、一曰食、二曰貨、三曰祀、四曰司空、五曰司徒、六曰司寇、七曰賓、八曰師」とあり、食貨は民の生を養ふ所ろ、祭祀は本に報ずる所以、司空は土を掌りて其の居を安んじ、司徒は敎を掌りて其の性を成す、司寇は禁を掌りて其の姦を治め賓は諸侯遠人を禮し、往來交際する所以、師は殘を除き暴を禁ずる所以なり、

【伐性之斧】（バッセイノフ） 女色の人心を蕩してその性命を害ふに喩ふ、枚乘の七發に「皓齒蛾眉命曰——伐性之斧」また呂氏春秋本性に「出則以車入則以輦、務以自佚命之曰」招憂之機、肥肉厚酒、務以相強、命之曰「爛腸之食、靡曼皓齒鄭衞之音、務以自樂、命之曰伐性之斧、三患者富貴之所致也」

【發夕】（ハッセキ） 夕は猶ほ宿の如し、宿る所ろの舍を離るるをいふ、詩經齊風に「齊子——」一解に、發は朝なりと、

【梭機】（ハッセキ） 農夫の雨具なり、管子に「身服——」唐韻に「——蓑、雨衣也」

【八節】（ハッセツ） 一年中の氣候の變り目八ッあるなり、立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至これなり、史記律書の「八正之氣」の注に「八正者八節」とあり、圓機活法に「立春、條風至、春分明庶風至、立夏清明風至、夏至景風至、立秋涼風至、秋分閶闔風至、立冬不周風至、冬至廣莫風至」

【末節】（マッセツ） （末節）を見よ、

【跋涉】（バッショウ） 詩經の邶風載馳に「大夫跋涉、我心則憂」の註に「草行ヲ跋トイヒ、水行ヲ涉トイフ」とあり、——は行路の艱難なるをいふ、左傳の襄二十八年に「——山川」

【跋前疐後】（バッゼンテイゴ） （前ヲ跋ミ）また（跋胡）を見よ、

【八體】（ハッタイ） 圓機活法に「秦ノ書ニ——アリ、一ニ曰ク、大篆、二ニ曰ク、小篆、三ニ曰ク、刻符、四ニ曰ク、蟲書、五

ニ曰ク、落印、六ニ曰ク、署書、七ニ曰ク、殳書、八ニ曰ク隸書」

【拔提河】 西域記巻六拘尸那揭羅國の下に「城西北三四里、波阿持多伐底河(唐ニ無勝ト言フ、舊譯ニ阿利羅拔提河トイフハ訛ナリ)西岸不遠、至沙羅林、其樹類槲、而皮青白、葉甚光潤、四樹特高、如來寂滅之所也」とあり、

【拔擢】 衆中より抜き出して用ふる義、漢書孔光傳に「今復——備内朝臣」

【八達】 晉書の光逸傳に「胡毋輔之與謝鯤・阮放畢卓・羊曼桓彝阮孚・散髮裸袒、閉室酣飲、已累日、逸將排戸入、守者不聽、逸便于戸外脱衣露頭于狗竇中窺之而大叫、輔之驚曰、他人決不能爾、必我孟祖也、遽呼入遂與飲、不捨晝夜、時人謂之——」孟祖は逸の字、宋の范質(魯公)の曉従子文に「南朝稱——、千古機青史」とあるは、これをいふなり、

【跋涉】 進退に窮する義(跋胡)を見よ、

【抜地倚天】 (地ヲ抜キ)を見よ、

【八秩】 年八十をいふ(一秩)を見よ、

【八音】 (八音)を見よ、

【八珍】 八ツの珍味なり、正字通に「食ノ美ナル者ヲ珍トイフ」周禮天官膳夫の「凡王之饋、珍用八物」の註に「淳熬・淳母・炮豚・炮牂・擣珍・漬・熬・肝膋也」また陸佃曰く「珍用八物、牛・羊・麋・鹿・麕・家・狗・狼ナリ」張謐古の大寶箴に「羅八珍於前、所食不過適口」また張九韶の群書拾唾に「後世八珍則曰、龍肝・鳳髓・兎胎・鯉尾・鴛炙・猩唇・熊掌・酥酪」また酥酪の代りに豹蹄を入るる説もあり、

【發擿】 人の罪をあばき出す義、漢書趙廣漢傳に「其發姦擿伏如神」

【發動】 振ひ起る義、莊子天運篇に「人固有尸居而龍見、雷聲而淵默、——如天地者乎」

【八斗ノ才】 (八斗才)才思の富贍なるをいふ、南史に「謝靈運云、天下才、共有一石、子建獨得八斗、我得一斗、自古及今、同用一斗、奇才博敏、安有機之子建、曹植の字なり、李商隱の詩に「密妃愁坐芝田館、用盡陳王——」

【發發】 疾き貌、詩經小雅蓼莪に「飄風——」箋に「寒ク シテ疾キナリ」

【八法】 (八風)を見よ、

【伐氷之家】 卿大夫以上の家を稱す、卿大夫以上は、其の喪祭に氷を用ふるによりていふ、大學に「伐氷之家

トイフ」周禮天官膳夫の「凡王之饋、珍用八物」の註に「淳熬・淳母・炮豚・炮牂・擣珍・漬・熬・肝膋也」また陸佃曰く「珍用八物、牛・羊・麋・鹿・麕・家・狗・狼ナリ」張謐古の大寶箴に「羅八珍於前、所食不過適口」また張九韶の群書拾唾に「後世八珍則曰、龍肝・鳳髓・兎胎・鯉尾・鴛炙・猩唇・熊掌・酥酪」また酥酪の代りに豹蹄を入るる説もあり、

【發擿】 人の罪をあばき出す義、漢書趙廣漢傳に「其發姦擿伏如神」

【發動】 振ひ起る義、莊子天運篇に「人固有尸居而龍見、雷聲而淵默、——如天地者乎」

【八斗ノ才】 (八斗才)才思の富贍なるをいふ、南史に「謝靈運云、天下才、共有一石、子建獨得八斗、我得一斗、自古及今、同用一斗、奇才博敏、安有機之子建、曹植の字なり、李商隱の詩に「密妃愁坐芝田館、用盡陳王——」

【發發】 疾き貌、詩經小雅蓼莪に「飄風——」箋に「寒ク シテ疾キナリ」

【八法】 (八風)を見よ、

【伐氷之家】 卿大夫以上の家を稱す、卿大夫以上は、其の喪祭に氷を用ふるによりていふ、大學に「伐氷之家

不畜牛羊ニ

【八風】 佛地絶論に「一利、二衰、三毀、四譽、五稱、六譏、七苦、八樂、コノ八法ハ世間ノ愛スルトコロ、憎ムトコロニシテ能ク人心ヲ扇動ス、之ヲ名ヅケテ風トナス、苟モ心ニ主アリテ正法ニ安住シ、愛憎ノ爲メニ惑亂セラレザレバ、即チ一一モ動スコト能ハズ」一に八法ともいふ、

また八方の風なり、淮南子地形訓に「何謂八風、東北曰炎風、東方曰條風、東南曰景風、南方曰巨風、西南曰涼風、西方曰飂風、西北曰麗風、北方曰寒風」(八節)をも參看せよ、

【八分】 書の一體なり、書斷に「上谷ノ王次中ノ作、八分篆法、二分隸文」とあり、同文通考に「書苑ニイフ、李陽冰ガ說ニ、秦ノ始皇ノ時、上谷ノ王次仲、八分ノ書ヲ製スト見エ、郭忠恕ガ說ニ、小篆散ジテ八分生ジ、八分破レテ隸書出ヅト見エタレバ、此ノ體ハ李斯小篆ノ後、程邈ガ隸書ノ先ニ始リシナルベシ、サラバ秦ノ代ヨリ始レリトイフベシヤ、シカハアレド水經ノ註ヲ見レバ、秦ノ王次仲ガ作レル所ロハ隸書ニシテ八分ノ書ニハアラズ、此ノ體ハ前漢ノ末ニヤ起リヌラン、又八分ト名ヅクルコモ、或ハ八分ノ篆二分ノ隸ヲ取ルガ故ナリトモイヒ、又八體ノ後ニ於テ此ノ方ヲ分ツガ故ナリトモイフ、ソノ說マタ同ジカラズ、又佩觿集ニハ、勢、八ノ字ノ如クニシテ偃波ノ文アレバナリトモ見エタリ」

【發憤】 憤を發して道を求むるなり、奮發すること、論語述而篇に「子曰(中略)其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾」

【伐木丁丁山更幽】 杜市の題張氏隱居といふ七律中の第二句なり、唐詩別裁集巻の十三に出づ、丁丁は伐木の聲なり、伐木丁は、詩經小雅に出づ、

【拔本塞原】 本源にさかのぼりて正しく處置する義、左傳昭九年に「伯父若裂冠毀冕——、專弃謀主、雖戎狄其何有余一人」原は源に同じ、

【發明】 開發し彰明する義、文選の宋玉の風賦に「——耳目、寧體便人」

【發蒙】 たやすき義なり、漢書の淮南王安の傳に「丞相弘ヲ說イテ之ヲ下サンコト、蒙ヲ發ク如キ耳」の註に「物上ノ蒙(おほひ)ヲ發去(とりのける)スルガ如シ、直チニ其ノ易キニ取ルナリ」史記汲鄭傳にも「至」如「說」丞相弘、如發蒙振落耳」とあり、弘は公孫弘なり、

【撥剌】 弓を十分に張りたる貌、文選張衡の思玄賦に

「毋二威弧之一一ヲ射一鴟鴞之封狐一」撥一本に抜に作る、

【撥剌】 魚の飛び跳ねる貌、杜甫の詩に「船尾跳魚一一鳴」次條に同じ、

【撥剌】 「ビチビチ」と魚の跳る聲なり、李白詩に「双鯉呼レ来撥剌、一一銀盤欲レ飛去」跳に作る、同じ、

【撥亂反正】 亂世を治め、正道に復するなり、公羊傳哀・十四年に「撥二亂世一反二諸正一莫レ近二於春秋一」撥は治なり、除なり、また漢書高祖紀に「帝起二細微一撥二亂世一反二之正一平二定天下一」

【巴調】 巴人の調、田舍調といふ如く詩句の拙きをいふ、陳基の題二玉山艸堂詩一に「竹枝已愁二巴人調一、桂樹仍叫二楚客歌一」俚調・俗調・下調皆同じ、

【破天荒】 初めて人才の頻起するをいふ、事類全書に「唐ノ荊州、毎解二郷人一多ク名ヲ成サズ、號シテ二天荒一トイフ、劉蛻舍人荊州ノ解ヲ以テ及第スルニ至リテ、破二天荒一トナス」轉じて前人未發の事を率先して爲し得たるをいふ、

【鳩】 禽經に「拙者莫レ如レ鳩不レ能レ爲レ巣」古語に「鷦巧而危、鳩拙而安」鶻は「ミソサザイ」巣を作るに巧なるによりて巧婦鳥ともいふ、方言に「鳩ハ蜀之ヲ拙鳥トイフ善ク巣ヲ營マズ、鵲巣ヲ占メテ之ニ居ル」詩經召南に「維鵲有レ巣、維鳩居レ之」埤雅に「鶻鳩ハ陰レバ則チ其巴ヲ屏逐シ、晴ルレバ則チ之ヲ呼ブ、語ニ曰ク、天將ニ雨フラントスレバ鳩婦ヲ逐フ」(布穀)を見よ、

【鴿】 鳩の屬、イヘバト」陸佃いふ「鴿ハ性合ヲ喜ブ」一名雪衣、蘇軾の詩に「記得金籠放二雪衣一」正字通に「唐鄭復禮言、波斯舶上、多二養鴿一、鴿能飛行數千里、放二一隻一至レ家以爲二平安信一」(飛奴)を參看せよ、

【巴東】 郡名、晉隋は梁州に屬し、南宋は荊州に屬す、今の四川夔州府奉節縣の東北、また縣名、隋は梁州巴東郡に屬し、唐は山南道歸州に屬す、今の湖北宜昌府巴東縣の西北、また宋元明の巴東縣は共に歸州に屬し、今の湖北宜昌府巴東縣治これなり、

【馬頭】 「ミナト」なり、埠に同じ「ハトバ」俗に碼頭に作る 天香樓偶得に「都會ノ處之ヲ一一トイフ地ノ水陸衝要ニ當ルヲ以テ蓋シ商旅ノ聚集スル所、馬ヲ擧ゲ以テ車船ヲ槩シ且ツ一一ヲ擧ゲ以テ馬ノ全體ヲ槩スルナリ」

【馬頭米糞花ノ歎】 艱難を經て目的の處に達したるヨロコビをいふ、三體詩に載する張籍の詩に「行過險棧出二蔓斜一、出盡平川似二到家一、無限客愁今日散、馬頭初見米糞花」とあるに本づく、詩意米糞花を見るに

よりて蜀を離れて故郷に近つきし歡を敍したるなり、米糞花は、粟(ケシ)なり、夏初に莖の高サ三四尺となり、葉は互生し「アザミ」に似て、刺なく、白みあり、花は四瓣にして二は大に、二は小なり、色は紅白紫等あり、また一種八重なるは美なること牡丹の如し、中に器の形の如きものあり、上に菊紋の蓋あり、蕊、器をめぐる、器の中に粟の如き子滿つ、阿片を作るべし、この詩、津阪孝綽の絶句類選には西歸出二谷谷一と題し、雍陶の作とす、陶は蜀の成都の人、

【鳩ノ杖】 (鳩杖)を見よ、

【花】 正字通に「草木ノ葩ナリ」歐陽修花品序に「洛陽ノ人花ヲ稱シテ某花某花トイフ、牡丹ニ至リテハ則チ名イハズ、直チニ花トイフ」按は俗字なり、また華に通用す、後漢書の李賢述身賦に「草迎歲而發レ花」曹植の句に「朱華冒二綠池一」白氏文集十三春興の詩に「花下忘レ歸因二美景一、樽前勸レ酔是春風」また同じく春夜の詩に「背レ燭共憐深夜月、踏レ花同惜少年春」(二十四番)を見よ、

【鼻ヲ掩フ】 (掩鼻)(誰カ知ラン僞言)を見よ、

【鼻ヲ驗シテ殺賊ノ多少ヲ表ス】 舊唐書羅士信傳に「士信逐レ北每レ殺一人、輒割二其鼻一而懷之、及還則驗二鼻以表二殺賊之多少一也」

【花ヲ鋪キ裀トナス】 (鋪花爲レ裀)學士許愼親友と花圃中に宴し、落花を聚めて鋪き坐して曰く、吾自ら花裀あり、何ぞ坐具を消ひんと、天寶遺事に見ゆ、

【花ヲ鬪ハス】 (鬪花)天寶遺事に「長安ノ士女、春時花ヲ鬪ハシ、戴挿シ、奇花ノ多キ者ヲ以テ勝トナス、皆千金ヲ用ヒ、名花ヲ市ヒ、中庭ニ植エ、以テ春時ノ鬪ニ備フ」

【花ヲ呑ミ酒ニ臥ス】 (呑花臥酒)花を賞し酒を愛することの甚しきにいふ、雲仙雜記に「庾松方春以謂二握月擔一風、且留二後日一呑二花臥一酒、不可レ過レ時」

【花ヲ吹キ柳ヲ擘ク】 (吹花擘柳)春の暴風をいふ、逐齋閑覽に「河朔ノ地、春時ニ大風多シ、塵ヲ飛バシ、木ヲ拔キ、惡ヲ作ス、三日ニシテ方ニ止ム以テ左右ニ訪フ、對ヘテ曰ク、名ヅケテ花ヲ吹キ柳ヲ擘クト爲ス、草木百穀皆之レニ藉ル」韻府に「河朔春時疾風數日、一作三日乃止、曰一一一一風」

【花ニ傍ヒ柳ニ隨フ】 (傍花隨柳)書言故事に「時令ヲ敍スルヲ傍花隨柳トイフ」程明道の詩に「雲淡風輕近午天、一一一過二前川一、時人不レ識二予心樂一、將レ謂偸閑學二少年一」

【花之君子】 蓮の異名、周茂叔の愛蓮說に「菊花之隱逸

者也、牡丹花之富貴者也、蓮花之君子者也」

【馬乳】 葡萄の異名(葡萄)を見よ、

【齒ハ瓠犀ノ如シ】 (齒如瓠犀)瓠は「ユフガホ」「ヒサゴ」齒ならびの美しき義(齒凝脂)を見よ、

【馬班】 班馬に同じ、司馬遷と班固となり、後漢書班固傳論に「司馬遷班固父子、其言史官、載籍之作、大義粲然著矣、議者咸稱二子有良史之才」司馬遷の史記を著し、班固の漢書を著ししをいふ、また後漢の馬援と班超とを併稱してもいふ、この二人は竝に功を邊陲に立てたるに由る、

【法印】 佛法を世に行ひて印象する義、法華經に「我此ニ——爲欲利益世間說」我が國にて僧位の稱(僧正ニ相當シ、法眼ノ上ニ在リ)とするはこの義に本づく、

【乏ヲ承ク】 (承乏)を見よ、

【法界】 佛法の區域なり、金剛經新注に「——混然」

【馬伏波】 (馬援)を見よ、

【乏月】 四時纂要に「四月之ヲ——トイフ、冬穀既ニ盡キ、夏麥未ダ登ラズ、宜シク乏絕ヲ賑シ、飢窮ヲ救フベシ」

【法言】 (揚子——)を見よ、

【法眼】 佛法にて悟道せし義、金剛經の注に「即ノ法自悟名ノ——」わが國にて僧位の稱とするは、この義に本づく、

【法顯】 名義集に「姓ハ龔、宋(六朝)ノ平陽ノ武陽ノ人ナリ、常ニ經律ノ舛缺ヲ嘅ンデ、志ヲ誓ヒ尋求ス、晉ノ安帝ノ隆安三年歲次己亥ニ於テ、印度ニ游ビ三十餘國ヲ歷テ義熙元年歲次乙巳ニ海ニ汎ビテ還リ、佛國記一卷ヲ著シ、楊都ニシテ經ヲ譯ス」年八十六寂す、

【法故】 法則故事なり、禮記月令に「脩廢文章、必以故——」李覯の袁州學記に「殿堂門廡、勦聖丹漆、舉以故——」

【法語之言】 嚴正に說き諭す言なり、論語子罕に「——、能無從乎、改之爲貴」法語は人の敬み憚る所ろ、故に必ず之に從へども、改めざるときは、面從にして益なし、故に改むるを貴ぶとなり、

【法藏】 經藏に同じ、一切經を納めたる藏をいふ、

【法相宗】 萬法の性相を究め明かす宗なる故に名づく、さればこの宗の學をなすを性相學をなすといふ、又唯識論によりて萬法唯識の理を明かすによりて唯識宗とも名づく、支那にては玄奘之を傳へ、その弟子慈恩之を大成せり、奈良の興福寺は藤原氏の建立にて——なり、

【法師】 僧をいふ、法華文句に「法トハ軌則ナリ、師トハ訓匠ナリ、師妙法ニ於テ自行成就シ又能ク妙法ヲ以テ他ヲ訓導ス、故ニ——ト稱ス」十住婆沙論に「應ニ四法ヲ行ズルヲ——ト名ヅク、一ニハ廣博多學ニシテ能ク一切ノ言辭章句ヲ持ス、二ニハ決定シテ善ク世間出世間ノ諸法、生滅ノ相ヲ知ル、三ニハ禪定智ヲ得テ諸ノ經法ニ於テ、隨順シテ諍フコトナシ、四ニハ增サズ損セズシテ所說ノ如ク行ズ」また法華經に「常ニ修梵行、皆爲——ニ」

【法常】 唐の高僧、鄭氏、襄陽の人、法を馬祖に嗣ぐ、開成四年九月十九日寂す、年八十八、

また宋の畫僧、牧溪と號す、畫史會要に「龍虎猿鶴山水人物ヲ畫クニ皆筆ニ隨ヒテ墨ヲ點シテ之ヲ成ス、意思簡當、粧飾ヲ費サズ、但麤惡ニシテ古法ナシ、誠ニ雅玩ニ非ズ」とあり、性英爽にして、酒を嗜む、寒暑風雨にも常に醉ひ、醉へば即ち熟寢し、覺むれば即ち朗吟す

【法則】 「キソク」「ノリ」とすべき「サダメ」周禮大宰に「——以馭其官」

【破釜沈船】 (船ヲ沈メ)を見よ、

【法帖】 筆蹟の法則とすべき帖子をいふ、——譜系に「此歷代——之祖」

【法度】 法則制度の義、書經に「儆戒無虞、罔——」——管子に「——者、萬民之儀表也」

【法燈】 正法の迷執を破すること、恰も燈光の暗中を燭すが如し、さてその燈燭も、油薪を要する如く、敎經を傳へて世の迷を照すべきなり、康熙字典に「釋書以燈喩法、有傳燈錄」劉孝綽の栖隱寺碑に「欲使永傳、勝因長久」轉じて一宗の高僧をもいふ、徒然草に「宗の——」とあり、

【馬舞之災】 火災をいふ、晉書の藝術傳に「黃平、索紞ニ問ヒテ曰ク、我レ昨夜舍中ノ馬舞數十人、馬ニ向ヒテ手ヲ拍ツト夢ミル、此レ何ノ祥ゾヤト、紞曰ク、馬ハ火ナリ、舞フハ火起ルト爲スナリ、馬ニ向ヒテ手ヲ拍ツハ、火ヲ救フ人ナリト、平未ダ歸ラズ而シテ火起ル」

【法螺】 貝螺とも書く、和訓「ホラ」貝の名、形「バイ」に似て甚だ大なり、殼は黃白にして淡紫の虎斑あり、海中に產じ、肉は食ふべし、古は陣中に用ひて進退を示す、又佛事にも用ふ、眞俗佛事編に「法事ニ——ヲ吹クハ何ノ爲メゾ答ヘテ曰ク、佛ノ說法ノ音聲ノ標識ナリ」大悲經に「呼召一切諸天善神、求資螺手」法華經に「吹大——、擊大法鼓、演大法義、表大乘法雄猛」

【法律】 法度に同じ、陸倕の石闕銘に「正二六樂一、治二五禮一、改二章程一、創二法律一」莊子徐無鬼に「——之士廣治」淮南子主術訓に「——度量者、人主之所二以執一也」

【蠅】 格物論に「蠅ハ好ンデソノ足ヲ交フ、絞繩ノ象アリ、故ニ以テ名ヅクトイフ、ソノ聲ハ翼ニ在リ、ソノ糞ハ善ク物ヲ敗ル、玉ト雖モ免カレズ、所謂蠅糞玉ヲ點ストイフハ是レナリ、或ハ水ニ墜テテ溺死セントスルモ、以テ灰中ニ置ク片ハ復活ク、蒼蠅は夏の初、陽地に集りて飛ぶ、色蒼黒にして大さ四分許、聲高し、青蠅は、青緑にして光り、聲高し、糞上にあつまる、歐陽修の憎蒼蠅賦に「尤忌二赤頭一、號爲二景跡一云」また詩經の青蠅は、小人の讒を刺りたるなり、曰く「營營青蠅、止二于樊一、愷悌君子、無二信讒言一」(朝蠅)(洛誥——)を見よ、

【馬蠅】 馬ずきの「クセ」東坡集に「杜預有二左傳癖一、王濟有二——一、王嘗時有二裘兒癖一、晉書杜預傳に「王濟馬ヲ相スルコヲ解シ、又甚ダ之ヲ愛ス、和嶠頗ル聚歛ス、預常ニ稱ス、濟ニ——アリ、嶠ニ錢癖アリト」

【齒亡ビ舌存ス】 (齒堅チ)を見よ、

【班】 位または列の義、左傳文六年に「班在二九人一」注に「班ハ位ナリ」朝班は朝廷にて百官の整列する位、同班は同等の位、末班下班は卑下なる位をいふ、

【翻案】 古人の詩文の作意を、翻していひ替ふるをいふ、例へば、杜甫の重陽の詩に「明年此會知誰健、醉取二茱萸一子細看」とあるを、劉浚が詩に「不レ用二茱萸一子細看、管取明年各強健」と作れるが如し、

【班位】 「クラヰ」晉書に「諸侯恃レ恩、各爭二——一」

【範圍】 「カタ」に入るる義、易の繫辭上傳に「範二圍天地之化一、而不レ過」の本義に「範ハ、金ヲ鑄ルノ模(いかだ)アルガ如シ、範圍ハ、匡郭ナリ、天地ノ化、无窮ニシテ、而シテ聖人之ガ範圍ヲ爲クリテ、中道ヲ過ゴサシメズ」

【蟠虺】 「タラヒ」の類、匾は柄に水を通はす道ありて水を盛りて物に注ぐ器「ハンザフ」——は儀禮既夕の字面、

【蠻夷】 「エビス」をいふ(四夷)を見よ、

【斑衣之戲】 高士傳に「老萊子、孝奉二親一、行年七十、作二嬰兒戲一、身著二五色斑爛之衣一」とあるに本づき、老親の心を慰め孝養する義とす、

【槃盂】 槃は盤に同じ、物を盛る器、また浴器、盂は飯器、また酒をも入る、轉じては古代の法戒の書の名、黄帝の史官孔甲の作る所ろの銘凡二十六篇を、槃盂の中に書し、朝夕見て戒とせる者、漢書田蚡傳に「蚡辯有

口、學——諸書」とは、百家の書をいふ、また孔叢子の異名、故事雕龍に「孔叢子一名——」注に「孔鮒ノ集ムルトコロ、事ノ據ナルニ因リテ故ニ——ト名ヅク」

【飜雲覆雨】 人情の反覆定りなきに喩ふ、杜甫の貧交行に「飜二手作一雲覆二手雨一、紛紛輕薄何須數、君不レ見管鮑貧時交、此道今人棄如レ土」

【范曄】 字は蔚宗、劉宋順陽の人、少より學を好み文を善くす、文帝元嘉二十二年反を謀りて誅に伏す、年四十八、著すところ後漢書九十卷あり、

【畔援】 畔は道に遠ひて叛き去るなり、援は引なり、擊援の義、——は此を含てて彼を取るをいふ、詩經の大雅に「無然——、無然二畔援一」

【樊於期ハ荆軻ニ首ヲ借ス】 十訓抄第六に見ゆ、史記の荆軻傳に「燕ノ太子丹、秦ニ質タリ、秦王政禮セズ、怒リテ亡歸ス、秦ヲ怨ンデ之ニ報ゼント欲ス、秦ノ將軍樊於期、罪ヲ得テ亡ゲテ燕ニ之ク、丹受ケテ之ヲ舍ス、丹、衛人荆軻ノ賢ヲ聞キ、軻ヲ遣ラント欲ス、軻樊將軍ノ首及ビ督亢ノ地圖ヲ得テ以テ秦ニ獻ゼント請フ、丹於期ヲ殺スニ忍ビズ、軻自ラ意ヲ以テ之ニ諷シテ曰ク、願クハ將軍ノ首ヲ得テ以テ秦王ニ獻ゼバ、必ズ喜ビテ臣ヲ見ン、臣左手ニ其ノ袖ヲ把リ、右手ニ其ノ胷ヲ揕サバ、則チ將軍ノ仇報ジテ燕ノ恥雪ガレント、於期慨然トシテ遂ニ自ラ刎ヌ」

【挽歌】 挽は引くなり、葬る時に柩の車の紼を執る者の歌なり、搜神記に「——者、裴家之樂、執紼者、相和聲也、有二薤露蒿里二章一、漢田橫門人作、橫自殺、傷レ之悲歌」と、薤露の歌に曰く「薤上露何易晞、露晞明朝更復落、人死一去何時歸」と、蒿里の歌に曰く「蒿里誰家地、聚歛魂魄無二賢愚一、鬼伯一何相催促、人命不レ得二少踟躕一」成語考に「——ハ田橫ニ始マル」明の劉基の薤露歌に曰く「人生無二百歲一、百歲復如何、古來英雄士、各已歸二山阿一」

挽歌の起原は漢の田橫より始まるといへども、その由來は極めて古し、左傳哀十一年に「公孫夏曰、二子必死、將二戰、公孫夏命二其徒一歌二虞殯一」注に「虞殯ハ葬ヲ送ルノ歌曲ナリ、必死ヲ示スナリ」また曰く「虞殯ハ將ニ虞セントスルノ歌ナリ、即チ今ノ——ナリ」

【輓歌】 挽歌に同じ、前條を見よ、

【輓學】 年長じて學に志すをいふ、鶴林玉露に「高適五十ニシテ始メテ詩ヲ爲ル、少陵ガ爲メニ推サル、老蘇三十ニシテ、始メテ書ヲ讀ム、歐公ノ爲メニ許サル、功

深ク力到ルコト早晩ナキナリ、聖賢ノ學モ亦然リ、東坡ノ詩ニイフ、貧家淨掃地、貧女巧梳頭、下士晩聞道、聊以抽自修ト、朱文公毎ニ此ノ句ヲ借リテ話頭ト作シ、窮鄉晩學ノ士ヲ接引ス」少陵は杜市なり、陳書儒林傳に「沈不害上書曰、後生敦悅不見古丈之儀、晩學蟄仰、徒深倚席之歎」

【潘岳】　字は安仁、滎陽中牟の人、鄉邑號して奇童となす、才名世に冠たり、晉に仕へて中書令に至る、西征閒居等の賦あり、姿容に美なり、少時常に彈を挾みて洛陽の道を出づ、婦人之に遇ふ者、皆手を連ねて縈繞し、皆之に投ずるに果を以てし、車に滿ちて歸る、時に張載甚だ醜し、行く毎に小兒瓦石を以て之に擲ち、委頓して反ると、潘岳は晩年人の爲めに誣告せられて市に誅せらる、詳しくは晉書の傳を見よ、なほ花縣を參看せよ、

【反汗】　言を出して復た反すをいふ、劉向の封事に「號令ハ汗ノ如シ、汗出デテ反ラザルナリ、今令ヲ出シテ、未ダ時ヲ踰ユル能ハズシテ之ヲ反スハ、是レ反汗ナリ」と、號令を汗に比すること、易の渙卦に見ゆ（繪言汗ノ如シ）を見よ、

【蒹葭】　蒹は薇なり、葭は蘆なり、國家の楨幹屏蔽たるを言ふ、詩經大雅崧高に「維申及甫、爲周之翰、四國于蕃」と、蕃は藩に通ず、

【半漢雕梁】　太平記卷十三に見ゆ、半漢は文選に「天馬半漢」とありて、半漢は天馬の貌と注す「イサメリ」と訓む、雕は蓋し跳の誤りならん、跳梁は、莊子に「東西跳梁、不避高下」と注に「跳梁ハ猶ホ走踊ノ如シ」とあり、

【反閒ノ計】　敵の來りて我を閒する者を求め、いつはりて知らざるまねして、示すに僞情を以てす、かくて彼れ歸りて見る所ろを以て、其の將に告ぐるときは、即ち反りて我の閒と爲るなり、或は厚く賄して之を誘ひ、利用して我が用を爲さしむべきなり、孫子の用閒篇に「閒ヲ用ヒルニ五アリ、鄉閒アリ、內閒アリ、反閒アリ、死閒アリ、生閒アリ」とあり、また史記の陳丞相世家に「陳平既ニ多ク金ヲ以テ、反閒ヲ楚ノ軍ニ縱ツ」とあり、

【萬幾】　萬づの政事をいふ、其の機の發する所ろ極めて多し、故にいふ、書經の皐陶謨に「兢兢業業トシテ、一日二日——」と、傳に「當ニ萬事ノ微ヲ戒懼スベキヲイフ」幾一に機に作る、同じ、機は樞機の機なり、

【萬機】　前條を見よ、

【反求】　かへりて我に在りて盡すべき者を求むるをいふ、中庸に「射有似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身」孟子公孫丑上に「行有不得者、皆——諸己」

【泮宮】　次の（頖宮）を見よ、

【頖宮】　諸侯の學宮なり、頖は半なり、辟雍（天子の學宮）に半ばするの義、また東西門以南は水を通じ、北は水なし、故にいふと、一解に、頖の言たる班なり、政敎を班つ所以なりと、禮記の王制に「大學在郊、天子曰辟雍、諸侯曰——」また泮宮に作る、詩經魯頌泮水篇に「既作泮宮、淮夷攸服」

【飯牛ノ歌】　（牛角ノ歌）を見よ、

【班婕妤ガ團扇】　（班婕妤ガ）を見よ、

【泛菊盃】　風土記に「俗說ニ重九ヲ以テ相會シ、山ニ登リ菊花ノ酒ヲ飲ム、之ヲ登高會トイヒ、又之ヲ——ト訶フ」

【反錦】　他人の「オクリモノ」を返す義、反璧に同じ、左傳昭十三年に「叔向受羣反錦」

【盤曲】　山の「ウネリクネリ」と曲れる義、宋書謝靈運傳に「石壁差山——」

【伴奐】　「ヒマ」ありて「タノシム」暇豫の貌、詩の大雅に「——爾游矣、優游爾休矣」

【范寬】　宋の畫人、圖繪寶鑑に「——名ハ中正、字ハ仲立、溫厚ニシテ大度アリ、畫山水ハ始メ李成ヲ師トシ、又荊浩ヲ師トス、山頂ニ好ンデ密林ヲ作リ、水際ニ突兀セル大石ヲ作ル、既ニシテ歎ジテ曰ク、ソノ人ヲ師トセンヨリハ造化ヲ師トスルニ如カズト、乃チ舊習ヲ捨テテ、終南太華ニ居シ、偏ク奇勝ヲ觀ル、落筆雄偉老硬眞ニ山骨ヲ得タリ、而シテ關李ト竝馳方駕セ

【畔渙】　強恣の貌、畔一に叛に作る、左思の魏都賦に「雲徹叛渙、席卷虔劉」

【般還】　進み難き貌、盤桓に同じ、禮記に「——而避」

【盤桓】　「タチモトホル」をいふ、易經屯卦に「初九盤桓、利居貞」の本義に「——ハ進ミ難キ貌」文選班固の幽通賦に「佇——而且俟」また陶淵明の歸去來辭に「撫孤松以——」

【範型】　模型なり、手本の義、凡そ鑄式土を以てするを型、木を以てするを模、金を以てするを範といふ、

【藩臬】　明の世に布政司按察司を稱していふ、藩は藩屛の義、臬は法なり、すべて物事を正す準法の義、雜事大全に「布政司曰藩、按察司曰臬」

【繁紘】　「ヤカマシキ」絃聲、蔡邕の琴賦に「——既抱、雅韻乃揚」また文賦に「炳若縟繡、悽若——」錢起の瑪

瑞杯歌に「——急管催ニ獻酬一、後若レ飛レ空生ニ羽翼一」

【班固】 字は孟堅、彪の長子、扶風の人、九歳にして文を能くし、長ずるに及び載籍を博貫す、後漢の明帝の時、校書郎に拜し、祕書を典校す、父の成すところの漢書を續成せし外に、兩都賦と頌記との著あり、永元四年卒す、年六十一、後漢書の傳に「固ノ僕、洛陽ノ令种競ヲ罵ル、競怒リ事ヲ以テ固ヲ捕フ、固獄中ニ死ス」

【萬古】 永世の義、魏書に「高祖創ニ定九流一軌ニ儀萬古一」また宋之問の詩に「聖德超ニ萬古一、皇風扇ニ九圍一」

【盤互】 盤一に盤に作る、盤曲交互するをいふ、漢書劉向傳に「宗族——また互或は牙に作る、犬牙の相入るが如きをいふ、谷永傳に「百官盤牙、親疎相錯」

【盤牙】 前條を見よ、

【萬國紅爐ノ中ニ在ルガ如シ】 (萬國如在紅爐中)暑熱の甚しきを形容す、僧贊の苦熱行に「祝融南來轡火龍、火旗焰焰燒天紅、日輪當午凝不去、——一五嶽翠乾雲彩滅、陽侯海底愁波竭、何當一夕金風發、爲我掃却天下熱」

【萬戶侯】 一萬戶もある廣大なる土地に封ぜられたる大名の義、史記李廣傳に「文帝謂レ廣曰、惜乎子不レ遇レ時、如レ令子當ニ高帝時一、——豈足レ道哉」杜牧の詩「何人得似張公子、千首詩輕——」

【盤古氏】 任昉の述異記に「盤古氏、夫婦陰陽之始也天地萬物之祖也」又莊子にも盤古氏の名見えたり、また盤古は廣く太古の義にも用ふ、

【萬古千秋】 いつの世までもの義、過去未來に通じていふ、沈佺期の邙山の詩に「北邙山上列ニ墳塋一——對ニ洛城一」

【飯後ノ鐘】 飯をくはせぬ工夫をいふ、書言故事に「期ニ後レテ至ルヲ、飯後ノ鐘トイフ、唐ノ王播、少クシテ孤貧、揚州惠照寺ノ木蘭院ニ客タリ、僧之ヲ厭フ、乃チ飯後ニ鐘ヲ撃ツ、播來レバ則チ時ニ後ル、乃チ詩ヲ留メテイフ、上堂已了各ニ西東、慚愧闍黎飯後鐘ト、後二紀來リテ是ノ邦ヲ鎭ス、向ノ題字已ニ碧紗ニテ之ヲ罩ス、播復タ題シテイフ、二十年前塵土面、如今始得碧紗籠」とあり、註に「僧鐘ヲ撃チテ以テ號(あひづ)トナシ會食ス、僧、播ヲ厭フ、故ニ飯後ニ鐘ヲ撃ツ、播至レバ則チ飯罷ム、十二年ヲ一紀ト爲ス」

【萬劫】 (——)を見よ、

【反魂香】 洪芻の香譜に「司天主簿徐肇、燕氏ノ子德哥トイフ者ニ遇フ、自ラ言フ善ク返魂香ヲ爲ルト、手ニ香爐ヲ持チ、懷中ヨリ一貼ノ白檀香ノ末ヲ取リテ、爐中ニ撒ス(つまみいる)煙氣鬱鬱トシテ直チニ上ル、龍腦ヨリモ甚シ、德哥微吟シテ曰ク、東海ノ徐熙、先靈ヲ見ント欲ス、願クハ此ノ香煙、用ヒテ引導ヲ爲セヨト、誼ク其ノ父母曾高ヲ見ル、德哥曰ク、但ダ死シテ八十年已上ヲ經ルハ、則チ返スベカラズト」東坡詩集の注には、李夫人死ス、漢ノ武帝之ヲ念ヒテ已マズ、乃チ方士ヲシテ——ヲ作ラシメテ之ヲ燒ケバ、夫人乃チ降リヌ」とあり、(返魂樹)を參看せよ、

【盤根錯節】 盤は蟠に通ず「ワダカマレル」根「イリマジハレル」「フシ」にて、事の艱險なるに喩ふ、後漢書虞詡傳に「詡爲ニ朝歌長一、笑曰、不レ遇ニ——一何以別ニ利器一乎」とあり、朝歌は賊起りて治め難き地の名、

【煩碎】 煩は紛冗にしてわづらはしきなり、碎は零細に失するなり、後漢書黃瓊傳に「米鹽雜密、初苦——」然猶精力能推ニ行之一、また淮南子に「事碎レ難レ治也、法煩難レ行也」

【繁碎】 繁雜零碎なり、南史鍾傑傳に「——職事、各有司存一一」

【萬歲】 天子を壽する辭、漢書武帝紀に「朕親登ニ嵩高一御史乘ニ屬車一、廟旁、吏卒咸聞ニ呼——者三一」またひろく慶賀を願ひ、慶福を祝する辭、戰國策齊策に「以レ債レ賜

【萬歲ノ後】 死後なり、天子自らいふ、また臣民が天子に對していふ婉語、史記高祖紀に「吾雖ニ都ニ關中一、——吾魂魄猶樂ニ思沛一」

また天子に限らず廣く死期をいひて萬歲之期と稱す、漢書翟方進傳に「李尋以ニ星變一責ニ方進一而云、萬歲之期近、愼ニ朝暮一」注に「萬歲之期ハ方進ノ死ヲ指ス」

【反相】 「ムホンノサウ」漢書吳王濞傳に「高帝曰、若狀有一一ニ

【槃散】 散一に跚に作る、蹇み行く貌「チンバ」の「アルク」貌、史記平原君傳に「民家ニ璧者アリ——トシテ行キテ汲ム」

【槃跚】（バンサン）前條を見よ、

【牛子】（ベンシ）女ムスメ）の壻をいふ、——は半箇の子に當るの義、晉書故事に「晉ヲ以テ外貝姑ニ與フルニ、孚在半子之列トイフ、劉禹錫楊應子文ニ、乃命長嗣爲君半子ニとあり、唐書回紇傳に「咸安公主下嫁可汗可汗上書曰——ニ

【班資】（バンシ）班は位、資は俸給なり、韓愈の進學解に「商財賄之有無計——之業庫ニ

【班師】（バンシ）軍隊をひきかへす義（師ヲ班ス）を見よ、

【萬死一生】（バンシイッセイ）萬死不顧一生）必死を期する義、史記張耳陳餘傳に「將軍瞋目張膽出——レ——之計ニ

【萬死ヲ出テ一生ニ遇フ】（出萬死而遇一生）貞觀政要一に「太宗曰、玄齡昔從我定天下、備嘗艱苦、出萬死而遇一生、ここを後漢書耿恭傳に「出於萬死無一生之望ニ

【盤涉調】（バンセツテウ）音樂六調の一なり、歌儛品目に「按ズルニ盤涉調、胡樂之名也、般如般若之般、管絃音義云、此羽音者、即——、——者、水音也、所以名盤涉者、經云、一切江河必有回曲、入於海、故水音名盤涉ニとあり、

【范質】（ハンシツ）字は文素、宋城の人、性明悟、九歲にして能く文を屬す、後唐の時の進士、仕に從ひてより未だ嘗て卷を釋かず、宋の太祖の世に及び魯國公に封ぜらる、質慮愼にして法を守る、太祖稱して眞宰相となす、文集及び五代通錄共に九十餘卷あり、

【半日村】（バンジツソン）樂史太平寰宇記に「——、此村山高蔽暉陽影、常照其一半ニ山高くして村の半分は常に日蔭となれる地をいふ、

【萬事ハ夢】（バンジユメ）俚諺なり、菅公の太宰府へ左遷せられし時の詩に「離家三四月、落淚百千行、萬事皆如夢、時時仰彼蒼ニとあると同意

【反唇】（ハンシン）唇を反すとは心に然りとせずして誹るをいふ、史記平準書に「客語、初令下有不便者、異不應微——」漢書賈誼傳にも見ゆ、

【翻車】（ハンシヤ）「ミヅグルマ」漢事始に「魏略ニイフ、扶風ノ、馬鈞京都ニ居ル、城内ニ地アリ、園トナスベシト雖モ、コレニソソグベキ水ナシ、故ニ翻車ヲ作リ童兒ヲシテコレヲ轉ゼシム、水ヲソソゲバ自ラ覆ル、今、田家ニ水車アリ天旱スル時水ヲ引イテ田ニソソグ器ナリト、コレニヨレバ水車ハ魏ノ馬鈞ヨリ起レリ、シカレドモ漢ノ靈帝畢嵐ヲシテ翻車ヲ作ラシメ水ヲ引イテ

南北ノ郊路ニソソグトイフコトアレバ畢嵐ガ製スルトコロナラン、宋ダイヴレノ說ヲヨシトスルコトヲ知ラズ」と馬鈞の龝車を作りし事は、魏志杜夔傳の注にも見ゆ、

【反掌】（ハンシヤウ）（掌ヲ反ス）を見よ、

【萬象】（バンシヤウ）象は形なり、萬物に同じ、淮南子に「天地未剖、陰陽未判、四時未分、——未生、寂然澄清、莫見其形ニ

【阪上ニ丸ヲ走ラス】（阪上走丸）勢に乘じて極めて便易なるに喩ふ、漢書酈通傳に「范陽令先下、而身富貴、必相率而降、猶若——也」

【反手】（ハンシユ）反掌に同じ、事の易きに喩ふ、孟子公孫丑上に「以齊王、由反手也」由は猶と通ず、

【萬殊】（バンシユ）殊は異なり、色色に異る義、王羲之蘭亭集序に「趣舍——、靜躁不同」

【萬壽驅ナシ】（バンジユカケツ）壽長くして限りなきを祝する語、詩經小雅天保に「君曰卜爾、萬壽無疆」君は先公先王を通じていふ、トは猶ほ期の如し、

【萬壽山】（バンジユサン）（頤和園）を見よ、

【萬鍾】（バンシヨウ）左傳襄公二十九年に「籍國人粟戶一鍾ニとあり、註に「六斛四斗曰鍾」とあり、漢書食貨志の註に「鍾ハ十斛」

【萬乘之尊】（バンジヨウノタフト）天子の尊をいふ、孟子梁惠王上の註に「兵車萬乘ハ、天子ヲ謂フナリ」書言故事に「古ノ天子大國ニ居リ、萬乘ノ國トナス、諸侯ヲ封土シテ小國ニ居ラシム、千乘百乘トナス」天子は兵車萬乘を出すべき幾內方千里の地を領するに由る、

【范式】（ハンシキ）（千里ノ結言）を見よ、

【繁殖】（ハンシヨク）多く增殖するをいふ、孟子滕文公上に「草木暢茂、禽獸——」

【伴食】（バンシヨク）職に在りて爲す所ろなきをいふ、舊唐書の盧懷慎傳に「開元三年、懷慎與紫微令姚崇對掌樞密、懷慎自以爲吏道不及崇、每事皆推讓之、時人謂之伴食宰相」とあるに本づく、胡銓の上高宗封事に「伴食中書、漫不可否」事ニ

【蠻觸ノ爭】（バンシヨクノアラソヒ）莊子雜篇則陽に「有國於蝸之左角者曰蠻氏、有國於蝸之右角者曰觸氏、時相與爭地而戰、伏尸數萬云云」注に「蝸蝸牛也、蝸至小而角尤爲小、以俗眼觀之、無小不大、以道眼觀之、無大不小、天下一蝸也、梁國一蠻也、何以辨哉云云」天下の英雄互に爭ふも、達觀するときは、猶ほ蝸角上蠻觸二氏の爭の如しとの意、

【晚食以テ肉ニ當ツ】（バンシヨクモツテニクニアタル）（善ク窮ニ）を見よ、

【晩翠】草木の歳寒に至りてもその色を變ぜざるをいふ、宋文鑑の范質が戒二従子一呆詩に「遲遲澗畔松、鬱鬱含二一千字文に「枇杷一一、梧桐早凋」

【輓推】前より牽くを輓といひ、後より送るを推といふ、左傳襄十四年に「或輓之或推之」(推輓)を見よ、

【范成大】字は正能、石湖と號す、宋の吳縣の人、紹興二十四年の進士、隆興中金國に出使し、節を竭し忠を盡す、諸官に歷任してその職に稱ふ、成大素より文名あり、尤も詩に工なり、紹熙四年卒す、年六十八、著すところ石湖集、攬轡錄、驂鸞錄、吳船錄あり、

【萬姓統譜】一百四十六卷、附氏族博考十四卷、明の吳興の人、凌迪知の編する所ろ、上古より明の中葉までの、上帝王より下士庶に至る略傳を、二十一吏の列傳、通志等より抄出す、四聲一百六韻を以て姓を分ちて類編す、萬曆己卯王世貞の序あり、今日の所謂人名辭書の類なり、延寶九年の和版あり、

【萬世ノ功】永世不朽の功をいふ、漢書蕭何傳に「曹參ハ野戰略地ノ功アリト雖モ、此レ特ニ一時ノ事ナリ、蕭何ハ關中ニ轉漕シ、食ヲ給シテ乏シカラザラシム、陛下數〻山東ニ亡スト雖モ、蕭何常ニ關中ヲ全ウシ陛下ヲ待ツ、コレ萬世ノ功ナリ、奈何ゾ一旦ノ功ヲ以テ萬世ノ功ニ加ヘントスルヤ、蕭何ハ當ニ第一ニスベク、曹參ハ之ニ次グベシト」

【半生半熟】技藝の未だ熟達せざるをいふ、掛掌錄に「北都有二妓一、舉止生硬、土人謂二生張八一乙詩魏野、野贈レ詩云、君爲二北道生張八一、我是西州熟魏三、莫レ怪尊前無二笑語一」未二相諳一」

【萬世不易】永世變ることなき義、荀子に「百姓以爲二成俗一、萬世不能レ易也」

【萬世不刊】不刊に削除すべからざる義、揚雄の酈商銘に「金紫褒表、一一一」とあり(不刊ノ書)を見よ、

【盤石】大石なり(安キコト盤石)を見よ、

【范石湖詩集】三十五卷、晉して石湖詩集といふ、宋の范成大撰す、簡明目錄にいふ「ソノ才調ノ富健ハ、楊萬里ニ及バザルモ、萬里ノ粗豪ナク、氣象ノ廣博ハ、陸游ニ及バザルモ、亦游ノ窠臼ナシ、大抵早年ハ晩唐ニ沿溯シ、新安ノ掾ニ官シテヨリ後ハ、乃チ蘇黃ノ遺法ヲ規取シ、變ズルニ婉峭ヲ以テシ、自ラ一家ヲ爲ス」(范成大)を參看せよ、

【反切】一に翻切とも書く、俗に「カヘシ」といふ、二字の音相摩して一音を成す法、例へば天字の音、他前ノ反(反又ハ切ニ作ル)とす、その他の發聲と、前の「ゼ」の韻の「エ」と相約まりて「テ」となり、さて「テン」となるが如し、その上なる字を字頭(父字)といひ、下なるを字母又は母韻字(母字)といふ、餘は類推すべし、夢溪筆談に「切韻之學出二于西域一、漢人訓レ字止曰二讀如某字一、未レ用二反切一、然古語已有二聲合爲一者、如二不可爲一叵、何不爲一盍、如是爲一爾、而已爲一耳、之乎爲一諸之類、以二西域二合之音一蓋切字之原也、如二輭字文從一而大二亦切韻也」徐鉉の重修說文序に「許愼注解、詞簡義奧、臣等粗爲二訓釋一、以成二一家之學一、時未レ有二反切一、後人附益、互有二異同一」

【反接】兩手を背に反へして縛するをいふ「ウシロデニシバル」史記陳丞相世家に「武士一一レ之」

【晩節】節は時期なり、一一は猶ほ末時といふが如し、晩年に同じ、杜甫の遣悶の詩に「晩節漸於二詩律一細」品字箋に「一一ハ末後ノ一節ヲイフ漢書石顯傳に「元帝一一寢疾」(韓琦邵曲ナシ)を參看せよ、

【班婕妤ガ團雪ノ扇】東關紀行に見ゆ、班婕妤は漢の孝成帝の宮人にて、才華あり詩賦に巧なり、團雪の扇とはその作なる怨歌行に「新裂齊紈素、皎潔如二霜雪一、裁成合歡扇、團團似二明月一、出二入君懷袖一、動搖微風發、常恐秋節至、涼飈奪二炎熱一、棄捐篋笥中、恩情中道絕」とあるを斥すなるべし、和漢朗詠集納涼に、大江匡衡の班婕妤團雪之扇、代二岸風一兮長忘、燕昭王招涼之珠、當二沙月一兮自得」とあり、

【范丹】字は史雲(甑中塵)を見よ、

【幡然】幡は反なり、翻に通じて用ふ「サラリ」と改まる貌、孟子に「既而一一改」

【萬全】事を計るに善を盡して一失なきなり、韓非子に「隱衡而知レ平、設二規而知一圓、一一之道也」また史記淮南王傳に「聖人萬舉一一」

【阪泉ノ三戰】史記の五帝紀に「軒轅乃チ德ヲ修メ兵ヲ振ヒ、熊羆貔貅貙虎ヲ教ヘ以テ炎帝ト阪泉ノ野ニ戰ヒ、三戰シテ然ル後チニソノ志ヲ得タリ」括地志に「阪泉ハ今黃帝泉ト名ヅク、嬀州懷戎縣ノ東五十六里ニ在リ」

【樊素】白樂天の妾の名、即機活法に「白樂天ニ、歌妓一一アリ、善ク歌フ、既ニ老イテ將ニ之ヲ放タントス、素慘然トシテ去ルニ忍ビズ、遂ニ不レ能レ忘レ情歌ヲ作ル」(一一小蠻)を參看せよ、

【阪緡】「キヌウリ」漢書灌嬰傳に「睢陽一一者也」註に「緡ハ帛ノ別名」

【范祖禹】字は淳父、宋の華陽の人嘉祐八年の進士、司馬光に從ひ通鑑を修め、また唐鑑十二卷、仁宗政典六

卷を著す、官は翰林學士に至る、元符元年卒す、年五十八、

【范增罪セラレテ楚王滅ブ】 太平記卷十三に見ゆ、范增は居巢の人、年七十、家に居て奇計を好む、項羽を助けて諸侯に霸たらしむ、史記項羽本紀に「項王乃チ范增ト急ニ栗陽ヲ圍ム、漢王之ヲ患フ、乃チ陳平ノ計ヲ用ヒテ項王ヲ閒セントス、項王ノ使者來ル、大牢ノ具ヲ擧ケ之ヲ進メント欲シ、使者ヲ見テ佯リ驚愕シテ曰ク、吾以テ亞父(即ち范增)ノ使者トオモヒシニ、乃チ反リテ項王ノ使者ナリシカト、更ニ持チ去リ、惡食ヲ以テ項王ノ使者ニ食ハシム、使者歸リテ項王ニ報ズ、項王乃チ范增ノ漢ト私アルカト疑ヒ、稍之ガ權ヲ奪フ、范增大ニ怒リテ曰ク、天下ノ事大ニ定リヌ、君王自ラ之ヲ爲セ、願クバ骸骨ヲ賜ヒ、卒伍ニ歸セント、項王之ヲ許ス、行キテ未ダ彭城ニ至ラザルニ、疽背ニ發シテ死セリ」蘇軾の范增論に「增高帝之所畏也、增不去、項羽不亡、嗚呼增亦人傑也哉」

【反側】 反復して正直ならざる者をいふ、一解に、叛黨を——といふと、後漢書光武紀に「使——子自安」

【班足王】 太平記鈔に「———ノ事、仁王經賢愚經竝ニ大論ニ出デタリ、此ノ王ハ身ニ羽翼生ジ、脚ハ鹿足ノゴトクアリテ、飛行自在ノ人ナリ、惡人ノ敎ニヨリテ一切ノ血肉ヲ食ス、中ニモ人ノ血肉ヲ專トセシ程ニ、朝暮ノ供膳ニモ備フベキ由、勅アレドモ、左ヤウニ人ノ血肉ヲ上ルニ足ラズ、廚ノ者モ調法ニ及バザル間、手ヅカラ自ラ飛行シテ人ヲ捕ヘテ食ヘリ云云」とあり、

【樊素小蠻】 敍小志に「白樂天ニ二妾アリ、樊素ハ善ク歌ヒ、小蠻ハ善ク舞フ」また白詩に「櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰」とあり、櫻桃は果の名、小にして紅なり、樊素が口は櫻桃の若きをいふ、楊柳は軟かにして小なり、小蠻が腰は、楊柳に似たるをいふ、

【番代】 順番に交代するをいふ、唐律疏義に「軍防令、防人——、皆十月一日交代」更番(バンガハリ)に同じ、

【潘大臨】 字は邠老、黃岡の人、弟大觀と皆詩名あり、蘇軾黃庭堅・張來と游ぶ、冷齋夜話にいふ「黃州潘邠老、詩ニ工ニシテ佳句アリ、然レドモ貧苦シ、東坡山谷尤モ之ヲ喜ブ」

【板蕩】 政事のみだれ敗るるをいふ、詩の序に「天下——、無綱紀文章」詩經大雅に、板の詩、蕩の詩あり、共に厲王無道にして周室大に壞れ、下民はなはだ苦めるを傷みて作れるによる、後漢書楊震傳に「不念——之作、飛場之戒」唐書蕭瑀傳に「疾風知勁草、——識誠

【晩唐】 唐代の詩を、初唐・盛唐・中唐・晩唐の四に分つ、唐初より玄宗開元の初に至る凡百餘年間を初唐とし、開元より代宗太曆の初に至る凡五十餘年を盛唐とし、太曆より文宗の太和年間に至る、凡七十餘年を中唐とし、以後唐末に至る凡八十餘年を晩唐とす、晩唐の作者には、杜牧・李商隱・溫庭筠等あり、中唐の作者には錢起・韋應物・劉長卿・孟郊・賈島・白居易・元稹・劉禹錫竝に韓退之・柳宗元等あり、盛唐の作者は李白・杜甫を首として孟浩然・王昌齡・王維・岑參・高適・儲光羲・李頎・常建等あり、初唐の作者には王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王の四傑をはじめとして、陳子昂・張九齡・沈佺期・宋之問等あり、

【蟠桃】 大なる桃の實、上壽を祝するに用ふる語、漢武故事に「西王母降出桃七枚、自啖二枚、五枚與帝、帝懷核欲種、母曰、此桃三千年一開花、三千年一結實、非下土所植、帝乃止」を見よ、

【萬端】 色色と力を用ひる義、萬方に同じ、史記禮書に「人道經緯、——規矩、無所不貫」また信陵君傳に「賓客辯士、說王——」

【萬雉】 王城なり、西都賦に「建金城之——」(百雉)を見よ、

【范仲淹】 字は希文、宋の吳縣の人、刻苦して書を讀み、六經の旨に通ず、大中祥符の間、進士に第し、慨然として當世に志あり、嘗て曰く、士は當に天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れて樂むべしと、仁宗の時右司諫となり、時政を極論す、數州に歷任し、至る所惠政あり、龍圖學士を以て、延州に知たり、西賊大に懼る、召して樞密副使に拜し、參知政事に進む、未だ施す所ろを竟へずして卒す、文正と諡し、楚國公に追封せらる(范文正公集)また(胸中ノ甲兵)を見よ、

【版築】 版は牆板、築は杵なり、板と板との間に土を入れて、杵にてつきかたむるをいふ、孟子に「傅說舉于——之閒」また漢書英布傳に「項王伐齊、身負——、以爲士卒先」

【藩鎭】 唐の玄宗の時、邊要の地に節度使を置きしが、安祿山の亂後、內地久しく安からず、加ふるに邊塞の地は、回紇・吐蕃の入寇頻たるを以て、節度使の數は、次第に增加するに至れり、節度使はもと武官なれども、內地の節度使は、多く數州を統べて一鎭となし、其の地の按察使を兼ねしを以て、遂に兵・政の兩大權を、一身に握り、自ら所部の文武官を置き、數日に強く

して宛然諸侯王の如く、父死するも子其の兵を領して、肯て代らず、士卒も亦自ら將帥を棄げて留後となし、朝廷の命を請ふ、朝廷之を制する能はざるが故に、——益驕る、中に就きて尤も朝廷の患をなせし者は、河北の諸鎮なり、代宗の初、安祿山の餘黨の平定するや、賊將張忠志・田承嗣・李懷仙等皆降る、朝廷無事を冀ひ、忠志を成德(直隸正定府)の節度使に、懷仙を盧龍(直隸大名府)の節度使に任ず、而るにこの三鎮相結びて婚を通じ、互に相助けて兵を養ひ城を固くし、遂に貢賦を供せず、しかれども代宗制する能はず、皇紀千四百四十年、德宗代宗に嗣ぎ、精を勵まして治を求む玄宗の末年、內亂外寇相踵ぎ、田畝荒廢し、丁口は亡散し、戶籍の制壞れて、天下浮浪多く徵稅の法漸く廢して、國庫空乏を告ぐるに至る、德宗乃ち楊炎を擧げて新に兩稅の法を行ふ、其の法、每戶主客を問はず、凡て現住者を簿に載せ、各人其の貧富に隨じて一定の稅を夏秋兩期に納めしめ、行商者は其の所在の州縣にて之に課稅するに在り、これによりて國庫稍豐なるに至れり、かくて德宗此の機に乘じて、藩鎭の勢を殺がんとせしが、たま〳〵成德の節度使、張忠志死し、子惟岳留後たらんことを請ひしも朝廷許さず、遂に叛す、魏博・盧龍の諸鎭之に應じ、當時盧龍の節度使たりし、朱滔を擧げて盟主となす、淮西(河南汝寧府)の節度使、李希烈も亦之に應ず、官軍之を征し、軍費多くして府庫支へず、時に盧杞相たり、帝に勸めて閉架、除陌の令を出さしむ、閉架は民屋の廣狹を計りて稅を課し、除陌は公私の賣買、百每に其の五を官に納めしむるの法なり、されども天下厚斂に苦み、遠近嗟怨す、會〻涇原の兵、關東の叛を討ぜんが爲めに、京師を過ぎしに朝廷の待遇頗る薄かりしかば、怒りて亂をなし、朱泚を奉じて主となし、閉架除陌を除くを以て名となす、帝出でて奉天(陝西乾州)に奔りしが渾瑊・李晟等の援によりて、長安に歸るを得たり、帝治を求むるの志ありて、賢臣に任ずるを知らず、李泌・陸贄の諸名臣ありと雖も多くは其の終を善くせず、晚年頗る失政多し、德宗の後、順宗を經て憲宗に至る、英武にして賢相、杜黃裳・李絳に任じて內政を正し、また名將武元衡・裴度を用ひて外鎭を制す、淮西先づ破れ、河北の諸鎭も亦尊て降る、是に於て藩鎭始めて稍朝威を懼る、然れども帝是より意滿ち漸く驕奢に流れ、宦官を信任せしかば、賢臣多く朝を去り、國政日に亂れ、外に藩鎭復叛さて

終に朝命を奉ぜず、內は宦官の跋扈甚しく、遂に唐室の滅亡を招くに至る、

【班超】 字は仲升、彪の次子、固の弟、少くして大志あり、家貧にして傭書して母を養ふ、嘗て筆を投じて歎じて曰く、大丈夫當に功を異域に立て以て封侯を取るべし、安ぞ能く久しく筆硯を事とせんやと、明章兩朝に仕へ、出でて西域を征し、五十餘國を安集し、定遠侯に封ぜらる、

【反坫】 坫は、土や甎をつみかさねてつくる、兩楹の間に在り、兩君獻酬して畢れば、爵を其の上に反し置くなり、論語八佾に「邦君爲兩君之好、有反坫、管氏亦有反坫、邦君は諸侯なり、管仲が大夫の身分を以て諸侯の禮を僭せしをそしるなり、

【版圖】 戶籍領地の義、周禮の冢宰治官之職の鄭玄の註に「版ハ戶籍ナリ、圖ハ土地ノ形象、田地ノ廣狹ナリ」周禮釋文に「版ハ名籍、圖ハ地圖ナリ」

【萬ニ一ヲ失ハズ】 (萬不失一)少しも違はざる義、史記淮陰侯傳に「蒯通曰、貴賤在于骨法、憂喜在于容色、成敗在于決斷、以此參之、萬ニ一ヲ失ハズ」

【般若】 智慧と譯す、梵語、分別妄想を離れたる智慧をいふ、一切の諸法に通達するをいふ、

【般若湯】 僧家にて酒をいふ、東坡志林に「僧謂レ酒爲二般若湯一」

【魚爲水梭花、雞爲鑽籬菜、人有爲不義而文之以美名、與此何異】 寺にては酒魚鳥等は禁物なれども、破戒僧はひそかに之を用ふるによりて異名をつけてかくはいふなり、なほわが國の寺にても魚を亡者、飽を「カミソリ」鯛を首座、鯛を惣身とも天蓋ともいふが如し、

【萬年青】 「オモト」大本の義といふ、一解に琉球の石垣島の表岳に多しといへば「オモト」蘭などいへるに起れるならんと、致富全書に「蓋ハ即チ千年蓋、葉闊ク叢生シ、深綠色ニシテ冬夏枯レズ、マタ一ト名ヅク」

【晚年定論】 明の王守仁(陽明)撰す、守仁、致良知の說は朱熹の格物致知の說とその趣を異にするを以て、當時學者の異議を招けり、守仁乃ち朱熹晚年の說の己の說と近き者三十餘條を抄して朱子晚年定論と名づけ、以て信を世に取らんとせり、されど却りて世儒の譏を招き、舞文の書と評せらるるに至れり、

【班馬】 班固と、司馬遷となり、固は漢書を著し、遷は史記を著す、共に史才に長ぜり(馬班)を見よ、また班は別なり、馬の別るるをいふ、左傳襄十八年に

「齊師夜遁、邢伯告"中行伯"曰、有"——之聲"齊師其遁"」注に「夜遁レテ馬相見ズ、故ニ鳴キテ班別ス」

【萬方】 色色と心をくばり、力を用ふる義、史記周紀に「褒姒不好笑、幽王欲其笑、——故不笑」また外戚世家に「欲其生子、——終無子」

【范滂ノ傳ヲ讀ム】 (讀范滂傳)宋史蘇軾傳に「生十年父尚遊學四方、母程氏親授以書、程氏讀東漢范滂傳、慨然太息、軾請曰、軾若爲滂、母許之否乎、程氏曰、汝能爲滂、吾願不能爲滂母耶」

【班白】 禮記の王制に「——之者、不提挈ニ韓非子に「——者多徒行」白髪マジリの老人をいふ、次條を見よ、

【頒白】 頒は班と同じ、老人の頭、半白黒なる者なり、孟子の梁惠王上篇に「——者不負戴於道路ニ(二毛)を見よ、

【槃礴】 箕踞なり、兩足を前に出して箕の如くに坐するをいふ、莊子の田子方に「公使"人視"之、則解衣——」槃一に般に作る、

【晩泊】 「クレガタ」に舟の「イカリ」をおろす、孟浩然の句に「河橋晩泊船」

【磐貊】 「エビス」磐は南蠻、貊は北狄なり、書經武成に「華夏——」論語衞靈公篇に「子曰、言忠信、行篤敬、雖——之邦行矣」中庸に「聲名洋溢乎中國ニ施及——ニ

【汎汎】 泛泛に同じ、浮ぶ貌、楚辭に「將——若"水中之鳧"乎」

【班彪】 稚の子、沈重にして古を好む、初め發憤に事へ融に勸めて漢に歸せしむ、光武の初め、茂才に擧げられ、徐令に拜す、著す所ろ賦論奏事凡そ九篇あり、

【凡百】 凡は皆なり、括なり、之を總ぶるの辭なり、國語に「——箴諫、吾盡聞"之」

【販夫】 周禮地官の字面、販は「フリウリ」商人なり、

【反覆】 言行を「ヒルガヘシ」て一貫せざる義、漢書韓信傳に「齊令詐多變——之國」また反復に同じく、幾度も「クリカヘス」をいふ、——丁寧と連用す、

【反覆手】 手の「ウラ」「オモテ」を反すことにて、事の易きに喩ふ、漢書陸賈傳に「殺"王降"漢、如"反"覆手"耳」

【萬物一齊】 萬物皆同等なるの義、莊子に「——短孰長」

【萬物ノ靈】 (人ハ萬物)を見よ、

【萬夫之望】 萬人仰ぎ望むをいふ、易に「君子知"微知"彰、知"柔知"剛、——」圓機活法に「何充字ハ次道、王導・庾亮ト、成帝ニ言ヒテ曰ク、何充ハ器局方槩、萬夫之望アリ、宜シク老臣ノ副トナスベシ、則チ社稷庶ナケ

ント、司空ヲ贈ラル」

【范文正公集】 二十四卷、宋の范仲淹撰す、仲淹は一代の名儒、經術に深く、政體に明かに、その作るところの文、皆根柢あり、固より徒に詞句を雕繪して以て巧と爲す者の及ぶところにあらず(范仲淹)を見よ、

【藩屛】 四方の藩離と爲りて、本家を屛蔽する義に取り、諸侯の稱とす、左傳僖二十四年に「封"建親戚"以"——周ニ

【反譖】 人の贈遺を辭退するをいふ、左傳僖二十三年に「晉公子重耳及"曹僖負羈乃饋"盤飧、寘"璧焉、公子受"飧"反"璧"」

【反哺】 恩に報いて親に食はしむる義、本草に「慈烏一名ハ孝烏、コノ烏初メテ生ルル、母哺スル「六十日長ズレバ則チ——スル六十日、慈孝トイフベシ」哺は口中の食なり、

【泛蒲ノ酒】 荊楚歲時記に「端午ニ菖蒲ヲ以テ或ハ縷ニシ或ハ屑ニシ酒ニ泛ブ」杜履古の詩「自切"菖蒲"泛"濁醪ニ

【反命】 使し歸りて、(ハンジ)するをいふ、復命に同じ、儀禮の士昏禮篇に「凡使者歸反命(ハンメイ)曰、某既得"將"事矣」と、註に「反命ハ、使者還リテ報ズルヲイフ」

【半面ノ識】 かつて少しく相識れるをいふ、書言故事に「後漢ノ應奉嘗テ袁賀ニ詣ル、賀時ニ出デテ門ヲ閉ヅ、造車匠アリ內ニ於テ扇戶ヲ開キ、半面ヲ出シテ奉ヲ視ル、奉卽チ去ル、後數年ニシテ、路ニテ車匠ヲ見ル、識リテ面シテ之ヲ呼ブ」この故事もと東觀漢記に出づ、

【反目】 目をそばめて、にらみ合ふなり、易の小畜の卦に「夫妻反"目」とありて、象に曰く「夫妻目ヲ反ムトハ、室ヲ正スコト能ハザルナリ」とあり、室を正すとは、其室家を正しく齊ふるをいふ、

【范陽】 西漢の涿郡——縣、東漢の侯國(幽州涿郡ニ屬ス)晉の——國、北魏の幽州——郡——縣は今の直隸保定府定興縣の南四十淸里に在り、唐以後の——縣は今の直隸順天府涿州治これなり、

【潘楊ノ好】 婚姻を重ねたる好みをいふ、晉書に「楊經字仲武、潘岳云、葭莩三葉世親之恩、子之姑予之伉儷、潘楊之睦、有"自來"矣云云」

【班輸之雲梯】 班輸は魯人、公輸般なり、巧に機械を作る、雲梯は攻城に用ふる具なり、列子に「——————、墨翟之飛焉、自謂能之極也」(雲梯)また(魯般ガ)を參看せよ、

【萬類】萬物の盛なり、姚察の詩に「含風——碧、蕊露百花鮮」（天籟）を參看せよ、

【般樂】般も亦樂なり、大いに樂む義、孟子公孫丑上に「今國家閒暇、及是時、——忘歎、是自求禍也」また同書盡心下に「——飲酒、驅騁田獵」

【氾濫】大水横流の貌、孟子滕文公上に「洪水横流、——於天下」

【班爵】色純ならざるなり、爵は同じ、拾遺記に「玉梁之側有——自然雲霞龍鳳之狀」また漏爵に作る同じ、元稹の詩に「文章甚漏爵」

【滂離】易經の大壯の九三に「羝羊觸藩、註に「藩ハ離ナリ」左傳哀十二年に「吳ノ人衛人ノ舍ニ藩ス」とあれば則ち滂離を設けて室家を固くすること、三代の制なり、また學問の門戸の義にも用ふ、史通に「憑衍許劭、不足窺班范之——」

【萬里侯】京師より遠く隔りたる邊塞などの大名をいふ、かかる大名は朝廷より牽制せらること少く、わが思ふままに政を施すことを得るなり、後漢書班超傳に「燕頷虎頸、飛而食肉、——之相也」

【萬里同風】遠方の地まで、風俗を同くするをいふ、漢書終軍傳に「天下爲一、——」

【滂離之鷁】鷁は小禽なり、鵝に同じ、フナシウヅラ「マガキ」に巢くう鷁とは、見識狹隘なる小人物に喩ふ、宋玉對楚王問に「鳥有鳳而魚有鯤、鳳上擊九千里、絕雲霓、負蒼天、翱翔乎杳冥之上、夫——、豈能與℘之料天地之高哉」

【萬里ノ長城】秦の始皇三十二年に、蒙恬を遣り、兵三十萬人を發して北のかた匈奴を伐たしめ、長城を築く臨洮（甘肅鞏昌府ノ岷州に起り、遼東に至る、延袤萬餘里、威匈奴に振ひぬ、詳しくは史記蒙恬傳に見ゆ、長城は始皇帝に始まりしにあらず、戰國の際、既にその一部を作れるを始皇の增築したるにて漢の武帝の如きも亦之を延長せり、日知錄三十一を參看せよ、

また轉じてすぐれたる猛將に喩ふ、劉宋の檀道濟、文帝の時司空となり、威名あり、讒を以て收められるに及び、道濟目光炬の如くにして曰く、乃ち汝が——を壞ると、魏人之を聞きて喜びて曰く、吳子輩また憚るに足らずと、是に至りて長驅す、吳の軍能く禦ぐ者なかりき、

【萬里モ比隣ノ如シ】萬里の遠きも隣家の如く思ふ義、魏の曹植の贈白馬王彪の詩に「丈夫志四海、萬里猶比隣」

【蟠龍附鳳】（龍鱗ニ）を見よ、

【萬綠叢中紅一點】多くのつまらぬ物の中に、一つのすぐれたるものあるにいふ、書言故事花木類に「王荊公石榴詩ニ、——————、動人春色不須多」この詩、遯齋閒覽には「此唐人詩、不記作者姓氏、曾見王介甫（介市は安石の字）親書于所持扇、或以爲介市自作」非也」とあれども、その何に據れるかを知らず、

【凡例】凡は大旨なり、例は例條なり、書中の大體の條目例則をいふ、杜預の春秋左氏傳序に「其發凡以言例、皆經國之常制、周公垂法、史書之舊章、仲尼從而修之以成一經之通體」

【范蠡】周の吳の人、文種と同じく、越王勾踐に事へ大夫となる、士民を撫循し、兵革を訓治す、吳を滅して越を霸たらしめ、功名天下に顯はる、遂に姓名を變匿し、扁舟五湖に泛ぶ、鴟夷子皮と號す、齊に之き自ら陶朱公と稱し貲巨萬を累ぬ、徐州先賢傳に「勾踐吳ヲ滅シ——ニ謂ヒテ曰ク、吾將ニ子ト國ヲ分チ而シテ之ヲ有タントス、——曰ク君ハ令ヲ行ヒ臣ハ意ヲ行ハント、乃チ扁舟ニ乘ジテ五湖ニ浮ビ終ニ返ラズ」

【范蠡ノ國ヲ獻ズ】（獻范蠡圖）倦遊錄に「陳恭公判亳州ニ過ル生日ニ親戚多ク獻老人星圖」姪世修獨ク獻范蠡遊五湖圖、且贊曰、賢哉陶朱、伯℘越平℘吳、名遂身退、扁舟五湖、公即日納節、明年乞℘致仕」

【樊籠ノ累】樊も亦籠なり、共に禽鳥を入るる「カゴ」以て身の束縛せらるるに喩ふ、世事に牽かるるを——といふ、北史に「楊休之謂人曰、此官清華但煩劇妨我賞適、眞是樊籠」唐詩に「一遣——」

【范魯公】（范質）を見よ、

【郡陽】兩漢の豫章郡——縣、晉の揚州——郡、——縣以後歷朝の縣名、今の江西饒州府——縣治これなり

【簸颺】箕にて糠粃を颺げ去るなり、晉書習鑿齒傳に「——之、糠粃在℘前」颺ふに揚に作る、詩の小雅に「維南有箕、不可℘以簸揚」轉じて舟などの波にゆりあげらるるさまにも用ふ、

【林深ケレバ鳥棲ム】（林深則鳥棲）（林深ケレバ鳥棲ム）を見よ、

【馬融】字は季長、後漢の茂陵の人、辭貌に美にして俊才あり、博く經籍に通ず永初の閒、校書郎に拜す、鄧氏に忤ふを以て東觀に滯ること十年、調せらるるを得ず、後ち召されて郎中に拜し、桓帝の時、南郡の太守となる、融才高く博洽にして世の通儒たり、諸生を敎養する常に千數あり、著述甚だ富む、高堂に坐し、絳

帳を施す、前は生徒に授け、後は女樂を列す、次を以て相傳へ、その室に入る有る者鮮し、盧綰鄭玄はその徒なり、少女あり、名は倫、少くして才辯あり、家世豐富、汝南の袁隗に適く、資送甚だ厚し、既に禮を成す、隗之に問ひて曰く、婦は箕帚を奉ずるのみ、何ぞ乃ち珍麗なると、對へて曰く、慈親愛重し、敢て命に違はず、君若し鮑宣梁鴻の高を慕はば、妾亦少君孟光の事に效はんと、

【巴渝ノ舞】 巴は地名、渝は水名、その地方に行はるる舞なり、漢書高帝紀の注に「渝水獠人居、其人剛勇好ノ舞、高祖樂此以平ニ三秦、後使ニ樂府習之、因名ニ巴渝舞ト一」(竹枝)を參看せよ、

【腹ヲ剖テ珠ヲ藏ス】 (剖腹藏珠)財を愛して、命を重んぜざるをいふ、唐書に「太宗曰ク、西域ノ賈胡、美珠ヲ得テ腹ヲ剖キテ而シテ之ヲ藏ム、珠ヲ愛シテ而シテ其ノ身ヲ愛セザルナリ」

【破落戸】 良民の害をなすもの「ナラズモノ」咸淳臨安志に「紹興二十三年上謂ニ大臣一曰、近今臨安府收捕ニ一ー編置ニ外州一、本爲ニ民閒除一レ害」

【爬羅剔抉】 韓愈の進學解に見ゆ、爬は把に同じ、爪にてかきあつむるなり、羅は網にて鳥を捕ふる義、剔は骨を解くなり、抉は挑なり、くじり出す義、四字にて廣く人才を探し用ふるをいふ、

【波羅蜜多】 煩惱を去りて解脫する義、心經の註に「ー——此云ニ到一レ彼岸一ニまた波羅蜜を度彼岸とも譯す、生死を此岸とし、涅槃を彼岸とし、煩惱を中流とす、華嚴經に「以ニ波羅蜜船一於ニ生死流中一不レ依ニ此岸一不レ著ニ彼岸一不レ住ニ中流一而度ニ衆生一无レ有ニ休息一」

【波瀾】 水細紋を生ずるを波といひ、大波を瀾といふ、范仲淹の岳陽樓記に「春和景明、——不レ驚」また文勢の動盪絢爛、猶ほ水の波有るが如きをいふ、杜甫の詩に「髽髮無ニ遺憾一、波瀾獨老成」

【婆羅門】 淨行と譯す、天竺の四姓の一にして貴族なり、梵天の口より生ぜりと稱す、故に梵士といひ、淨裔と譯す、

【玻璃】 梵語、水晶の屬、酉陽雜俎に「千歲積冰結爲ニ一ー一」梅堯臣の詩に「銀瓶索ニ酒傾一ー一」顚黎とも書く、水玉と譯す、七寶の一、法華經に「金銀及顚黎阿彌陀經に「金銀瑠璃ーー硨磲」

【顚黎】 前條を見よ

【罵詈】 人を「ノノシル」をいふ、韻會に「正斥ヲ罵トイヒ、旁及ヲ詈トイフ」史記魏豹傳に「漢王ー。ー諸侯群臣」

【跛立箕坐】 跛は一足に偏任して立つ「カタアシダチ」箕坐は兩足を展ばして、その狀箕舌の如くするをいふ、禮記に「立毋ニ跛、坐毋ニ箕一」

【張リテ弛ベザルハ文武モ能ハズ】 禮記の雜記に出づ(一張一弛)を見よ、

【針ノ穴カラ天ノゾク】 俚諺なり、智見の小なるに喩ふ、莊子に「以ニ管窺一レ天、以ニ錐指一レ地、不ニ亦少一乎」說苑に「以ニ管窺一レ天、以ニ針刺一レ地、所ニ窺者甚大一、所ニ見者甚少一」などの語と同意、

【馬倫】 【馬融】を見よ、

【霸陵ノ風云云】 太平記卷二十一に見ゆ、霸陵は漢の文帝を葬りし地名、秦の莊陽の地なり、以て帝の陵の義に用ふ、

【霸陵ノ舊將軍】 漢の李廣をいふ、隴西成紀の人なり、霸陵は長安城の東七十里に在り、李廣匈奴を擊ち亡失するところ多し、斬に當す、贖ひて庶人となり、藍田の南山中に屛居す、文帝曰く、廣は時に遇はず、高祖の世に當らしめば、萬戶侯何ぞ道ふに足らんやと、林和靖の退筆の詩に「神功雖ニ缺力猶存、架ニ卓珊瑚一缺策勳、日暮閉窓何所ニ似、霸陵憔悴舊將軍一(李廣)を見よ、

【春】 漢書律歷志に「春ハ陽ナリ、萬物始メテ生ズルナリ」と、禮記の月令に「東風解ニ凍、魚上ニ冰一、獺祭ニ魚、天氣下降地氣上騰、天地和同、草木萌動」また梁武帝纂要に「春ヲ青陽トイヒ、マタ芳春・青春・三春・九春トイフ、天ヲ蒼天トイヒ、風ヲ陽風・柔風・惠風トイヒ、寒ヲ料峭トイフ、景ヲ媚景・和景、韶景トイヒ、時ヲ良時・芳時トイヒ辰ヲ良辰・芳辰トイヒ、草ヲ芳草・芳草トイヒ、塵ヲ香塵トイヒ、日ヲ遲日トイフ」易緯に「立春ニ條風至リ、春分ニ明庶風至ル」爾雅に「東風之ヲ谷風ト謂ヒ、春晴レテ風フクヲ光風トイフ」律歷志に「春ハ蠢ナリ、物蠢生シテ乃チ運動ス」と、鶡冠子に「斗柄東ヲ指シテ天下春ヲ知ル」と、纂要に「正月ヲ孟陽・孟陬・端月トナス」白氏文集二十一の落花古調の詩に「留ニ春春不一レ駐、春歸人寂寞、厭ニ風風不一レ定、風起花蕋索」

【春祈リ秋報ユ】 周禮の疏に「春社ヲ祭ルハ以テ膏雨ヲ祈リ、五穀ノ豐熟ヲ望ム、秋社ヲ祭ルハ、百穀ノ豐稔ナルヲ以テ、功ニ報ズル所以ナリ」

【春ヲ送ル】 (送レ春)春の去るを送る、白氏文集二十八、酬ニ皇甫賓客一詩に「竹院君閑銷ニ永日一、花亭我醉送ニ殘春一」同書十三、三月三十日題ニ慈恩寺一詩に「惆悵春歸留不レ得、紫藤花下漸黃昏」菅公の「送レ春不レ用」動ニ舟車一、唯別ニ殘鶯與ニ落花一、若使ニ詔光知ニ我意一、今宵

旅宿在詩家ニ

【春ヲ探ル】（探春）天賚遊事に「都人士女、正月ノ半ニ、車ニ乗ジ、馬ニ跨リ、郊野ノ中ニ探春ノ宴ヲ爲ス」また蘇軾の詩に「東郊欲探春、未見黄花迹、春風在流水、鳧鴈先拍拍、孤帆信浴浴、弄此半篙碧」

【春ヲ迎フ】（迎春）禮記月令に「立春ニ盛徳木ニ在リ、天子乃チ齋ス、立春ノ日、天子親ラ三公九卿諸侯大夫ヲ帥キ以テ春ヲ東郊ニ迎フ」註に「春ヲ迎フルハ蒼帝ノ靈威ヲ祭リ、東郊ノ兆ヲ仰グナリ」蒼帝とは、東方蒼龍の帝をいふ、一解に太皞句芒を祭るなりと、沈佺期の詩に「東郊暫轉迎春仗」

【遙ニ知ル兄弟高ニ登ル處】　唐の王維の九月九日憶山東兄弟に「獨在異郷爲異客、毎逢佳節倍思親、遙知兄弟登高處、遍插茱萸少一人」この詩は九日に客中より故郷の兄弟が登高の景況を想ひやりて作りたるなり、旅にて佳節に逢へば益親類のことが思はるるが、今日兄弟どもが高きに登り、茱萸を插んで、我が一人缺けたることを言ふならむと、我が思ふとはいはず　兄弟どもが我が一人不足せることを沙汰し居るならんと作りて眞情掬すべし（茱萸）を參看せよ、

【春ハ枝頭ニ在リテ已ニ十分】（道ハ遒キ）を見よ、

【馬鬣封】　馬の「タテガミ」の如く土を封じたる墳墓をいふ、禮記檀弓上に「子夏曰、昔夫子言之曰、吾見封之若堂者矣、見若坊者矣、見若覆夏屋者矣、見若斧者矣、——之謂也」

【霸王之資】「ハタガシラ」となる「モトデ」春秋後語に「蘇秦商說楚威王曰、楚天下之强國也、西有黔中郡、東有夏州海陽、南有洞庭蒼梧、北有汾陰地方五千里、帶甲百萬、車千乘、騎萬匹粟支十年、此霸王之資也」

有女顰眉吉士誘之（詩經）

萬物不如酒、四時惟愛春（韋莊）

造化如知妬、又釀明日雨（舒頲）

紙窓明曉暖、布被暖知春（白居易）

花濃春寺靜、竹細野池幽（杜甫）

【日】　音ジツ說文に「日ハ實ナリ、太陽ノ精熙ケズ」博雅に「日ハ君ノ象ナリ」釋名に「日ハ實ナリ、光明盛實ナリ」易の說卦に「離ヲ火ト爲シ、日ト爲ス」禮記の祭義に「日ハ東ヨリ出ヅ」史記天官書の注に「日ハ陽精ノ宗後漢書荀爽傳に「在地爲火、在天爲日」淮南子天文訓に「火氣ノ精ナル者ヲ日ト爲ス」淮南子に「日出暘谷、入於咸池、拂於扶桑、是謂晨明、登於扶桑之上、爰始將行、是謂朏明、臻於衡陽、是謂禺中、對昆吾、是謂正中、經於泉隅、是謂高舂、薄於虞泉、是謂蚩昧、是謂定昏、日西垂、景在樹端、謂之桑榆、廣雅に「日ヲ羅盤ト名ヅケ、一ニ朱明ト名ヅケ、大明陽烏ト名ヅケ、日御ヲ羲和ト曰フ」爾要に「日光ヲ景ト曰ヒ、日影ヲ晷ト曰ヒ、日氣ヲ晛ト曰ヒ、初メテ出ヅルヲ旭トイヒ、日昕ヲ晞トイヒ、日ノ溫カナルヲ煦トイヒ、午ニ在ルヲ亭トイヒ、未ニ在ルヲ昳トイヒ、日晩ルルヲ旰トイヒ、日將ニ落チントスルヲ薄暮トイヒ、日西ニ落チテ光、東ニ返照スルヲ之ヲ反景倒景トイフ、又日ノ已ニ出ヅルヲ朝陽トイヒ、日暮ヲ夕陽トイヒ、春ヲ遲日トイヒ、夏ヲ畏日トイヒ、秋ヲ凄日トイヒ、冬ヲ愛日トイフ」六帖に「日中有陽烏三足」漢書魏豹傳に「人生如白駒過隙」注に「白駒ハ日景ナリ」易に「日月麗乎天、百穀草木麗乎土」唐書の天文志に「日者太陽之宗、人君之象」列子に「夸父力ヲ量ラズ、日影ヲ逐ハント欲シ、之ヲ暘谷ノ際ニ逐フ、渴シテ飲ヲ得ント欲シ、河ニ赴キテ飲ム、足ラズ、將ニ北ニ走リ大澤ノ中ニ飲マントス、未ダ至ラズ、道ニ渴シテ死ス云云」杜詩に「羲和鞭白日」また「山頭落日半輪明」杜荀鶴の詩に「風媛鳥聲碎、日高花影重」

【碑】　說文に「豎石（たていし）ナリ」古者廟門の內に立てて牲を繫ぐに用ふ、禮記の祭義に「君牽牲既入廟門、麗於碑」疏に「君、牲ヲ牽キテ廟門ニ入レバ中庭ノ碑ニ繫著スルナリ」

また古者諸侯士大夫の家には皆碑あり、日影を計りて時の早晩を知るに用ふ、儀禮士昏禮に「入門當碑揖」

また棹の前後の四角に樹て轆轤を設けて縆を繞らし棺を下すに用ふるもの、王莽の時設くる所ろにして、臣子、君父の功德を追述してその上に書す、これ後人

碑文を建つるの始とす、禮記檀弓に「公室視豐碑」初學記に「碑ハ以テ往事ヲ悲ムナリ、今宮室廟屋墓隧ノ禍ニ文ヲ石ニ鐫スル皆碑ト曰フ」樹碑は碑を立つるをいひ、古碑は「コケ」のむしたる「イシブミ」斷碑は「クダケ損したる碑(墓碑)を參看せよ、

【轡】馬轡(タヅナ)なり、詩經秦風小戎篇に「四牡孔阜、六轡在手」我が國にて馬銜(クツワ)の義とするは誤りなり

【未央宮】漢書に「高祖ノ七年蕭何ーーヲ造ル、上其ノ壯麗ナルヲ見、怒リテ曰ク、天下洶洶勞苦スルコト數歲、成敗未ダ知ルベカラズ、何ソ宮室ヲ治ムルノ度ニ過グルヤト、對ヘテ曰ク且ツ天子ハ四海ヲ以テ家トナス壯麗ニアラザレバ以テ威ヲ重ンズルナシ、且ツ後世ヲシテ以テ加フルナカラシメント上悅ブ」

【靡有子遺】(子遺アルナシ)を見よ、

【日出デテ三竿】日三竿の高きに上ぼるなり、朝日の高く昇かれるをいふ、今の午前八時頃、南齊書天文志に「ーーー、黃色ニシテ赤韭劉禹錫の竹枝詞に「日出三竿春霧消、江頭蜀客擊蘭橈、欲寄狂夫書一紙、家住成都萬里橋」

【日出デテ作シ、日入リテ息ス】逸士傳に「堯ノ時、八九十ノ老人アリ、壤ヲ擊チテ歌ヒテ曰ク、日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力何有於我哉ト」擊壤歌とはこれをいふ、壤は木にてつくる、狀履の如し、一壤を三四十歩の外に置き、一壤を以て之を擊ち中るを以て工となす、帝堯の時、君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり、聖神功化の極、一物もその所を得ざることなきは、この歌を見ても知らるべし、

【庇蔭】庇は「ヒサシ」蔭は樹蔭なり、陰に通ず、ーーは「カバフ」といふ意、左傳文九年に「本根無所ーーニ爾雅釋言に「庇廕蔭也」と見え、また「廕庇蔭也」とありて、註に「今俗呼樹蔭爲庇」と見ゆ人を回護すること、樹蔭の飛鳥を息はしむるが如きに取る、荀子の勸學篇に「樹成蔭而飛鳥息焉」とあり、俗に人の力に賴ることを「御蔭を蒙る」といふは蓋し此に本づくならん、

【碑陰】碑の背をいふ、碣陰ともいふ、典籍便覽に「凡ソ碑碣ソノ背ニ題スルモノ」とあり、碑陽碣陽ハ、ソノ面ニ題スルモノヲイフ、

【備員】(員ニ備フ)と讀む、員は數なり、その定まれる數に備はるのみなる義、史記秦始皇紀に「博士雖七十人、特備員弗用」また平原君傳に「毛遂曰、願君即以遂ーーー行矣」

【徵陰】陰暦五月をいふ、後漢書魯恭傳の注に「五月陰氣始メテ生ズ、故ニーーートイフ」また「ウスグモリ」

【眉宇】眉の面に於けるは、猶ほ屋の宇(ノキ)あるが如し、故にいふ、文選に載する枚乘の七發に「陽氣見於ーー之閒ニ

【諶悠之說】「トリトメナキ」說をいふ、虛遠の言なり、莊子に「以ーー諶悠之說荒唐之言無端崖之辭、時恣縱而不儻」

【經戾】悖戾に同じ、漢書劉向傳に「朝臣舛午、ーー乖刺」

【飛英會】曲洧舊聞に「范蜀公許ニ居リ、長嘯堂ヲ造ル、前ニ芬縻架アリ、春時花盛ナル時、客ヲ宴ス、花、酒杯中ニ墮ツレバ飲マシムルニ大白ヲ以テシ、衆座遍ス無シ、之ヲーーート謂フ」

【披抉】披は發なり、抉は挑なり「エグル」人の陰祕を挑發するをいふ、漢書薛宣傳に「ーーー其闈門ニ

【火ヲ改ム】(改火)六帖に「春ハ楡柳ノ火ヲ取リ以テ陽氣ニ順フ、マターーー辰トイフ」寒明退朝錄に「唐ノ時、清明ニ楡柳ノ火ヲ取リ以テ近臣戚里ニ賜フ、本朝モ之ニ因ル」

【碑ヲ捫ツ】(捫碑)碑は殷(モモ)なり、碑をうつは喜び勇む貌、莊子在宥篇に「鴻蒙ーーー而雀躍不ーー」李斯の諫逐客一書に「彈ーー箏搏ーー髀」搏髀・拍髀義皆同じ、

【日ヲ同ジクシテ論ゼズ】(不ーー同ーー日論ニ)兩者甚しく懸隔すれば一樣に對比して論ずべからずとの義、史記游俠傳に「雖使鄉曲之俠、予季次・原憲比ーー權量、力効功於當世、不ーー同ーー日論ーー矣」季次は公晳哀(孔子の弟子)の字、

【廄ヲ逐フノ狗ハ兎ヲ顧ミズ】(逐ーー廄之狗不ーー顧ーー兎)求むる所ろ大なる者は、小なる者を顧みざるの意、漢書外戚傳に見ゆ、

【日ヲ搴ス】(搴)日)搴は揮に通ず、日を「サシマネク」(魯陽)を見よ、

【比屋】比は列なり「カドナミ」の義、漢書王莽傳に「堯舜之世、ーー可ーー封」と、一に屋比に作る、同じ、

【火ヲ乞フハ燧ヲ取ルニ若カズ】(乞ーー火不ーー若ーー取ーー燧)人に求むるは、自ら修むるに若かざるに喩ふ、淮南子に「ーーーーーーーー、寄ーー汲不ーー若ーー鑿ーー井」燧とは火を取る具、ヒウチ石の類なり、

【火ヲ救フニ薪ヲ投ズ】(救ーー火投ーー薪)本を治めずして末を務むるときは、その害却りて甚しきに至るに喩ふ、鄧析子に「令煩則民詐、政擾則民不ーー定、不ーー治其本ーー而務其末、譬如ーー拯ーー溺錘ーー之以ーー石救ーー火投ーー之以ーー薪」

【日ヲ倍シ行ヲ幷ス】(倍日幷行)晝夜疾く走る義、史

記孫子傳に「乘其步軍、與其輕銳ーレーーレーー逐之」また孫子には「卷甲而趨、日夜不處、倍道兼行、百里而爭利、則擒三將軍」

【日ヲ視テ眩セズ】（視日不眩）（爛爛トシテ）を見よ、

【日ヲ曠シクシテ久シキニ彌ル】（曠日彌久）曠は空なり、廢なり、空しく時日を廢するをいふ、漢書賈山傳に「曠日十年」彌久は、久しきにわたる義、史記の刺客列傳に「太傅之計ーーーー」

【美ヲ專ニス】（專美）獨にて美名を占むる義、書經說命に「爾尙明保予、罔俾阿衡ーーー有商」

【埤雅】二十卷、宋の陸佃撰す、その子宰の序に曰く「佃神宗ノ時召對セラレ、言物性ニ及ブ、因リテ說魚、說木二獸ヲ進ム、後チ乃チ益ニ筆削ヲ加フ、初メ物性門類ト名ヅク、後チ爾雅ヲ注シ終リ、更ニ此ノ書ヲ修メ、名ヲーート易フ、爾雅ノ補タルヲ言フナリ」この書釋魚・釋獸・釋鳥・釋蟲・釋馬・釋木・釋草・釋天に分ち、字義を明かにせり、明牛哀のーー廣要四十二卷あり、參考すべし、

【比校】比は「タクラブル」なり、校は考へ合すなり、彼と此とを比べ合せて優劣を考へ判つなり、國語齊語に「ーーー民之有道者ニ校一」に較に作る、

【卑行】目下の親類（尊行）を參看せよ、

【誖行】偏頗の行なり、孟子滕文公下に「我亦欲正人心、息邪說、距ーー、放淫辭、以承三聖者」と「ネヂケタル」行なり、

【微行】小徑（コミチ）をいふ、詩經に「遵彼ーー」

また貴人の「シノビアルキ」をいふ、即ち隱行なり、史記秦紀に「始皇ーー咸陽ニ」とあり、一說に微賤の所爲の如くする義とあり、漢書武帝紀にも「帝嘗輕服ーー」とあり、

【悲歌慷慨】「ウレタミ」慨きて悲壯なる歌を謠ふをいふ、史記項羽本紀の垓下之戰の條に「項王乃悲歌忼慨、自爲詩曰云云」十八史略には忼を慷に作る、字相通ず、韓愈の送董昌南序には「燕趙古稱多感慨悲歌之士」とあり、

【皮革】周禮天官に「毛アルヲ皮ト爲シ、毛ヲ去ルヲ革ト爲ス」說文に「革ヲ柔スルヲ韋トイフ」

【否閉】否は閉なり、閉ぢ隔つる義、漢書薛宣傳に「人道不通、則陰陽ーー」

【祕閣】天子の圖書を藏する處をいふ、宋朝會要に「端拱元年五月詔シテ崇文院中堂ニ就キテーーヲ建

ツ、是ノ月宋沁ヲ以テーーニ直セシム、此レ蓋シ官ヲ設クノ始ナリ」晉言故事に「淳化三年ーー成、李至乞賜ーー新額、宋太宗御書飛白書ーーニ字、以賜ニ李至ニ」

【飛蛾ノ火ニ赴クガ如シ】（如飛蛾之赴火）自ら死地に就くに喩ふ「飛んで火に入る夏の蟲」といふ俚諺の本づく所ろ、梁書到溉傳に「高祖賜ニ連珠ニ曰、「ーーーーーー、豈焚身之可ンーー」

また衆の慕ひ歸するに喩ふ、魏書崔浩傳に「慕容垂乘祖父之資、同類歸ルニ之、若夜蛾之赴火」（蛾トイフ）を參看せよ、

【彼岸】佛家の語、煩惱の苦を脫して菩提の果を得る義、即ち生死を海に喩へ、煩惱を脫せずして人閒に迷ふを此岸といひ、證果を得るをーーと謂ふ、无量壽經の疏に「涅槃名ーーニ

また佛家にて春分と秋分との日を中日といひ、その前後三日を合せて七日をーー會といひ、佛事を修し、諸佛に詣で亡靈に供養す、冬夏の兩時を取らずして春秋の二節を取る所以は、仲春（陰曆二月）仲秋（陰曆八月）は正東（マヒガシ）より日出でて其西に沒す、而して彌陀佛の國は直西日沒する處に當れり、故に彌陀の在所を衆生に正しく指示して往生の願を遂げさしむるに取るといふ、

【非幾】幾は機なり、不善の機をいふ、書經顧命に「爾無以劍冒貢于ーーニ貢は進なり、幾は動の微にして善惡の由りて分るる所ろなり、劍は音セヅ康王の名、

【非儀】自ら人に贈る品物を謙していふ、菲は薄なり、成語考に「自謙ニ禮薄ニ曰ーーニ

【扉屨】力を用ふることの壯大なる貌、左思の吳都賦に「巨鼇ーー、首冠ニ靈山ニ」一解に力を作す貌、屨は一本詳しくは眞俗佛事編を見よ、

【肥甘】肉の「コエテ」味「ウマキ」をいふ、孟子梁惠王上に「爲ーー不足ニ于口ニ與肥甘ニ同じ、

【辟寒香】迦異記に「ーーーハ丹丹國ノ出ス所ロ、漢武ノ時、入貢ス、大寒ニ至ル每ニ室ニ於テ之ヲ焚ケバ、暖氣外ヨリ入リ、皆衣ヲ減ズ」

【辟寒丸】「サムサ」を避くる丸藥、宋史眞宗紀に「賜ニ從官ーーニ

【辟寒犀】開元遺事に「開元二年冬、交趾國犀一株ヲ進ム、色黃ニシテ金ノ如シ、使者請ヒテ金盤ヲ以テ殿中ニ置ク、溫溫然暖氣ノ人ヲ襲フアリ、上其ノ故ヲ問フ、使者對ヘテ曰ク、此レーーーナリ、隋ノ文帝ノ時本國曾テ一株ヲ進ム、直チニ今日ニ至ルト、上甚ダ悅ビ、厚ク之ニ賜フ」

負に作るは非なり、邦語「ヒイキ」と讀みて援引の意に用ふるも作力の義に本づく、張衡西京賦に「巨靈贔屭」巨靈は河神なり、贔は屃の省字、本草に「大龜好ンデ重ヲ負フ、今石碑下ノ龜趺ハ其ノ形ニ象ル」

【貔貅】 猛獣なり、史記五帝紀に「教熊羆ーー貔虎」以與炎帝戰於阪泉之野ニ註に「此ノ六者ハ猛獣、以テ戰ヲ教フベシ」また旌旗の名、禮記の曲禮に「前有ニ摯獣ー則載ーー」註に「兵車ノ旌ニーーヲ畫ク、ハ形象威猛ニシテ衆ヲシテ警備スルコトヲ知ラシム」貔は爾雅釋獣に「白狐ナリ」説文に「豹ノ屬ナリ」

【閟宮】 閟は幽深なり、また神なり、靈廟をいふ、詩の魯頌に「ーー有侐」とあり、侐は音ケキ靜かに寂しき義、

【弭久】 久しきに弭るなり(日ヲ噤シク)を見よ、

【被裘公遺金ヲ願ミズ】 (被裘公不願遺金)劉氏人譜に「春秋ノ時吳ニ被裘公トイフモノアリ、夏月ニ當リテ、敝裘ヲ衣テ、薪ヲ道上ニ賣ル、道上ニ遺金一錠アリ、公願ミズシテ過グ、延陵ノ季子見テ之ヲ憫ミテ曰ク、薪ヲ負フ者、彼ノ金ヲ取レト、公笑ヒテ曰ク、五月ニ裘ヲ被テ薪ヲ負フ、豈金ヲ取ル者ナランヤト、季子驚キ拜シテ姓名ヲ問フ、公曰ク 何ゾ與ニ姓名ヲ 言フニ足ラント、答ヘズシテ去ル」

【匪躬之節】 一身の利害を顧みずして、君主の爲めに忠節を盡すをいふ、易の蹇卦の六二に「王臣蹇蹇匪ニ躬之故ニ」とあるに本づく、韓愈の爭臣論に「居無用之地ニ而致ス——ーー」蹇蹇は艱難の甚しきをいふ、註に「忠貞ノ貌」とあり、

【日晷ヲ移サズ】 (日不レ移レ晷)晷は日影なり、多く時を經ざる義、漢書王莽傳に「人不レ還レ踵、ーーレーレー」還は旋なり、

【否極マレバ泰ニ反ル】 (否極反泰)否塞の運もその極に達すれば泰平に反るをいふ、梁宣帝の賦に「望否極而反レ泰、何杳杳而無レ津」吳越春秋句踐入臣傳に「時過于期、否終則泰」(否泰)を參看せよ、

【非據】 己の居るべき所ろに非ざる處に居るをいふ、易經繫辭下傳に「非レ所レ據而據焉、身必危」

【比丘】 僧をいふ、釋氏要覽に「梵語、比丘トイヒ、秦ニハ乞士ト言フ、上ハ諸佛ニ法ヲ乞ヒ、以テ慧命ヲ資益シ、下ハ施主ニ、食ヲ乞ヒ以テ色身ヲ資益スルヲイフ」魏書釋老志に「桑門爲レ息心ーー爲レ行乞」一に苾芻ともいふ、苾芻は雪山の香草の名、草に五義あり、以て僧の五德に喩ふ(苾芻)を見よ、

【比丘尼】 「アマ」大藏法數に「梵語尼華言レ女、佛初不レ度

女人出家成道之後、因レ嫉世摩訶波闍波提懇ニ求出家ヲ、佛乃度之、故名ーーニ智度論ニ「尼得ニ无量律儀、故應レ次比丘ニ(比丘)を見よ、

【日暮レ道遠シ】 (日暮道遠)史記の伍子胥傳に「吾日暮レ途遠レ吾故倒行而逆レ施之」とあり、人の行く、前途尚ほ遠くして、日已に暮る、故に顚倒疾行して、理に逆ひ、事を施すをいふ、唐書の白居易傳に「日暮道遠、吾生已蹉跎」年すでに老いて、期するところの前途尚ほ遠きに喩ふ、

【飛黃】 名馬の名、背に角あり、千年の壽を保つといふ、淮南子覽冥訓に「ーー伏皁」韓愈の符讀書城南の詩に「ーー騰踏去」註に「ーーハ龍馬」

【祕館】 天子の圖書を藏するところ、賈逵傳に「左氏傳、國語ニ明カナリ、之ガ解詁ヲ爲リ、之ヲ獻ズ、顯宗其ノ書ヲ重ンジ、寫シテーーニ藏ス」

【美冠玉ノ如シ】 (美如冠玉)(冠玉ノ)を見よ、

【被徑】 「コミチ」に「オホヒ」「カブサル」をいふ、楚辭招魂に「皐蘭ーー兮」

【皤ヲ染ム】 (染皤)年老いて壯者に伍せんためにするなり、造邦貴勳錄に「武臣裘義入朝ス、帝其ノ老ヲ惜ミ、大醫院ニ命ジテ、其ノ皤ヲ染メシメ、以テ壯者ニ伍ス

【碑碣】 石碑(イシブミ)なり、康熙字典に「方ナル者ヲ碑ト爲シ、圓ナル者ヲ碣ト爲ス李斯ノ造ル所ロ」(碑)を見ルコトヲ得シム」また輟耕錄に「中書丞相、史忠武王名ハ天澤、髭皆已ニ白シ、一朝忽チ盡ク黑シ、世皇之ヲ見テ驚キ問ヒテ曰ク、史拔都、汝ノ髯何ゾ乃チ更ニ黑キヤト、對ヘテ曰ク、臣藥ヲ用ヒテ之ヲ染ムルガ故ナリト、上曰ク、之ヲ染メテ如何セント欲スト、曰ク、臣鏡ヲ覽テ、髭髯ノ白キヲ見、縱ニ年且ツ暮レテ、忠ヲ陛下ニ盡スノ日短キヲ傷ム、因リテ之ヲ染メテ、玄ク シテ報效ノ心疇昔ニ異ナラザラシムルノミト、上大ニ喜ブ、人皆王ヲ以テ奏對ニ捷ナリトス」

【鬚ヲ拂フ】 (拂鬚)俚言に、貴人に「コビヘツラフ」ことを「鬚の塵を拂ふ」といふ、韻府に「寇萊公宰相トナル丁謂參知政事タリ、嘗テ都堂ニ會食ス、羹(あつもの)公ノ鬚ヲ染ム、謂起テ之ヲ拂フ、公色ヲ正シテ曰ク、身執政タリ、何ゾ自ラ宰相ノ爲ニ鬚ヲ拂ハンヤト、謂慙ヅ」この事は、宋史寇準傳に出づ、丁謂は準の門に出でて參政に至りし人なり、

【皤ヲ然タ】 (然鬚)度量の寬弘なるにいふ、宋史に「韓魏公、夜、書ヲ作ル、侍兵燭ヲ傍ニ執ル、燭、公ノ鬚ヲ然ク、袖ヲ以テ之ヲ揮シ書ヲ作ルコト故ノ如シ」

よ、

【皮軒】 虎の皮にて飾りたる車、獨斷下に出づ、

【疲倦】 體の「ウミツカルル」義、三國志蜀志張裔傳に「晝夜接賓、不得寧息、張君嗣ー一欲死」罷倦に同じ、

【罷倦】 前條に同じ、東觀漢記に「上擊莽還、汝水上、以手飲水、澡盥塵垢、謂傅俊曰、今日ー一甚」

【微言】 微妙の言をいふ、漢書藝文志に「仲尼沒而ー一絶七十子喪而大義乖」と陸游の詩「ー一入孤夢、恍與屈宋遊」屈宋は屈原と宋玉となり、また謎をいふ、列子說符篇に「白公問孔子曰、人可與ー一乎」

【被堅執銳】 戰國策に「吾ー一ー一赴強敵而死、此猶一卒也(堅ヲ被リ)を見よ、

【比肩隨踵】 肩を並べて立ち「カカト」に續ぎて至るをいふ、隔離せざるの義、戰國策に「千里而一士、是比肩而立、百世而一聖、若隨踵而至也」また韓非子に「堯舜桀紂千世而一出、是比肩隨踵而生也」

【微顯闡幽】 (顯ヲ微ニシ幽ヲ闡ス)と讀む、その顯なる者を微にして以て其の妙を究め、その幽なる者を闡きて之をして明かならしむるをいふ(周易本義ニ、微顯當ニ顯微ニ作ルベシトセリ、サレドモ倒語トシテコノ儘ニシテ微ヲ顯ニスト讀ムモ可ナリ)易經繫辭下傳に「夫易彰往而察來ー一ー一」

【飛語】 誰の言ひしとも知れざる無根の語をいふ、漢書灌夫傳に「酒有ー一、爲惡言聞上」上は武帝、

【貔虎】 貔は一名執夷、虎の屬、ーーは猛勇の士に喩ふ、書經牧誓に「尙桓桓如虎如貔、如熊如羆」

【廱蓋】 (蓋コト)を見よ、

【鴻】 蠭蠆(カツヲムシ)なり「ヌカガ」といふ小蟲の類、史記周本紀に「ー一滿野」

【避穀】 避一に辟に作る、穀食を避けて仙を學ぶなり(穀ヲ避ク)を見よ、

【廱、虎皮ヲ蒙ル】 (廱蒙虎皮)廱は鹿の一種「ナレシカ」諸侯にして天子の名器を收むるに喩ふ、史記楚世家に「若使澤中之廱蒙虎之皮、人之攻之必萬之於虎」

【彼蒼】 蒼天をいふ、蒼は深青色なり、詩經に「ー一蒼天」とあるに本づく、杜甫の詩に「餘力浮于海、端憂問ー一蒼天、曷其有極」

【祕藏】 「ヒメカクス」隱を祕とし、隱覆を藏とす、佛經の語、圓覺經に「爲諸菩薩開祕密藏」涅槃經に「愚人不解、謂之ー一、智者了達則不名藏」轉じて俗に珍重する義に用ふ「ーーの品」「ーー娘」の如し、

【非想天】 欲界の六欲天を打ち過ぎて色界に十八の天あり、その上に無色界の四空所とて四天ある、その最上の極天の名なり、

【皮相ノ士】 外貌のみを見て、內實を察すること能はざる士をいふ、韓詩外傳に「季札齊ニ遊ビ、還金ヲ見テ牧者ヲ呼ビテ、之ヲ取ラシム、牧者ノイハク、子居ルコトノ高ク、視ルコトノ下ク、貌ノ君子ニシテ、而シテ言ノ野ナルヤ、吾君アルモ君トセズ、友アルモ友トセズ、晉ニ當リテ裘ヲ衣ル、君、金ヲ取ル者ト疑フカト、延陵子其ノ賢者タルヲ知リ、姓字ヲ請ヒ問フ、牧者ノイハク、子ハ乃チ皮相ノ士ナリ、何ゾ姓字ヲ語ルニ足ランヤト、遂ニ去ル」史記陸賈傳に「足下以目皮相、恐失天下之能士」

【膝ヲ容ル】 (容膝)を見よ、

【飛棧】 「タカクケハシキ」カケハシ」雲棧に同じ、陸游の句に「ーー連雲是坦途」

【眉山】 隋の郡名、梁州に屬す、今の四川嘉定府樂山縣治、また宋の縣名、成都府路眉州に屬す、今の四川眉州治、

【糜散】 猶ほ消滅の如し、楚辭に「名ーー而不彰」

【非三非一】 太平記卷八に「號神山王、須有ーーー從」

【美士】身體の美くしき士をいふ(肥白)を見よ、

【比周】比はかたよりて黨するなり、周は徧くゆきわたるなり、皆人と親厚するの意なれども、周は公にして、比は私なり、論語爲政篇に「君子周而不比小人比而不周」註に「忠信ヲ周トシ、阿黨ヲ比トナス」また公私の別なく、ただ親む義に用ふることあり、左傳に「頑闇不友是興——」とあるの類、

【眉州】唐は劒南道に、宋は成都府路に、元は四川省嘉定府路に、明は四川省に屬す、今の四川省——治これなり、

【微子去リテ殷ノ代傾ク】太平記卷十三に見ゆ紂王愈淫亂にして止まず、微子數諫むれども聽かず、乃ち大師少師と謀りて遂に去る、やがて周の武王の爲めに亡ぼさる、事は史記の殷本紀に出でたり、

【飛耳長目】飛耳は、能く遠きを聞き、長目は能く遠きを視るをいふ、管子に「一曰長目、二曰飛耳、三曰樹明、明知千里之外隱微之中」樹は立なり、

【皮日休】字は襲美、唐の襄陽の人、文を能くし進士に擧げられ、孟浩然と鹿門山に隱れ、自ら醉吟先生と號し、また酒民といふ、酒箴食箴を作る、陸龜蒙と友たり、松陵倡和詩集あり、官太常博士に至る、著すところ皮子文藪十卷あり、孫の文粲も亦詩文を能くし、官鴻臚少卿に至る、

【鄙事ニ多能】(多能鄙事)論語子罕篇に「子曰吾少也賤故多能鄙事」君子多乎哉、不多也」鄙事とは、釣弋獵較の如き藝能をいふ、

【匪兕匪虎】(兕ニ匪ズ、虎ニ匪ズ賢人が災厄に遇ひて其の不幸を嘆ずるを「————之歎」といふ、史記孔子世家に孔子が將に楚に之きたまはんとて陳蔡の閒にて厄せられたまひし事を敍して曰く「楚人ヲシテ孔子ヲ聘セシム、陳蔡ノ大夫謀リテ曰ク、孔子ハ賢者ナリ(中略)孔子楚ニ用ヒラルレバ陳蔡ノ事ヲ用フル大夫危シト、是ニ於テ乃チ相與ニ徒役ヲ發シ、孔子ヲ野ニ圍ム、行クコトヲ得ズ、糧ヲ絕ツ、從者病ミテ能ク興ツ莫シ、孔子講誦弦歌シテ衰ヘズ、子路慍リ見エテ曰ク、君子亦有ルカ窮乎ト、孔子曰ク君子固窮、小人窮斯濫矣ト(中略)孔子、弟子ノ慍色アルヲ知リ、乃チ子路ヲ召シテ問ヒテ曰ク、詩云匪兕匪虎、率彼曠野、吾道非耶、吾何爲於此云云」とあるに本づく、詩は小雅何草不黃篇に出づ

【皮子文藪】十卷唐の皮日休撰す、その文大抵經術に原本す、その孟子を以て學科に立てんと請ふ如き尤も卓見となす、詩は陸魯望と名を齊うす、この書收むるところの詩、僅に一卷なるは、蓋し已に松陵集に入れる者は重ねて載せざるに由る、

【非心】非は不是なり、非僻の心をいふ、書經冏命に「格ノ非ヲ——俾ク克ク紹ガ先烈ヲ」また孟子離婁上に「惟大人能格ノ君心之非ヲ」

【鄙人】「イヤシキ」人、小人に同じ、淮南子修務訓に「——有得ル玉璞ヲ者」

【美人】容貌の美しき婦女をいふ、李白の詩に「——捲珠簾深坐顰ム蛾眉ヲ」

また吾が君に比していふこと、王逸の離騷の序に見ゆ、楚辭九歌に「望ム——兮未來ニ」

また賢人君子に比していふ、詩經の「誰之思、西方ノ美人」の鄭箋に「周室ノ賢者ヲ思フナリ」蘇軾の赤壁賦に「渺渺兮吾懷望ム——兮天一方ニ」

また女官の稱、事物紀原に「漢ノ光武、——ヲ置ク、歷代多ク之レアリ、國初モ亦之ヲ置ク、正四品ナリ、通典ニ前漢內命婦ニ——アリ」

【虞美人】貿氏談錄に「褒斜山中ニ————草アリ、行路ノ人見ル者或ハ——ヲ唱フレバ即チ兩葉漸ク搖動シ、人ノ撫掌ノ狀ノ如ク、頗ル節拍ニ應ズ、或ハ他ノ辭ヲ唱フレバ即チ寂然トシテ動カズ」學圃餘疏に「——一名ハ滿園春、千葉ノ者佳ナリ」花鏡に「———花葉密ニ類シテ小ニ、一本數十花アリ」

【美人蕉】琉球に多く產す、寒を畏れ濕地を忌む、芭蕉に似て小く、葉も狹く短し、花は朱色にて「メウガ」の花の如く、瓣狹く三寸許、左右に互生すること四五寸なり、一に紅蕉ともいふ、伊藤圭介曰く「美人蕉ハ「ヒメバセウ」ト訓ム、天和年中琉球ヨリ渡リ、薩摩日向ニ多ク播殖ス」錦字箋に「福州ニ產スル者、佳ナリ、冬春ヲ歷テ凋マズ、花ハ紅黃色ニシテ瓣ハ蓮ヨリモ大ナリ、金蓮實相ト號ス」

【非常】事變の義、漢書燕王傳に「修ム武備ヲ、備ヘ——ニ」

【飛將】猶ほ梟將の如し、漢書李廣傳に「廣在リ郡ニ匈奴號シテ漢ノ——軍ト、避ク之ヲ」

【非常ノ事アリテ然ル後チニ非常ノ功ヲ立ツ】(有非常之事、然後立非常之功)太平の世に於ては、大功を立て難きをいふ、司馬相如の難蜀父老檄に「蓋世ニ必有非常之人ニ然後有非常之事、————、————、夫非常者、固常人之所異也」

【飛錫】釋氏要覽に「今僧ノ遊行スルヲ飛錫ト嘉稱ス、コレ高僧隱峰ノ五臺ニ遊ビ、淮西ニ出ヅルニ錫ヲ擲

チ空ニ翻リテ往キシニ因ル」とあり、また「今、僧ノ止リテ住スル所ロノ處ヲ掛錫ト名ツクルハ、凡ソ西天ノ比丘、行クトキハ必ズ錫杖ヲ持ツ、錫ヲ持ツニ二十五ノ威儀アリ、凡ソ室中ニ至レバ地ニ著クルヲ得ズ、必ズ壁牙ノ上ニ掛ク、故ニ掛錫トイフ」高僧傳に「有神僧飛錫凌雲而行」

【毘沙門】 梵語、多聞と譯す、福德の名、四方に聞ゆ、須彌山の半第四層の水精埵に居す、北方の天王にして无量百千の藥叉を統領し、北方を守護す、一說に恒に佛の道場を護り說法を聞くを以て多聞といふ、法華經科注に「此云多聞、居須彌北面、即護世四天王一」

【匕首】 劒なき短刀「アヒクチ」其の頭匕に類する故にーーといふ、史記吳世家に「使專諸置ーー於炙魚之中以進食」また刺客傳に「圖窮ーー見」

【眉嵓】 眉秀でて命長きをいふ、詩經豳風に「爲此春酒、以介ーーこまた小雅南山有臺篇に「樂只君子、遐不ーー

【美珠ヲ得レバ身ヲ剖キテ之ヲ藏ス】（得美珠剖身藏之）（宅ヲ徙シテ）を見よ、

【美貂蓐用】 「ウツクシキ」口實と、大いなる用、後漢書趙壹傳に「趙壹字ハ元叔、漢陽西縣ノ人、體貌魁梧、身ノ長九尺、ーーーー之ヲ望ムニ甚ダ偉ナリ、而シテオヲ恃ミテ倨傲鄉黨ノ爲メニ擯ケラル」

【毘首羯磨】 種種業と譯す、天童部に屬す、天竺の工匠善く佛像を刻む、今佛として祭らる、眞言密記に「帝釋天王以神通取此女至忉利天上、召ーーーー天令造喜見城」

【批准】 臣下より上つる所ろの表奏の尾に、天子自ら答敕を書せらるるを批といふ、准は準の俗字にて「許ス」の義、谷響集に「客曰、御批或ハ勅批トイフ、批ノ字ノ意如何、答、凡ソ書尾ニ署ス、之ヲ批ト謂フナリ、批本捴ニ作ル、說文ニ云フ、反手擊也ト、帝皇ノ詔答之ヲ批ト謂フハ、之ヲ上ル所ロノ表奏ノ尾ニ批スルナリ」

【祕書】 天子の藏書をいふ、夢溪筆談に「後漢之時、藏書東觀、在禁中、至桓帝之時、始置ーー監一支配一切ーーーー之名始此」

【祕書監】 初學記に「按ズルニーーーーハ後漢ノ桓帝置ク、圖書祕記ヲ掌ドル、故ニ祕書トイフ、後之ヲ省ク、獻帝ノ建安中ニ至リ曹操魏王トナリ、祕書令ヲ置キ、尙書ノ奏事ヲ典ル、卽チ中書ノ任ナリ、マタ圖書祕記ノ事ヲ兼ネ掌ル、魏文黃初ノ初、祕書ヲ分チ、中書ヲ立テ、中書自ラ令ヲ置キ、尙書ノ奏事ヲ典リ、而シテ祕書ハ

令ヲ改メ監トナシ、別ニ文籍ヲ掌ル、初メ漢制ニ、尙書中書ハ、少府ニ屬シ、祕書ハ中書ノ官ニ本ヅク、故ニ魏ノ祕書ハ、卽チ漢ノ東觀ノ職ナリ、安ンゾ復タ少府ニ屬スベケント、此ヨリ復セズ、晉武ニ至リ、マタ祕書ヲ以テ幷セテ中書省ニ入レ、其ノ監ヲ省ク、晉惠復タ別ニーーーー一人ヲ置ク、後世之ニ因ル、龍朔二年、祕書省ヲ改メ蘭臺トイヒ、其ノ監ヲ改メ太史ト名ヅク、咸亨元年復ターーーートナス、天授ノ初、祕書ヲ改メ麟臺トイヒ、其ノ監ハ改メズ、神龍ノ初、舊ニ復ス」

【避暑會】 開元遺事に「長安富家ノ子ハ、暑伏中ニ至ル每ニ、各林亭內ニ於テ畫柱ヲ植テ、錦綺ヲ以テ結ビ、凉棚ヲ爲リ坐具ヲ設ケ、避暑ノ會ヲ爲ス」

【翡翠】 「カハセミ」なり、格物論に「ーーハ形小ニシテ握ニ盈タズ、一種ニシテ二色ナリ、翡ハ赤羽、翠ハ青羽鵁ノ羽モ亦翠、鴛鴦モ亦翠、鷺紫纓大サ鳧ノ如シ、皆珍禽ナリ、翠雀一名ハ魚狗、爾雅ニマタ翠鵁ト名ヅク」

【淝水ノ戰】 秦王苻堅大擧して晉を攻めんことを議す、或人曰く、晉には長江の險あり、未だ容易にこれを攻むべからずと、堅曰く吾が衆を以て鞭を江に投ぜば、其の流を斷つべしと、戎卒六十萬、騎二十七萬を發して水陸齊しく進む、晉謝安の弟石と兄の子玄とに命じてこれを防がしむ、堅、壽陽城に登り、晉兵の部伍整然たるを見て、始めて懼るる色あり、秦兵進みて淝水に陣す、玄人をして謂はしめて曰く、請ふ陣を移して少しく郤き、我が兵をして渡るを得しめ以つて勝負を決せんと、堅晉兵の半渡るを俟ち、これを擊めんと欲し、兵を麾きて却かしむ、是より先晉の襄陽の刺史朱序執へられて、秦の陣後により呼びて曰く、秦兵敗ると、秦兵これを聞きて動搖しまた止むべからず玄等勝に乘じて追擊す、秦兵の走るもの八甲山の草木を見て皆兵なりとなし、狼狽して逃げ歸れり、

【秕政】 秕は穀の實のらざるもの「シヒナ」轉じて惡の義とす、ーーは、惡しき政なり、弊政に同じ、國語の晉語に「罪無ーーにまた秕は粃に同じ、晉書に「朝無粃政、人無謗言」

【徵生高】 徵生は姓、高は名、魯國の人、素より正直の名あり、論語公冶長篇に「子曰、孰謂ーーー直或乞醯焉、乞諸其隣而與之」醯は醋(ス)なり、是を是とし非を非とし、有を有とし無を無とするを直といふ、高の或人に無を以て告げずして、之が爲めに代りて鄰に乞ひて與へたるは、人の美を掠めて吾の恩を市る者なれば正直者とはいふべからずとの意、

【尾生之信】　約束を固執して、變通を知らざるをいふ、史記の蘇秦傳に「尾生、女子ト梁下ニ期ス、女子來ラズ水至レドモ去ラズ、柱ヲ抱イテ而シテ死ス、信此ノ如キアリ」また蘇秦燕王に見えて曰く「今孝ナルコト曾參ノ如ク、廉ナルコト伯夷ノ如ク、信ナルコト尾生ノ如クナルコトアラン、此ノ三人ノ者ヲ得テ以テ大王ニ事ヘシメバ何若ト、王曰ク、足リナント」莊子の盜跖篇に「尾生ノ溺死セシハ信ノ患ナリ」

【微小】　すべて形の小さをいふ、荀子非相に「——短脅」

【丕績】　丕は大なり、績は功勳なり、大功に同じ、書經大禹謨に「予懋乃德、嘉乃——」に

【匪石ノ心】　堅くして動かすべからざる心をいふ、詩經邶風柏舟篇に「我心匪石不可轉」とあるに本づく、晉書王導傳に「曾賴元宰固愼匪石之心、潛運忠謀、竟剪吞沙之寇」

【眉尖刀】　「ナギナタ」武備志に見ゆ、

【斐然トシテ章ヲ成ス】　論語公冶長篇に「子在陳曰、歸與歸與、吾黨之小子、狂簡斐然成章」とあり、斐然とは文ある貌、成章とは、その爲る所ろ、文理ありて觀るべきをいふ、

【比隣】　櫛なり、金にて作る、匈奴の單于の辮髮の裝飾となすもの、疎は梳に通ず、一說に櫛の大にして麤疎なるを理むる者を疎といふ、その齒の稀疏なるをいふ、小にして細、蟣蝨を去る所以の者を比といふ、その齒の密比せるをいふと、詩經商頌良耜に「其比如櫛」(比、必)を參看せよ、

【飛鼠】　蝙蝠(カハホリ)の異名、揚子方言に「蝙蝠自關而東、或謂之——」

【鼻祖】　人の始祖をいふ、揚子方言に「鼻ハ始ナリ、獸ノ初生、之ヲ鼻トイヒ、人ノ初生之ヲ首トイフ、梁益ノ閒ニテハ鼻ヲ謂ヒテ初トナシ、或ハ之ヲ祖ト謂フ」野客叢書反離騷の註に「——ハ始祖ナリ(中略)鼻ト祖ト皆始ノ別名、凡ソ人孕胎スルヤ必ズ先ヅ鼻アリ、然ル後ニ耳目ノ屬アリ、今、人ヲ畫クモ亦然リ、必ズ先ヅ鼻ヲ畫ク」正字通にも「人之胚胎鼻先受形、故謂始祖爲——」

【卑阪】　阪一音スウーは傀恩(ハヅル)の貌、莊子天地篇に「子貢——失色頊頊然不自得」

【飛走】　禽獸をいふ、吳都賦に「窮——之棲宿」

【卑屬】　目下の親類、家禮儀節に「——謂兄弟子孫」とあり(尊屬)を參看せよ、

【鼻息ヲ仰グ】　(仰鼻息)人の喜怒を伺ふをいふ、後漢書袁紹傳に「孤客窮軍、仰我鼻息、譬嬰兒在股掌之上、

【日中スレバ則仄キ、月盈ツレバ則食ク】　(日中則仄月滿則食)物は盛の極るときは衰ふる義、易の豐卦に「——、——、天地盈虛、與時消息、而況於人乎、況於鬼神乎」と盈虛は盛衰をいひ、消息は進退をいふ、天地の運も亦時に隨ひて進退するをいふ、史記禁澤傳に「日中則移、月滿則虧、物盛則衰、天之常數也」とあるも、意同じ、

【臂ノ指ヲ使フガ如シ】　(如臂使指)意の如くならざることなきに喩ふ、漢書賈誼傳に「今海內之勢、如身之使臂、臂之使指、莫不制從」

【美疢ハ惡石ニ如カズ】　(美疢不如惡石)疢疾は美なりと雖も身を害ふ、藥石は惡なりと雖、病を治す、以て姑息の愛は、規正の言に如かざるに喩ふ、一解に、美疢は美嗜にて、「ウマキモノ」をくらひ疾をなすをいふと、左傳襄二十三年に「季孫之愛我疢疾也、孟孫之惡我藥石也、——矣、夫石猶生我、疢之美、其毒滋多」

【匕箸】　食事に用ふる「サジ」飯匙なり、三國志蜀志劉先主傳に「曹公從容謂曰、今天下英雄惟使君與操耳、本初之徒不足數也、先主方食失——」本初は袁紹の字、箸は筯に通ず、

【美女ハ醜婦ノ仇ナリ】　說苑尊賢篇の語(盛德ノ士)を

絕「其乳哺」立可「餓殺」

また鼻息は「ハナイキ」の義、宋史王韶傳に「侍者往往股栗、而韶——自如」

【陂陁】　地平かならざるなり、司馬相如の子虛賦に「罷池——下屬江河」陁は陀の俗字、一に陁に作る、陂一音ハ

【飛蛇】　霧にのりて飛ぶといふ蛇、山海經中山經に「柴桑之山多——」腦蛇に同じ、

【否泰】　周易の二の卦の名、否は塞なり、泰は通なり、程傳に「天地隔絕不相交、所以爲否也、天地陰陽之氣相交而和、則萬物生成故爲通泰」

☰☰天地否　☷☷地天泰　(否極マレバ)を見よ、

【尾大ナレバ掉ハズ】　(尾大不掉)獸の尾、大なれば、掉かすこと能はざるの義にて、上弱く下強ければ、制御すること能はざるに喩ふ、左傳昭十一年に「末大必折、——」國語に「邊境者國之尾也、譬之如牛馬處暑之既至、虻蟹之既多而不能掉其尾」淮南子に「禽獸之性、大者爲首、而小者爲尾、末大于本則折、尾大于要則不掉」

【狸豹】　次第に平かになる貌、史記司馬相如傳に「陂池——」文選の李善の註に「——ハ漸ク平カナル貌」

見よ、

【筆築】（盛築）を見よ、

【筆ヲ買ヒ珠ヲ還ス】（櫝ヲ買ヒ）を見よ、

【筆耕】 書を寫して生活するをいふ、筆を以て農耕に、代ふる義、東觀漢記に「班超家貧シ、官ノ爲メニ傭ハレ書ヲ寫ス、筆ヲ投ジテ歎ジテ曰ク、丈夫獨リ傅介子ニ効ヒテ、功ヲ絶域ノ地ニ立テズ、安ゾ久シク筆耕セン乎」とあり、また事文類聚にも「王物文ヲ能クス、請フ者甚ダ多ク、金帛盈積ス、人謂フ、心織リテ衣、筆耕シテ食フト」文選任昉述異記に「既ニ——而爲養」

【筆格】「フデカケ」楊文公談苑に「宋錢思公有一珊瑚——子弟竊之、公以十千購之」筆架、筆牀皆同じ、

【筆諫】 唐書柳公權傳に「穆宗柳公權ニ書法ヲ問フ、公權曰ク、心正則筆正ト、上容ヲ改メ、ソノ筆ヲ以テ諫ムルヲ知ルナリ」筆法に託して諫めたる義、

【畢竟】 結局の義「ツマルトコロ」宋文鑑に載する、范質の戒從子泉詩に「勢位難久居、——何足恃」註に「——ハ終ナリ」、

【畢沅】 字は、纕蘅、秋帆と號す、江南鎭洋の人、乾隆二十五年第一人に及第す、官兵部尚書湖廣總督に至る、才を愛するが如く、一時の名士多くその門に遊ぶ、嘉慶二年卒す、年六十八、續資治通鑑二百二十卷、史籍考、經訓堂法帖を輯め、墨子に註す、自ら靈巖山人と號す、靈巖山人集あり、

【筆硯ヲ燒カント欲ス】（欲燒筆硯）文を作ることを廢せんと欲する意、事文類聚卷五に「陸雲與兄機書曰、君苗見兄文輒欲燒其筆硯、君苗は雲の小字、兄は陸機を斥す、

【筆削】 筆すべき事は筆し、削るべき事は削る義、削とは削刀にて文字を削り去るなり、史記孔子世家に孔子が春秋を作られし事を述べて「孔子在位聽訟、文辭有可與人共者、弗獨有也、至爲春秋筆則筆、削則削、子夏之徒、不能贊一辭」

【必死】 死力を盡すをいふ、漢書朱博傳に「且喜且惧、對曰——」

【匹似】 匹は餘冬序錄に「匹讀ミテ譬ノ如クス」とあり「譬ヘハ何何ノ如シ」といふ意、詩に多く用ふ、黃庭堅の詩に「田多穀少無人會——無田過一生」匹如に作る同じ、元稹の酬樂天醉別に「前回一去五年別、此別又知何日回、好住樂天休悵望、匹如元不到京來」

【拂士】 拂は弼に通ず、輔弼の賢士をいふ、孟子告子篇下に「入則無法家——出則無敵國外患者國恒亡」

【羊ヲ亡ヒ牢ヲ補フ】（亡羊補牢）牢は羊を閉ぢ養ふ所ろの圏なり、過ちて而して後に悔い改むるの意、戰國策に「見兎而顧犬、未爲晩也、亡羊而補牢、未爲遲也」

【羊ヲシテ狼ニ將タラ使ム】（使羊將狼）柔弱の人をして、強悍の卒を率ゐしむるに喩ふ、漢書の張良傳に「太子ノ與ニ俱ニスル所ロノ諸將ハ、皆上ト天下ヲ定メタル梟將ナリ、今廻テ太子ヲシテ之ニ將タラシム、此レ羊ヲシテ狼ニ將タラシムル ニ異ルナシ、皆肯テ用ヲ爲サズ、其ノ功ナキヤ必セリ」

【羊ヲ烹ル】（烹羊）を見よ、

【羊ノ歩】 人命の日日死に近づくに喩ふ、摩耶經の偈に「譬如旃陀羅驅羊就屠所、歩歩近死地、人命亦如是」とあるに本づく、旃陀羅とは梵語にて屠手の義、羊は至りて恐なる者なれば人の心に譬へしなり、

【匹如】（匹似）を見よ、

【茲葛】 「ヒチシュ」とも讀む、比丘に同じ、舊譯に比丘といひ、新譯に苾芻といふ、釋氏要覽に「苾芻ハ西天ノ草ノ名、五德ヲ具フ、故ニ將テ出家ノ人ニ喩フ（中略）一ニハ體性柔軟、二ニハ莖ヲ引キテ旁ク布ク、三ニハ磨香遠ク聞ユ、四ニハ能ク疼痛ヲ療ス、五ニハ日光ニ背カズ」（比丘）を參考せよ、

【畢卓酒ヲ盜ム】 成語考に「畢卓爲吏部郎而盜酒、逸興太豪」晉書に「畢卓吏部郎トナル、比舍ニ酒ヲ釀シテ熟セリ、卓夜往キテ盜ミ飲ム、因リテ甕邊ニ醉臥ス、旦ニ之ヲ視レバ乃チ畢卓吏部ナリ」

【筆塚】 尚書故實に「僧ノ智永ハ王逸少（羲之）ノ子孫ナリ、書ヲ學ブコト年ヲ積メリ、禿筆（ささのされたる筆）ヲ千甕ニ入ル、一甕皆數石ヲ容ル ベシ、後チニ之ヲ地ニウヅメ號シテ退——トイフ」

【筆頭花ヲ生ズト夢ミル】（夢筆頭生花）天寶遺事に「李白少時夢筆頭生花、自是才思贍逸」また南史に「江淹少時夢人授五色筆、由是文藻日新、後宿於冶亭、夢一丈夫自稱郭璞、謂淹曰、吾有筆在卿處多年、可以見還、乃探懷中得五色筆以授之、自後爲詩絶無美句、時人謂之才盡」

【畢ニ離ル雲】（離畢雲）七命に「將ニ雨フラントスルノ雲ヲ——トイフ」畢は二十八宿の一「アメフリボシ」

【匹馬隻輪】 一匹の馬、一片の車輪をいふ、公羊傳僖二十三年に「——無還」とあり、大敗の狀をいへるなり、春秋の世は車戰を用ふ、故に隻輪といふ、

【蜚發】 風寒きなり、詩經豳風七月篇に「一之日——」

【匹夫匹婦】一夫一婦といふが如し、庶人の夫婦をいふ、左傳桓公十年の正義に「庶人夫妻相匹、其名既定、雖單亦曰匹、故通謂匹夫匹婦」蘇軾の荷卿論に「――――之所共知」

【賡沸】泉の湧き出づる貌、詩經小雅采菽に「――檻泉、言采其芹」

【匹夫罪ナシ、璧ヲ懐キテ其レ罪アリ】（匹夫無罪、懐璧其罪）もと罪なき者も、玉を懐くがために、禍を招くをいふ、左傳桓十年に「初虞叔有玉、虞公求旃、弗獻既而悔之曰、周諺有之、匹夫無罪、懐玉其罪、吾焉用此、其以賈害也、乃獻之」

【匹夫之勇】匹は偶なり、配なり、合なり、匹夫匹婦は、庶人は夫妻相匹す、其の名既に定まる、單（ヒトリ）と雖も亦通ずと、賤しき人の血氣にはやる小勇をいふ、孟子梁惠王下に「王請フ小勇ヲ好ムナカレ、夫レ劒ヲ撫シ疾視シテ曰ク、彼レ惡ンゾ敢テ我ニ當ランヤト、此レ匹夫ノ勇、一人ニ敵スル者ナリ、王請フ之ヲ大ニセヨ」史記淮陰侯傳に「韓信曰項王喑噁叱咤、千人皆廢、然不能任賢相、此特――耳」

【匹夫モ志ヲ奪フベカラズ】（匹夫不可奪志）論語子罕に「子曰三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也」註に「三軍ノ勇ハ、人ニ在リ、匹夫ノ志ハ、己ニアリ、故ニ帥ハ奪フ可キモ、志ハ奪フベカラズ、若シ奪フベクンバ、亦之ヲ志トイフニ足ラズ」（匹夫）を參看せよ、

【篳門圭竇】禮記の儒行篇に「――――蓬戸甕牖」とあり、篳門は、荊竹を以て門を編るなり、圭竇は、牆を穿ちて之を爲る、門旁の小戸なり、上銳に下方にして、其の狀圭の如しと、貧賤なる者の住む所ろの門牆なり、また左傳襄十年に「篳門閨竇之人而陵其上、其難爲上矣」とあり、閨竇は、圭竇と同じ、

【蠡簡】「ヒチリキ」說文に「――ハ筦管ナリ、蘆葉ヲ卷キ頭トナシ、竹ヲ截リ管トナス、胡地ニ出ヅ」また玉芝堂談薈に「悲慄ハ篳篥、本ト悲栗ト名ヅク、胡中ニ出ヅ、其ノ聲悲ム、胡人吹キ以テ馬ヲ驚カス、一名ハ觱篥、蘆ヲ以テ首ト爲シ、竹ヲ管ト爲ス」頭管ともいふ、九竅ありて皆角音、故に宇角に从ふ、俗に篳に作る、

【第力扛鼎】（篳力扛鼎）文章の力の強健なるを稱す、韓愈の詩に「龍文百斛鼎、篳力可獨扛、扛は擧なり、

【篳路藍縷】篳路は柴車なり、一說に荊竹にて編みたる車なりと、藍縷は敝衣なり、襤褸に同じ、揚子方言に「南楚凡人貧衣被醜弊謂之襤褸」――――は事に勤倦り得たることを盡して譯譯としてをしへて倦み怠ることなきなり、夫子實にこの三者を能くせざるにあらず蓋し自ら謙して人の此に從事せんことをすすめたまひしなり、

【人ヲ鏡トス】俚諺なり（人ヲ以テ鏡）を見よ、

【人ヲ兼ヌ】（兼人）人に勝つをいふ、一解に、一人にして二人分を併すをいふ、論語に「求也退、故進之、由也――故退之」また漢書韓信傳に「受辱於跨下、無――之勇」また荀子に「凡――者、有三術、有以德――者、有以力――者、有以當――者」

【人ヲ殺スル罪マデニセズ】（罪人不孥）孥は妻子なり、人を刑すると其の身に止めて、妻子にまで及ぼさざるなり、孟子に「關市譏而不征、澤梁無禁、――不誅無罪」また史記孝文紀に「――――不誅無罪」

【人各能アリ不能アリ】（人各有能有不能）人事は、萬事に兼通すること能はず、彼に長ずれば、此に短なるをいふ、左傳に「――――――」とあり、

【人衆キトキハ天ニ勝ツ、天定マリテ亦能ク人ニ勝ツ】史記の伍子胥傳に「申包胥人ヲシテ子胥ニ謂ハシメテ曰ク、子ガ讎ヲ報ユルコト甚シキカナ、吾レ之ヲ聞ケリ人衆者勝レ天、天定亦能勝レ人」とあり、註に

なのをいふ、左傳宣十二年に「訓之以若敖蚡冒――以啓山林、篳路藍縷、以處草莽」

【飛鳥盡キテ良弓藏メラル】（狡兎死シテ）を見よ、

【批點】詩文てどを評して、點を附くるをいふ、四庫全書總目經部禮類存目に「――楊弓二卷、舊本題宋謝枋得撰」

【悲田】貧民に施しするをいふ、通俗編に「釋典以供父母田、爲恩田、供佛爲敬田、施貧窮爲――、後世謂養濟院曰――院取此」

【飛奴】鴿（ハト）の異名、事文類聚に天寶遺事を引きて「張九齡少時、群鴿ヲ養フ、親知ニ書ヲ與フル每ニ、鴿ノ足ニ繫ゲバ、敎フル所ロノ處ニ依リテ、往キテ之ヲ投ズ、目シテ飛奴トナス」（鴿）を參看せよ、

【人ヲ繪ク者ハ、其情ヲ繪ク能ハズ】（繪人者不能繪其情）鶴林玉露に「繪雪者不能繪其清、繪月者不能繪其明、繪花者不能繪其馨、繪泉者不能繪其聲、繪人者不能繪其情、然則言語文字、固不足以盡道也」

【人ヲ誨ヘテ倦マズ】（誨人不倦）論語の述而篇に「子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉、人を敎へてその能く知り能く行はんことを欲し、己の知

「人衆キ者ハ、一時ノ凶暴、天ニ勝ツト雖モ、天其ノ凶ヲ降スニ及ンデ、亦強暴ノ人ヲ破ル」

【人ヲ用フル瓜ヲ市フニ似タリ】（用人似市瓜）その人の實力を問はず、只その言貌を以て之を任用するに喩ふ、北史楊愔傳に「選ヲ典ル事二十年、人物ヲ奬擢シ、以テ己ノ任ト爲ス、然レドモ士ヲ取ルニ多ク言貌ヲ以テス、時ニ謗言ヲ致ス、以爲ラク愔ノ人ヲ用フルハ、貧士ノ瓜ヲ市フニ似タリ、其ノ大ナルヲ取ルト、愔聞キテ以テ意トナサズ」

【人ヲ以テ鋭ト爲ス】（以人爲鋭）人の行を見て、わが戒とする幾、書經に「人無於水鑑當於民鑑」とあり、墨子に「君子ハ水ニ鋭セズシテ、人ニ鋭ス、水ニ鋭スレバ、則チ容ノ面ヲ見ル、人ニ鋭スレバ、則チ其ノ吉凶ヲ知ル」とあり、唐書に「魏徴薨ズ、太宗朝ニ臨ミテ歎ジテ曰ク、銅ヲ以テ鑑トナセバ、衣冠ヲ正スベク、古ヲ以テ鑑トナセバ、興替ヲ知ルベク、人ヲ以テ鑑ト爲セバ、得失ヲ明カニスベシ、朕常ニ此ノ三鑑ヲ保チテ、内己ガ過ヲ防グ、今魏徴逝ク、一鑑亡ビヌト」

【人ヲ以テ言ヲ廢セズ】（不以人廢言）論語の衛靈公篇に「子曰君子不以言擧人、不以人廢言」とあり、上の句は德行を重んじ、下の句は名言を重んずるなり、

【人ヲ以テ鳥ニ如カザル可ケンヤ】（可以人而不如鳥乎）萬物の靈たる人と生れて微微たる鳥にだにも如かずして可ならんや、可ならずとの義、大學に「詩云綿蠻黄鳥、止于丘隅、子曰、於止知其所止、可以人而不如鳥乎」綿蠻は黄鳥の聲、

【否德】薄き德なり、一解に不德なり、書經堯典に「一一忝帝位」

【人古今ニ通ゼザレバ馬牛ニシテ襟裾ス】人として古今の道理に通ぜざるは、馬牛が襟裾ある衣服を著けたる如しと譏れるなり（燈火稍親ムベシ）を見よ、

【齊シカランコトヲ思フ】（思齊）を見よ、

【日トシテ之ヲ忘ルルナシ】（無日忘之）一日も忘れざるをいふ、左傳に「余一人ニ一一一」余一人は、天子の自稱、

【人冉冉トシテ行キ暮レヌ】（人冉冉而行暮）十訓抄第十に引用せり、文選四の陸士衡の歎逝賦に「川閲水以成川、水滔滔而日度、世閲人而爲世、一一一一一一」註に「閲ハ總ナリ、滔滔ハ水ノ流ルル貌、衆水ヲ總ベテ其ノ川ヲ成シ、終日流去シテ水相續グヲ言フナリ、冉冉ハ人老ユル貌、衆人ヲ總ベテ世ヲ成ス、終日老謝シテ後人相繼グヲ言フナリ」

【人其ノ子ノ惡ヲ知ルナシ】（人莫知其子之惡）愛に溺るる者は、其の視る所ろ明かならざるをいふ、大學に「一一一一一一一一一莫知其苗之碩」碩は大なり、

【一タビ鳴カバ人ヲ驚カス】（一鳴驚人）「たび手を出せば人を驚怖せしむるをいふ、史記の滑稽傳に「齊ノ威王好ンデ淫樂長夜ノ飲ヲ爲ス、百官荒亂シテ、諸侯並ビ侵ス、國且ニ危亡セントスルモ、左右敢テ諫ムルナシ、淳于髡之ヲ說クニ、隱いんご）ヲ以テシテ曰ク、國中大鳥アリテ、王ノ庭ニ止マル三年、飛バズ又鳴カズ、王此ノ鳥ノ何ト云フコトヲ知ルカト、王曰ク、此ノ鳥飛バズンバ則チ已マン、一タビ飛ババ天ニ冲ラン、鳴カズンバ則チ已マン、一タビ鳴カバ人ヲ驚カサント、是ニ於テ乃チ諸縣ノ令長七十二人ヲ朝セシメ、一人ヲ賞シ、一人ヲ誅シ、兵ヲ奮ヒテ出ヅ、諸侯振驚シテ、皆齊ノ侵地ヲ還ヘス、威行ハルルコト三十六年」

【人常ニ菜根ヲ咬ミ得バ則チ百事做スベシ】（人常咬得菜根則百事可做）宋の汪信民の語、呂氏師友雜誌に出づ、胡康侯この語を聞く節を擊ちて嘆賞せしといふ、人人寒素に耐へて奮勵せば、天下何事か成らざらむ、この語洵に味あり（咬菜）を見よ、

【人トシテ禮無クンバ胡ゾ遄ク死セザル】（人而無禮胡不遄死）この口を極めて、無禮の人を刺りたる語なり、詩經鄘風相鼠篇に「相鼠有體、人而無禮、胡不遄死」とあり、註に「相ハ視ルナリ、禮ハ支體ナリ、遄ハ速ナリ、鼠ハ蟲ノ賤惡スベキ者、言フココロハ彼ノ鼠ヲ視ルニ、而モ猶ホ必ズ體有リ、人トシテ禮無カル可ケンヤ、人トシテ禮ナクンバ則チ其レ何ゾ速ニ死セザル」

【人ニ逢ヒテ項斯ヲ說ク】（逢人說項斯）成語考に「逢人說項斯、表揚善行」註に「楊敬ガ項斯ニ贈ル詩ニイフ、幾度見君詩盡好、及觀標格過于詩、平生不解藏、人善到處逢人說項斯」尙書故實には「楊敬之愛才公正、知江表士有項斯贈詩云（中略）斯因此名達長安、遂登科第」

【人ニ狂藥ヲ飲マセテ、人ニ正禮ヲ責ム】（飲人狂藥責人正禮）世說に「石季倫、嘗テ長水校尉孫季舒ト酣宴ス、孫慢傲禮ニ過グ、季倫表シテ之ヲ免セント欲ス、裴叔則聞イテ之ニ謂ヒテ曰ク、季舒ノ酒狂ハ、四海ノ知ル所ロナリ、足下人ニ狂藥ヲ飲セテ、人ニ正禮ヲ責ム、亦乖カズヤト」

【人ニ三怨アリ】（人有三怨）十訓抄第二に見ゆ、列子の說符に「狐丘謂孫叔敖曰、人有三怨、子知之乎、曰何

謂乎、對曰爲高者人妬之、官大者主惡之、祿厚者怨逮之」說苑の敬愼篇に「孫叔敖、楚ノ令尹タリ一老父アリ、來リ弔シテ曰ク、身已ニ貴クシテ人ニ驕ル者ハ、民之ヲ去ル、位已ニ高クシテ權ヲ擅ニスル者ハ、君之ヲ惡ム、祿已ニ厚クシテ足ルコトヲ知ラザル者ハ、患之ニ處ル、孫叔敖再拜シテ曰ク敬ンデ命ヲ受ク、願クハ餘教ヲ聞カント、父曰ク、位スデニ高クシテ意益ゝ下リ、官益ゝ大ニシテ心益ゝ小ニ、祿スデニ厚クシテ愼ンデ敢テ取ラズ、君謹ンデコノ三者ヲ守ラバ、以テ楚ヲ治ムルニ足ラント」

【人ニシテ不仁ナル、之ヲ疾ム已甚シケレバ亂ス】（人而不仁疾之已甚亂也）孔子の語、論語に出づ、鄭玄の註に云ふ「不仁之人當以風化之、若疾之甚、是益使爲亂也」

【人ニ施シテハ愼ンデ念フ勿レ】（施人愼勿念）崔子玉の座右銘中の句、下に「受ケ施慎勿忘レ」とあり、註に「李善曰ク、戰國策ニ唐雎信陵君ニ謂ヒテ曰ク、人之有德於我ニ不可忘也、吾之有德於人ニ不可不忘也」とあり

【人ノ知ヲ】（適人）女子の嫁するをいふ、適は「ユク」なり、儀禮喪服の注に「凡女行於大夫以上曰嫁、行於庶人曰適人」

【人ノ過ヤ各其ノ黨ニ於テス】（人之過也各於其黨）過とは無心にして道理に「ソムク」をいふ、仁者は常に厚に失し、不仁者は常に薄に失する如く、その黨類によりて異るをいふ、論語里仁篇に見ゆ（過ヲ觀テ）を見よ、

【人ノ己ヲ知ラザルヲ患ヘズ】（不患人之不己知）人の我が才德を知りて呉れざるを患へざるをいふ、論語學而篇に見ゆ、孔子の語、下に「患不知人也」とあり、人の善惡邪正を知らされば、交りて損あり益なきことありて、我が德を進むるの助とならざる故なり、憲問篇にもこの語出づ、下に「患其不能也」とあり、

【人ノ食物ヲ嫌フコトアレバ、其ノ身必ズ瘦ス】　十訓抄第一に見ゆ、孝經、諫諍章の孔安國註に「凡ソ諫ハ上ヲ安ンズル所以、猶ホ食ノ體ヲ肥スガ如シ、主ニシテ諫ニ從ハザレバ則チ國亡ビ、人ニシテ食ヲ吐ヘバ、則チ體瘠ス」吐は音シ食を嫌ふなり、

【人ノ心ノ濁レルヲウラミテ、ツヒニ滄浪ノ水ニ沈ム】　十訓抄第二に見ゆ、史記屈賈列傳に「屈原者名平、楚之同姓也、爲楚懷王左徒、博聞强志、明於治亂、嫺於辭令、入則與王圖議國事、以出號令、出則接遇賓客、應對諸侯、王甚任之、上官大夫與之同列爭寵、而心害其能、（中略）頃襄王時、遂讒遷於江南、屈原至於江濱、被髮行吟澤畔、顏色憔悴、形容枯槁、漁父見而問之曰、子非三閭大夫歟、何故而至此、屈原曰舉世混濁而我獨清、衆人皆醉、而我獨醒、是以見放、（中略）乃作懷沙之賦、（中略）懷石遂自投汨羅以死、孟子離婁に「孺子歌曰、滄浪之水清兮可以濯我纓、云云」屈原の漁父辭にも亦この俚諺を引けり、故に滄浪の水に沈むと書きたるならん（滄浪ノ水）を參看せよ、

【人ノ神智ヲ益スハ書籍ニ若クハナシ】（益人神智莫如讀書）魏王博士李先に問ひて曰く「天下何物可以益人神智」對曰、莫若書籍、大和俗訓に「古人も人の智惠をますは書に若くはなしといへり」とあるは蓋しこの語を引きたるなり、

【人之淵繩】　人の「テホン」子華子に「仲尼人之準繩也」

【人之水鏡】　世說に「衛伯玉尚書令トナルトキ、樂廣ガ中朝ノ名士ト談議スルヲ見テ、之ヲ奇トシテ曰ク、昔ノ諸人沒シテヨリ已來、皆ニ微言將ニ絕エントスルヲ恐レシニ、今乃チ復タ斯言ヲ君ニ聞ケリト、子弟ニ命ジテ之ニ造ラシム、曰ク此人、人之水鏡也、見之若披雲霧覩青天ト」

【人ノ短ヲ道フナカレ、己ノ長ヲ說クナカレ】（無道人之短無說己之長）文選の崔子玉の座右銘に「人ノ短ヲ道フナカレ、己ノ長ヲ說クナカレ、人ニ施シテハ愼ンデ念フナカレ、施ヲ受ケテハ愼ンデ忘ルルナカレ」

【人ノ爲メニ謀リテ忠ナラザルカ】（爲人謀而不忠乎）論語學而篇に「曾子曰、吾日ニ三ニ省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎」曾子名は參、字は子輿、孔子の門人なり、忠は眞心を盡すをいふ、

【人ノ知惠ヲ益スハ書ニ若クハナシ】（人ノ神智）を見よ

【人ノ二雞子ヲ食フ】（食人二雞子）資治通鑑「子思諫衞侯」條に見ゆ、雞子は雞卵なり、頃炎武日知錄に「賦斂於民而食者、取之於民也、人二雞子者、每人令出二雞子一也」とあり、

【人ノ將ニ死セントスル、ソノ言フヤ善シ】（鳥ノ將ニ）を見よ、

【人ノ雛下ニ寄ル】（寄人雛下）人の「マネ」をするをいふ、事文類聚に「齊ノ張融ノ自序ニ云フ（中略）大丈夫當ニ詩書ヲ删リ、禮樂ヲ制スベシ、何ソ因循シテ人ノ雛下ニ寄ルニ至ラン」

【人ハ刀俎タリ我ハ魚肉タリ】（人爲刀俎我爲魚肉）

人、勞を得て、我が死命を制するに喩ふ、史記項羽本紀

【人ヒトニ】 人、萬物、萬物之靈註に「天地ハ萬物ノ父母ナリ、萬物ノ生、惟人ノ知覺獨リ物ニ異ナリ、而シテ聖人ハ、又其ノ最モ秀ヲ得テ靈ナルモノナリ」

【人ヒトハ得テ、成モ靈ナルモノナリ】

【人ハ、木石ニアラズ】 (人非木石)人は木石の惰なるが如きにあらざるをいふ、司馬遷の報任安書に「身非木石、獨與法吏、從事深文、拘攣、不ル得ル伸ビ、於ヒ刀鋸之間ニ、又、伍ヒ、偸生苟合之徒ニ、安ンゼ、能ク引ヒ、節ヲ、以テ、自ラ、別ニ、於ヒ、幽冥之中ニ」、また白樂天の詩に「人非木石皆有情、不如不遇傾城色」

【人ハ、岩ヲ炎熱ヲ苦ム】 晉郤詵柳公權傳に「文宗夏日與學士聯句、帝曰、人皆苦炎熱、我愛夏日長、公權續曰、蕭閣生微涼」

【人ハ自ラ來ル】

【人ハ己ヲ能クスレバ己ノ百タビス】 (人一能己之百、己之中庸の道)公の條に出づ、下に「人十能己之千、果能此道矣、雖愚必明、雖柔必強」

【爬ト遜トあり】 爬は傻なり、裕なり、遜は遁なり、心ニタカニ窮ク遁レ隱ルるをいふ、易の遯卦に「上九ー、肥遯、无不利」、また石崇思歸引序に「ー於河陽別業」

【人ヒトに「如物ノ萬物ノ靈方ニ爲リ、刀俎我爲魚肉」】 昔經の泰誓に「惟天地、萬物父母、惟人、萬物之靈」註に「天地ハ萬物ノ父母ナリ、萬物ノ生、惟人ノ知覺獨リ物ニ異ナリ、而シテ聖人ハ、又其ノ最モ秀ヲ得テ靈ナリ、四端ヲ具ヘ、萬善ヲ備ヘテ

【人山ニ躓ク】 (人糞躓於山而躓)

【人ヒト於埒ニ(山ニ躓クヲ)】 (山ニ躓クヲ)を見よ、

【獨リ異鄉ニ在リテ異客トナル】 (遙ニ知ルヲ)と見よ、

【獨ヒトリ愼ム】 (愼獨)人の見聞せざる所にても恐れ愼むをいふ、大學に「君子必愼其獨也」

【日ヒニ成ラズシテ之ヲ成ス】 (不日成之)多く日數を經ずして成就せし義(不日ヲ)と見よ、

【皮ヒ肉ノ之ヲ見ル】 悟るところの透澈なるをいふ、傳燈錄に「達磨欲西返、天竺乃命門人曰、時將至矣、汝等盍各言所得乎、時門人道副對曰、如我所見、不執文字、而爲道用、師曰、汝得我皮、尼總持曰、我今所見、如慶喜見阿閦佛國、一見更不再見、師曰、汝得我肉、道育曰、四大本空、五陰非有、而我見處無一法可得、師曰、汝得我骨、最後慧可禮拜後、依位而立、師曰、汝得吾髓」

【髀ヒ肉ノ之ノ歎】 無罪に苦み、功名を立つることの能はざるをなげくなり、三國志蜀志に「劉備嘗テ劉表ガ座ニ於テ、起チテ厠ニ至リ、還リテ慨然トシテ泣ヲ流ス、表怪ミテ之ヲ問ヘバ、備答ヘテ曰ク、常時身、鞍ヲ離レズ、髀肉皆消セリ、今久シク騎セズ、髀裏肉生ズ、日月流ルルガ如ク、老將ニ到ラントシテ、功業建タズ、是ヲ以テ悲

【日ニ之ヲ計レバ足ラズ、月ニ之ヲ計レバ餘リアリ】 (日計之不足月計之有餘)莊子庚桑楚篇の語(日ヒニ計ルヿ足ラズ)を見よ、

【美ヒニ而ラズ醜ヒニ而ラズ】 美は形貌の美なるをいふ、醜とは顏色の好

【目ヒ逆ヒ而送之ヲ】 (逆目而送之)左傳の桓元年に「宋華父督見孔父之妻于路、目逆而送之、曰、美而豔」

【目ヒニ就キ雲ヲ望ム】 (就日望雲)日の照すや、人皆之に就き、雲の覆ふや、人皆之を望むが如く、天下の德を仰ぎ望むをいふ、史記五帝紀に「就之如日、望之如雲」また柳宗元の文に「徒望雲而就日」

【日ニ就リ月ニ將ス(ム)】 (日就月將)學問の日月に進歩する義、詩經周頌敬之篇に「維予小子、不聰敬止、日就月將、學有緝熙于光明」の註に「我レ聰ナラズシテ、未ダ敬スルコト能ハズ、然レドモ願クハ學バン、庶幾クハ日ニ就ル所ロアリ、月ニ進ム所ロアリテ、以テ光明ニ至ラントナリ、將ハ進ナリ」成

【日ヒニ吹ユ】 (吹日)俗非成語考に「蜀犬日ニ吠ユルハ人ノ見ロ所ヒ怪ダ稀ナルニ比ス」蜀犬吠日ニ(ヘ)を見よ、

【扁柑ノ見ロ所ヒ怪ダ稀ナルニ比ス】 (ヘバイノ)を見よ、

【日ニ之ヲ計レバ足ラズ、月ニ之ヲ計レバ餘リアリ】 (日計之不足月計之有餘)莊子庚桑楚篇の語(日ヒニ計ルヿ足ラズ)を見よ、

【美ヒニ而ラズ醜ヒニ而ラズ】 美は形貌の美なるをいふ、醜とは顏色の好

【目ヒ逆ヒ而送之ヲ】 (逆目而送之)左傳の桓元年に「宋華父督見孔父之妻于路、目逆而送之、曰、美而豔」

【目ヒニ就キ雲ヲ望ム】 (就日望雲)日の照すや、人皆之に就き、雲の覆ふや、人皆之を望むが如く、天下の德を仰ぎ望むをいふ、史記五帝紀に「就之如日、望之如雲」また柳宗元の文に「徒望雲而就日」

【日ニ就リ月ニ將ス(ム)】 (日就月將)學問の日月に進歩する義、詩經周頌敬之篇に「維予小子、不聰敬止、日就月將、學有緝熙于光明」の註に「我レ聰ナラズシテ、未ダ敬スルコト能ハズ、然レドモ願クハ學バン、庶幾クハ日ニ就ル所ロアリ、月ニ進ム所ロアリテ、以テ光明ニ至ラントナリ、將ハ進ナリ」成

【日ヒニ吹ユ】 (吹日)俗非成語考に「蜀犬日ニ吠ユルハ人ノ見ロ所ヒ怪ダ稀ナルニ比ス」蜀犬吠日ニ(ヘ)を見よ、

【扁柑ノ見ロ所ヒ怪ダ稀ナルニ比ス】 (ヘバイノ)を見よ、

【火ノ原ニ燃ユルガ若シ】 (若火之燃于原)書經の盤庚上に「ー不可ク鄉ヒ邇ヒ、其ノ猶ホ火之燃于原ニ」とあり、罪惡の

【皮ノ存ゼザル毛將ニ安クニ傅カン】 (皮之不存毛將安傅)毛は皮に附きて生ずる者なるに、皮にして存在せざれば毛の附くべき地なし、以て大本すでに失すれば、枝葉は論ずるに足らざるに譬ふ、左傳僖十四年に「見ル如シ、鍼劒晉ノ惠公ノ見」の語なり、

【日ノ力ヲ窮ム】 (窮日之力)朝早くより、暮るるまで勞するをいふ、孟子に「去ルヿー、ー、ー、而ル後ニ歸ル」

【比ヒ年ニ】 一ニ比年ニ頻年に同じ、禮記王制に「諸侯之於天子也、ー一小聘、三年一大聘、五年一朝」註に「ー一ハ每歲ナリ、小聘ハ大夫ヲ使ス、大聘ハ卿ヲ使ス、朝ハ則チ君親ラ

【粗ソ粗ホ】 廣志に「粗粗ハ葉微シク栗ニ似タリ、冬花サキ、蔕ニ子簇生シ、毛アリ、四月ニ熟ス、大ナル者ハ雞子ノ如ク、小ナル者ハ龍眼ノ如シ云云」黛嵀に「今廣東ノ人、粗粗ヲ呼ビ盧橘トナシ、ソノ葉ヲ無愛扇ト名ヅク」格物論に「ー高サ丈餘、枝肥ニ葉大ニシテ毛アリ、盧橘ノ形ヲ作ス、冬白花ヲ開キ、三四月成實ス、一名ハ盧橘」宋景文の詩に「有果產西蜀、作花凌早寒、樹繁ンノ碧

玉葉、柯盤黄金丸」

【琵琶】 樂器ノ名、廣韻に「手ヲ推スヲ琵トナシ、手ヲ引クヲ琶トナス、ソノ鼓スル時ノサマニ取リテ名トナス」もと胡地より出づ、多く馬上にて之を鼓せしといふ、木製にして、體を甲といふ、梢扁にして二尺餘あり、棹の頭轉手のある處、背に折れたり、四絃四柱、抱きて撥にて彈ず、和名「ヨツノヲ」一に批把に作る、風俗通に「一一ハ近代樂家ノ作ル所ロヲ知ラズ、長サ三尺五寸、天地人ト五行トニ法リ、四絃ハ四時ニ象

【鄙倍】 鄙は凡鄙、倍は背に同じ、凡鄙にして理に背くをいふ、論語泰伯篇に「出二鄙氣一斯遠二一一一矣」一說に、倍は俗の誤りならんと、

【未萌】 禍故の未だ生ぜざる前をいふ、漢書張安世傳に「所以安二社稷一絕二一一也」

【彌望】 彌は遠なり、亙なり、眺望遠く亙るをいふ、文選潘岳の西征賦に「黄壤千里、沃野一一」

【未亡人】 寡婦の自稱なり、左傳の莊二十八年に見ゆ、註に「婦人既ニ寡ニシテ、自ラ未亡人ト稱ス」婦人は夫死すれば從つて死すべきに未だ死せずして世に存在せりとの意にて寡婦の謙して自ら稱する語となるなり、左傳成九年に「穆姜出二于房一再拜曰、大夫勤勞不レ忘レ先君一以及二嗣君一、施及一一一一ここれ魯の穆姜自ら稱して一一一一といへるなり、同十四年にも衛の定姜自ら一一一一と稱せし事見ゆ、されば他人の寡婦を稱して一一一一といふは無禮なり、

【誹謗之木】 帝堯の時、木を橋梁の上に建て、政治の過失を書せしめ以て反省せられたるをいふ、史記孝文紀に「古之治二天下一、朝有二進善之旌一、誹謗之木一」また淮南子に「堯置二敢諫之鼓一、舜立二誹謗之木一」(諫鼓)また(登聞鼓)を見よ、

【琵琶行】 唐の白居易字は樂天の作れる詩、茲に序あり左に錄す、

琵琶行幷序

元和十年、予左遷九江郡司馬一(九江郡は今の江西省の楊子江の南明年秋、送二客湓浦口一聞二船中夜彈一琵琶一者一、聽二其音一、錚錚然有二京都聲一、問二其人一、本長安娼女、嘗學二琵琶於穆曹二善才一、年長色衰、委二身爲一賈人婦一、遂命レ酒使二快彈一數曲一、曲罷憫然、自敍二少小時歡樂事一、今漂淪憔悴、轉二徙於江湖間一、予出官二年、恬然自安、感二斯人言一、是夕始覺有二遷謫意一、因爲二長句歌一以贈之一、凡六百一十六言、命曰二琵琶行一、

潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟瑟、主人下レ馬客在レ船、舉レ酒欲レ飲無二管絃一、醉不レ成レ歡慘將レ別別時茫茫江浸レ月、忽聞水上琵琶聲、主人忘レ歸客不レ發、尋レ聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲レ語レ遲、移レ船相近邀相見、添レ酒回レ燈重開レ宴、千呼萬喚始出來、猶抱二琵琶一半遮レ面、轉レ軸撥レ絃三兩聲、未レ成レ曲調先有レ情、絃絃掩抑聲聲思、似レ訴二平生不一得レ志、低眉信手續續彈、說盡心中無限事、輕攏慢撚抹復挑、初爲二霓裳一後六么、(撥、一本作レ抹、霓裳六么、共曲名、)大絃嘈嘈如二急雨一、小絃切切如二私語一、嘈嘈切切錯雜彈、大珠小珠落二玉盤一、間關鶯語花底レ滑、幽咽泉流水下レ灘、水泉冷澁絃凝絶、凝絶不レ通聲暫歇、別有二幽愁暗恨生一、此時無レ聲勝レ有レ聲、銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀槍鳴、曲終收レ撥當二心畫一、收、一本作レ抽、四絃一聲如二裂レ帛、東船西舫悄無レ言、唯見二江心秋月白一、沉吟放レ撥插二絃中一、放、一本作レ收、整二頓衣裳一起斂レ容、自言本是京城女、家在二蝦蟆陵下一、住、十三學レ得二琵琶一、成、名屬二敎坊第一部一、曲罷常敎善才服、常、一本作レ長、高齋詩話、元和中、曹保有二子善才一、善才有二子網一、皆執二琵琶一、妝成每被二秋娘妬一、五陵年少爭縁頭、一曲紅綃不レ知レ數、鈿頭雲篦擊節碎、血色羅裙翻レ酒汚、今年歡笑復明年、秋月春風等閑度、弟走從二軍阿姨死一、暮去朝來顏色故、(故、一本作レ改、)門前冷落鞍馬稀、老大嫁作二商人婦一、商人重レ利輕二別離一、前月浮梁買レ茶去、(饒州浮梁縣、乃產二茶之地一)去來江口守二空船一、遶二船月明江水寒一、夜深忽夢少年事、夢啼妝淚紅闌干、我聞二琵琶一已歎息、又聞二此語一重唧唧、同是天涯淪落人、相逢何必レ曾相識、我從二去年辭一帝京一、謫居臥二病潯陽城一、潯陽地僻無二音樂一、終歲不レ聞絲竹聲、住近二湓江一地低濕、黄蘆苦竹遶レ宅生、其閒旦暮聞二何物一、杜鵑啼血猿哀鳴、春江花朝秋月夜、往往取レ酒還獨傾、豈無二山歌與一村笛一、嘔啞嘲哳難レ爲レ聽、(嘔啞嘲哳、言二其聲一也、)今夜聞二君琵琶一語、如レ聽二仙樂一耳暫明、莫二辭更坐一彈、一曲爲二君翻一作二琵琶行一、感二我此言一良久立、卻坐促レ絃絃轉急、凄凄不レ似二向前聲一、滿座重聞皆掩レ泣、(重聞、一本作二聞之一、)就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕」

【琵琶魚】 (一一一)を見よ

【肥白】 體肥えて色白し、史記張丞相傳に「蒼坐二法當一レ斬、解レ衣伏レ質、身長大一一如レ瓠、時王陵見而怪二其美一、乃言二沛公一赦レ勿レ斬」

【飛白】 書の一體にして「カスリガキ」の文字なり、書斷

に「飛白ノ書ハ、後漢ノ蔡邕ノ作ル所ロナリ、王隠、王愔並ニイフ、飛白ハ楷制ヲ變ズルナリ、本是レ宮殿ノ題署、勢亦勁大字宜シク輕微ニシテ滿タザルベシ、名ツケテ飛白トナス、王僧虔云フ、——ハ八分ノ輕キ者ナリト、此ノ説アリト雖モ、按ズルニ漢ノ靈帝嘉平、蔡邕ニ詔シテ聖皇篇ヲ作ラシム、篇成リテ鴻都門ニ詣リテ上ル、時ニ方ニ鴻都門ヲ修飾ス、伯喈門下ニ待詔シテ役人ノ聖帝ヲ以テ字ヲ成スヲ見、心ニ悦ブアリ、歸リテ——ノ書ヲ爲ル、漢末魏初並ニ以テ宮闕ニ題署ス、其ノ體二アリ、法ヲ八分ニ捌メ、微ヲ小篆ニ窮ム、蔡公ノ妙ヲ設クルニ非ルヨリハ豈能ク此ニ詣ラン勝寄窓通標渺神仙ノ事ト謂フ可キナリ」

【靡薄】輕薄にして篤實ならざる義、漢書董仲舒傳に「——世俗之——」佻薄浮薄皆同じ、

【被髮左衽】夷狄の風俗をいふ、髪を結ばず、衣の衽を左方に於て合はすをいふ「ヒダリマヘ」論語憲問に「微管仲、吾其——髪——矣」

淮南子の窩誘注に「被ハ覆ナリ」とあり、一説とすべし、蓋し髪を斷ちて結束せずして頭を被覆する故にいふか、

【肥馬ノ塵ヲ望ム】太平記資朝俊基關東下向の條に見ゆ、富貴の者に追從する義、杜甫の詩に「朝扣ニ富兒門ニ暮隨ニ肥馬塵ニ」殘盃與冷炙、到處潛悲辛」とあるに本づく、

【疲馬ハ鞭箠ヲ畏レズ】（疲馬不畏鞭箠）人貧しく疲るるときは生を輕んじて、刑罰を畏れざるに至るに喩ふ、鹽鐵論に「——レ——、弊民不畏刑法」

【比比】頻頻といふに同じ、漢書成帝紀に「郡國——地動」

【披披】長くなびく貌、楚辭大司命に「靈衣兮——」楚辭思古に「髪——」

【披靡】震ひ伏す貌、草が風に吹き倒されてなびき伏せる樣をいふ、史記項羽本紀に「漢軍皆——」廉頗傳に「相如張目叱之、左右皆靡」

【狉狉】禽獸の群がり走る貌、柳宗元の封建論に「艸木榛榛、鹿豕——」

【菲菲】芳香の貌、楚辭に「芳——其彌章」また雜なり、後漢書梁鴻傳に「志——于升降」註に「高下定ラザルナリ」

【霏霏】雨雪などの「フリシキル」貌、詩經小雅采薇に「雨雪——、行道遲遲」註に「——ハ雪甚シキ貌」また雲の起る貌、漢書揚雄傳に「雲——而來迎」

【騑騑】馬の行きて止まらざる貌、詩經小雅四牡篇に四牡——、周道倭遲」周道は大道、倭遲は回遠の貌、

【靡靡】相隨從する貌、書經畢命に「商俗——、利口惟賢」また遲遲といふが如し、詩經王風に「行邁——」

【瀰瀰】水の盛なる貌、詩經邶風新臺篇に「新臺有泚、河水——」

【甡甡】倦まざる貌、易の繫辭上傳に「成天下之——」また強勉なり、詩經大雅文王篇に「——文王、令聞不已」釋常談に「事相續クルアルヲ——トイフ」

【紕繆】舛戾（タガヒモトル）なり、大雅の傳に「猶レ錯也」禮記に「五者一物——、民莫得其死」漢書于定國傳には錯繆に作る、

【譻ヲ聞キテ欣然タリ】（聞譻欣然）聞機活法に「陶弘景、特ニ松風ヲ愛シ、庭院皆松ヲ植ツ、每ニ其ノ響ヲ聞キテ欣然トシテ自ラ樂ミ、獨リ其ノ下ニ遊ブ、人以テ仙ト爲ス」

【邈行雲ヲ遏ム】（邈遏行雲）歌聲の美妙なるを稱する語なり、列子に「薛譚謳フコトヲ秦青ニ學ブ、未ダ青ノ技ヲ窮メズ、自ラ謂ヘラク之ヲ盡セリト、遂ニ辭シテ歸ル、秦青止メズ、郊衢ニ餞シ節ヲ撫デ悲歌ス、聲林木ニ振ヒ、邈行雲ヲ遏ム、薛譚乃チ謝シテ反ルヲ求メ、終身敢テ歸ヲイハズ」とあり、類書纂要にも「秦青善歌、響遏行雲」とあり、

【日晷ニ在リ】（日在晷）禮記月令に「孟夏之月——レ——」また「仲夏之月、日在東井」また「季夏之月、日在レ柳」晷、東井柳は皆星宿の名、

【妃嬪】初學記に、周禮ニ天子ノ后、六宮ヲ立ツ、三夫人・九嬪二十七世婦・八十一御妻アリ、以テ婦順ヲ明章ニス、故ニ天下内和ギテ家理マルト（以上禮記昏義の文も同じ）漢ハ秦ノ制ニ因リ、正嫡ヲ皇后ト曰ヒ、ソノ餘ハ內職ニ夫人・美人・良人・八子・七子・長使・少使ノ號アリ、武帝ハ婕妤・經娥・容華・充衣ヲ加フ、元帝ハ昭儀ヲ加フ（中略）光武中興シ竝ニ前制ヲ省キ、正嫡ノ外惟貴人・美人・綵女ノ號ヲ立ツ、魏ノ武帝ハ西漢ニ因リ、夫人・昭儀・婕妤・容華・美人ヲ置ク、文帝ハ貴嬪・淑媛・脩容・脩儀・婕妤・容華・充華是ヲ九嬪ト爲シ、貴嬪・夫人・貴人ヲ置キ、是ヲ三夫人ト爲シ、淑妃・淑媛・淑儀・脩容・脩華・脩儀・婕妤・容華・充華是ヲ九嬪ト爲シ、又美人・才人・中才人ヲ置キ以テ散職ト爲ス、宋齊ノ後、大抵多クハ晉制ニ依ル、其ノ閒增損因革或ハ小異アリ」

【皮傅】表面のみを見て說をなすをいふ、後漢書張衡傳に「方言非其事曰——、言皮膚淺近強相傅會也」

【鄙夫】 庸悪にして陋劣なる男をいふ、論語陽貨篇に「子曰、——可ニ与事ニ君也与哉、其未レ得レ之也、患得レ之、既レ得レ之患レ失、苟レ患レ失、無レ所ニ不レ至矣」

【媚嫵】 「ナマメキコブル」義、元好問の句に「意態工——

【皮腐漆ノ若シ】 （皮腐若漆）南史焦度傳に「度、容貌壯——ニ——ヒ——ル——ノ——ル——ル——」

【蚍蜉蟻子之拔】 極めて少しの拔助に譬ふ、韓愈の張中丞傳後敍に「當ニ其ノ其ノ圍守ノ時ニ、外無ニ——ニ——ニ——ニ——ニ蚍蜉ハ大なる蟻をいふ、

【微服】 服裝を變じて人目に觸れざるやうにするなり、孟子萬章上に「孔子不レ悅ニ於魯衛ニ、遭ニ宋桓司馬將ニ要而殺レ之ニ——而過ニ宋」

【蚍蜉大樹ヲ動カス】 （蚍蜉動ニ大樹ニ）韓愈の詩に「蚍蜉撼ニ大樹ニ可ニ笑自不レ量」動を撼に作る、自ら力を量らざるに譬ふ、爾雅の注に「郭璞曰ク、俗呼ニ爲ニ馬蚍蜉ニ疏ニ蚍通名也、其大者別名ニ蚍蜉ニとあり（李杜文章在）を見よ、

【蹕沸蟻動】 蟻は蟻に同じ、紛亂するをいふ、淮南子に「天下爲之——」

【碑文】 文の一體なり、文體明辨に「按ズルニ劉勰イフ、碑ハ埤ナリ、上古ノ帝皇、始メテ封禪ト號シテ、石ヲ埤岳ニ樹ツ、故ニ碑トイフ、周穆、跡ヲ弇山ノ石ニ紀シ、秦始、銘ヲ嶧山ノ巓ニ刻ス、此レ碑ノ從テ始マル所ロナリ、後漢以來作者漸ク盛ナリ、故ニ山川城池宮室橋道墳井神廟家廟古跡土風災祥功德墓道寺觀託物ノ碑アリ（中略）又碑ノ體ハ、事ヲ敍スルヲ主トス、其ノ後漸ク議論ヲ以テ之ニ雜ユルハ、則チ非ナリ、其ノ事ヲ敍スルヲ主トスル者ヲ、正體トイヒ、議論ヲ主トスル者ヲ變體トイフ、事ヲ敍シテ之ニ參フルニ議論ヲ以テスル者ヲ、變ジテ其ノ正ヲ失ハズトイフ、云云」唐彪の讀書作文譜に「碑文事實多キ者ハ止須ク事ヲ敍スル可シ、若シ故意ニ議論ヲ攙入セバ便チ贅瘤ヲ成ス、事實寡キ者ハ之ニ參スルニ議論ヲ以テセザレバ必ズ寂寞ニシテ文字ヲ成サズ云云」碑を參看せよ、

【皮幣】 貨幣に同じ、史記平準書に「以ニ白鹿皮方尺一緣ニ以藻繢爲ニ——ニ直四十萬」

【靡敝】 禮記の少儀篇に「國家——」疏に「靡ハ麼トナス、財物麼散凋敝スルヲイフ」敝は弊と通ず、

【皮弁】 鹿皮にて作れる「カンムリ」說文に「弁ハ冕ナリ、象形シテ或ハ弁ニ作ル」——は儀禮士冠禮に出づ、

【飛燮】 急變の意、漢書張湯傳に「使ニ人上ニ——ニ告ニ文姦

【弭】 事ニ文は李文なり、

【彌縫】 釋文に「彌縫ハ、補ヒ合ハスルナリ」左傳の桓五年に「爲ニ魚麗之陳ニ、先ニ偏後ニ伍、伍承ニ——」の註に「司馬法ニ、車戰二十五乘ヲ偏トナシ、車ヲ以テ前ニ居キ、伍ヲ以テ之ニ次ギ、偏ノ隙ヲ承ケテ、隙漏ヲ彌縫スルナリ」類書纂要に「——トハ、其ノ缺漏ヲ補フ、人ノ過ヲ掩ヒ、トリツクロフニ喩フ」左傳僖二十六年に「桓公是以糾ニ合諸侯ニ、而謀ニ其不協ニ——其闕ニ而匡ニ救其災ニ、昭ニ舊職ニ也」昭二年の「敢拜ニ子之ニ——」の註に「猶ニ補合ニ也」

【非梵行】 （不ニ梵行）を見よ、

【披麻】 悲家の用語、石の敷を盡くに麻の葉を披きたる如きをいふ、大斧劈小斧劈荷葉——等すべて十六皴法あり、芥子園畫傳・妮古錄等に見ゆ、

【陧アリ】 （有ニ陧）陧は閉（スキマ）なり、「ナカタガヒ」史記禁唸傳に「大王今日、至ニ聽ニ小人之言ニ、與ニ沛公ニ有ニ陧」

【龐曼】 柔弱なり、また細好なり、また美色なり、列子に「鄧鄭衛之處子娥媚——者」淮南子に「齊——之色」

【陧ユク駒ノ足ハヤミ】 太平記卷二、後基下向の條に見ゆ、光陰の速なるをいふ、史記、魏豹列傳第三十に「鄙生說ニ豹ニ、豹謝曰、人生一世閒、如ニ白駒過ニ陧ニ耳」とあり その註に「索隱曰、莊子云、無ニ異ニ騏驥馳過ニ陧ニ、則謂ニ馬也小顏曰、白駒、謂ニ日影ニ也、陧、壁陧也、以言ニ速疾若ニ日影過ニ壁陧ニ也」とあり、

【祕密】 「ヒメテ、ヒソカニスル」佛經の語、涅槃經に「此經名ニ如來ニ——藏ニ大日經義釋に「若已成ニ就利根智ニ、卽當ニ演ニ暢ニ——而開ニ示之ニ」

【嬪】 爾雅釋親に「——ハ婦ナリ」禮記の曲禮に「生ニ妻トイヒ、死ニ嬪トイフ」註に「——ハ婦人ノ美稱、妻死スレバ、ソノ夫美號ヲ以テ之ニ名ヅク、故ニ——ト稱ス」（妃嬪）を見よ、

【賓ノ至ル歸スル如シ】 （賓至如ニ歸）賓客の來る者、己の家に歸りたる如く、安心して少しも憂なきをいふ、左傳襄三十一年に「——ニ——ニ——ニ、無ニ寧茲ニ患」

【閩】 （粵）閩は福建省、粵は廣東省の異名、粵は越に同じ、

【擯介】 主客の間に立ちて周旋する者、儀禮士冠禮の注に「擯者有司佐ニ禮者ニ、在ニ主人ニ曰ニ擯、在ニ客曰ニ介」

【瀕海】 海に臨む地をいふ、海邊なり、漢書賈山傳に「江湖之上、——之觀畢至」

【貧交行】 杜甫の作なり、曰く「翻ニ手作ニ雲覆ニ手雨、紛紛輕薄何須ニ數、君不ニ見管鮑貧時交、此道今人棄如ニ土」翻ニ手作ニ雲云云は變態常なきの謂なり、以て人情の輕薄なるに比す、管鮑云云は、史記に「管仲 少時與ニ鮑叔牙

游、鮑叔終善遇之、管仲曰、生我者父母、知我者鮑子也、鮑叔既進管仲以身下之、天下不多管仲之賢、而多鮑叔之知人、と、此道今人云云は、人たゞ市道の交を爲す、復管鮑の情なきを嘆ず、杜甫、賦を獻ぜし時、京華の故人之を念ふ者あることなし、故にこの詩を賦し、今人の交、古人に如かざることを言ひ、以て薄俗を警む、

【擯棄】「シリゾケ」擯は斥なり、棄なり、崔寔の政論に「寂不勝衆、遂見——擯斥」擯郤に同じ、

【擯郤】擯斥に同じ、漢書中山王傳に「使夫宗室——、骨肉氷釋」

【頻伽羅】大論七十八に「如歌羅頻伽鳥、在殼中未發聲已能勝諸鳥」法華文句十に「好堅處地芽已百圍、頻伽在殼聲勝衆鳥」

【閔凶】父母の喪をいふ、左傳宣十二年に「寡君少遭——不能文、不能文とは其の辭を文飾することを能はざるなり、

【貧窶】貧しくして、ヤツルル窶は財乏しくしてを具ふること能はざる義、詩經邶風北門篇に「出自北門、憂心殷殷、終窶且貧、莫知我艱」註に「衛ノ賢者亂世ニ處リ、暗君ニ事ヘテ其ノ志ヲ得ズ、故ニ北門（陽に背き陰に向ふヲ出ヅルニ因リテ賦シテ以テ自ラ比ス、

又ソノ——ニシテ人ノ之ヲ知ルナキヲ歎ズ云云」

【牝雞之晨】妻、夫の權を奪ふをいふ、書經の牧誓に「武王曰、古人有言曰、牝雞無晨、牝雞之晨、惟家之索、今商王受、惟婦言是用、牝雞にして晨を告ぐるときは、即ち陰陽常に反して、家道衰へ盡くるなり、

【品藻】品評の義、漢書揚雄傳に「稱述——」註に「其ノ差品及ビ文質ヲ定ムルナリ」

【岷山】四川省と甘肅省との境なる山脈を總稱していふ、この——の地方を後魏の世には岷州と名づく、廣雅に「蜀山謂之——」

【賓從】賓もまた服なり、——は服從の義、史記五帝紀に「諸侯咸來——」

【褧絲茶烟之感】少年の頃豪遊に耽りし人が老後に至りて淡泊なる生活に晩年を樂む感をいふ、杜牧の題禪院詩に「舸船一棹百分空、十歲青春不負公、今日褧絲禪榻畔、茶烟輕颺落花風」褧絲は褧の白髮なり、

【擯相】賓客應對の事を司る者、入りて禮を告ぐるを相といひ、出でて賓に接するを擯といふ、儐に同じ、禮記に「可以——」

【嫦娥】二字共に宮中に仕ふる女官の稱、轉じてひろく官女の義にも用ふ、左傳昭三年に「以備——」寡人之

望也、杜牧の阿房宮賦に「妃嬪媵嬙王子皇孫（嬪）を參看せよ、

【貧者ノ一燈】眞俗佛事編に「阿闍世王經曰ク、時ニ老母アリ、見王供養佛、自ラ念ズラク、我レ今世如此貧苦ナリ、後世云何セン、生レテ値佛不能供養ニコトヲ歎キ、路行ク人ニ乞ヒテ一日ニ二錢ヲ以テ油ヲ沽フ、賣油者怪ミテ問其故、老母曰ク、供養佛、賣油者コレヲ愍ミ、其ノ價ヨリ益シテ油ヲ與フ、老母持之佛ノ所ニ至リテ然シ供スルニ油盡クレドモ不滅增明シ、於是佛授記シタマフ」

【頻顣】怒盛に同じ、安んぜざる貌、面を「シカムル」義、孟子滕文公下に「——曰、惡用是顣顣者爲」顣顣は鵝の聲、

【稟性】天よりうけ得たる、ツマレツキ」宣和畫譜に「——通雅」

【擯斥】斥け退くる義、劉峻の辯命論に「——於當年」

【玭石】玭は玉に次ぐる美石、說文に「——ハ石ノ美ナル者ナリ」

【緡錢】緡は繩なり、また錢を貫く絲をいふ、漢書武帝紀に「初算——」註に「緡ハ絲ナリ、以テ錢ヲ貫クナリ」——は絲にて貫きたる錢、

【貧賤ナレバ親戚モ離ル】（富貴ナレバ）を見よ、

【貧賤ノ交ハ忘ル可カラズ】貧賤の時、親しく交りし友は富貴になりても忘るることはできずとの義（宋弘）を見よ、

【貧賤モ移ス能ハズ】（貧賤不能移）窮して益志の堅さをいふ、孟子滕文公下に「富貴不能淫、——（移すとはその節を變ずるをいふ）威武不能屈、此之謂大丈夫ニ

【閔損純孝】叢求に「周ノ閔子騫名ハ損、早ク母ヲ喪フ、父後妻ヲ娶リ、二子ヲ生ム、衣スルニ綿絮ヲ以テシ、損ヲ妬ミテ衣スルニ蘆花ヲ以テス、父損ヲシテ車ヲ御セシム、體寒クシテ轡ヲ失フ、父其ノ故ヲ察知シ、後母ヲ出サント欲ス、損曰ク、母在レバ一子寒シ、母去ラバ三子單ナラント、母聞キテ悔イ改ム」損孔門に在りて德行の科に居る、大夫の家に仕へず、

【貧道】僧の自ら謙する語、智度論に「貧ニ二種アリ、一ニハ財貧、二ニハ功德法貧、佛道を修することの淺薄なる義、世說に「支道林嘗養數馬、曰、——重其神駿」石林燕語に「晉宋間佛教初行未有僧稱、通曰道人、自稱則曰——今以名相稱、蓋自唐已然、而——之名廢矣」

【獫狁】「カハヨン」韓愈の文に「爲——之笑」

【閩中】 今の福建省の地をいふ、說文に「東南越ノ種分レテ七トナル、故ニ七閩トイフ」とあり、周禮の夏官に「職方氏辨其邦國都鄙四夷八蠻七閩」

【賓頭盧】 十六羅漢の第一の尊者、白頭長眉の像を作り、寺院の食堂に安んず、具には——(不動ト譯ス)頗羅墮(姓ナリ、捷疾マタ利相ト譯ス)といふ、佛勅を受けて涅槃に入らず、つねに天竺摩利支山に住し、末世の供に應じ、大福田となるといへり、

【妛天】 秋の天をいふ、爾雅の釋天に「秋爲——」註に「妛ハ猶愁ノ如シ、萬物ノ凋落ヲ愁ムノ義ナリ」されど秋天のみに限らず、廣く天の意にも用ふ、書經大禹謨に「日號泣于妛天于父母」と天の仁にして、下を愍むの義なり、

【昊天極マリナシ】 (昊天罔極)天の極りなきが如く父母の恩の大なるをいふ、罔極の恩ともいふ(父母)を見よ、

【貧ニシテ樂ム】 (貧而樂)貧乏に安んじて道を樂むをいふ、論語學而篇に「子貢曰、貧而無諂富而無驕、何如、子曰、可也、未若——富而好禮者也、子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與、子曰、賜也始可與言詩已矣、告諸往而知來者」

【貧ニ施ス】 貧乏人に施與する、

【貧ノ盜】 俚諺なり、漢書に「民貧則姦邪生」潛夫論に「禮義生於富足、盜竊起於貧窮」

【貧者士之常】 士は常に道を講じて、貨利を殖せず、故に貧しきは士の常なり、列子天瑞に「桑啓期曰、貧者士之常也、死者人之終也」

【牝馬之貞】 柔順の德あり、能く事に堪へて成功するをいふ易の坤卦に「坤元亨利——牝馬ハ柔順ニシテ貞ナリ、牝馬ハ柔順ニシテ健行、故ニ其ノ象ヲ取リテ——トイフ」象傳に「牝馬地類行地无疆、柔順利貞君子攸行」

【頻繁】 「イソガハシ」忙劇なり、質亮の表に「沐浴玄風、——省閱二杜門ノ蜀相ノ詩ニ三顧——天下計、兩朝開濟老臣心」

【嚬呻】 「ヒン」の「ハナヒギ」鄭谷の句に「年來——未亜白」

【蘋藻濜藻】 蘋は大萍なり「ウキクサ」白花を開く、藻は「モ」囘當「シロヨモギ」春生ず、食ふべし、濜も水草、藻は「モ」なり、皆清潔のものなれば、微物なれども、神に薦むべし、左傳隱三年に「苟有明信、澗谿沼沚之毛、——之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公」一解に濜藻は、聚藻なりとあれども、穩當ならず、

【彬彬】 文と質と兩ながらそなはる貌、論語雍也に「文質——」

【斌斌】 文と質との相雜はりて「ウルハシキ」貌、禮記の王制の注に「竝行——然」祭儀の句に「——碩人」彬彬に通ず、

【擬ニ效フ】 (效顰)己の醜きをかへりみずして、強ひて人の美を摸倣するをいふ、倣顰とも用ふ、莊子の天運篇に「西施心ヲ病ンデ而シテ其ノ里ニ矉ス、(かほしかめる)其ノ里ノ醜人之ヲ美トシ、歸リテ亦心ヲ捧ゲテ而シテ其ノ里ニ矉ス、其ノ里ノ富人之ヲ見テ、堅ク門ヲ閉デテ而シテ出デズ、貧人之ヲ見テ、妻子ヲ挈ヘテ而シテ之ヲ去テテ走ル、彼レ矉ヲ美トスルヲ知リテ而シテ矉ノ美ナル所以ヲ知ラズ」とあり、矉は嚬なり眉を嚬するなり、古に法る者は、只だ古の善を知りて、古の善は固より別に在ること有るを知らざるに喩ふ、西施は美人の名、

【賓ニ禮アレバ主則チ之ヲ擇ブ】 (賓有禮主則擇之)左傳の隱十一年に「周諺有之曰、山有木工則度之、賓有禮主則擇之」とあり、註に「宜シキ所ヲ擇ビテ之ヲ行フ」と見ゆ、

【閔閔】 閔は病なり、憂ふる貌、左傳昭三十二年に「——焉如農夫之望歲、懼以待時」

【豳風七月篇】 豳は國の名、禹貢雍州岐山の北、原濕の野に在り(今ノ陝西省ニ屬ス)——は詩經に載す、農桑の事を述べたる詩なり、すべて八章あり、序にいふ「七月ハ王業ヲ陳ブルナリ、周公變ニ遭ヒ、后稷先公ノ風化ノ由ル所ヲ王業ヲ致スノ艱難ヲ陳ブルナリ」左にその一章を錄す、

七月流火、九月授衣、一之日觱發、二之日栗烈、無衣無褐、何以卒歲、三之日于耜、四之日擧趾、同我婦子、饁彼南畝、田畯至喜、

【賓服】 爾雅釋詁に「賓ハ服ナリ」疏に「賓ハ德ニ懷キテ服スルナリ」禮記の樂記に「諸侯——賓從に同じ、

【繽紛】 盛なる貌、家語に「旌旗——下蟠于地」また雜亂なり、屈原の離騷に「佩——其繁飾兮」また花などの亂れ散る貌、陶潛の桃花源記に「落英——」

【黽勉】 黽は勉むるなり、——は詩緝に「力堪ヘザル所ロ、心欲セザル所ロ、勉強シテ之ヲ爲スヲ黽ト曰フ」孫季昭の示兒編に「黽ハ蛙ノ屬、蛙黽ノ行クヤ、勉強シテ自ラ力ム、故ニ——ト曰フ、猶ノ獸タル其ノ行クヤ趨趍ス、故ニ猶豫ト曰フガ如シ」黽の字蛙の義の時は音

猛(バウ)示兒編の說によれば「バウベン」と讀むべきに似たり、されども普通の說にはあらず、

【貧骨ニ到ル】（貧到骨)極めて貧しきをいふ、赤貧の義、杜甫の畳呉郎詩に「已訴徵求ー一レ、更思戎馬」涙沽巾」

【牝牡驪黃ノ外ニ求ム】善く馬を相するものは、その馬の神に通じて、形色などの外に於て見分くるをいふ(九方皐)を見よ、

【碑銘】鶴林玉露に「古人碑ヲ立ツルニ、廟ニハ以テ牲ヲ繫ギ、墓ニハ以テ棺ヲ下ス、厥ノ後、乃チ歲月ヲ刻ミ或ハ事ノ始末ヲ識ス、蓋シ亦因リテ之ヲ文ニスル耳、湯ノ盤ノ銘、太公ガ丹書ニ載スル所ロノ諸銘ノ若キ、亦用フル所ロノ器物ニ因リテ、辭ヲ著シテ以テ自ラ警ム、未ダ嘗テ徒文ト爲サザルナリ、後世特ニ石ヲ立テテ以テ事ヲ紀シ言ヲ述ベテ而シテ之ヲー一ト謂フ、古ト異リ、杜元凱功ヲ二石ニ銘シ、一ハ峴山ノ上ニ置キ、一ハ漢水ノ中ニ沈ム、韓退之張愉ニ謂ヒテ曰ク、我ニ一片石ヲ丐ヘヨ、二妃ノ廟ノ事ヲ敍セ、且ツ後世ヲシテ子ガ名アルヲ知ラシメント、後世名ヲ好ムノ弊此ノ如クナルニ至ル(墓誌銘)を參看せよ、

【比目】鰈(カレヒ)の類の魚、爾雅釋地の九府に「東方有ー一魚焉、不レ比不レ行、其名謂之鰈」註に「狀牛脾ニ似テ鱗細ク紫黑色、一眼ナリ、兩片相合スレバ乃チ行クヲ得、今水中所在ニ之レ有リ、江東又呼ビテ王餘魚ト爲ス」比翼鳥と同じく男女の「チギリ」の濃かなるに比していふ、

【眉目畫クガ如シ】(眉目如畫)姿容の秀麗なるをいふ、後漢書馬援傳に「爲人明鬚髮、ー一レー」

【美目盼タリ】美人の目の美くしきをいふ、盼は黑白分明なるをいふ(膚凝脂)を見よ、

【疕瘍】疕は頭瘡(カシラノカサ)瘍は頭または「カラダ」のかさ、周禮に「ー一者造焉」

【箆揚】箕にて「サビル」小雅大東に見ゆ、晉書孫綽傳に「箆之颺之」之注に「糠粃ヲ去ルナリ」揚は颺と通ず、

【病根】病漢音ヘイ人の身に病を受くることの深きをいふ、後漢書華佗傳に「有疾詣佗求療、佗曰、君ー一深、應當剖腹」

また心に惡しき念の浸みこむにいふ、橫渠語錄に「並則至於徇私意義理都喪也、唯爲ー一不去隨所居所接而長」

【平仄】漢字には平上去入の四聲あり、平は上平下平に分る、上去入の三聲は、平韻に對して仄韻といふ、詩を作るに二四不同二六對・孤平・孤仄・平三連・仄三連などそれぞれ平仄の規則あり(韻)を參看せよ、

【平等】平かに均しき義、不同なきをいふ、佛經の語、親疎怨恩を別たざる心を——心といふ、涅槃經に「悉皆ー一無有差別」

【屛風】風をふせぐ具なり、史記孟嘗君傳に「ー一後、常有侍史」晉書王秀之傳に「王導如ー一屈曲從俗能破風露」導は秀之の父なり、

【百憂】多くの「シンパイ」詩經無將大車篇に「無思ー一淚の張衡の思玄賦に「思百憂以自疹」歐陽修の秋聲賦に「ー一感其心萬事勞其形」

【百家姓】諸家の姓氏を集め村塾にて幼童の讀本に用ひしもの、わが國の名頭(源平藤橘ヲ始メトシテ多クノ姓氏ヲ集メタルモノ)の類、先づ宋の姓趙を首として趙錢孫李、周吳鄭王の如く單姓四百八、複姓三十を收めたり、宋の世吳越王錢氏の時民閒にて作りしなりといふ、陸放翁の詩「兒童冬學鬧比鄰、據案恐傷也、子曰、何必高宗、古之人皆然、君薨、百官總己以聽於冢宰三年云云百官悉く冢宰に諸職の事をさゞさて政を行ひ、天子は三年の閒、政をさゞさたまはずとの義、

【百結衣】「ツヅレ」をいふ、晉書隱逸傳に「輦威洛陽ニ在リ、白社ニ隱居シ、殘絮敗縕ヲ得テ以テ自ラ覆フ、ー一百捉時彼」舜をこの官に納れて、百事を捉り度らしむる義、後漢書百官志の註に「ー一ハ、堯初メテ別ニ置ク、周、名ヲ冢宰トアラタム」

【百卉英ヲ含ム】多くの花が美くしく開く、後漢書馮衍傳に「開歲發春兮、百卉含英」また後漢書張衡傳には「天地絪縕、百卉含藹」

【百金之士】能く敵を破り將を擒にして百金の賞を受くる士をいふ、史記に「ー一ー一五萬人、殺者十萬人」

【百果ノ宗】すべての果物の長にて梨をいふ(梨花)を見よ、

【百花王】牡丹の異名、合璧事類備要に「北山集云旣全國色與天香底用人家紫與黃、却喜騷人稱第一至今喚作百花王(花王)」を參看せよ、

【百官冢宰ニ任ス】太平記卷二十一に見ゆ、冢宰とは大宰なり、王治を輔くること、總理大臣の如き者なり、論語憲問に「子張曰、書云高宗諒陰三年不言何謂也、子曰、何必高宗、古之人皆然、君薨、百官總己以聽於冢宰三年云云百官悉く冢宰に諸職の事をさゞさて政を行ひ、天子は三年の閒、政をさゞさたまはずとの義、

【百揆】舜の時、この官に納れて、百事を揆り度らしむる義、後漢書百官志の註に「ー一ハ、堯初メテ別ニ置ク、周、名ヲ冢宰トアラタム」

【百卉英ヲ含ム】多くの花が美くしく開く、後漢書馮衍傳に「開歲發春兮、百卉含英」また後漢書張衡傳には「天地絪縕、百卉含藹」

【百金之士】能く敵を破り將を擒にして百金の賞を受くる士をいふ、史記に「ー一ー一五萬人、殺者十萬人」

【百果ノ宗】すべての果物の長にて梨をいふ(梨花)を見よ、

【百花王】牡丹の異名、合璧事類備要に「北山集云旣全國色與天香底用人家紫與黃、却喜騷人稱第一至今喚作百花王(花王)」を參看せよ、

【百官冢宰ニ任ス】太平記卷二十一に見ゆ、冢宰とは大宰なり、王治を輔くること、總理大臣の如き者なり、論語憲問に「子張曰、書云高宗諒陰三年不言何謂也、子曰、何必高宗、古之人皆然、君薨、百官總己以聽於冢宰三年云云百官悉く冢宰に諸職の事をさゞさて政を行ひ、天子は三年の閒、政をさゞさたまはずとの義、

【百結衣】「ツヅレ」をいふ、晉書隱逸傳に「輦威洛陽ニ在リ、白社ニ隱居シ、殘絮敗縕ヲ得テ以テ自ラ覆フ、ー一百捉

——ト名ヅク」

【百孔千疸】　聖人の道の多く缺けて明かならざるに喩ふ、韓愈の與孟尚書書に「漢氏以來、羣儒區區修補——随亂随失、陳好道の詩には「昔日剝疸今補——肉百孔千瘡容一縫」に

【百穀】　多くの穀物をいふ、爾雅翼には「粱ハ黍稷ノ總名、稻ハ粢種ノ總名、菽ハ衆豆ノ總名、三穀各二十種アリ、合セテ六十ト爲ス、蔬ト果トノ屬、穀ヲ助クル者、各二十種凡テ百穀」とあれども百の字は多數の義にして定數とせざるも可なり、詩豳風七月篇に「荼、宵爾索綯、亟其乘屋、其始播——」に

【百谷王】　江海をいふ、老子に「江海ノ能ク百谷ノ王タル所以ノ者ハ、其ノ善ク之ニ下ルヲ以テナリ、故ニ能ク百谷ノ王トナル」

【白虎通】　四卷、白虎通義の略稱、後漢の肅宗諸儒に詔して五經の同異を北宮白虎觀に考定せしめ、班固に命じ、その議を撰錄してこの書を成さしむ、その說雜ねて纖緯に涉ると雖も、多く古義を傳ふるを以て、今に至るまで學者の依據するところとなれり、

【百歲ノ後】　人壽百歲を過ぐる者は少し、故に死後の義とす、詩經唐風葛生に「冬之夜夏之日、——之——、歸

其室に室は壙なり、史記高祖紀に「陛下——蕭相國即死令誰代之」

【百草ヲ鬪ハス】　（鬪百草）荊楚歲時記に「五月五日四民並踏百草、又有鬪百草之戲」

【百草ヲ鞭ツ】　（鞭百草）干寶搜神記に「神農以赭鞭——一盡知其平毒寒溫之性、臭味所主、以播百穀、故天下號神農也」

【百獸モ率舞】　尚書益稷篇に「簫韶九成、鳳凰來儀、擊石拊石、百獸率舞」とあり、音曲の妙なるに、獸までが感動するをいふ、太平記卷二に引けり、

【百子全書】　湖北崇文書局にて刊行す、儒家・兵家・法家・農家・雜家・小說家・雜事・異聞ニ分ツ）道家の八類に分ちてその主要なる者百種を彙編す、

【百事大吉】　何事も宜しといふ義、遊覽志餘に「杭俗元旦簽柏枝柿餅、以大橘承之、謂之——」

【百日紅】　和名「サルスベリ」陳淏子に「百日紅、一名紫薇、其花紅紫之外有白者、曰銀薇、又有紫帶藍色者、曰翠薇、俗呼爲怕癢樹、其木光滑無皮、人若搔之則枝幹無風而自動、亦其性使然也、葉對生、一枝數穎、一穎數花、六月始花、其蕾開謝相接續可至九月、約有百日之紅、故有是名」

【百日之勞、一日之樂】　孔子家語觀鄉射に「子貢觀於蜡、孔子曰、賜也樂乎、對曰、一國之人皆若狂、賜未知其爲樂也、孔子曰、——一日之澤、非爾所知也」註に「民皆稼穡ニ勤苦ス、百日ノ勞アリトハ久シキニ喩フ、今一日之ヲシテ酒ヲ飲マシメ、之ヲ燕樂セシムルハ是レ君ノ恩澤ナリ」と、蜡の祭は、禮記郊特牲に「蜡也者索也、歲十二月、合聚萬物而索享之也」陳註には「索求索其神也」とあり、

【百枝ノ燈】　開元遺事に「韓國夫人、百枝ノ燈樹ヲ置キ、之ヲ高山ニ竪テ、上元ノ夜、之ヲ點スレバ、光明月色ヲ奪フ」

【百尺竿頭一步ヲ進ム】　百尺の竿頭に達するは既に至り盡せるなり、又一步を進むるは、更に工夫を增し加へて、上に向ふの義、傳燈錄に「招賢大師示一偈曰、百丈竿頭不動人（人一に身に作る）雖然得入未爲眞、百丈竿頭須進步、十方世界是全身、僧問只如百丈竿頭、如何進步、師云朗州山、澧州水」乘燭譚には、この偈を引きて百丈を百尺に作れり、

【百姓】　民庶をいふ、書經堯典に「平章——ニ孟子　梁惠王篇に「誠有——者ニ也百官の著姓をいふ、同書君奭に「百姓王人、罔不乘德明」恤」と、王人とは王臣の

微なる者、

【百姓ヲ平章ス】　（平章百姓）平は均、章は明なり、善く庶民を治むるをいふ、書經堯典に「——百姓昭明」

【百世之師】　百世の後までも人の師法となるをいふ、孟子盡心下に「聖人百世之師也、伯夷柳下惠是也」蘇軾の韓文公廟碑に「匹夫而爲——一言而爲天下法」

【百川ハ海ヲ學ビテ海ニ至ル】　（百川學海而至于海）揚子法言に「百川學海而至于海、丘陵學山而不至于山」註に「百川モ亦海ノ類ニシテ小ナリ、故ニ海ヲ學ブトイフ、百川ハ動キテ息マズ、故ニ海ニ至ル、丘陵ハ止マリテ進マズ、故ニ山ニ至ラズ、學者モ亦猶ホ是ノゴトシ」

【百戰百勝ハ善ノ善ナル者ニアラズ】　（百戰百勝非善之善者）孫子ノ謀攻篇に「凡ソ兵ヲ用ヒルノ法ハ、國ヲ全ウスルヲ上ト爲ス、國ヲ破ルハ之ニ次グ、旅（もろもろ）ヲ全ウスルヲ上ト爲ス、旅ヲ破ルハ之ニ次グ、卒ヲ全ウスルヲ上ト爲ス、卒ヲ破ルハ之ニ次グ、伍ヲ全ウスルヲ上ト爲ス、伍ヲ破ルハ之ニ次グ、是ノ故ニ百戰百勝ハ、善ノ善ナル者ニアラザルナリ、戰ハズシテ、而シテ人ノ兵ヲ屈スルハ、善ノ善ナル者ナリ」

【百足ノ蟲死ニ至ルマデ僵レズ】 扶助する者多ければ、容易に亡びざるに喩ふ、文選曹冏の六代論に「語ニ曰ク百足之蟲、至レ死不レ僵扶レ之者衆也、此言雖レ小可レ以譬レ大」の註に「蟲ハ帝室ニ喩ヘ、足ハ諸侯ニ喩フ」

【百雉】 城の大サをいふ、方丈を堵といひ、三堵を雉といふ、一雉の墻は、長さ三丈、高さ一丈なり、漢の魏禮いふ、雉飛ぶこと三丈にして墮つ、故に三丈を雉といふと、左傳隱元年に「都城過レ百雉一國之害也」とあるは、侯伯の城は方五里なれば、徑三百雉なり、故にその大夫の都城にして三分の一、即ち百雉を過ぐることを得ず、之を過ぐるときは害を爲すとなり、史記仲尼世家に「臣無レ藏レ甲、大夫毋二百雉之城」

【白水】 「ヲケラ」といふ藥草(蒼朮)を見よ、

【百ニ一ヲ失ハズ】 (百不失一)すべての事一も目的とするところを失ふことなき義、論衡須頌篇に「從門庭聽堂室之言、什而失九、如登堂闚室、一二レ」

【百二ノ險】 ※二萬の兵を以て、百萬の敵に當るに足る、要害險固の地をいふ、史記高祖紀に「秦形勝之國、帶河山之險、隔千里、持戟百萬、秦得百二焉、地勢便利其以下兵於諸侯、譬猶居高屋之上建瓴水也」日知錄に「古人倍ヲ謂ヒテ二ト爲ス、百二ハ百倍ナリ」これによれば秦は諸侯に比して百倍の險ありとの義なり、

【百年二萬六千日】 百年の總日數をいふ、李白の詩に「聖君三萬六千日、歳歳年年奈樂何」杜牧の詩に「一一一一、與子期於局上消」

【百拜以テ禮トナス】 (百拜以爲禮)柳文の序飲の句、百拜は「シバシバ」拜するをいふ、禮記の樂記に「先王因爲酒禮一獻之禮、賓主百拜、終日飲酒而不得醉焉、此先王之所以備酒禍也」とあるに本づく、

【百發百中】 弓の巧手をいふ、史記の周本紀に「楚有養由基者、善射者也、去柳葉百步而射之、百發而百中之」とあり、轉じて謀計の悉く適中するにもいふ、

【百福莊嚴】 佛經の語、三十二相を具するをいふ、百福を積みて一相を得るといふに因りていふ、法華經に「彩畫作佛像一一一一相ニ

【百聞ハ一見ニ如カズ】 (百聞不如一見)多く人の言を聞くよりは、自ら一見するの確實なるに如かざるをいふ、漢書の趙充國傳に「充國曰ク、百聞ハ一見ニ如カズ、兵勢ニ度リ難シ、臣願クハ馳セテ金城ニ至リテ、圖シテ方略ヲ上ラント」陰は音エウ遙に同じ、

【百辟】 「モロモロ」の君の義、諸侯をいふ、詩經に「一一斯刑」

【百朋】 多くの「タカラ」古者貝を貨とす、兩貝を朋とす(一解ニ五貝ヲ一ト云フ)詩經小雅菁菁者莪に「既見君子、錫我一一ニ

【百步楊ヲ穿ツ】 (百步穿楊)圓機活法に、史記を引きて「楚ノ養由基善ク射ル、楊葉ヲ去ル百步ニシテ、之レヲ射ル、百發百中ス」

【百味ノ飲食】 多種の「ウマキ」飲食物、佛經の語、因果經に「常作人王一一一隨念而至」孟蘭盆經疏に「云百者大數、非定一百」

【百藥ノ長】 (百藥之長)酒の異稱なり(酒ハ)を見よ、

【百六掾】 掾一音はエン官屬をいふ、六曹故に掾ハ乃チ屬官ノ通稱ナリ」漢書蕭何傳に「爲沛主吏掾ニ一一は司馬晉の時の官吏をいふ、晉書元帝紀に「辟掾屬百餘人、時人謂之一一一ニ

【百六會】 厄運の歳に出會ふ義、漢書谷永傳に「遭无妄之卦、運直百六之災阨」漢書義に「四千五百歳ヲ一元ト爲ス、一元ノ中ニ九尼アリ、陽尼五、陰尼四、陽ハ旱ト爲リ、陰ハ水ト爲ル、一百六歳ニシテ陽尼アリ、故ニ一一ト曰フ」

【百里奚】 もと虞の大夫たり、晉の獻公虞を滅し、百里奚を虜にし、以て秦の繆公のために秦に媵す、百里奚秦を亡げて宛に走る、楚の鄙人之を執ふ、繆公(穆公ニ作ル同ジ)百里奚の賢を聞きて、重く之を贖はんと欲す、楚人の與へざるを恐れて、乃ち人をして楚に謂はしめて曰く、吾が媵臣百里奚在り、請ふ五羖羊の皮を以て之を贖はんと、楚人遂に許して之を與ふ、この時に當りて、百里奚年已に七十餘、繆公に國事を語りて大によろこび、之に國政を授く、號して五羖大夫といふ、詳しくは史記の秦本紀を見よ、

【百里米ヲ負フ】 (予路米)を見よ、

【百里ニ行ク者ハ、九十ニ半バス】 (行百里者半於九十)百里の路を行くに、九十里を行き、適にその半ばの五十里と爲すに足るとの義にて、事を爲すに、始めの易く、終りの難きに喩ふ、戰國策に「一一一一一一一一一一此言末路之難ニ

【百里才】 百里を縣といふ、縣を治むる長官たるの才をいふ、三國志蜀志に「劉備以鹿統爲郡陽令、魯肅曰、士元非百里一一一使爲治中別駕、乃得展其驥足」士元は統の字、

【百里之命】 百里は諸侯の國なり、命は民命、一國の政事をいふ(託孤)を見よ、

【百慘】 慘は妖氣なり、說文に「水不利也」漢書 孔光傳

「六診之作」の註に「診ハ惡氣ナリ」——は多くの妖氣なり、文天祥の正氣歌に「如此再暑寒、——自辟易」陵亂（ミダル）の幾のときは昔テン莊子大宗師に「陰陽之氣有診（スレイ）」

【百禮ノ會（ヒヤクレイノクワイ）、酒ニアラザレバ行ハレズ】（百禮之會非酒不行）吉凶の百禮は、酒なくては行はれざる義、漢書の食貨志に「酒者天之美祿（ナリ）、帝王所以頤養（シテ）天下、享祀祈福、扶衰養疾、百禮之會、非酒不行（レズ）」

【百僚（ヒヤクレウ）】百官なり、僚は朋なり、官僚をいふ、寮に通ず、書經皐陶謨に「——師師（シシ）」と「モロモロ」の官吏が、相師とするをいふ、

【百鍊剛（ヒヤクレンガウ）】百度も鍛錬せし鐵の剛なる如く志氣の堅確なるをいふ、事類全書に「晉劉琨爲段匹磾所拘、自知必死、爲五言詩贈其故吏盧諶、末云何意——、化爲繞指柔（ヒヤクレンレウシ）」

【白蓮社（ビヤクレンシヤ）】四機活法に「晉ノ惠遠、白蓮社ヲ結ビ、書ヲ以テ陶淵明ヲ招ク、陶曰ク、弟子酒ヲ嗜ム、若シ飲ヲ許サバ、即チ往カント、遠之ヲ許ス、遂ニコレニ造（イタ）ル、勉メテ社ニ入ラシム、陶眉ヲ攢メテ去ル」佛祖統紀二十七に「謝靈運、廬山ニ到リ、惠遠ヲ見テ心服ス、乃チ寺ニ就キ盛ヲ築キ、池ヲ整チ白蓮ヲ植ウ、時ニ惠遠諸賢ト淨土ノ業ヲ修メ——ト號ス」（蓮社）を見よ、

【百祿是荷（ヒヤクロクコレニナフ）】天の多福を受くるをいふ、詩經商頌玄鳥篇に「殷受命咸宜、百祿是何（レフ）」と、何は春秋傳に荷に作る、任なり百祿は多くの幸福、同長發篇にも「敷政優優、百祿是遒（アツマル）」

【比余（ヒヨ）】猶（クシ）なり、匈奴單于（王ノ義）の用ふるもの、史記匈奴傳に、漢の文帝が冒頓單于に物を贈ることを敍して「——一黃金飾具帶一」とあり、——一に疏比に作る、漢書の匈奴傳には比疎に作る（比疎）を參看せよ、

【氷夷（ヒヨウイ）】河の神、山海經、海內北經に「——卽河伯也」馮夷に同じ、

【馮夷（ヒヨウイ）】水神なり、莊子に「——得之以遊大川（ヲ）」注に「——ハ河伯ナリ」また淮南子に「——服八石（シ）而水仙（テ）後赤壁賦に「俯ス——之幽宮」山海經には氷夷に作る、同じ、

【馮河（ヒヨウカ）】河を徒歩にて渉るをいふ、莊子逍遙遊に「藐姑射之山（ニ）有神人、肌膚如氷雪（ノ）」

【氷肌（ヒヨウキ）】「ハダヘ」の美なるをいふ、莊子逍遙遊に「藐姑射之山、有神人、肌膚如氷雪」

【氷肌玉骨（ヒヨウキギヨクコツ）】梅の異名、豐衰之、梅を評していふ「——物外佳人、但恨無傾城之笑耳」竹坡詩話に「——

土ノ業ヲ修メ——ト號ス」（蓮社）を見よ、

【百祿是荷（ヒヤクロクコレニナフ）】天の多福を受くるをいふ、詩經商頌玄鳥篇に「殷受命咸宜、百祿是何（レフ）」と、何は春秋傳に荷に作る、任なり百祿は多くの幸福、同長發篇にも「敷政優優、百祿是遒（アツマル）」

【比余（ヒヨ）】猶（クシ）なり、匈奴單于（王ノ義）の用ふるもの、史記匈奴傳に、漢の文帝が冒頓單于に物を贈ることを敍して「——一黃金飾具帶一」とあり、——一に疏比に作る、漢書の匈奴傳には比疎に作る（比疎）を參看せよ、

【氷夷（ヒヨウイ）】河の神、山海經、海內北經に「——卽河伯也」馮夷に同じ、

【馮夷（ヒヨウイ）】水神なり、莊子に「——得之以遊大川（ヲ）」注に「——ハ河伯ナリ」また淮南子に「——服八石（シ）而水仙（テ）後赤壁賦に「俯ス——之幽宮」山海經には氷夷に作る、同じ、

【馮河（ヒヨウカ）】河を徒歩にて渉るをいふ、莊子逍遙遊に「藐姑射之山（ニ）有神人、肌膚如氷雪（ノ）」

【氷肌（ヒヨウキ）】「ハダヘ」の美なるをいふ、莊子逍遙遊に「藐姑射之山、有神人、肌膚如氷雪」

【氷肌玉骨（ヒヨウキギヨクコツ）】梅の異名、豐衰之、梅を評していふ「——物外佳人、但恨無傾城之笑耳」竹坡詩話に「——

【氷人（ヒヨウジン）】媒妁人をいふ、事類全書に「晉ノ索紞、字ハ叔徹、世ゝ通儒タリ、術數ニ明カナリ、令狐策氷上ニ立チテ氷下ノ人ト語ルト夢ミル、紞曰ク氷上ハ陽ナリ、氷下ハ陰ナリ、陰陽ノ事ナリ、士如シ妻ヲ歸ババ、氷ノ未ダ泮ケザルニ迫ベト、婚姻ノ事ナリ、君氷上ニ在リテ氷下ノ人ト語ル、陽、陰ト語ルト爲ス、媒介ノ事ナリ、君當ニ人ノ爲ニ媒ヲ爲シ、氷泮ケテ婚成ルベシト、策曰ク老夫髦タリ媒トナラザルナリト、會ゝ大守田豹策ニ因リテ子ノ爲メニ鄉人張公徵ガ女ヲ求ム、仲春ニシテ而シテ婚ヲナス」詳しくは晉書索紞傳を見よ、書言故事に「媒ヲ氷人トイヒ、媒ノ言ヲ氷語トイフ」

【氷釋（ヒヨウシヤク）】釋一音「セキ」消なり、散なり、消散して痕を留めざるをいふ、老子に「儼兮若客渙兮若氷將釋（ノントシテマサニトケントス）」客一本容に作る、漢書中山王傳に「使夫宗室擯郤骨肉（セニ）——

【氷山（ヒヨウザン）】權勢の盡き易きに喩ふ、天寶遺事に「楊國忠ガ擢天下ヲ傾ク、四方ノ士爭ヒテ其ノ門ニ詣ル、進士張彙トイフ者ハ、陝州ノ人ナリ、力學シテ大名アリ、志氣高大ニシテ、未ダ嘗テ人ニ低折セズ、人家ニ勸メテ謁ヲ國忠ニ修シ、顯榮ヲ圖ルベシトイフ者アリ、彙曰ク、爾ガ輩以テ楊公ノ勢、倚靠スベキヿ太山ノ如シト謂ハン、吾ガ見ル所ロヲ以テスレバ、乃チ氷山ナリ、或ハ皎日大イニ明カナルノ際ニハ、則チ此ノ山、當ニ人ヲ誤ルベキノミト、後チ果シテ其ノ言ノ如クナリキ」

【氷壺（ヒヨウコ）】清無汙、水殿風來暗香滿、此詩爲花惡夫人作」

【氷渙（ヒヨウクワン）】渙は散るなり、釋くるなり、——は氷のとけて散る義、閻丘沖の句に「——川盈」

【氷釋（ヒヨウシヤク）】齊の國より出づる潔白にして光ある絹をいふ、釋名に「紈ハ煥ナリ、細澤ニシテ光ノ煥煥然タルアリ」急就篇の註に「紈ハ卽チ素ノ輕キモノ」漢書地理志に「織作（ヲリナス）——綺繒純麗之物」

【氷言（ヒヨウゲン）】書言故事に「媒ヲ氷人トイヒ、媒ノ言ヲ——トイフ（氷人）を參看せよ、

【氷壺玉鑑（ヒヨウコギヨクカン）】極めて潔白なる心に比す、杜詩に「氷壺玉鑑懸清秋」の句あり、また姚元崇、冰壺誡を作りて云ふ「氷壺ハ清潔ノ至ナリ、夫レ洞徹瑕ナク、澄空ニシテ底ヲ見ル、官ニ當リテ明白ナル者、是ニ類スルアリ」

【氷壺秋月（ヒヨウコシウゲツ）】四機活法に「宋ノ李侗、延平先生ト號ス、鄧廸曰ク、李延平ハ——ノ如シ、瑩徹瑕無シ」

【氷壺ノ心】心の清潔なること、氷を玉壺の中に容れしが如きをいふ、鮑照の詩に「清如玉壺氷」また姚崇の氷壺誡に「氷壺者清潔之至也、君子對之不忘乎清」

【冰炭相容レズ】（冰炭不相容）楚辭七諫に「冰炭不可以相並兮」の註に「冰火ヲ見レバ則チ消エ、火冰ヲ得レバ則チ滅ニ、以テ忠佞並ビ處ルベカラザルニ喩フ」とあり、炭は火なり、また後漢書傅燮傳に「邪正之人不宜共國、亦猶冰炭之不可同器」鹽鐵論に「冰炭不同器、日月不並明」蘇軾の乞責降韓綜第七狀にも「冰炭不可以一器」

【冰炭器ヲ同クセズ】前條を見よ、

【憑怒】憑は盛なり、滿なり、また大なり、怒の甚しきをいふ、左傳昭五年に「今君奮焉震屯——虐執使臣將以發其怒」列子に「帝——侵滅龍伯之國」帝は上帝なり、

【冰輪】月の異名、蘇軾の詩に「夜半老僧呼客起、雲峯缺處湧——」

【憑陵】勢を恃みて迫り陵ぐをいふ、左傳襄二十五年に「介恃楚衆以——我敝邑」李華の弔古戰場文に「當此苦寒天假強胡、——殺氣、以相蹂躪」憑一に憑に作る、相通ず、

【腦膊】廣韻に「意泄レザルナリ」「ムネフサガリ」て泄れざる貌、唐の李華の弔古戰場文に「地闊天長、不知踏路、寄身鋒刃——誰訴」

【腦膊】雞が將に鳴かんとして「バタバタ」と兩翼を「ハウツ」聲をいふ、古兩頭纖纖詩に「腦腦膊膊雞初鳴、磊磊落落向曙星」

【溫浴】溫は「ユドノ」「ユドノ」にてゆあみする、禮記內則に「外內不共——」に

【比翼連理ノ契】比翼とは、羽を比べて飛ぶ鳥なり、連理とは木理を連ぬる枝なり、夫妻の契淺からざるに喩ふ、白樂天の長恨歌に「在天作比翼鳥、在地願爲連理枝」是れは唐の玄宗皇帝、楊貴妃と天寶十年七月七日、牛女の事に感じて、夫婦の誓をせし時の詞を敍せしなり、爾雅の釋地篇に「南方有比翼鳥焉、不比不飛、其名謂之鶼鶼」註に「鳧ニ似テ青赤色、一目一翼相得テ乃チ飛ブ」山海經に「崇吾之山有鳥焉、其狀如鳧、而一翼一目、相得乃飛、名曰蠻蠻」晉書元帝紀に「一角之獸、連理之木、以爲休徵者、蓋有百數」

【賁來】賁臨に同じ、賁は飾なり、人我が家に來りて爲めに光彩を生ずるの意、詩經少雅白駒に「賁然來思」思は助語、

【毗嵐】瑜伽論音義に「舊經中或作毗嵐婆、或作鞞藍、亦作隨藍、此云迅猛風」と、世界の大風にて水輪もこの風の力なりと、

【糜爛】米または肉をただらかす如く、疲弊する義、孟子盡心下篇に「梁惠王以土地之故、——其民而戰之、大敗、方苞の左忠毅公逸事に「國家之事、——至此」

【仳離】人の離別するをいふ、詩經王風中谷有蓷篇に「有女——」

【罷極】腰曲り脊高き病、セムシ」史記平原君傳に「臣不幸有——之病」醫一に瘖に作る、

【彌留】病の重きをいふ、書經顧命に「嗚呼疾大漸惟幾、病日臻既——」と、註に「疾危殆ニシテ彌甚ダシクシテ留連スルナリ」

【皮裏陽秋】心にて可否するをいふ、書言故事に「胷中ノ褒貶ヲ、皮裏ノ陽秋トイフ、晉ノ褚裒字ハ季野、桓彝之ヲ目シテ曰ク、季野ハ皮裏ノ陽秋ト、其ノ外ニ臧否スル所ロ無クシテ、內ニ褒貶スル所ロアルヲイフ也」とあり、陽は春なり、晉は簡文后の諱、阿春なるを以て春を諱む、故に陽秋といふ、春は萬物を發生す、褒に喩ふ、秋は萬物を肅殺す、貶に喩ふるなり、一解に春秋は孔子の筆削に係り、褒貶甚だ嚴なるをいふと、從ふべし、唐庚の詩に「見說胸中卷雲夢、莫將皮裏貯陽秋」

【比倫】「ナカマ」「トモガラ」「クラベモノ」仁宗皇帝の勅學文に「映觀無學人、無物堪——」

【比鄰】近く接近する義、王勃の句に「天涯若——」

【飛輪】日の異名、許堯佐の詩に「流景再節——頓勞」

【鄙吝】吝は悋に同じ、「イヤシキ心をいふ通鑑に「陳蕃周景等曰、時月之閒、不見黃生二黃憲をいふ則——之萌、復存乎心矣」

【彌綸】徧く理むる義、易の繫辭上傳に「易與天地準、故能——天地之道」一解に、彌は彌縫補闕なり、綸は選擇條理の意あり、

【飛龍天ニ在リ】（飛龍在天聖人が帝位に在るに喩ふ、易經乾卦に「——レ——、利見大人」聖人位に在る時は、大德の人を見て共に天下の事を成すに利ありとなり、史記禁澤傳に「國有道則仕、國無道則隱、聖人曰、——レ——利見大人」

【尾閭洩セドモ乾カズ】太平記卷三十四に見ゆ、莊子秋水に「天下之水、莫大於海、川歸之不知何時止、而不盈、尾閭泄之不知何時已、而不虛」尾閭は海水を泄すの處、碧海の東に在りと、

【盡ヲトシ未ダ夜ヲトセズ】（下盡未下夜）盡閉の善きことはトひて知らずとの義、左傳莊公二十二年に「飲桓公酒樂、公曰、以火繼之、辭曰、臣下其盡、未下其夜」

一行有餘力則以學文」とあり、汎愛は偏狹なく博く衆を愛するなり、親は衆の人をいふ、親しむべきを親しみ、汎愛すべきを汎愛するなり、人に接するには誰彼の差別なく廣く衆人を愛し、その中にて仁德ある人はこよりも近づき親むときは

【親ク狎ヒテラ筋ク志ス】論語子張篇に「博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣」未註に「四者學問思辨之事、切己而有益於仁、然徒博於此、則心不外馳、又未及乎力行而爲仁也、故=有=此=戒=一、尹氏曰「博學篤志、切問近思、皆所=以存=其=心=一、楊氏曰「學者於=此=四=者=、苟=知=其=序=而=用=力=焉=、則=日=新=又=新=矣=」

【非禮勿視ルル勿レ】非禮勿視非禮とはこゝの私欲なり論語顏淵篇に「顏淵問=仁=一、子曰「克=己=復=レ=禮=爲=レ=仁=、一日克=己=復=レ=禮=、天下歸=レ=仁=焉=、爲=レ=仁=由=レ=己=、而=由=レ=人=乎=哉=、顏淵曰「請問=其=目=一、子曰「非=禮=勿=視=、非=禮=勿=聽=、非=禮=勿=言=、非=禮=勿=動=一、顏淵曰「回雖=不=敏=、請=事=斯=語=矣=一、顏淵退而省=其=身=、見=其=有=レ=違=レ=仁=一、子曰「賜也、始可=與=言=詩=已=矣=一、子貢退而省=其=身=、亦=能=發=レ=明=レ=性=與=天=道=一、子曰「商也、始可=與=言=詩=已=矣=一、子夏退而省=其=身=、亦=能=以=故=者=比=焉=一、子曰「回也其=庶=乎=屢=空=一、賜不=受=命=而=貨=殖=焉=、億=則=屢=中=一、子曰「回也非=助=我=者=也=、於=吾=言=無=所=不=說=一、子曰「回也其=心=三=月=不=違=レ=仁=、其=餘=則=日=月=至=焉=而=已=矣=一、

【非類ニ秩ケズ】不祀非類鬼神はその族類にあらざる祭享を受けざるの義、左傳十年に「晉侯將=レ=死=、韓宣子有=レ=憾=於=魏獻子=一、獻子病=レ=之=、以=告=范宣子=一、宣子曰「君之百官、其=誰=不=有=レ=憾=、子=盍=亦=憂=レ=之=一、獻子曰「吾=聞=之=、非=類=不=祀=、祀=非=其=族=、必=有=レ=咎=一、吾=子=爲=レ=政=、而=祀=其=父=於=洹=、不=亦=可=乎=一、宣子說=レ=之=、乃=祀=桓=子=於=洹=一、

【日臣即之神ノ一民不祀非族君祀無乃殄乎】「日臣即之神ノ一民不祀非族君祀無乃殄乎」

【秋ハ愛ナリ】秋は愛なり、

【畳遝那ヲ見ヨ】（畳遝那ヲ見ヨ）

【容恕ノ一ツ】容恕の一つ、

【城北徐公齊國之一ツ】城北徐公齊國之一者也「まだすべて物のキレイ」

【美麗ニ】美麗なる義に用ふ、

【非禮勿視ルル勿レ】非禮勿視非禮とはこゝの私欲なり論語顏淵篇に「顏淵問=仁=一、子曰「克=己=復=レ=禮=爲=レ=仁=、一日克=己=復=レ=禮=、天下歸=レ=仁=焉=、爲=レ=仁=由=レ=己=、而=由=レ=人=乎=哉=、顏淵曰「請問=其=目=一、子曰「非=禮=勿=視=、非=禮=勿=聽=、非=禮=勿=言=、非=禮=勿=動=一、顏淵曰「回雖=不=敏=、請=事=斯=語=矣=一、顏淵退而省=其=身=、見=其=有=レ=違=レ=仁=一、子曰「賜也、始可=與=言=詩=已=矣=一、子貢退而省=其=身=、亦=能=發=レ=明=レ=性=與=天=道=一、子曰「商也、始可=與=言=詩=已=矣=一、子夏退而省=其=身=、亦=能=以=故=者=比=焉=一、子曰「回也其=庶=乎=屢=空=一、賜不=受=命=而=貨=殖=焉=、億=則=屢=中=一、子曰「回也非=助=我=者=也=、於=吾=言=無=所=不=說=一、子曰「回也其=心=三=月=不=違=レ=仁=、其=餘=則=日=月=至=焉=而=已=矣=一、

【博ク學ビテ篤ク志ス】論語子張篇に「博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣」未註に「四者學問思辨之事、切己而有益於仁、然徒博於此、則心不外馳、又未及乎力行而爲仁也、故=有=此=戒=一、尹氏曰「博學篤志、切問近思、皆所=以存=其=心=一、楊氏曰「學者於=此=四=者=、苟=知=其=序=而=用=力=焉=、則=日=新=又=新=矣=」

フ

【賦】 もと詩の一體にして韻語を用ひ、直ちにその事を賦敍するものなり、されども司馬相如が上林子虛の二賦揚雄が甘泉賦、班固が兩都賦より、張衡が兩京賦、左思が三都賦の如き、歷代の作家多く力を此に用ひ、遂に文の一體となるに至れり、文選に載する所ろを見ても、その盛を推知すべし、藝文志にいふ「不歌而誦謂之賦、登高能賦、可以爲大夫、言感物造端、材知深美、可與圖事、故可以爲列大夫也」と、蓋し古昔周の盛時に當りては諸侯卿大夫以下皆微言を以て相感じ、詩を誦してその志を瞻せしが、その衰ふるに及び、聘問歌咏の事、列國に行はれず、詩を學ぶの士は、隱れて民閒に在り、而して賢人志を失ふの賦由りて作るあり、楚の屈原忠を含み潔を履みて世に容れられず、耿介の志、遊るところなく、之を辭に發し、竟に後世賦體の法門を開き、その弟子宋玉の徒、その遺響を嗣ぎて賦體全く成るに至れり、我が國に在りても、貞觀延喜の盛時の如き、苟も文章を作る者は、皆賦を以て主要とせざるはなし、所謂駢儷體の文は蓋し亦賦より轉じ來れる者に似たり、後世清の沈德潛が唐宋八家文を選するに當り、賦を以て古詩の流と爲してその選本に采入せざりしは、頗る古義に合せりといへども、之を古今に通觀するときは、稍偏執に失するの憾なき能はず、されども爾來八家の文世に盛行するに隨ひ、賦體の文は漸く衰微に歸するに至れり、

【賻】 死者ある家族に貨財を贈りて喪を助くるをいふ、またその貨財をいふ、北史に「故贈賻有加」とあり、賞賻は死者の功を賞してその家に贈るなり、荀子大略篇に「貨財ヲ賻トイヒ、與馬ヲ贈トイヒ、衣服ヲ遺ト曰フ」

【不意】 不慮に同じ、戰國策に「卒起」——盡失其度ニ

【布衣】 布衣は、庶人の服なり、故に官位なき庶人（ヘイミン）をいふ、史記の田單傳に「王蠋ハ布衣ナリ、義、燕ニ北面セズ、況ヤ位ニ在リテ祿ヲ食ム者ヲヤ」同書蘇秦傳に「蘇秦謂趙肅公ニ曰、天下卿相人臣及——之士、皆高賢君之行義ニ聽鐵論に「古者庶人耆老シテ後、絲（さぬ）ヲ衣ル、其ノ餘ハ則チ麻枲ノミ、故ニ命ジテ——ト曰フ」

國語にて布衣といふは狩衣の無文のものをいふ（古

ハ布製ナリキ）延べて「ホウイ」ともいふ、無文の狩衣は六位以下の人の服するところなれば、轉じて六位以下の官人をも稱す、

【巫醫】 「カンナギ」と「クスシ」と、論語に「人而無恒不可以作——」汲家の周書に「武王既勝殷、鄉立——具百藥以備疾哀」

【斧扆】 あか色の質に斧を多がける「ツイタテ」屏風、天子が諸侯に對する時に、これを後にして、南面するもの、高さ八尺あり、禮記に「天子——、南鄉而立」淮南子に「負扆而朝」諸侯ニ斧の柄なきを畫けるは設けて用ひざる義なり、

【負扆】 （斧扆）を見よ、

【布衣韋帶之士】 布の衣を衣、單韋を帶とす、貧賤の人の稱、漢書賈山傳に「布衣韋帶之士、修身於內、成名於外ニ帶一に佩に作る、

【孚佑】 孚は允なり、信なり、佑は「タスクル」なり「アック」惠み助くる義、書經湯誥に「上天孚佑下民、罪人黜伏」

【蜉蝣】 小さき蟲、朝に生じ暮に死すといふ、爾雅の疏に「一名渠略、似蛣蜣、身狹而長、有角黃黑色、叢生糞土中ニ朝生暮死」とあり、和名「カゲロフ」「イサゴムシ」の羽化せるもの、秋の半に水邊に多く飛ぶ、長さ六七分、首は蜻蛉に似て甚だ小さく、翅薄くして四翅一處に重なる、身は狹長にして多くは淡黃なり、尾は甚だ長く、細くして絲の如し、詩の曹風——篇に「——之羽、衣裳楚楚」淮南子の說林訓に「鶴壽千歲、以極其遊、——朝生而暮死、而盡其樂ニ徒然艸にも「かげろふの夕をまち、夏の蟬の春秋を知らぬとあるぞおし」と見ゆ、

【蜉蝣ノ一期】 人生の短きに喩ふ、蜉蝣は、短命の蟲なり、一期とは、一生涯なり、白樂天の詩に「長生無得者、舉世如蜉蝣」また蘇東坡の赤壁賦に「寄蜉蝣於天地」の前條を見よ、

【武夷九曲】 武夷山は、今の福建省建寧府崇安縣に在り、山に九曲溪あり、風景絕佳なり、朱熹に——歌あり、事類統編卷二十一、地輿部福建省の條「武夷千載神棲」の註に「武夷山、在崇安縣南三十里、道書以此爲第十六洞化元之天、相傳昔有神人曰武夷君者、居此故名、漢武嘗祀之」また「九曲櫂歌」の註に「九曲溪在武夷山中ニ

【覆育】 「オホヒ」て育つる義、淮南子に「昫論——萬物群生」詩經小雅の「長我育我」箋に「育ト、——ナリ」

【嘯】 火を吹き起す具、音「ハイ」藁箭皮排・鼓幅・風箱皆

同じ、

【不乙】　凡そ書を讀み、筆を以て其の止まる處を誌すを乙といふ、史記東方朔傳に「朔初上書、人主從上方讀之、止輒乙、其處讀三月乃盡」書牘の結尾に、——と記すは、止まらずといふ意にして、不盡に同じ、

【不竟】　終始德を一にせざる者をいふ、左傳に「不穀惡其無成德、是以宣之懲——」

【無逸】　書經の篇名(——)を見よ、

【布衣之交】　貧賤の交をいふ、史記閻柏如傳に「——、尙不相欺、況大國乎」戰國策に「衞君與文——」文は孟嘗君の名(布衣)を見よ、

【訃音】　死去の報知をいふ、訃一に赴また報に作る、喪を告ぐるなり、左傳隱七年に「凡諸侯同盟、薨則赴以名」赴訃報三字古、竝に通ず、

【舞雩】　夏日雨を天に祈る祭「アマゴヒ」禮記の月令に「仲夏大雩」とあり、また天を祭り雨を祈る處にして壇樹木等ある地をもいふ、論語先進篇に「風乎——詠而歸」

【馮夷】　(馮夷)を見よ、

【馮異】　字は公孫、潁川父城の人、左氏春秋・孫子の兵法に通ず、光武に事へて主簿となる、光武河北を徇ふ、王郎の兵起るに値ふ、乃ち馳せて饒陽蕪蔞亭に至る、天寒く飛飢う、異、豆粥を進む、南宮に至る、又麥飯を進む、信都に至り偏將軍に拜す、異人と爲り謙退なり、諸將功を論ずるに、異獨り大樹の下に坐す、軍中號して大樹將軍と爲す、後ち陽夏侯に封ぜらる、

【風雨ヲ避ケズ】　(不ノ避ニ風雨ニ)艱苦を避けざる義、漢書朱博傳に「隨從士太夫——」

【風雨時】　漢書晁錯傳に「日月光、——」

【風雲月露】　文章の浮薄にして、はでやかに、實質の乏しきをいふ(連編累牘)を見よ、

【風雲之會】　明主賢臣の遭合するをいふ、易經乾卦の文言に「雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩」とあるに由る、また龍が風雲を得て上天する如く、豪傑が時機に投じて志を達するをいふ、後漢書馬武傳に「咸能感會風雲、奮其智力」

【風鳶】　「イカノボリ」「タコ」唐書田悅傳に「以紙爲——(風箏)」を見よ、

【風雅】　詩の國風と、大小雅となり、轉じて詞章の義となし、また「ミヤビヤカ」なる義とす、文選の序に「——之道、粲然可觀」

【風槩】　風格節槩の義、人品の高雅なるをいふ、晉書桓溫傳に「溫豪爽有風槩、姿貌甚偉」とあり、また風景勝槩の義にも用ふ、槩は趣致の義「オモムキ」

【風雅頌賦比興】　(六義ノ)を見よ、

【風流】　「キチガヒ」風は瘋なり、玉泉子に「奈何放此——及第」

【風岸】　人となり「カドカドシク」して「タクマシキ」をいふ、唐書官者傳に「稜稜有——」

【諷諫】　遠まはしに物にたとへて異見するをいふ、舊唐書職官志に「凡諫有五、一曰——、二曰順諫、三曰規諫、四曰致諫、五曰直諫」史記滑稽傳に「優孟常以談笑——」

【風儀】　「ミメカタチ」五代史劉煦傳に「煦爲人美——」

【舞雩歸詠】　論語の先進篇に出づ、曾點の語に「暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸」とあり、註に「舞雩ハ、天ヲ祭リ、雨ヲ祈ル處、壇墠樹木アリ」朱熹の四時讀書樂の詩に「——春花香」

【富貴花】　牡丹の異名、周茂叔の愛蓮說に「牡丹花之富貴者也」

【富貴草頭露】　太平記卷三十八に見ゆ、杜甫の句に「富貴何如草頭露」とあり、又東坡の詩にも「生前富貴草頭露、身後風流陌上花」

【富貴他人合ス】　晉の曹攄の感舊詩に「——貧賤親戚離」とあり、人情の輕薄にして炎に就き涼に背く態を嘆ぜしなり、續晉陽秋に「殷浩雖廢黜、喪神委命、雅詠不輟、外甥韓生始隨至徙所、周年還都、浩送至水側、乃詠曹顏遠詩曰、——、——、因泣下、其悲見于外、——者、惟此一事而已」

【富貴天ニ在リ】　人の富み貴くなるのは天命によるものなれば、強ひて求めて得べきにあらずとの義、論語の顏淵篇に「司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡、子夏曰、商聞之矣、死生有命、富貴在天云云」死生富貴皆天命あり、人はこの天命に安んじ順に受けて辭せざれとの夫子の言を引きて、兄弟の有無も亦天命なれば必ずしも憂ふべきにあらずと慰めたるなり、

【富貴ナレバ驕奢ヲ生ズ】　(富貴生ニ驕奢一)富貴の身となれば心弛みて「オゴリ」の心起るをいふ、寶鑑に「——驕奢生淫亂、淫亂生貧賤、貧賤生勤儉、勤儉生富貴」

【富貴ナレバ他人モ合ヒ、貧賤ナレバ親戚モ離ル】　文選卷八の晉の曹顏遠の感舊詩に「富貴他人合、貧賤親戚離」とあり、陽冠子に「家富疎族聚、居貧、兄弟離」とあるも、意同じ、

【富貴ノ三患】 富貴の人の通患三つある義、呂氏春秋本性篇に「出ヅルトキハ車ヲ以テシ、入ルトキハ輦ヲ以テシ、務メテ以テ自ラ佚ス、之ヲ命ケテ招蹙ノ機ト云フ、肥肉厚酒、務メテ以テ相強フ、之ヲ命ケテ爛腸ノ食ト云フ、靡曼皓齒鄭衛ノ音、務メテ自ラ樂ム、之ヲ命ケテ伐性ノ斧斤トイフ、コノ三患ハ富貴ノ致ストコロナリ」

【富貴ノ人ヲ畏ルルハ貧賤ノ志ヲ肆マニスルニ若カズ】 高士傳に紫芝歌(四皓ノ作トイフ)あり曰く、

莫莫高山、深谷逶迤、曄曄紫芝、可以療飢、唐虞世遠、吾將何歸、駟馬高蓋、其憂甚大、富貴之畏人兮、不若貧賤之肆志

【富貴ハ浮雲ノ如シ】 (不義ノ富貴)を見よ、

【富貴モ淫スル能ハズ】 (貧賤モ)を見よ、

【風魚之災】 韓愈の送鄧尚書序に見ゆ、颶風と鰐魚との災をいふ、同人の潮州謝上表にも「颶風鰐魚患禍不測」とあり、

【風化】 風は諷なり、人を諷し導きて、善に化せしむる義、風教に同じ、卜商の詩經序に「關雎后妃之德也、風之始也、所以——天下而正夫婦也」

【風花香シ】 宋史樂志に「陽春白日——」

【風花雪月】 四時のすぐれたる景物をいふ、鄭谷の寄趙大諫詩に「雪風花月好、中夜便招延」

【風敎】 風は諷なり、民の「ナラハシ」によりて諷誡敎化するをいふ「ヲシヘ」詩經の序に「風風也、敎也、風以動之、敎以化之」風化に同じ、

【楓橋ノ夜ノ泊】 太平記卷十八に見ゆ、唐の張繼の詩、「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠」姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」とある詩の題なり、

【風穴】 任昉の述異記に「列禦寇、鄭人、御風而行、常以立春日候乎八荒、立秋日遊於——、是風至卽草木皆生、去則草木皆落、謂之離合風」

【風月主人】 風光の美なる地に就任するを——といふ、五代史に「歐陽彬文辭ヲ善クセリ、蜀主祠以テ嘉州ノ太守トナス、彬大ニ喜ンデ曰ク青山綠水中ニ二千石トナリ、詩ヲ作リ酒ヲ飮ンデ、風月ノ主人トナル、豈誠ニ喜バシカラスヤト、忻然トシテ任ニ就ケリ」

【風月ノ本主】 太平記卷十二に見ゆ、黃山谷の詩に「試問淮南風月主、の注に「江山風月本無常主、閑者便是主人」と、嘯月吟風の盟主たるの義なり、

【楓吳江ニ落ツ】 (楓落吳江)見るところに及ばざるに用ふ、唐書崔信明傳に「鄭世翼過信明江中、謂曰、聞公有楓落吳江冷願見其餘、信明欣然多出兼篇、世翼讀未終曰、所見不逮所聞、引舟去」

【風采】 風儀文采をいふ、また威風光采の義にも用ふ、漢書霍光傳に「天下想聞其——」韓愈の詩に「寤寐想——於今已三年」

【風箏】 「イカノボリ」「タコ」詢蒭錄に「——ハ卽チ紙鳶マタ風鳶ト名ヅク(中略)鳶首ニ竹ヲ以テ笛ヲ作ル、風入リテ聲ヲナサシム、箏ノ如シ、故ニ名ヅク」と、楊升菴集には「古人殿閣窻稜ノ閒、風琴——アリ、皆風ニ因リ、動イテ音ヲ成シ、自ラ宮商ニ諧フ」と、されば風鈴、窻馬殿鈴の類なるべし、

【風箱ノ氣】 文章のつよくはげしき義、世說に「淮南王安、著書二十篇號淮南子、自云、字中皆挾風霜之氣」西京雜記にも見ゆ、文字の烈しきこと風霜の氣、人の肌に感ずる如きをいふ、

【風草ノ德】 君子の德を風に比し、小人の德を草の風になびき從ふに比するなり(君子ノ德)を見よ、

【夫子】 先生長者をいふ、史記孔子世家の贊に「中國言六藝者、折中于——」可謂至聖矣、論語憲問篇に「信乎——不言不笑不取乎夫子は衛の大夫公叔文子を斥す、

【風姿】 「スガタ」姿は形貌なり、晉書王衍傳に「王衍字夷甫、神清明秀、——諱雅」

【風刺】 遠まはしに上の政などの非を「ソシル」をいふ、詩經關雎の序に「詩有六義焉、一曰風、上以風化下、下以——上、主文而譎諫、言之者無罪、聞之者足戒、故曰風、註に風化——ハ皆譬論シテ直言セザルヲ謂フナリ」

【風師】 風の神、風俗通の祀典に「——者箕星也」箕星は二十八宿の一、次條を見よ、

【颿師】 風の神、風伯に同じ、颿は風の古文、周禮春官に「祀——」(——)を見よ、

【封事】 (——)を見よ、

【風字硯】 風の字の形につくりたる硯、硯譜に「會稽有老叟云、右軍(王羲之)之後、持一——、大尺餘、色正赤、用之不減、端石云右軍所用石」

【風疾】 「キチガヒ」「ランシン」唐六典に見ゆ、失心、心疾、心風、喪心、病狂皆同じ、

【夫子自道】 自分の事を自分で言ふの義、道は言なり、

論語憲問篇に「子曰、君子道者三、我無能焉、仁者不憂、知者不惑、勇者不懼、子貢曰、——也」

【丰】 丰は草の盛なる貌、轉じて顔の圓く肥えて「ミメヨキ」なり、詩經鄭風丰篇に「子之——兮」註に「容色美好ノ貌」

【楓宸】 朝廷をいふ、說文に「楓木厚葉弱枝善ク搖ク、漢ノ宮殿中ニ多ク之ヲ植ウ、霜後ニ至リ、葉丹クシテ愛スベシ、故ニ——ト稱ス」成語考に「——乃天子所涖」註に「帝居ヲ宸トイフ」

【風樹之歎】 (風木ノ)を見よ、

【風色】 風の色なり、天氣の義にも用ふ、何遜の詩に「——極天淨」盧照鄰の詩に「今朝——好」

【風水】 陰陽家の說にて墳墓を相する術なり、風水宜しきを得れば、子孫繁昌するといふ、張子全書に「葬法有——山岡之說、此全無義理」司馬溫公葬論に「孝經云、卜其宅兆、非若今陰陽家相其山岡——也」朱子語錄に「古今建都之地、莫過于冀、所謂無風以散之有水以界之也」

【風馬牛モ相及バズ】 (風馬牛不相及)左傳の僖四年に「齊侯諸侯ノ師ヲ以テ蔡ヲ侵ス、蔡潰ユ、遂ニ楚ヲ伐ツ、楚子師ト言ハシメテ曰ク君處北海、寡人處南海、唯是風馬牛不相及也、不虞君之涉吾地也」とあり、風は、放なり、馬牛の牝牡相誘ふをいふ、兩地遠く隔るを以て、牝牡相誘ひて、遠く放逸する馬牛も、兩地の界に入ること能はざる義なり、書經の費誓に「馬牛其風、臣妾逋逃、勿敢越逐」また陸游の詩に「醉自醉倒愁自愁、愁與酒如風馬牛」

【風聲】 土地風俗に因りて爲めに聲敎の法を立つるなり、書經畢命に「旌別淑慝、表厥宅里、彰善癉惡、樹之——」注に「淑ハ善、慝ハ惡、癉ハ病ナリ」左傳文六年に「竝建聖哲、樹之——、分之采物」

また、人の消息を聞く義、三國志蜀志許靖傳の注に「王朗與靖書曰、聞消息于——、托舊情于思想」

【風聲鶴唳】 つまらぬ事に感じて、痛く驚き怖るる義に用ふ、晉書謝玄傳に「苻堅衆號百萬、列陣臨淝水、幼度以精銳八千涉水、堅衆奔潰、棄甲宵遁、聞——皆以爲王師已幼度は玄の字なり、平維盛の、水禽の聲に驚きて、走りたるも此に似たり、唳は鶴の鳴聲なり、

【馮昭儀熊ニ當ル】 漢書外戚傳に「元帝ノ馮昭儀ハ左將軍奉世ノ女ニシテ、平帝ノ祖母ナリ、僖仔ニ拜ス、內寵傳昭儀ト等シ、上虎圈ニ幸シ、獸ヲ鬪ハシム、後宮皆坐ス、熊逸シテ圈ヲ出デ、檻ヲ攀デ殿ニ上ラント欲ス、左右貴人傅昭儀等皆驚走ス、僖仔直チニ前ミ、熊ニ當リテ立ツ、左右熊ヲ搏殺ス、上問フ人情驚懼スルニ、何ガ故ニ前ンデ熊ニ當レルゾト、對ヘテ曰ク、猛獸ハ人ヲ得テ止マル、妾熊ノ御座ニ至ランコヲ恐ル、故ニ身ヲ以テ之ニ當リシナリト、上嗟嘆シテ倍ス敬重シタマヒキ」昭儀、僖仔は共に漢代女官の名、昭儀は我が朝の女御、僖仔は一に嬉妤に作る、更衣に當る、

【風俗】 上の化する所ろを風といひ、下の習ふ所ろを俗といふ、孝經に「移風易俗、莫善於樂」禮記樂記に「移風易俗、天下皆寧」漢書の地理志には「民ノ剛柔緩急音聲ノ不同ハ、水土ノ風氣ニ係ル、故ニ風トイヒ、好惡取舍動靜常ナク、君上ノ情欲ニ隨フ、故ニ之ヲ俗トイフ」朱熹の大學序に「敎化陵夷、——頹廢」

【風俗通義】 十卷、後漢の應劭撰す、略して風俗通といふ、卷毎に總題あり、題毎に散目あり、總題にその大意を陳べ、散目には先づその事を詳かにし、案語を附してその得失を辨正す、之を風俗通義といふは、流俗の誤認を通じて、之を義理に合せしむるの義、この書、物類の名號を辨ずるは白虎通に似、流俗を糾正せるは略王充論衡に似たり、讀みて博洽を資くべし、萬治三年の和版(明ノ鍾惺ノ評本)あり、

【風刀】 正法念經に「命終ルノ時、刀風皆動ク、千尖ノ刀ソノ身上ヲ刺スガ如シ(中略)若シ善業アルトキハ則チ多ク苦惱セズ」

【風中ノ燭】 風の中の燭火は消え易し、以て人生の「ハカナキ」に喩ふ、古樂府怨詩行に「百年未幾時、奄若——」杜詩の注に「晉阮瞻九日會親友曰、人生如——、不知明年此日再開此會、誰是強健」

【風塵】 濁世の義、庾翼の書に「兄弟自不能拔於——之外ニ(——表物)を見よ、

また世累俗累塵累の義、陸機の詩に「京洛多——、素衣化爲緇」

また官途また吏務をいふ、晉書虞喜傳に「處靜味道無——之志」杜甫の詩に「悲君隨無雀、薄官走——」

また汚濁の義より轉じて花柳の巷をいふ、雜說に「妾失身——」

また兵亂をいふ、杜甫の詩に「——三尺劍、祉稷一戎衣」

【風塵之警】 兵亂をいふ、漢書終軍傳に「邊境時有——」

【風塵表物】 晉書陶瑣傳に「風塵之變、出於非常」

世俗の外に超出せる人を稱す、晉書王衍傳に「王戎謂王衍曰、神姿高徹、如瑤林瓊樹、自然是——」

——世說には表を外に作る、同じ

【風土】氣候と土地との「アリサマ」晉書周處傳に「有——記十卷」

【風雷】雷は釋名に「風而雨、土曰雷、雷晦也」とあり、

【風貌】「ヲトコブリ」北夢瑣言に「路侍中出殿——之美爲世所聞」と、同書に「裴度——不揚」とあり、不揚とは醜にして「ヒキタタヌ」貌、

【風伯】風の神をいふ、禪師に同じ、韓非子に「——進掃雨師灑道」淮南子原道訓に「使——掃塵」

【風癨ノ論】僧の疎闊を敍するに「疎奉風癨之論」といふ、傳燈錄に「六祖惠能、初寓法性寺、風揚旛動、有二僧爭論、一云風動、一云旛動、六祖曰、風旛非動、動自心耳」言ふこころは、風の動くにあらず、亦旛の動くにもあらず、乃ち汝が心の動く所ろなり、修行者は、ただ其の心を正しくすべし、必ずしも風旛を論ぜずとの義、

【風靡】風の草木を「ナビカス」如く從ふをいふ、史記淮陰侯傳に「無從風而靡」

【夫婦】「オット」と妻と、メウト」易の序卦傳に「有天地然後有萬物、有萬物、然後有男女、有男女、然後有——、有——、然後有父子」同家人に「女正位乎內、男正位乎外、父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正矣」禮記禮運に「——和家之肥也」中庸に「君子之道造端乎——及其至也、察乎天地」孟子滕文公篇に「——有別」同萬章篇に「男女居室、人之大倫也」

【贈內】生爲同室親」死爲同穴塵」他人尙相勉、而況我與君、豁達固窮士、妻賢忘其貧、粟缺一農夫、妻敬儼如賓、陶潛不營生、翟氏自裂裙、梁鴻不肯仕、孟光甘布裙」君雖不讀書、此事耳亦聞、至此千載後」傳是何如人、人生未死閒、不能忘其身」所須者飮食、不過飽與溫、蔬食足忘飢、何必膏粱珍、綈絮足禦寒、何必錦繡文、君家有貽訓」清白遺子孫」我亦貧苦士、與君新結婚、庶得貧與素、偕老同欣欣

【風丰】丰は一音バウ豐滿なり、一解に、美好の貌、風姿の美はしさをいふ、詩經鄭風丰篇に「子之丰兮、俟我於巷兮」

【風聞】「ホノカ」に聞く義、之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「——老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」また根據なき語をいふ、晉書顧和傳に「對王導曰、明公使網漏吞舟、何忍采——以察察爲政」

【夫婦能飮】韋文類聚後集卷十四に「齊(南北)沈文季飮酒五斗、妻王氏亦至三斗、爲吳興太守、常對飮竟日、而親事不廢」

【風木之悲】風樹之歎に同じ、父母をうしなひて奉養することを得ざる悲なり、韓詩外傳に「夫樹欲靜、而風不止、子欲養、而親不待、往而不可返者年也、逝而不可追者、親也」

【浮雲之志】浮べる雲の如き不義の富貴を惡める志をいふ不義ノ富貴ヲ見よ、また文選班固答賓戲に「仲尼抗——孟軻養浩然之氣」

【浮雲ノ富貴】(不義ノ富貴ハ)を見よ、

【風味】高尙なる好味をいふ「オモムキアルアヂ」陳師道の詩に「——若麴君」麴君は酒の異名、また麴生ともいふ、開天傳信記にも「麴生——不可忘也」

【風流】風度溫雅なるをいふ、洒落の義「ミヤビタルコト」晉書王獻之傳に「少クシテ盛名アリ、而シテ高邁不羈——一時ノ冠タリ」

また樂廣傳に「廣、王衍ト俱ニ心ヲ事外ニ宅キ、名、時ニ重シ、故ニ天下——ヲ言フ者ハ、王樂ヲ以テ稱首ト爲ス」

また先人の遺風餘流の義とす、後漢書王暢傳に「士女沾敎化、黔首仰——自中興以來、功臣將相繼世而隆」北史李彪傳に「金石可滅、而——不泯者、惟載籍乎」

【風流罪過】法律上の罪にならざる罪をいふ、北齊書郎基傳に「基爲潁川太守、淸愼無所營求、唯頗令寫書、潘子義遺之書曰、在官寫書、亦是——」書を寫さしめたりとも法にも觸れず、人をも害せざればなり、

【風流ナラザル處却リテ風流】(不風流處、却風流)眞の風流は無風流の如くなる處に存ずるをいふ、喩曉集に「沈樞謂鴛州携二妓去、數年歸嫁、皆處子、潘方壽以詩寄曰、鐵石心腸延壽藥、——」

【風輪】梵語、虛空の上に在りといふ、俱舍論世閒品に「先於最下依止虛空有——生、廣無數、厚十六億踰繕那、踰繕那は由旬に同じ、虛空は即ち空輪なり、輪とは形の横に圓きより名づく、——の上にたまる水層を水輪といふ

【笛】音テキ說文に「樂管亦簹ニ作ル」風俗通に「武帝ノ時丘仲笛ヲ作ル、笛ハ滌ナリ、邪志ヲ滌滌シテ之ヲ雅正ニ納ル、長サ尺四寸七孔」通雅に「雅笛アリ羌笛アリ」正字通には「西京雜記ニ、高祖初入咸陽宮得玉笛ト

アルニヨレバ、風俗通ノ、笛ハ武帝ノ時、丘仲作ルトイフハ誤レリ」といへり。事類統編 巻四十四に甘澤謠を引きて「許雲封曰、落梅流韻、感二金谷之游人一、折柳傳情、悲二玉關之戍客一」落梅・折柳は笛曲の名なり、馬融に長笛賦あり文選巻五に出づ（隣笛）を參看せよ、

【浮棄】 うきたる世俗の「サカエ」王融の句に「——未レ能レ捨」

【扶搖】 「テラシ」暴風をいふ、爾雅釋天に「——謂二之焱一」フエウの合音ヘツなるによりて飄の字の義とす、また曰く「暴風從下上亦曰——」風」莊子逍遙遊篇に「搏——羊角而上者、九萬里」

また勢よく發動する義、淮南子覽冥訓に「——而登レ之」また扶桑の義、莊子在宥篇に「雲將東遊、過——之枝」而適遭二鴻蒙一」音義に「扶マタ夫ニ作ル、——ハ神木ナリ、東海ニ生ズ」（扶桑）を參看せよ、

【斧鉞】 「ヲノ」「マサカリ」連文釋義に「戚爲レ斧揚爲レ鉞、斧小于鉞、鉞大于斧」轉じて「ヲノ」にて斬らるる重き刑をいふ、國語の周語の注に「——ハ大刑ナリ」

【鈇鉞】 「マサカリ」禮記王制に「諸侯賜二弓矢一而後征、賜二鈇鉞一然後殺」また春秋繁露に「公侯賢者、爲二州方伯一錫二鈇鉞一得二虎賁百人一」とあり、說文に「鈇ハ、莝斫刀」左傳昭公十五年の疏に「鈇大而斧小」とあり、白虎通致黜に「——所二以斷一大刑一」

また征討主將の威信を表するために執るものなり、唐書百官志に「凡將出征、告二廟授一——」

【傅說】 殷の相、賢德あり、傅巖の下、水、道を壞る、常に胥靡をして之を築かしむ、說胥靡のために代りて築き、以て食を供す、殷の高宗恭默して道を思ふ、帝良弼を資ふと夢む、象を以て之を求め、遂に立てて相となす、孟子の告子下篇に「孟子曰、舜發二於畝一傅說舉二於版築之閒一」

【傅說列星ト爲ル】 （傅說爲二列星一）蘇軾の潮州韓文公廟碑の句、莊子の大宗師に「傅說得レ之以相二武丁一、奄有二天下一乘二東維一騎二箕尾一而比二於列星一」注に「東維ハ箕斗之閒、天漢津ノ東維ナリ」

【敷衍】 「ノベヒロガル」文選の張衡の西京賦に「篠蕩——編二町成篁一」

【附炎棄寒】 （炎ニ附キ寒ヲ棄ツ）（炎ニシテ附キ）を見よ、

【婦ヲ敎フルハ初來ニス】 （敎婦初來）婦を敎ふるには、初めて來りし時に、篤と敎へよ、慣れて後は、敎へ難しとなり、顏氏家訓に「俗諺ニ曰ク、婦ヲ敎フルハ初來ニセヨト、誠ナル哉、此ノ語」とあり、

【斧ヲ掲ゲテ淵ニ入ル】 （掲斧入レ淵）（斧ヲ掲ゲ）を見よ、

【符ヲ剖ク】 （剖レ符）符節を剖ち與へて、諸侯に封ぜし驗とするをいふ、史記高祖紀に「論レ功與二諸列侯一——行レ封」符は瑞信、はじめて封を賜はるとき、その半を分ちて之に與へ、半を朝廷に留めて信となすもの、剖は分なり、

【武ヲ接ユ】 （接レ武）武は足跡なり、後者の足、前者の跡の半を踏む、故に接ゆといふ、禮記に「君與レ尸行——、大夫繼レ武、士中レ武、徐趨皆用レ之」

【武ヲ用フルノ國】 （用二武之國一）兵を用ひて敵を制するに宜しき地をいふ、史記留侯世家に「雒陽雖レ有二此固一、其中小不レ過二數百里一、田地薄、四面受レ敵、非二用レ武之國一也」

【不佳】 體中少しく佳ならざる義にて、輕き疾をいふ、資治通鑑漢桓帝延熹七年郭泰の條の字面、

【負荷】 父の業を受けつぎて、その任にたふる義、左傳昭七年に「古人有レ言、曰、其父析レ薪、其子弗レ克——」とあるに本づく、轉じて師の學を受けつぎ、若くはひろくその負はされたる任にたふる義とす（析レ薪ヲ）を參看せよ、

【浮誇】 浮華誇大をいふ、韓愈の進學解に「春秋謹二嚴ノ一、左氏ノ——」

【布告】 あまねく敷きて示す義、史記呂后紀に「事已——天下一」

【俛仰】 俛は俯に同じ、俯したり、仰いだりする義、升降に同じ、淮南子に「與二道沈浮一——一世につれて忤ふことなきをいふ、

【俯仰天地ニ愧デズ】 （俯仰不レ愧二天地一）能く身を修め、內に省みて疚しき所ろなくば、仰いで上天に對し、俯して下地に對し、毫も愧づるとなきをいふ、孟子盡心上篇に「仰不レ愧二於天一、俯不レ怍二於人一」（三樂）を參看せよ、

【不孝ニ三アリ後ナキヲ大ト爲ス】 （不孝有二三無レ後爲レ大）孟子の語、註に「禮ニ於テ不孝ノ者三事アリ、意ニ阿リ曲ゲ從ヒテ、親ヲ不義ニ陷イル、一ナリ、家貧シク親老イテ、祿仕ヲ爲サズ、二ナリ、娶ラズシテ子無ク、先祖ノ祀ヲ絕ツ、三ナリ、三者ノ中後チ無キヲ 大ナリトス」

【不恪】 恪は敬なり「ツツシャザル」者をいふ、左傳に「以懲——」

【婦學】 一卷、清の章學誠字ハ實齋、少慶ト號ス、乾隆四

十三年ノ進士撰す、女子に關する敎訓學術文藝等を簡約に述べ、又女學の沿革をも略敍せり、

【不學無術】　學術の素養なきをいふ、漢書霍光傳に「光爲師保、雖周公阿衡、何以加此、然光――云云」宋史寇準傳に「張鄧謂準曰、霍公傳、不可不讀、準歸取其傳讀之至――笑曰、此張公謂我也」

【不可思議】　「ハカリ」知るべからざる義、略しては不思議ともいふ、法苑珠林に「佛變化無量三昧力、――」

【夫家之征】　周の制にて、民の常業なき者に罰金として、出さしむるをいふ、周禮に「凡民無職事者出――」注に「民常業ナキ者之ヲ罰シテ一家力役ノ征ヲ出サシム」征は稅(カカリモノ)なり、

【宮家女易嫁】　(議婚ノ詩)を見よ、

【屑合】　切れ切れの少しの雲のあつまり合ふ義(屑ニシテ)を見よ、

【巫峽ノ水ノミ何ゾ舟ヲ渡サムヤ】　源光行の海道記の語、白氏文集の太行路と題する詩に「太行之路能摧車、若比君心是坦途、巫峽之水能覆舟、若比君心是安流」とあるによれり、巫峽は、四川省より湖北省に流る河の兩岸の名、ここに明月、巫山、廣澤の三峽あり、その水至りて險なり、荊州記に「信陵縣西二十里有巫峽」またその漁者歌に「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳」

【浮家泛宅】　舟中に住居するをいふ、新唐書隱逸傳に「張志和、自稱烟波釣徒、顏眞卿爲湖州刺史、欲館之、以舟敝漏請更之、志和曰、願爲――往來曾譬閒(張志和)を參看せよ、王漁洋の詩に「便可泛宅仍浮家」

【不刊之書】　刊は削なり、猶ほ不朽の如し、永く銷滅せざる書なり、劉歆答揚雄書に「懸諸日月、――」左傳の杜預の序に「左丘明受經於仲尼、以爲經者――也」

【不軌】　軌は法なり、則なり、――は國家の法を守らざるなり、漢書賈山傳に「軌事之大者也」の註に「軌ハ法度ヲイフ、故ニ凡ソ法度ニ循ハザル者ハ、之ヲ――トイフ」史記漢興以來諸侯年表に「大者叛逆、小者不軌」于法、以危其命」漢書卜式傳に「――之臣」

【不器】　(君子ハ器ナラズ)を見よ、

【不諱】　死をいふ、死は人の諱み避くる能はざる所ろなればなり、戰國策に「公叔病、即不可諱、將奈社稷何」――は不可諱の略なり、

また直諫をいふ、楚辭卜居に「寧正言――以危身乎」また君父の名を諱み避けざる義、禮記に「詩書――」また臨「文――」

【不諱】　諱は「ツナグ」絆なり、――は其の材質高遠にして、羈縻(ツナグ)すべからざるをいふ、一說には、放達にして禮法の爲めに束縛せられざるをいふと、漢書の司馬遷傳に「少負――之才」鄒陽の獄中上梁王書に「使――之士與牛驥同皂」韓愈の詩「惠師浮屠者乃是――人」

【傅毅】　字は武仲、漢の扶風茂陵の人、博學能文、明帝賢を求むる篤からざるを以て、士多く隱處す、嘗て七激を作り以て諷す、章帝以て蘭臺の令史と爲し郎中に拜す、班固、賈逵等と共に校書を典らしむ、顯宗の頌十篇を作り、之を奏す、是に由りて文雅朝廷に顯はる、毅早く卒す、詩賦誄頌連珠凡そ二十八篇を著す、

【賻儀】　「カウデン」珠璣數に「財物ヲ以テ喪家ヲ資助スルヲ――トイフ」

【不朽】　死すとも長く朽ちざる義、左傳襄二十四年に「太上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂――」と穆叔の語なり、註に「立德ハ黃帝堯舜、立功ハ禹稷、立言ハ史佚・周任・臧文仲」とあり、

【不朽之盛事】　文章の功、盛にして永久に朽つることなきを稱へていふ、魏の文帝曰く「文章者經國之大業、――、年壽有時過、榮樂止於其身、二者必至之常期、未若文章之無窮」とあるに本づく、

【不龜手】　(不龜手ノ)を見よ、

【傅璣之珥】　傅は附るなり、璣は珠の圓ならざるもの、珥は「ミミダマ」璣を以て珥に附著するなり、李斯の逐客上書に「宛珠之簪、――」

【不義ノ富貴ハ浮雲ノ如シ】　論語述而篇に「子曰ク疏食ヲ飯ヒ、水ヲ飲ミ、肱ヲ曲ゲテ而シテ之ヲ枕トス、樂亦其ノ中ニ在リ、不義ニシテ而シテ富ミ且ツ貴キハ、我ニ於テ浮雲ノ如シ」註に「聖人ノ心、渾然タル天理、困極ニ處ルト雖モ、而モ樂亦在ラザルコト無シ、其ノ不義ノ富貴ヲ視ルコト、浮雲ノ有ルコト無キガ如シ、漠然トシテ其ノ中ニ動ク所ノ無キナリ」

【附驥尾】　(驥尾ニ)を見よ、

【負笈】　遊學するをいふ、漢書の蘇章傳の「負笈追師」不遠千里」の註に「笈ハ書箱ナリ、追ハ尋ネ求ムルナリ」章字は游卿、北海の人、官を去りて王莽に仕へず、

【不急官】　急務ならざる官職をいふ、漢書昭帝紀に「日者省用罷――」

【不急之察、無用之辨】 駿藩雑話の「扁鵲藥匙をすつ」の條に見ゆ、荀子の天論に「無用之辨、不急之察、棄而不治若夫君臣之義、父子之親、夫婦之別、則日切磋而不舍也」

【不龜手之藥】 手の「コゴエ」て「ヒビワレヌ」藥なり、莊子の逍遙遊篇に「莊子曰、宋人有善爲不龜手之藥者、世世以洴澼絖爲事、客聞之請買其方百金聚族而謀曰、我世世爲洴澼絖不過數金、今一朝而鬻技百金請與之客得之以說吳王、越有難、吳王使之將、冬與越人水戰、大敗越人、裂地而封之、能不龜手一也、或以封、或不免於洴澼絖、則所用之異也」

【布衾鐵ノ如シ】 布の「フスマ」の冷かなるをいふ、杜甫の茅屋爲秋風所破歌に「布衾多年冷似鐵、嬌兒惡臥踏裏裂」

【不享】 諸侯の朝享せざるをいふ、不庭に同じ、史記五帝紀に「習用干戈以征」

【武衆】 武藝に習熟せるものを擧げ用ひる義、唐書の選擧志に「一ハ則天武后ノ時ヨリ始マル」と、唐會要に「長安(武后の年號)三年正月十七日天下ノ諸州ニ詔シテ、武藝ヲ教ヘシメ、每年明經進士ニ準ジテ貢擧セシム」

【不庳】 庳は癈なり、測なり「ハカラザル」禍なり、左傳桓十七年に「軍場之事愼守其一而備其一一」詩經に「用戒一一」

【伏陰】 夏時に入りても猶ほ陰氣の滯り伏し、發して霜雹となる類、國語に「天無一一地無散陽」

【不遇】 不仕合なり、不耦に通用す「時ニ遇ハズ」を見よ、

【不耦】 命婆にして、耦合せざるなり、不幸に同じ、漢書霍去病傳に「諸宿將常留落一一」

【負嵎ノ勢】 猛虎が山に依れる勢をいふ(虎嵎)を見よ、

【幅員】 幅は邊幅なり、員は圓也、周圍の義、詩經商頌長發篇に「幅隕既長」註に「隕ハ謨ミテ員トナス周ヲイフ」

【腹藁】 胸中にて文案を立つるなり、事文類聚に「王勃碑頌ヲ作ル每ニ先ヅ墨數升ヲ磨リテ、被ヲ引キ首ヲ覆ヒテ臥ス、寤ムルニ及ビ、忽チ起キテ一筆ニ書ス、文點ヲ加ヘズ、時ノ人之ヲ一一トイフ」詳しくは唐書王勃傳に出づ、蘇軾の詩に「袖手獨不言默稿已在腹稿、藁同じ、

【吹ク風モ枝ヲ鳴ラサズ】 太平の世を稱する語(五風十雨)を見よ、

【福基】 幸福の基、漢書枚乘傳に「福生有基」南史に「顏延之曰、恭敬撙節福之基也」

【福禔】 「サイハヒ」范鎭の詩に「同心仰一一」

【福益】 「サイハヒ」益も福なり、沈約の詩に「其德不爽、受一一」唐祭汾陰樂章に「神之聽之、用受一一」

【伏羲氏】 庖犧氏ともいふ、上古の三皇の一人、風姓燧人氏に代りて王たり、母を華胥と曰ふ、大人の迹を雷澤に履みて庖犧を成紀に生む、蛇身人首なり、聖德あり、仰ぎては象を天に觀、伏しては法を地に觀、旁ら鳥獸の文と地の宜きとを觀、近く諸を身に取り、遠く諸を物に取り、始めて八卦を畫し、以て神明の德を通じ、以て萬物の情を通じ、書契を造り以て結繩の政に代ふ、始めて嫁娶を制し、儷皮を以て禮と爲す、網罟を結び以て佃漁を敎ふ、故に庖犧氏と曰ふ、犧牲を養ふに庖廚を以てす、故に庖犧と曰ふ、三十五絃の瑟を作る、木德の王たり、陳に都す、史記の注に「必一ニ伏ニ作ル」

【鮑魚】 「アハビ」なり、一名石決明、後漢伏隆傳に「詣闕上言獻一一」この註に「鮑似蛤偏著石」一說に、海魚の名なりとも、また一一は「トコブシ」石決明に似て稍小なり、

【福惡全書】 三十二卷、清の黃六鴻(思湖)著す、地方施政者の心得べき諸件を彙說す、康熙甲戌の自序に曰く「夫是書也、乃政事之事也、而顧一之福惡何居、曰福者、言乎造福之心也、惡者、言乎施惡之事也、夫人有是心而後有是事、無是心而卽無是事、故在上者、必先存有造福地方之心而後能有施惠百姓之事、事者心之推、而惠者福之實也、云云」とあり、六鴻は時に知鄒城東光兩縣事より、遷りて工科掌印給事中たり、この書小畑行簡の校せし和版あり、

【伏戎】 禍心を伏藏するの義、易經に「一一于莽ニ升其高陵ニ三歲不興」とは、禍心を伏藏すること、兵戎を林莽の中に伏せて顯はに發せざる如く、高きに昇り願望して、三年の久しき、敢て發せざるをいふ、

【服從】 服し從ふなり、禮記に「明君在上諸臣一一」

【伏日】 盛夏三伏の日なり、漢書東方朔傳に「一一詔賜從官肉」(三)伏を見よ、

【腹心】 心を同くし、德を同くする臣をいふ、詩經周南兎罝篇に「赳赳武夫、公侯一一」

【腹心ヲ布ク】 (布腹心)己の懷ふ所、ろを敷き陳べて、隱さざる義、左傳に「非所敢望也、敢一一一」

【腹心ヲ披ク】 (披腹心)隱し蔽ふ所ろなるなり、史記淮陰侯傳に「願一一一輸肝膽效愚計」漢書鄧陽傳には「披心腹見情素」とあり、

【腹笥虛シ】 腹の中の本箱が空てあるといふ義、學識

の乏しきをいふ、楊億の詩に「談經——」

【腹心之臣】 詩經の周南兎罝篇に「赳赳武夫、公侯腹心」註に「腹心トハ心ヲ同クシ、德ヲ同クスルノ謂、胡銓の上高宗封事に「秦檜以腹心大臣而亦爲之」

【副車】 「カヘグルマ」武事また副乘に同じ、史記の留侯世家に「良擊秦皇帝博浪車中、誤中——」

【覆車ノ戒】 前人の失敗を見て自ら戒むる義（前車ノ覆ルヘ）を見よ、

【福聚海无量】 幸福の聚まれること大海の水の計量すべからざる如きをいふ、法華經に「——是故應」頂禮」

【復初】 初の本性に復る義、莊子繕性篇に「繕性於俗學以求復其初、滑欲於俗思以求致其明、謂之蔽蒙之民」また曰く「民始惑亂、無以反其性情而復其初」（復性）を參看せよ、

【伏勝】 濟南の人、秦の博士たり、漢の文帝の時、能く尚書を治むる者を求め、伏生を得たり、而かも年九十餘、老いて行く能はず、乃ち太常掌故晁錯をして其の家に就きて之を受けしめ、二十九篇を得たり、今文尚書これなり、詳しくは初學記を見よ、

【覆水盆ニ歸ラズ】 婦、一度夫の家を去らば、再びかへること能はざるに喩ふ、五燈會元に「落花難上枝、破鏡不重照」また故事成語考に「怪ムベキハ、買臣ノ妻、貧ニ因リテ去ルコトヲ求メテ、覆水ノ收メ難キヲ思ハズ」拾遺記に「太公初娶馬氏、讀書不事產、馬求去、太公封齊、馬求再合、太公取水一盆傾于地、令婦收之、水惟得其泥、太公曰、若能離更合、覆水定難收」鶡冠子の注にも亦この故事を引けり、轉じて一旦爲し終りしことは「トリカヘシ」の「ツカザル」義にも用ふ、後漢書に「國家之事、亦何容易、覆水不收、宜深思之」李白の詩に「雨落不上天、覆水難再收」

【復性】 本性に復る義、復初に同じ、宋儒に一一說あり、人性は至善にして、堯舜も凡人も最初は少しも異ることなけれども、堯舜は、私欲に蔽はるることなくして、能くその性を充て、凡人は氣稟前に拘し、物欲後に蔽ひて最初の性を味まし、故に學問の力にて本性に復るべしとの義なり、論語朱註に「人性皆善、而覺有先後、後覺者必倣先覺之所爲、乃可以明善而復其初也」孟子集註に「程子曰、性卽理也、理則堯舜至於塗人一也、才稟於氣、氣有清濁、稟其清者爲賢、稟其濁者、爲愚、學而知之則氣無清濁、皆可至於善而復性之本、湯武身之是也」（復初）を參看せよ、

【復性書】 三篇、唐の李翺（字ハ習之）著す、曰く「誠者聖人性之也、復其性者、聖人修之」又曰く「情者妄也、邪也、妄與邪、則無所滅矣、妄情滅息、本性清明、周流六虛、所以謂之能復其性也」歐陽修は、この書を評して「中庸ノ義疏ノミ」と貶し、蒙齋筆談には「秦漢以下諸儒ニ於テ略ボ窺フ所ロナシ、獨リ超然トシテ顏子ノ用心ヲ知レリ」と褒す、支那の性說を研究せんとする者は宜しく一讀すべし、

【輻湊】 人のあつまると、輻（クルマノヤ）の、轂（コシキ）にあつまる如きをいふ、湊一に輳に作る、戰國策に「地四平、諸侯四通、條達——」漢書の地理志に「通魚鹽之利而人物輻湊」註に「湊ハ聚（あつまる）ナリ」淮南子に「百官修同、群臣——」

【不俱戴天】 父の讐とは、倶に天を戴かざる義（父ノ讐）を見よ、

【復道】 復は複なり、上下に道あるによりていふ、一解に、閣道に同じと、史記留侯世家に「從——望見諸將」

【複道】 前の復道に同じ、史記秦始皇紀に「殿屋——、周閣相屬」

【腹中ノ書ヲ噉ス】 （噉腹中書）事類全書に「郝隆七月七日、鄰人ノ皆衣物ヲ曝スルヲ見テ、隆乃チ仰ギ臥シテ腹ヲ庭ニ曝ス、人ソノ故ヲ問フ、曰ク我ハ腹中ノ書ヲ曝スノミト」世說排調篇にも引けり、

【不屈】 容易に人に屈し下らざる義、唐書に「田承嗣據有魏地、郭子儀遣使至魏、承嗣西望拜曰、茲膝不屈於人久矣、今爲公拜」

【鵬鳥】 「フクロフ」の類、韻會に「鴞ニ似テ不祥ノ鳥ナリ」史記賈誼傳に「有鴞飛入賈生舍、止於坐隅、楚人命曰鵩曰服」許渾の詩に「碧水鱸魚怨晉山——悲」

【覆轍】 車の「クツガヘリシ」「アト」以て事の敗亡の跡に喩ふ、新論に「立法者、譬如善御、察馬之力、揣途之數、齊其銜轡、以從其勞、故能登阪赴險無——之敗、乘危涉遠、無越軼之患」また文選左思の吳都賦に「喪亂之丘墟、顚覆之軌轍」また劉長卿の歸睦州詩に「羊腸留——、虎口脫餘生」

【福田】 佛經の語、三寶の德を敬ふを敬田といひ、君父の恩に報ゆるを恩田といひ、貧者を憐むを悲田といふ、之を三種の福田といひ、この無上の功德は、無上の福德を生ずと、——とは農の力を田畝に盡して、秋成の利あるに喩へていふ（佛法僧）を參看せよ、

【復土】 墓穴を掘りて棺を下したる後、土をその上に掩ふをいふ、史記秦始皇紀に「營阿房宮、爲室堂——未就、

會ー上崩、罷其作者、ーー郿山ニ
【服匿】匈奴の語、缶ホトギ)をいふなるべし、漢書蘇武傳に「賜武馬畜ーー窮廬ニ
【不廉譽】偶然に得たる譽をいふ(廉ヲサル)を見よ、
【伏波將軍】後漢の光武に仕へし三傑の一人なる馬援をいふ(馬援)を見よ、
【宓妃】(洛浦ノ)を見よ、
【腹誹之法】口には言はざるも、心に非としてそしる者を罪する法なり、史記平準書に「顏異當ス九卿見令不便、不入言而腹誹論死、自是之後有ーーーーニ
【服不】不服の獄を服することを掌る者、周禮に「ーー氏、掌養猛獸而教擾之」
【伏兵】「フセゼイ」孫子に「鳥起者伏也」史記淮陰侯傳に「陳船欲渡臨晉而ーー、從夏陽以木罌瓶渡軍」
【復辟】辟は君なり、君の位に復するをいふ、書經咸有一德に「伊尹既復ニ政厥辟ニ」文獻經籍考に「唐ノ中宗甲申武后之ヲ廢ス、後二十二年乙巳ーー」
【不君】君たるの道を失ふをいふ、左傳宣二年に「晉靈公ーー」論語顏淵篇に「君不君、臣不臣」
【不羣】高く羣類に出づるをいふ、出羣に同じ、漢書十三王傳贊に「夫惟大雅卓爾ーー、河閒獻王近之矣」また曹植の詩に「懷此王佐才、慷慨獨ーー」
【夫君】「ヲット」をいふ、唐音統籤に「高駢ノ閨怨ノ詩傳に「賜武馬畜ーー窮廬ニ人世悲歡不可知、ーー初破黑山歸、如今又獻征南策、早晩催縫帶號衣」
【府君】亡父を「タフトビ」て稱す、朱子語類に「撫爵曰ーー夫人、漢人碑已有、只是尊神之辭、ーー如官府之君、或謂之明府、今人亦謂父爲家府君」もと漢の時、太守を稱してーーといふより轉用せしなり、後漢書に「廣陵太守陳登忠胸中煩懣、華佗脈之曰、ーー胃中有蟲」
【撫軍】左傳閔二年に「太子(中略)君行則守、有守則從、從曰ーー守曰監國、古之制也」とあり(監國)を見よ、
【復命】命を受けて行ひ、終りて「ヘンジ」を申しあぐるなり、論語鄉黨に「賓退必ーー曰、賓不顧矣」
【服膺】膺は胷なり、胷につけて忘れざるをいふ(拳拳)を見よ、
【福履】履は祿なり、福祿に同じ、詩經周南樛木篇に「樂只君子、ーー綏之」綏は安なり。
【伏流】水の地下を「クグリ」流るるをいふ、錢起の句に「藥井通ーー」
【茯苓】寓生の植物、黑松の舊根株の邊の土中に自生す、塊をなすと�major の如く、皮は黑くして皺あり、肉は白きあり、赤きあり、或は外白く內赤きあり、黑松には白ーー多く、赤松には赤ーーあり、輕虛なるあり堅實なるあり、藥用とす、一名は不死麴、淮南子說山訓に「千年之松、下有ーーニ
【福祿綏ズ】身の「サイハイ」の安きなり、詩經に「君子萬年、ーーーーノ之」
【梟ハ松桂ノ枝ニ鳴キ、狐ハ蘭菊ノ叢ニ藏ル】(梟鳴松桂之枝、狐藏蘭菊之叢)白氏文集の凶宅と題する詩中の句
【浮華】「ハナヤカ」にして浮薄なる義、漢書司馬相如傳に「淫行無節、但有ーー之辭、不周于用」
【不快】疾あるをいふ、賈誼新書に「世謂有疾曰ーーニ
また後漢書華佗傳に「體有ーーニ
また心に「ココロヨシ」とせざる義、戰國策に「禁澤入、掛應侯、應侯不快」
【附會】正理を知らずして、事の宜しきに因りて、附著合會するをいふ、漢書の爰盎傳の贊に「爰盎雖不好學、亦善傳會」傳は音フ、附に同じ、歐陽修の、蘇君墓誌銘に「易之道深矣、汩而不明者、諸儒以附會之說亂之也」
また一篇の文、首尾全く整へるをいふ、後漢書張衡傳に「作二二京賦一精思傳會、十年乃成」文心雕龍附會篇に「何謂附會、謂總文理統首尾、彌綸一篇、使雜而不越者也」
【傅會】附會に同じ、前條を見よ、
【溥光】字は元暉、雪窗と號す、元の畫僧、大同の人、俗姓は李氏、趙孟頫之を朝に薦む、特に昭文館大學士に封ぜられ、號を玄悟大師と賜ふ、山水は關仝を學び、墨竹は文同を學ぶ、俱に趣を成す、詩を爲る冲淡粹美、眞行草書を善くし、尤も大字に工なり、凡そ禁扁は皆その書する所ろなり、
【郛郭】連文釋義に「城外小城曰郛、城外曰郭」
【負郭二頃之田】負は背なり、郭は城郭なり、負郭は城に近き地をいふ、その田は沃潤にして賣買なれば收穫他より多し、一頃は百畝なり、史記蘇秦傳に「使我有負郭二頃之田、吾豈能佩六國相印乎」良田二頃もあれば衣食に窮せざれば奮發心生ぜず、故にいへり、
【浮瓜沉李】(瓜ヲ浮ベ)を見よ、
【不經】經は常法なり、ーーは常法を用ひざる義、左傳襄二十六年に「夏書曰、與其殺不辜、寧失ーーニ善也」その夏書の語は、大禹謨(偽古文)に出づ、
【負荊】己の罪を謝するをいふ(刎頸ノ)を見よ、

【腐刑】 宮刑なり、腐臭なる故にいふ、一解には、男兒勢を倒さ復た子を生むこと能はず、腐木の實を生ぜざる如し、司馬遷の報任安書に「最下——極矣」

【武藝十八事】 讀書記數器に「一弓、二弩、三槍、四刀、五劒、六矛、七盾、八斧、九鉞、十戟、十一鞭、十二簡、十三橛、十四戈、十五殳、十六杷頭、十七綿繩套索、十八白打」

【兒脛短ト雖モ之ヲ續ガバ憂ヘン】 (兒ノ脛)を見よ、

【不繫ノ舟】 (繫ガザル舟)を見よ、

【腐毛ヲ生ゼス】 (腐不生毛)勞役して皮膚の毛の摩り切れて生ぜざるをいふ、司馬相如の難蜀父老文中の語、

【巫覡】 女の「カンナギ」を巫といひ、男のを覡といふ、「カンナギ」とは神を齋き祀り、又は神樂を奏する人をいふ、國語の楚語に「——見鬼者」周禮に「司巫ハ群巫ノ政令ヲ掌ル、若シ國ニ大旱アレバ、巫ヲ帥キテ舞雩」

【不潔】 穢れたる物なり、孟子離婁下篇に「西子蒙——、則人皆掩鼻而過之」西子は、西施なり、越國の美女、

【浮言】 無根の說なり、浮辭に同じ、書經に「胥動以——」

【負劒】 (劒ヲ負フ)古者劒を帶ぶるに、上長くして之を拔くに宜を出でず、故に之を背に推して負ふ如くし、以て前を短くして拔き易からしむるをいふ、史記刺客傳荊軻秦王を刺す條に「秦王方環柱走、卒惶急、不知所爲、左右乃曰、王負劒、負劒、遂拔以擊荊軻」

【婦言】 婦人の言葉、ヅカヒ」の上の心得なり(四行)また(婦德)を參看せよ、

【普賢】 菩薩の名、普とは德利周遍をいひ、賢とは仁慈慧悟をいふ、常に白象に騎る所ろを圖す、一に賢首ともいふ、

【傅玄】 字は休奕、北地泥陽の人、少くして孤貧、博學にして善く文を屬す、性剛直峻急、人の短を容ることを能はず、晉に事へて侍中と爲る、卒する時年六十二(或ハイフ六十)謚して剛といふ、玄少き時、難を河內に避けて、心を詞學に專にす、後ち顯貴に至ると雖も、著述を廢せず、嘗て傅子數十萬言を著す、玄また能く樂府歌章を作る、晉代宗廟朝廷の樂章、多くはその手を經て成る、郊祀歌、宗廟歌、鼓吹曲等の如き、概ね皆是なり(傅子)を參看せよ、

【婦言是用】 書經周書の牧誓に「今商王受、惟——」般の紂王が妲己の嬖に惑ひて、その言のみを用ひたるをいふ、

【不言之敎】 老莊の無爲恬淡の敎をいふ、老子の四十三章に「天下之至柔、馳騁天下之至堅(中略)——、無爲之益、天下希及之」

【不言之花】 桃李をいふ(桃李言ハザレドモ)を見よ、

【不辜】 罪なき者、書經の大禹謨に「與殺其——、寧失不經」また孟子公孫丑上篇に「行一不義、殺一——、而得天下、皆不爲也」無辜に同じ、

【巫盤】 連文釋義に「女能ク舞ヲ以テ神ヲ降スヲ巫トイヒ、左道ヲ執リテ以テ人ヲ惑スヲ蠱トイフ」

【武庫】 博學の人を稱す、晉書に「杜預尙書トナル、萬機ヲ損益スルコト、勝ゲテ數フベカラズ、朝野稱美シテ號シテ、杜武庫トイフ、其ノ有ラザル所ロナキヲイフナリ」

【婦功】 女子の仕事をいふ、周禮の春官に「敎婦德、婦言、婦容、——」註に「——ハ絲枲ヲイフ」とあり(婦德)また(四行)を參看せよ、

【膚公】 詩經に「以奏——」注に「大功ナリ」膚功に同じ、

【膚功】 前の膚公に同じ、膚は大なり、功公通ず、

【婦功成ル】 家語に「霜降リ而シテ——リ、嫁娶行ハル」注に「季秋ニ霜降リ嫁娶スル者此レヨリ始マル」

【不穀】 諸侯の自稱、穀は善なり、不善の義に取る、老子に「侯王自稱孤寡——」禮記曲禮に「自稱曰——」

【布告】 告一音カウ——は敷き示す義、史記呂后紀に「事已——天下」

【布穀】 鳩鳩の一名、ハト」の屬、爾雅の註に「鳲鳩一名ハ鵓鴿即今——也、農事方起、此鳥飛鳴於桑閒、若云五穀可布種、故云——」杜甫の詩に「——催春種」方言八に「——今江東呼爲穀穀」一に戴勝ともいふ、

【富國】 國を富ます義、唐書李適之傳に「華山生金采、之可以富國」韓愈の詩に「孜孜莫患勞心力、——安民理道長」

【負償】 人の財物を假りて未だ返さざるをいふ、漢書淮陽王傳に「博言——數百萬、願王爲償」博は張博なり、

【覆載】 天の覆ひ地の載するをいふ、轉じて天地の義とす、禮記に「天之所覆、地之所載」また中庸に「譬如天地之無不持載、無不覆幬」また左傳に「如天之無不幬也、如地之無不載也、幬は覆なり、

【祔祭】 合祭なり、說文に「後死者合食於先祖」とあり、

【夫妻反目】 夫婦目を反して相爭ふ義、易の小畜卦に「九三輿說輻、——」

【扶桑】 東海の中に在りといふ神木をいふ、二樹根を

同じくし相扶けて生ず、故に名づく、東方朔の十洲三島記に「——在二碧海之中一、地多二林木一、葉皆如レ桑、又有レ椹子、樹長者數千丈、徑三千圍、樹兩兩同レ根偶生、更相依倚、是名二扶桑一」支那人が我國を——と稱するは、此に本づく、齋藤拙堂曰く「上古有二扶桑樹一、考二其所在一、蓋當レ豫之地、傳言其高不レ知二幾百仞一、其大蔭二數數州一屹然爲二大八洲之鎭一、西土之人尙能言レ之、散見二淮南山海諸書一、遂爲二我邦別號一云云」夜航詩話に「古所レ謂——樹者、蓋在二伊豫海濱一、洪荒時物云云、按、史景行天皇西巡時、履レ偃臥巨木一、度二海抵一レ火州一、此其是矣、其大且レ長、何如哉、所レ謂其未レ偃之時、當二朝日一則隱二杵島山一、及二夕日一則覆二阿蘇山者一、理或然也、故西土之人、稱二——國一者、指二筑紫地方一也、王維送二鬼監一鄕國——外、主人孤島中、草莊送レ僧敬詣、——已在二渺茫中一、家在二——東更東一、言二日本去一——更遠一也」

山海經の海外東經に「湯谷之上、有二——一、十日所レ浴、在二黑齒北一、居二水中一、有二大木一、九日居二下枝一、一日居二上枝一」淮南子地形訓に「扶木在二陽州一、日之所レ出」注に「扶木ハ——ナリ」扶桑を參看せよ、

梁書扶桑國傳に「——國者、齊永元元年、其國有二沙門慧深一來至二荊州一、說云、——在二大漢國東二萬餘里一、地在二中國之東一、其土多——」故以爲レ名、——葉似レ桐而初生如レ笋、國人食レ之、實如二梨而赤一、繒二其皮一爲レ布以爲レ衣、亦以爲レ綿、作二板屋一、無二城郭一、有二文字一、以——皮爲レ紙、無二兵甲一、不二攻戰一」

【斧藻】 斧は斲削なり、藻は文飾なり、彫琢して「カザル」をいふ、揚子法言に「吾未レ見二好レ斧藻一其德一、若レ斧藻一其辭一者一歟」の註に「斧藻ハ猶ホ椀(たるき)ヲ刻ミ、楹(はしら)ヲ丹ニスルノ飾ノ如シ、藻ハ音セッ櫨(ますがた)ナリ」

【撫箏】 「コトヲヒク」彈箏、鼓箏に同じ、事文類聚續集に「桓伊——」

【扶桑豈影ナカランヤ、浮雲掩ヒテ忽チ昏シ】 (扶桑豈無影乎、浮雲掩而忽昏)前中書王秉明親王の菟裘賦中の語、下に「蕞爾豈不芳乎、秋風吹而先敗」とあり、扶桑は日の出づる處なるより、直ちに日を斥していふ、以て天子の明に喩ふ、浮雲は佞臣に喩ふ、この語、和漢朗詠集の蘭の條下にも引けり、

【廚索】 「クサリナハ」朽索に同じ、家語に「凜凜焉、若レ持二——一扞馬」

【部索】 手を分ちて搜索する、漢書許后傳に「——罪人」注に「罪人ヲ部分シテ搜索スルナリ」

【斧鑿痕】 詩文などを作るに、徒に雕飾を加へて、その痕迹のあらはるるをいふ、貫和書譜に「邊鸞長二于花鳥一、精二于設色一、如二良工之無一レ——一」韓愈の調二張籍一詩に「徒(いたづら)——、不レ曉二治水航一」

【巫山】 縣名、隋の梁州巴東郡、唐の山南道夔州、今の四川省夔州府——縣治、

【武三思ガ妾狄仁傑ニアフ】 駿臺雜話「妖は人より起る」に見ゆ、性理字義に「昔武三思置二一妾一、絕色、士大夫皆訪觀、狄梁公亦往焉、妾逃遁不レ見、三思搜之、在二壁隙中一、語曰、我乃花月之妖、天遣二我奉一君談笑一、梁公時之正人、我不レ可レ以見一レ」

【巫山之夢】 楚の襄王、夢に巫山の神女と會せし故事に由りて、男女の密會するに用ふ、文選の宋玉の高唐賦に「昔者先王、嘗テ高唐ニ游ビ、怠リテ而シテ晝寢ス、夢ニ一婦人ヲ見ル、曰ク妾ハ巫山ノ女ナリ、高唐ノ客タリ、聞ク君高唐ニ游ブト、願クハ枕席ヲ薦メント、王因リテ之ヲ幸ス、去ルトキニ辭シテ曰ク、妾ハ巫山ノ陽、高丘ノ岨ニ在リ、旦ニ朝雲トナリ、暮ニ行雨ト爲ル、朝朝暮暮陽臺ノ下ニスト、旦朝之ヲ視レバ、言ノ如シ、故ニ爲メニ廟ヲ立テ、號シテ朝雲トイフ」願くは枕席を薦めんとは、親しく枕席を進め親昵を求めんと欲するなり、劉廷芝の公子行に「爲雲爲雨楚襄王」李白の清平調詞に「一枝濃艷露凝レ香、雲雨巫山枉斷腸」皆この故事を用ひたるなり、江淹の詩に「神女色婆娑、乃出巫山眉」

【不死】 山海經に「——民、在二其東一、其爲レ人黑色、壽不レ死、一曰在二穿匈國東一」

【不蠆】 資財多くして「ハカラレザル」義、漢書貨殖傳に「家亦——レ——」

また蠆は思なり、禮記の少儀に「——レ——重器一」とある、——レーは、思はざる義なり、

【不齒】 (齒セズ)齒の列なれる如く、人と列を同くせざる義、左傳隱十一年に「寡人若朝二於薛一、不レ敢二與諸任一齒」註に「齒ハ列ナリ」禮記に「出二鄕不一レ與二士齒一」

【父子】 釋名に「父ハ甫ナリ、始メテ己ヲ生ム者ナリ」また「父死スレバ考ト爲ス」增韻に「子ハ嗣ナリ」易の序卦傳に「男女アリ、然ル後ニ夫婦アリ、夫婦アリ、然ル後ニ——アリ」白虎通に「王者ハ天ヲ父トシ、地ヲ母トシテ、天子トイフ、天子ノ子ヲ元子トイフ」

【布施】 人に物を施すをいふ、周語に「享祀時至、——儉裕」文子自然篇に「爲二惠者一——也」(敝施)を參看せよ、また佛經にては布施と讀む、清淨の心を以て資財を捨てて他に施し、吝惜の意なきをいふ、法界次第に「檀

那泰言」——ニ——ト」に財寶を施すと、世閒出世閒の善法を說きて他を導くとの二あり、

【扶枝】「カタヘ」の枝、ソバ」の枝、淮南子人閒訓に「去」高木而巢」——ニ」

【浮辭】流言また浮言に同じ、無根の說なり、また浮薄の言なり、鄒陽の獄中上」梁王」書に「兩主二臣、剖」心析」肝相信、豈移」於——」哉」

【累罣】屛なり、釋名に「——ハ門外ニ在リ、累ハ復ナリ、罣ハ思ナリ、臣將ニ入リテ事ヲ請ハントスレバ、此ニ於テ復重ネテ之ヲ思フナリ」漢書文帝紀に「未央宮東闕——災」の師古の注に「——ハ閣ニ連ル曲閣ナリ」王珪の詩に「宮花千樹擁」——ニ」

【傅子】一卷、晉の傅玄撰す、諸子中に在りて儒家類に屬す、もと一百四十卷ありしが、宋に至りて僅に二十三篇を存ずるのみ、後ち遂に散佚せしが、幸に永樂大典によりて重輯して十二篇を得たり、卽ち百子全書に收むる者是れなり、淸の紀昀曰く「此ノ書論ズル所ロ、皆治道ニ關切ニシテ儒風ヲ闡啓シ、精意名言、往往ニシテ在リ、實ニトスベキナリ」と、以てこの書の世に益あるを知るべし(傅玄)を參看せよ、

【婦寺】婦人と宦官と、詩經大雅瞻卬に「匪」教」匪」誨、時」維——」(婦寺ノ忠)を見よ、

【鳧氏】官名、書言故事に「鐘ヲ鑄ル匠ヲ——トイフ」周禮冬官考工記に「——爲」鎛」注に「鐘大ニシテ短ナレバ、ソノ聲疾ニシテ短ク聞ユ、小ニシテ長ケレバ、ソノ聲舒ニシテ遠ク聞ユ」とあり、正字通に「鳧ハ水ニ入リテ、溺レズ、以テ鐘工ニ名ヅクルハ、虛浮ノ義ニ取ル」

【敷施】政敎を敷き施す、書經の「翕受——」の孔傳に「能合」受三六之德」而用」之以布」施政敎」史記の夏本紀には翕受普施に作る、

【普施】「アマネク」施す、史記五帝紀に「高辛——利物、不於」其身」

【無二】無雙に同じ、史記淮陰侯傳に「功——レ」於天下」

【無似】禮記の哀公問に「公ノ曰ク、寡人雖」——」也、願聞」所」以行」三言」之道」の註に「無似トハ、猶ホ不肖トイフガゴトシ、肖モ亦似ルナリ、哀公ノ謙辭、愚蔽ニシテ、能ク賢人ニ似ルコト無キヲイフ」

【武士】武夫に同じ、莊子人閒世に「上徵」——」、則支離攘」臂於其閒」支離は支離疏なり、史記蘇秦傳に「——二十萬」

【贍仕】贍は厚なり、厚く人を使ふなり、詩經小雅節南山篇に「瑣瑣姻亞、則無」——」また好き官に任ずるを維——」(婦寺ノ忠)を見よ、

【鳧氏】官名、書言故事に「鐘ヲ鑄ル匠ヲ——トイフ」周禮冬官考工記に「——爲」鎛」注に「鐘大ニシテ短ナレバ、ソノ聲疾ニシテ短ク聞ユ、小ニシテ長ケレバ、ソノ聲舒ニシテ遠ク聞ユ」とあり、正字通に「鳧ハ水ニ入リテ、溺レズ、以テ鐘工ニ名ヅクルハ、虛浮ノ義ニ取ル」

【敷施】政敎を敷き施す、書經の「翕受——」の孔傳に「能合」受三六之德」而用」之以布」施政敎」史記の夏本紀には翕受普施に作る、

【普施】「アマネク」施す、史記五帝紀に「高辛——利物、不於」其身」

【無二】無雙に同じ、史記淮陰侯傳に「功——レ」於天下」

【無似】禮記の哀公問に「公ノ曰ク、寡人雖」——」也、願聞」所」以行」三言」之道」の註に「無似トハ、猶ホ不肖トイフガゴトシ、肖モ亦似ルナリ、哀公ノ謙辭、愚蔽ニシテ、能ク賢人ニ似ルコト無キヲイフ」

【武士】武夫に同じ、莊子人閒世に「上徵」——」、則支離攘」臂於其閒」支離は支離疏なり、史記蘇秦傳に「——二十萬」

【贍仕】贍は厚なり、厚く人を使ふなり、詩經小雅節南山篇に「瑣瑣姻亞、則無」——」また好き官に任ずるを

いふ、

【武周】周の武王の德をたたへたる樂の名、後漢書班彪傳の注に「——ハ武王ノ樂ナリ」象武ともいふ、

【撫州】唐以後の州名、今の江西——府臨川縣治、また元の遼陽省東寧路——は、今の朝鮮平安道平壤府の西北、

【不二價】少しも「カケネ」なきをいふ、孟子滕文公上に見ゆ(價ヲ)を見よ、

【不自棄ノ文】朱子文錄に出づ、その略に曰く「夫天地之物皆物也、而物有一節之可取、且不爲」世之所」棄、可」謂」人而不」如」物乎、蓋戝如」石而有」攻」玉之用、毒如」蝮而有」和」藥之靈、糞其穢矣、而施之」猴」田、則五穀賴之以秀實、灰旣冷矣、而俾之」洗滌」則衣裳賴之以淸潔、食」魚之肉、甲可」遺也、南人用之以占」年、食」鵝之肉、毛可」棄也、銅銹縪之以銀臘、推而擧之、類而推之、則天下無」棄物」矣、今人而見」棄焉、特其自棄耳、五行以性」其性、五事以形」其形、五典以敎」其敎、五經以學」其學(中略)若是則於」身不」棄、爲」人無」媿、祖父不」失」其賄謀、子孫不」論」於困辱、永保」其身」不」亦宜」乎」

【不死草】麥門冬の一名、容易に枯死せざるによりて名づく、

【無事日月長】白樂天の句、下に「不繫天地閒」の句あり、

【不日】日を經ざる義、詩經邶風終風篇に「終風且曀、不」日有曀」

また日限の遠からざる義、大雅靈臺篇に「經」始靈臺、經」之營」之、庶民攻」之不」日成」之」

【父執】父の朋をいふ、禮記の曲禮に「見」父之執」不」謂」之進」不」敢進、不」謂」之退」不」敢退、不」問」不」敢對、此孝子之行也」後漢書馬援傳に「援爲」梁松」——、松貴、拜」援牀下」援不」之答」杜甫の詩に「怡然敬」一」、問」我來何方」

【鈇鎖】公羊傳襄二十七年に「負」羈縲執」——」鑕」一」に質に作る、腰斬の刑をいふ(斧質ニ)を參看せよ、

【斧質ニ伏ス】(伏」斧質」質は鉄キリダイ)をいふ、古人を斬るに鉄の上に加へ斧を以て之を斫る、故に斬に處せらるるを、斧質に伏すといふ、漢書項籍傳に「孰與」身——」妻子爲」戮乎」史記廉頗藺相如傳に「肉袒——」——」ニ」

【俛シテ地芥ヲ拾フガ如シ】(如」俛拾」地芥」)得易きに喩ふ、漢書の夏侯勝傳に「勝講授スル每ニ、常ニ諸生ニ謂ヒテ曰ク、士ハ經術ニ明カナラザルヲ病ム、經術苟

モ明カナレバ、其ノ青紫ヲ取ルコト、俛シテ地芥ヲ拾フガ如キノミ、經ヲ學ンデ明カナラザレバ、歸耕スルニ如カズト」註に「青紫ハ卿大夫ノ服ナリ、俛ハ（ふす）ナリ、地芥ハ、草芥ノ横ニ地上ニ在ル者ヲ謂フ、俛シテ之ヲ拾フトハ、其ノ易クシテ必ズ得ルヲイフ」

【不死之樹】 博物志に「員丘上有――――食之乃壽」

【不死之藥】 晉の郭璞の――贊、淵鑑類函四百十七卷に出づ、

【不死之藥】 韓非子說林に「有獻不死之藥于荊王者、中射之士、捧而食之、王欲殺之、中射之士、曰、客獻不死之藥、臣食之而王殺臣、是天藥也、乃不殺」とあり、史記にも齊人徐市等秦の始皇帝に上書して、童男童女と海に入り、蓬萊、方丈、瀛州の三神山の仙人、及び不死の藥を求めんと請ふ、始皇その言の如くする由を記せり、同書封禪書を參看せよ、李白の詩に「安得不死藥高飛向蓬瀛」

【婦寺ノ忠】 論語の憲問篇に「子曰、愛之能勿勞乎、忠焉能勿誨乎」とあり、蘇軾曰く「愛シテ勞スル、コトナキハ、禽犢ノ愛ナリ、忠ニシテ誨ウルナキハ、婦寺ノ忠ナリ、愛シテ之ヲ勞スルコトヲ知レバ、則チソノ愛タルヤ深シ、忠ニシテ之ヲ誨ウルコトヲ知レバ、則チソノ忠タルヤ大ナリ」と、婦寺は婦女と寺人（周禮ニ寺人ハ王ノ內人ヲ掌ルトアリ、卽チ宦官ナリ）とをいふ、婦寺の忠は、姑息の忠にして眞の忠にはあらず、

【不脂戶】 脂を塗らざる戶は、開閉し難し、以て人の妄りに口をきかざるに喩ふ、淮南子に「人有多言者、猶百舌之聲、人有少言者、猶不脂之戶」也」

【不仁】 仁德なきをいふ、左傳に「臧文仲不仁者三」また手足の「シビレル」をいふ、後漢の班超の妹昭、兄の西域に老ゆるを以て、超に命じて漢土に還らしめんことを請ふ上書にいふ「兄年七十兩手不仁」

また晉書皇甫謐傳に「久嬰篤疾、軀半――右脚偏小」

【不審】 （審カ）を見よ、

【夫人】 貴人の配なり、禮記曲禮に、「天子ノ妃ヲ后トイヒ、諸侯ニハ夫人トイヒ、大夫ニハ孺人トイヒ、士ニハ婦人トイヒ、庶人ニハ妻トイフ」註に「妃ハ配ナリ、后ハ後ナリ、夫ハ扶ナリ（夫を扶くる義）孺ハ屬ナリ、婦ハ服ナリ、妻ハ齊ナリ」

また古は、天子の后をいふ、周禮考工記玉人に「――以勞諸侯」注に「――ハ天子ノ――」

また古は人の母を尊びて稱す、史記刺客傳「用――蠭爛之費」の注に「韋昭云フ、古者男子ヲ名ヅケテ丈夫ト爲シ、大媼ヲ尊ビテ――トナス」

また古は己の母を稱していふ、後漢書應奉傳注に「汝南記云、元義謂人曰、此我故婦非有他過、家――過之實酷」

また人人の義、左傳襄八年に「――慼痛不知所底」註に「夫人ハ猶ホ人人ノ如シ」

また衆人の義、淮南子本經訓に「――相樂」註に「夫人ハ衆人ナリ」

【腐心】 心を苦め、クサラズ」こと、史記刺客傳に「日夜切齒――」

【武人】 武夫に同じ、詩經の小雅漸漸之石篇に「――東征」また武勇の人の義にも用ふ、易の履卦六三に「――爲于大君」

【武信君】 項羽の季父項梁自ら號して――といふ、

【武臣死ヲ惜マズ】 （文臣錢）を見よ、

【不仁者ハ以テ久シク約ニ處ル可カラズ】 （不仁者不可以久處約）論語里仁篇に出づ、孔子の語、下に「不可以長處樂」とあり、約とは貧賤窮困なり、樂とは富貴豐裕なり、不仁の人は私欲に蔽はれて其の本心を失ふ、故に久しく窮約と富樂との境に處り難しとの義、

【負薪之憂】 己の病を謙していふ、負薪の餘勞ありて、事に堪へざる意、禮記曲禮に「君使士射不能則辭以疾、言曰、某有――――」

【婦人ノ三從】 （三從）を見よ、

【負薪之資】 「ツマラヌ」「ウマレツキ」謙していふ、後漢書袁紹傳に「臣以――――拔于陪隷之中」

【婦人之仁】 施すに足らざる小惠をいふ、史記淮陰侯傳に「韓信曰ク、項王人ヲ見ルトキ、恭敬慈愛ニシテ言語嘔嘔タリ、人疾病アルトキハ、涕泣シテ食飲ヲ分ツ、人ノ功アリテ當ニ封爵スベキ者ニ至リテハ、印刓弊（つぶれる）スレドモ忍ンデ予フル能ハズ、此所謂婦人之仁ナリ」註に「嘔嘔ハ猶ホ嫗嫗ノゴトシ、漢書ニ姁姁ニ作ル、姁姁ハ和好ノ貌」

【婦人ノ手ニ死セズ】 （不死於婦人手）死生の際は人の最も瞞むべき所ろなり、故に男女の別を明かにせんために男子は婦人の手に死せざるなり、禮記喪大記に「男子――――婦人不死男子之手」

【溝將】 （帝命不小）を見よ、

【覆醬】 覆は「オホフ」なり醬油入の「フタ」にする義、著書の世に行はれずして、反古となるにいふ、故に自ら作りし詩文を、誰するにも用ふ、漢書の揚雄傳の贊に「鉅鹿侯芭、常ニ雄ニ從ヒテ居ル、其ノ太玄法言ヲ受ク、劉歆亦嘗テ之ヲ觀ル、雄ニ謂ヒテ曰ク、空シク自ラ

苦ム、今學者祿利アリ、然レドモ尚ホ易ヲ明カニスル能ハズ、又玄ヲ如何セン、吾レ後人ノ用ヒテ嚮(かめ)ヲ覆ハンヲ恐ルト、雄笑ヒテ應ヘズ」とあり、註に「瓿ハ小器ナリ」。

晉書左思傳に「陸機曰、閉有偷父欲賦三都、待其成、取覆醬瓿」

【亡狀】 無禮なり、亡は無なり、音ブ漢書項籍傳に「秦中遇之多——無狀に通ず、

【無狀】 (——)を見よ、

【不淨行】 佛敎の語、非梵行ともいふ、婬欲をいふ、无量壽經鈔註に「情滯色欲」名婬欲、亦名婬色」亦名淫荒、故書云、內作色荒、外作禽荒、約內典、名——、謂愛染汚心名爲——非法境、汙淨戒品、故云行、行即業也、亦名非梵行」

【不借】 中華古今註に「——ハ艸履ナリ、其ノ物輕賤ニシテ得易ク、人人自ラ之ヲ有シ、人ニ借ラザルノ義ニヨリ名ヅク、漢ノ文帝——ヲ履ミ、以テ朝ヲ視ル、是レナリ」(亟持)を見よ、

【腐儒】 荀子の非相篇に「易曰、括囊、無咎無譽、——之謂也」註に「朽腐ノ物、用フル所ロナキガ如キヲ言フ」史記酷布傳に「何爲——、爲天下、安用——」何は、隨何

【撫循】 撫は拊に通ず、慰め安んずる義(拊循)を見よ、

【富春山】 後漢書に「嚴子陵少クシテ光武ト同ジク學ブ、後チ光武位ニ卽ク、身ヲ隱シテ見エズ、徵シテ諫議大夫ト爲ス、屈セズ、——ニ隱レテ垂釣ス、後人因リテ以テ名ヅケテ嚴陵瀨トナス」子陵名は光、その釣せし釣臺は、桐廬縣の南、東西二臺あり、高各數丈、下に羊裘軒、客星館、招隱堂あり(嚴子陵)を見よ、

【富春秋】 (春秋富ム)を見よ、

【部署】 「ヤクワリ」を定むる義、部「ワケ」して署置する義、漢書高祖紀に「遂聽韓信策、——諸將」史記淮陰侯傳に「欲襲呂后太子、——已定」

【不如歸】 「ホトトギス」の異名、その聲は——(ブルークイナニイ)と聞ゆるを以てなり、蜀王本紀に「蜀望帝淫其臣鱉靈妻、乃禪位亡去時此鳥鳴、故蜀人見杜鵑鳴而悲望帝、其鳴如曰——去——蘇轍の詩に「身愁啼鳥——」范成大の詩に「杜鵑終勸——」「歸ルニ如カズ」の義に取りていふ杜鵑(ホトトギス)を參看せよ、

【不食之地】 耕墾せざる地をいふ、禮記に「子高曰、我死則擇——而葬我焉」

【屑ニシテ合ス】 屑寸とは少しの義、略して屑合ともいふ、切れ切れの雲が、あつまり合ふの義、風俗通に「雲觸石而出、屑寸而合、不崇朝而徧雨天下、其唯泰山乎、故爲五嶽之長」もと公羊傳三十一年に出づ、注に「側手爲屑、按指爲寸」

【夫稅】 田百畝の稅、周禮載師の注に「——ハ百畝ノ稅」

【夫壻】 「ヲット」をいふ、王維の詩に「——輕薄兒」

【浮生】 「ハカナキ」人生をいふ、史記賈誼傳に「其生若浮兮、其死若休」また杜甫の詩に「是非何處定、高枕笑——」

【敗政】 政を「シキオコナフ」詩經商頌長發篇に「——優優百祿是遒」優優は寬裕の意、遒は聚なり、

【不成人】 不具の人をいふ、また禮を知らざる人に喩ふ、禮記の禮器に「禮也者猶體也、體不備、君子謂之——」(朱熹ノ類異)を參看せよ、

【不世出】 數世を經て、稀に出づる義にて、いつの世にも、常に出づべき者にあらざる義、史記淮陰侯傳に「功無二於天下、而略——者也」また漢書伍被傳に「夥太子智略——、非常人也」淮南子泰族訓に「夫欲治之主不世出」韓愈の與于襄陽書に「側聞閣下抱——之才」

【浮生半日ノ閑】 人生の定りなく、又事多き中に半日の清閑を得たるをいふ、唐の李涉の題鶴林寺僧舍の詩

に「終日昏昏酔夢間、忽聞二春盡一強登レ山、因レ過二竹院一逢二僧話一、又得ーーーーー」

【浮生夢ノ如シ】（浮生若レ夢）人生の「ハカナキ」こと夢の如しとの義、李白の春夜宴二桃李園一序に「ーーーーー、爲レ懽幾何」莊子刻意篇に「其生如レ浮、其死如レ流」（浮生）を參看せよ、

【不肖】肖は似なり、善に似ざる意にて、人に及かざるをいふ、史記の五帝紀に「堯、知二子丹朱之不肖一、不レ足レ授二天下一」中庸に「子曰、道之不レ明也、我知之矣、賢者過之、不肖者不レ及也」一說に不肖は父に似ざる義、また一解に人は天の生ずるところなり、故に天に似ざるをーーといふと、漢書刑法志に「人肖二天地之貌一」注に「肖、類ノ人之ヲーートイフ、其ノ狀貌、象似スル所ロナキヲ言フナリ」

また自ら謙稱してーーといふ、

【不肖之主】恐なる主君、論衡順鼠篇に見ゆ、

【不肖之父】恐なる父、孔子家語七十二弟子解に「冉雍生二於ーーーー一」

【負析薪】左傳昭七年に見ゆ（析レ薪ヲ）を見よ、

【不屑】（屑トセズ）事物を輕んじて意を加へざる義、屑は潔なり、詩經邶風君子偕老篇に「鬒髮如レ雲、不レ屑レ髢也」髢は髮髢ノ（カミ）人髮少ければ髢を以て之を益す、髮雲の如く多くして美なれば髢を用ふるを屑とせざるをいふ、また邶風谷風篇の「不二我屑一」の傳に「我ヲ以テ潔シトセザルナリ」

【符節ヲ合スル若シ】（若レ合二符節一）符節は、全き竹を剖きて兩とし、各〻其の一を執り、之を合せて信とするーーーーことは、兩者の同じくして差ふ所ろなき義、孟子離婁下篇に「地之相去也、千有餘里、世之相後也、千有餘歲、得レ志行二於中國一ーーーーに朱註に「符節ハ、玉ヲ以テ之ヲ爲リ、文字ヲ篆刻シテ、之ヲ中分シ、彼ト是ト各〻其ノ半ヲ藏メ、故アレバ左右合セテ以テ信ト爲ス、ーーーートハ、其ノ同ジキヲ言フナリ」この語、荀子の儒效篇にも出づ、

【不屑之敎誨】人をして自ら啓發せしめん爲めに敎ふるを屑しとせずして自ら反省せしむるやうにする敎誨法をいふ、孟子告子下篇に「孟子曰、敎亦多二術一矣、予不レ屑レ之敎誨者、是亦敎誨之而已矣」

【布泉】錢をいふ、後周書に「武帝保定元年、更鑄レ錢、文曰ーー、以二一當一五」（泉布）を參看せよ、

【膚淺】淺薄なり、韻會に「ーーハ喩ヘバ皮膚ニ在リテ深カラザルナリ」

【憮然】茫然として自失する貌、孟子滕文公上篇に「夷子ーー」廣韻に「失意ノ貌」

【不善人ト居ル、鮑魚之肆ニ入ルガ如シ】（與二不善人一居、如二入鮑魚之肆一）（鮑魚）を見よ、

【扶疎】分ち布く貌、一解に枝葉盛なる貌、韓非子に「木枝ーー將塞二公門一」上林賦に「垂條ーー」漢書武五子傳に「枝葉ーー異姓不レ得レ朗也」

【扶蘇】秦の始皇の長子、直諫を好む、史記の始皇紀三十五年に、ーー諫めて曰く、天下初めて定るも、遠方の黔首未だ集まらず、諸王皆孔子に誦法す、今上皆法を重くして之を繩さば、臣恐くは天下の安んぜざらんことを、唯上之を察せよと、始皇怒りて、ーーをして北の方蒙恬の軍を上郡に監せしむ、始皇三十七年巡遊して道に崩ず、趙高李斯等謀りて詔を詐り、死を賜はらしむ、卽ち自殺す、

また小木の名、詩經鄭風山有扶蘇篇の傳に「ーーハ扶胥、皆小木ナリ」

【敗衂】敗さ陳べて奏進するなり、奏聞に同じ、書經舜典に「ーー以レ言」

【不測之淵】危險の地といふが如し、史記袁盎傳に「陛下從二代乘一六乘傳一馳二ーーーー一」

【負俗之累】負俗とは、俗に負きて世に譏らるるをいふ、漢書武帝紀に「士或有二ーーーー一而立レ功名一」

【不善人ト居ル、鮑魚之肆ニ入ルガ如シ】（與二不善人一居、如二入鮑魚之肆一）（鮑魚）を見よ、

【扶疎】分ち布く貌、一解に枝葉盛なる貌、韓非子に「木枝ーー將塞二公門一」上林賦に「垂條ーー」漢書武五子傳に「枝葉ーー異姓不レ得レ朗也」

【扶蘇】秦の始皇の長子、直諫を好む、史記の始皇紀三十五年に、ーー諫めて曰く、天下初めて定るも、遠方の黔首未だ集まらず、諸王皆孔子に誦法す、今上皆法を重くして之を繩さば、臣恐くは天下の安んぜざらんことを、唯上之を察せよと、始皇怒りて、ーーをして北の方蒙恬の軍を上郡に監せしむ、始皇三十七年巡遊して道に崩ず、趙高李斯等謀りて詔を詐り、死を賜はらしむ、卽ち自殺す、

また小木の名、詩經鄭風山有扶蘇篇の傳に「ーーハ扶胥、皆小木ナリ」

【敗衂】敗さ陳べて奏進するなり、奏聞に同じ、書經舜典に「ーー以レ言」

【不測之淵】危險の地といふが如し、史記袁盎傳に「陛下從二代乘一六乘傳一馳二ーーーー一」

【負俗之累】負俗とは、俗に負きて世に譏らるるをいふ、漢書武帝紀に「士或有二ーーーー一而立レ功名一」

【負戴】孟子の梁惠王上篇の「頒白者不ーーー於道路一矣」の註に「負ハ任（にもつ）ノ背ニ在ルナリ、戴ハ任ノ首ニ在ルナリ」

【譜第】世統をいふ、系譜の義、晉書杜預傳に「參二考衆家一ーーー一」

【覆幬】天のあまねく「オホヘル」義（覆載）を見よ、

【衛菊】酉陽雜俎に「ーーハ本ト大宛ヨリ出ヅ、張騫西

域ニ使シテ致ス所ロ、白黒黄ノ三種アリ、一名ハ馬乳、マタ黒水晶ト名ヅク、國人醸シ以テ酒ヲ爲ル、富人ハ酒ヲ漉スル千斛ニ至ル、十年敗レズ韓愈の詩に「若欲滿盤堆馬乳莫辭添竹引龍鬚」次條を見よ、

葡萄　明　馮琦

晻暖繁陰覆綠苔、藤枝蘿蔓共縈廻、自隨博望仙槎後、詔許甘泉別殿栽、的的葉房含雨潤、疎疎翠蔓向風開、詞臣滑渴沾新醞、不羨金盤露一杯

【蒲萄】本草に「一一有黄黒白三種」史記に「大宛以一一爲酒富人藏酒至萬餘石久者數十歲不敗」博物志に「西域一一酒、傳云可至十年」また曰く張騫使西域還得一一二葡萄道ず、

【不倒翁】小兒の玩具、起キ上リコボフシ」といふもの、陔餘叢考に「見童嬉戲有一一糊紙作醉漢狀、虛其中而實其底、雖按捺旋轉不倒也」呉偉業集中有詩、考之撫言、則唐人已有此物、名酒胡子乃勸酒具也云云

【葡萄酒】事文類聚續集卷の十二に「史記貨殖傳ニ、漢大宛國造一一ト云々」また唐書の列傳に「唐憲宗遣使賜

李絳一一一ニ

【葡萄ノ美酒夜光ノ杯】唐の王翰(字ハ子羽)の涼州詞の起句なり、曰く「一一一一一一一、欲飲琵琶馬上催、醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回」涼州詞は、樂府の題なり、この詩は、北邊に征伐に出でて居る時のもやうを作れり、起承は、美酒を夜光の玉の「サカヅキ」に酌み、飲まんと欲し馬上に琵琶を彈じてその飲を催すなり、催は「ウナガス」の義、轉結は、共に醉ひてそのまま沙場に臥すをば、君必ず笑ふこと勿れよ、古より征戰に來たりし者が、幾人か生きて歸ることを得たりしぞと、君は他の人を斥す、最も悲壯の詩なり、この詩初唐七絕の第一なりと聞く、定めて然るなるべし、

【負擔】一物を持つに背に負といひ、肩に擔といふ、管子に「負任擔荷、服牛輓馬、以周四方」左傳莊二十二年に「敬仲辭齊侯曰、免于罪戾、弛于一一、君之惠也」

【武斷】其の饒富を恃みて、行を擅にし、罰を成すなり、史記平準書に「兼幷豪黨之徒、以一一於鄉曲」武威を以て擅に人民を制する義、

【補陀落】補陀落迦ともいふ、海島と譯す、祖庭事苑に「西域記云梵語寶陀洛伽山、此言孤絕處、觀自在菩薩所居之山、在南海中」

【扶持】「タスケモツ」義、禮記に「適父母舅姑之所、下氣怡聲、問衣燠寒、出入則或先或後而敬一一之」孟子に「扶病相一一」杜甫の古柏行に「一一自是神明力」

【釜中魚ヲ生ズ】(釜中生魚)極めて貧しくして炊ぐものなきをいふ、(甑中)を見よ、

【釜中ノ魚】世に生存することの久しからざるに喩ふ、通鑑漢順帝紀に「廣陵賊張婴曰、相聚偷生若魚遊釜中、知其不可久」

【扶竹】「フタマタダケ」楊升菴集に見ゆ、また(扶老竹)を見よ、

【不知足】(足ルヲ知ラズ)分に安んずることを知らず、貪求して厭くことなきをいふ、遺教經に「雖處天堂、亦不稱意、一一者雖富而貧」

【淵ニ臨ミテ魚ヲ羨ムハ、退キテ網ヲ結ブニ如カズ】(臨淵羨魚不如退而結網)徒らに幸福を望まんよりは、退いて幸福を得べき素地をつくるに若かざるに喩ふ、漢書の董仲舒傳に「古人有言曰臨淵羨魚不如退而結網」とあるに本づく、淮南子には「臨河而羨魚、不如歸家織網」に作る、文子、抱朴子、漢書禮樂志等に類語あり、

【淵ノ爲メニ魚ヲ驅ル】(爲淵驅魚)暴君が、仁者の爲めに、民を驅逐して、之に歸せしむるに喩ふ、孟子離婁上篇に「一一一一者獺也、爲叢歐爵者鸇也、爲湯武歐民者桀與紂也」爵は雀なり、鸇は「スズメタカ」

【淵變ジテ瀨ト爲ル】世の變遷常なきに喩へていふ俚諺なり、紀淑望の古今集序に「淵變作瀨」とあり、古歌に「世の中は何か常なるあすか川、きのふの淵は今日の瀨となる」

【浮沈】浮びたり沈みたりする義、蘇軾の詩に「龜魚自一一」また定りなき貌、詩經小雅に「載沈載浮」また世の變遷につれて行くにいふ、史記に「與世一一而取榮名哉」

【浮涉】俗にしたがひて浮き沈みする義、涉は沈に通ず、前條を參看せよ、漢書袁盎傳に「與閭里一一」

【腐腸之藥】腸を「クサラシ」身をそこなふ毒藥をいふ、美味醇酒に喩ふ、枚乘の七發に「甘脆肥醲、命曰一一一ト

【負重涉遠】(重ヲ負ヒ)を見よ、

【紼ヲ執ル】(執紼)禮記の曲禮に「助葬必一一」と、註に「紼ハ棺ヲ引ク索ナリ」釋名に「前ヨリ之ヲ引クヲ紼トイフ、紼ハ發ナリ、車ヲ發シテ前マシムルヲ以テ名ク」——は送葬の義、禮記檀弓に「弔於葬者必執引、若從柩及壙皆一

ー引とは柩車の索、棺に在るを綍といひ、道を行くに引といふ、

【物議】 世論といふに同じ、南史謝幾卿傳に「二人意相得、並肆情誕縱、或乘露車歷游郊野、不屑ーーニ二人は幾卿と庾仲容とをいふ、

【佛經】 佛教の經文なり、後漢の明帝永平年中に、摩騰竺法蘭白馬に經を馱して東都に至る、則ち四十二章經なり、漢土に佛經あること、これを始とす、古今原始には「漢ノ哀帝ノ時博士秦景、西國浮屠經ヲ京師ニ傳フ云云」また事物紀原に「漢ノ永平ヨリ後、摩騰首ニ四十二章經ヲ譯ス、コレ譯經ノ始ナリ」

【祓禊】 上巳の節日に「身ソギ」するをいふ、類書纂要に「祓禊ハ惡ヲ除ク祭ノ名ナリ、祓ハ災ヲ除キ禍ヲ求ムルナリ、禊ハ潔ナリ、水ニ于テ之ヲ盥潔スルナリ、徐廣曰ク、上巳ニ水ニ臨ミテ不祥ヲ祓除ス」

【物故】 ーーを見よ、

【佛國記】 一卷、宋(六朝)の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中に於て長安より天竺に遊び三十餘國を經歷し、歸りて是の書を成す、書中記するところの山川道里は以て考核の資とすべし、

【佛像】 眞俗佛事編に「佛ノ木像繪像ヲ禮拜恭敬スルハ、全ク如來在世ノ尊ヲ拜スルニ同ジ、故ニ佛滅後繪木ノ像ヲ安ンジテ拜セシム、四覺經ニイフ、若復滅後施設形像、心存目想生正憶念、還同如來常住之日ト」釋門事物紀原に「後漢ノ明帝夢ニ、金人ノ長大ニシテ頂ニ日光アルヲ見ル、傅毅曰ク天竺ニソノ道アリ、號シテ佛ト云フト、此ニ於テ使ヲ遣シテソノ形像ヲ圖セシム、コレ漢土ニ佛像ヲ造ルノ始ナリ、本朝ニテハ、欽明天皇ノ十四年夏五月溝邊直海ニ入リテ樟木ノ海ニ浮ビテ玲瓏タルヲ見、取リテ天皇ニ獻ズ、仍テ工匠ニ命ジテ佛像ヲ作ラシムト、日本紀ニ見エ、是レ我國ニテ佛像ヲ作ルノ始ナリ」

【佛生日】 釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八日ーーー十大禪院有浴佛齋會、乃煎香藥糖水相遺、謂之浴佛水」とあり、我朝にても推古天皇の時よりこの會を始む、

【物色】 禮記月令に「仲秋之月、命宰祝察物色」ーー事とは犧牲の色をいふ、轉じて人相書にて人を探し求むる義とす、後漢書嚴光傳に「帝令以ーーー訪之」帝は光武帝、

【佛處士】 ー好人物をいふ、空同集に「俗ニ善人ヲイヒ、ーーー爲ス」

【佛醉雷ノ如シ】 (流血)を見よ、

【艴然】 怒りて色を變ずる貌、孟子公孫丑上篇に「曾西艴然ーーー不悅」

【佛陀】 名義集に「大論ニ云フ、秦ニ知者ト言フ、過去未來現在ノ衆生非衆生ノ數有常無常等ノ一切ノ諸法ヲ知ル、菩提樹下ニシテ了了ト覺知ス、故ニーーート名ヅク云云釋氏要覽に、梵語ニハーーー或ハ浮屠ト云ヒ、或ハ部多トイフ(中略)竝ニ譯シテ覺ト爲ス、所謂自覺他覺、覺行圓滿、今略稱佛也」

【佛頭着ヲ著ク】 善美なる著書に、拙惡なる序文を冠するを譏る語、典籍便覽に「歐陽修修五代史、或作序冠其前、王安石曰、佛頭上豈可著糞(佛ノ面を見よ、

【佛ニ侫ス】 (侫佛)佛の加護を得んとし甚しくへつらひ拜すること、五代史に莊宗由此、亦ーーーまた梁書に「武帝晚溺信佛道」

【佛法僧】 佛は如來なり、法は敎法なり、僧は比丘なり、之を三寶といふ、釋氏要覽に「淮惊法師福田論云、夫福田者何也、三寶之謂也、功成妙智、道登圓覺、佛也、玄理幽徹、正敎精誠、法也、禁戒守眞、威儀出俗、僧也」この語義楚六帖にも出づ、

【黻冕】 黻は蔽膝なり、韋を以てつくり、兩巳相背くが如き文を施す、その狀、亞の字の如し、亞は古の弗の字なり、冕は冠なり、皆祭服なり、論語泰伯篇に「惡衣服而致美乎ーーー」

【佛郎機】 「イシビヤ」皇明世法錄に「ーーー十八海ノ西南ニ在リ、滿剌加ニ近シ、性寬狹ニシテ利ヲ嗜ム、大銃ヲ善クス、銃發シテ彈落ツルコト雨ノ如シ、向フトコロ敵ナシ、ソノ銃ハ銅ヲ用ヒテ鑄ル、大ナル者千餘斤、因リテ名ヅケテーーートイフ、然レドモ唯夷人精シクノミ之ヲ用フ、中國ノ人ハ及バザルナリ」

【物類相感】 太平記卷二に見ゆ、孝經の序に「物之相感、有自然者ことまた易の乾卦にも「同聲相應、同氣相求、水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎」とあるに同じ、

【物論譁囂】 時の物議の「ヤカマシキ」譁囂を見よ、

【筆】 釋名に「筆ハ述也、事ヲ述ベテ之ヲ書スル也」爾雅釋器に「不律謂之筆」註に「蜀人筆ヲ呼ビテ不律ト爲ス」說文に「楚謂之聿、吳人謂之不律、燕謂之弗、秦謂之筆」古今註に「古ノ筆ハ竹ヲ以テシ木ヲ以テスルヲ論ゼズ、但能ク墨ヲ染メ字ヲ成ス、即チ之ヲ筆ト謂フ、秦六國ヲ呑ミ前代ノ美ヲ滅ス、故ニ蒙恬時ニ稱セラルルヲ得タリ、蒙恬ノ筆ヲ造リシハ、即チ秦筆ノミ、枯木ヲ以テ管ト爲シ、鹿毛ヲ柱ト爲シ、羊毛ヲ被ト爲ス、所

間蒼莽ナリ、形管赤漆ノミ、史官事ヲ記スニ之ヲ用フ」五雑組に「古人書ス鳥文小篆、似不用筆亦可、自呉草入分興、而筆之標逸重矣」史記に「始皇令蒙恬興太子扶蘇築長城、恬取中山兎毫造筆」初學記に「尚書中侯ニ、玄龜圖ヲ負ヒ出ヅ、周公筆ヲ援リ、時文ヲ以テ之ヲ寫ス、曲禮ニイフ、史載筆、士載言ト此レ則チ秦ノ前已ニ筆アリシナリ」陶弘景傳に「弘景年四五歳、常以荻爲筆、畫灰中學書」世説に「王羲之得用筆法於白雲先生、先生遺以鼠鬚筆、又鍾繇・張芝皆用鼠鬚筆」拾遺記に「任末年十四、學無常師、或依林木之下、編茅爲蓆、削荊爲筆、夜則映月望星、暗則燃蒿自照」晉書に「左思爲三都賦、門庭藩溷皆置筆硯、十稔、方成」東坡志林に「筆禿千枝、墨磨萬挺」(退筆)(管城子)(筆諫)(椽大ノ)(五色ノ筆)(形管ノ)(筆頭花ヲ)等を參看せよ、

【不逞】 逞は快なり、心に快からざる不平の人をいふ、左傳に「鄭尉止及五族、聚群——之人、以爲亂」正韻には「不檢謂之——」とあり、不檢とは檢束することなき驕慢なる人をいふ、(

【不庭】 王庭に來朝せざるをいふ、詩經大雅韓奕篇に「幹——方、以佐戎辟」また左傳隱十一年に「以王命討——」

【不弔】 弔は愍なり、天のあはれむ所ろと爲らざる義、詩經小雅に「不弔昊天」また不仁といふが如し、左傳襄十三年に「君子以昊爲——」

【筆ヲ落シ蠅ヲ點ス】 (落筆蠅)を見よ、

【筆ヲ落ス】 (落筆)下筆に同じ、杜甫の詩に「閲書百紙盡、——レ一四座驚」

【筆ヲ呵ス】 (呵筆)寒中文を書くに筆に暖き息を吹きかくるをいふ、開元遺事に「李白于便殿撰制誥、時大寒筆凍、帝勅宮嬪十人侍白左右、執牙筆呵之受聖旨如此」

【筆ヲ下ス】 (下筆)筆を乘りて詩文を作る義、唐の岑參の詩に「學富贍清詞、——レ一不能休」

【筆ヲ下シ章ヲ成ス】 (下筆成章)筆を下して容易に文章を成すをいふ、魏志文帝紀評に「文帝天資文藻、下筆成章、博聞彊識、才藝兼該」

【筆ヲ閣ク】 (閣筆)閣は「サシオク」なり、筆をおくをいふ、事類全書に「後漢東觀大集群儒、而著述無主、毎欲載一事、皆閣筆相視、合毫不斷、東觀は閣の名、

【筆ヲ投ズ】 (投筆)文事をすてて武事に從ふをいふ、漢の班超字は仲升、大志あり、家貧しく傭書して以て自ら給す、乃ち筆を地に投じて曰く、大丈夫當に張騫傅介子に效ひ、功を異域に立てて、以て封侯を萬里の外に取るべし、安んぞ能く久しく筆硯を事とせんやと、西域に使して、功あり、封ぜられて定遠侯となれり、魏徴の述懷の詩にも「中原還逐鹿、——事戎軒」

【筆ヲ祇ル】 (祇筆)筆を「ナメ」て書かんとする義、莊子田子方篇に「——レ一和墨」

【筆ヲ執ス】 (執筆)自ら筆を隨へ持つなり、禮記の曲禮に「史——、士執言」

【筆花ヲ生ズ】 (筆生花)(筆頭花ヲ)を見よ、

【不天】 天の祐くる所ろと爲らざる義、左傳に「孤——不能事君」

【不腆】 腆は善なり、多なり、厚なり、禮の厚からざるをいふ、人に物を贈る謙辭、左傳文十二年に「——敝器、不足以辱也」禮記郊特牲に「脩必誠、辭無不腆」

【普天之下率土之濱】 詩の小雅北山篇に「普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣」この註に「土ノ廣キ臣ノ衆キヲ言フナリ、率ハ循、濱ハ涯ナリ」普は徧なり、天の徧く覆ふところの下、地の長く續ける限りにて、天下中の義、普はもと溥に作る、溥は大なり、孟子にその詩を引きて普に作る、義同じ、

【溥天之下】 前條を見よ、

【浮屠】 佛または佛教または僧をいふ、祖庭事苑に「梵語ノ佛陀、或ハ浮圖トイフ、或ハ部多トイフ、或ハ毋駄、或ハ沒陀、皆五天ノ語ナリ、今竝ニ譯シテ覺道士トナス」三破論に「佛ノ舊經本ニ——トイフ、羅什改メテ佛徒ト爲ス」歐陽修の釋秘演詩集序に「曼卿隱於酒、秘演隱於浮圖、皆奇男子也」また寺塔をいふ、次條を見よ、

【浮圖】 浮屠に同じ、卓氏藻林に「浮圖ハ塔ナリ、圖ハ屠ト通ズ」唐書張巡傳に「射佛寺——」洛陽伽藍記に「永寧寺中有九層——」

【埠頭】 通雅に「水瀕ナリ」また水邊にて物を販賣する處をいふ、康熙字典に「——籠貨物、積販商泊之所」ハトバ、

【不動尊】 佛經に明王の一、一切の鬼魅諸障碍、煩惱を降服するといふ、顔色獰惡にして、右に降魔劍を持し、左に縛の繩といふを握り、背に火焔ある像、脇士の二童子を制叱迦矜羯羅といふ、

【婦徳】 婦人の備ふべき徳なり、禮記の昏義に「婦人先レ嫁三月、教以——婦言婦容婦功」(四行)を參看せよ、

【夫倡へ婦隨フ】 關尹子に「天下之理、夫者倡、婦者隨、牡

【巫馬期】アノ孫申君得ニ見ユ、【孔子】ノ弟子星ヲ穀キ之ヲ見ヨ、

【不坂】ベクハ、かならざる義、ッチャリとしたる語勢、

【望之】アリ、【望】ミすして忽ち至る幸福をいふ、史記

【駟馬】天子の女婿なり、駟は乗輿に用ふる副馬なり、

【盍上愛非能ノ者ニ用ヒ】盍ハ何ゾ不ト也、上ハ君ニ非能ノ貴也、

【斃】ハ、爲ノ繁ト用ヒ、斃ハ爲ノ繁ト用ヒ、盍ハ何ゾ不ト也、

【婦ノ】爲ノ繁ト用ヒ、婦ハ爲ノ繁ト用ヒ、以ハ爲ノ繁ト用ヒ、

【船ヲ以テ家ト爲ス】以船爲家、漢書五行志に「泉地亦逃ッ乎ト云ヒテ水ニ入ル之ヲ求ムルヿ也、

【所ハ陵ノ字ニ刻ス其ニ舟ヲ記ス、陵ハ所ニ從ヒ刻ニ從ヒ舟ニ從ヒ

を參看せよ、

【拊髀】（髀ヲ拊ツ）を見よ、

【嫉妬】「ナマメキテ」「コビル」蔡邕の文に「都冶——」

【富弼】字は彦國、河南の人、篤學にして大度あり、宋の仁宗の時、茂才異等に擧げらる、累遷して樞密使に拜す、後ち文彦博と竝に相たり、天下稱して富文となす、鄭國公に封ぜらる、卒して太尉を贈り、文忠と謚す、宋史に「富弼天性忠義ナリ、仁宗命ジテ契丹ニ使セシムルトキ、一女ノ卒スルヲ聞キ、再ビ使スルトキ一男ノ生ルルヲ聞ケドモ、皆顧ミズ、家書ヲ得レドモ未ダ嘗テ之ヲ發セズ、輒チ之ヲ焚キテ曰ク、徒ニ人意ヲ亂スノミト、帝召シテ樞密副使ト爲ス、弼當世ノ務十餘條及ビ安邊十三策ヲ上ル、後チニ仕ヲ致シ洛ニ居リシトキ、清心獨居シ、夫人ニ對スルコト賓客ノ如シ、每ニ盜起シテ、家廟ヲ瞻禮スルコト、肅如タリ、年八十ニシテ終リ、中宗ノ廟庭ニ配享セラル」

【不敏】猶ほ不明の如し、不明なれば事に敏捷ならず、論語顏淵篇に「回雖——請事斯語矣」戰國策に「寡人——」孝經に「參——何足以知之」參は曾參、

【盾敏】盾は大なり、敏は達なり、才行すぐれて美にして、事を爲すに敏達なるをいふ、一解に盾は容貌の美なるをいふと、孟子離婁上篇に「殷士——祼將于京」祼は音クワン宗廟の祭に鬱鬯の酒を以て地に灌ぎて神を降すをいふ、

【布獲】「アマネク」四方を「オホフ」義、文選長笛賦に「氣噴勃以——兮」

【武夫】「モノノフ」詩經周南兎罝篇に「赳赳——、公侯干城」

また戰國策に「白骨疑象——類玉」の——は碱砆をいふ、次條を見よ、

【碱砆】玉に似たる一種の石、碱一に砆に作る、王褒の論に「故美玉藺於——、凡人視之怏焉、良工砥之然後知其和寶也」司馬光稷下賦に「——亂玉、魚目閒珠」——一に武夫とも書く、

【扶風】晉より隋に至るまでの郡名、或は雍州に屬し、或は益州に屬す、唐以後の縣名、今の陝西省鳳翔府——縣治、

【扶服】力を致すをいふ、禮記に「——救之」一解に、——は、匍匐に同じ、手足幷せ行くなり、揚雄の解嘲に「——入彀」

【怖覆】怖れて「ヒックリカヘル」文選神女賦に「神心——」注に「——ハ恐怖シテ反覆スルナリ」

【傅粉カト疑フ】（疑傅粉）魏略に「何晏字ハ平叔、姿儀ニ美ナリ、面絶ダ白シ、魏ノ文帝其ノ粉ヲ傅クルカヲ疑フ、後、夏月ニ至リ喚ビ來リ、熱湯餅ヲ與フ、大ニ汗出ヅ、遂ニ朱衣ヲ以テ自ラ拭フ、色轉タ皎然タリ、帝始メテ之ヲ信ズ」

【傅粉郎】白粉をつけたる男、前條を見よ、

【負米ノ嘆】（子路米）を見よ、

【不平之鳴】韓愈の送孟東野序に「大凡物不得其平則鳴、草木之無聲、風撓之鳴、水之無聲、風蕩之鳴、云云」物はすべてその常を得ざれば必ず鳴聲を發するをいふ、人の感情も喜怒哀樂すべて常を得ざれば亦不平を鳴らすものなり、必ずしも不滿の時のみに限らず、

【斧劈】畫家の用語、石の皺を畫くに、斧もて木を劈きたる如き線を描くをいふ、大——小——の稱あり、妮古錄に「皺法、荊浩、范寬雨點皺、李將軍小——皺、李唐大——皺、云云（披麻）を參看せよ、

【武弁】武人のかぶる冠、魏志陳思王植傳に「解遠遊、戴——、解朱組佩青紱」轉じて武人をいふ、儲光羲の句に「——朝建章」建章は宮殿の名、

【不經之法】尹文子に「——君臣上下是也」

【父母】書經泰誓に「惟天地萬物——、惟人萬物之靈」孟子離婁上篇に「天子父——、天子——、父——、天下之父——、事天事地——、事父事母——、事天事地——、事父事母——、事天事地——、事父事母

る者は、よくその心を體して疾なきやう心掛くるを孝とはいふなりとの義、論語爲政篇に「孟武伯問孝、子曰、——————」舊説には、子たる者は、父母をして己の不義に陷らんことを憂へしむることなく、唯己の疾に罹ることのみを憂へしむるやうすべしと、

【不凡】「ナミナミ」ならざる義、凡漢音ハン非凡と義同じ、汝南先賢傳に「薛勤謂陳仲擧父曰足下有——子、此時仲擧年十五、與勤言議盡日」

【父母疾アレバ爲ム可カラズト雖モ藥ヲ下サザルノ理ナシ】親の身に疾ありて、とても治すべからざる大病と雖も藥を飲まさずして捨て置くの道理なしとの義、宋史文天祥傳に「元丞相孛羅怒曰、爾立二王一竟成何功、天祥曰、立二君以存一宗社一存一日則盡臣子一日之責、何功之有、曰既知二其不可一、何必爲、天祥曰、父母有疾、雖二不可一爲、無二不下藥之理一、盡二吾心一焉、不可救、則天命也、今日天祥至此、有死而已、何必多言」

【不毛之地】史記の郷世家に「哀ンテ其社稷ヲ絶ツニ忍ビズシテ不毛ノ地ヲタマヒ、復タ改メテ君王ニ事フルヲ得シメバ、孤ノ願ナリ」註に「境埆ニシテ五穀ノ生ゼザルヲ不毛トイフ、誰シテ敢テ肥饒ヲ求メズ」公羊傳宣十二年にも見ゆ、孔明の出師表に「五月渡二瀘深一入不毛一」註に「不毛ハ草木ヲ生ゼザルノ地」

【浮民】「ゴクツブシ」近思錄の註に「京師——逾二百萬一」

【文】數義あり、説文に「錯畫ナリ」玉篇に「文章也」釋名に「文ハ衆綵ヲ會集シテ以テ辭義ヲ成ス、文繡ノ如ク然リ」禮記の樂記に「五色成レ文而不レ亂」尚書の序に「古者伏犧氏之王二天下一也、始畫二八卦一、造二書契一、以代二結繩之政一、由レ是文籍生焉」疏に「文ハ文字ナリ」説文に「依二類象形一、故謂二之文一、其後形聲相益、即謂二之字一」(文字)を見よ、史記諡法に「經緯天地曰レ文、道德博聞曰レ文、勤學好問曰レ文、慈惠愛レ民曰レ文、愍民惠禮曰レ文、錫レ民爵位曰レ文」

また飾る義、論語子張篇に「小人之過也必文」また文體の名、凡そ筆を執りて辭を屬する者、文にあらざるはなし、而して別に文の一體に文と稱するものあり、其の文格たる散文あり、韻語あり、或は楚辭に倣ひ、或は四六となす、其の用たる、或は以て神に盟ひ、或は以て人を諷する等、その體、その用各同じからず、

【文友】文學を以て交る友、文ヲ以テ友ヲ——ヲ見よ、

【聞一知十】論語公冶長篇に出づ(一)ヲ聞テ十ヲ知ル)を見よ、

【分陰】少しばかりの時刻なり、晉書陶侃傳に「陶侃嘗語二人一曰、大禹聖者乃惜二寸陰一、衆人當レ惜二分陰一」

【汾陰】兩漢の河東郡——縣、北魏・隋の縣名、今の山西蒲州府榮河縣の北、

【氛氳】氣の盛なる貌、謝惠連の雪詩に「散漫交錯、——霰紛紜」また祥氣をいふ、

【紛紜】亂るる貌、楚辭卷思に「腸——以繚轉兮」また盛なる貌、司馬相如の書に「威武——」班固の東都賦に「萬騎——」

【紛縕】盛んなる貌、楚辭九章に「——宜二修姱一而不レ醜兮」廣韻には「——ハ亂ナリ」

【文苑英華】一千卷、宋の太平興國七年李昉等勅を奉じて編す、蓋し以て蕭統の文選に續くに在り、故に文選は梁初に至るを以て、この書は卽ち始を梁末に託し、以て唐に至る、されども南北朝の文は十の一弱にして唐代の文は十の九強に居り、往往全部を收入せしものあり、唐人の諸集の世に佚せしもの、幸にこの書に賴りて傳はるを得たるもの少からず、宋の彭叔夏の文苑英華辨證十卷、異同を考訂して極めて精核と爲す、

【文翁】前漢の廬江、舒の人、少くして學を好み、春秋に通ず、景帝の時、蜀郡の守となり、敎化を崇尚し學校を興し以て風俗を變ず、是に由りて蜀の文風齊魯に比すべし、武帝の時、天下皆學を建つるは文翁より始まる、後ち、蜀に終る、蜀人之を祀る、詳しくは漢書の循吏傳を見よ、

【文ヲ賣リ活ヲ爲ス】(賣文爲活)文章を以て生活の資とする義、杜甫の詩に「故人南郡去、去索二作一碑錢一、本賣文爲活、飜令二室一倒懸一」

【文ヲ屬ス】(屬文)屬は綴るなり、綴文また作文に同じ、漢書賈誼傳に「誼年十八、以二能誦一詩書一——一、稱二於郡中一」晉書に「陸雲字ハ士龍、六歲ニシテ能ク文ヲ屬ス」

【紛ヲ解ク】紛爭(モツレ)を解くをいふ、史記に「管仲連曰、欲爲二人排一難解一紛而無一取也」

【憤ヲ發シ食ヲ忘ル】(發憤忘食)論語述而篇、孔子の語「其爲二人也一、——レバ——、樂以忘レ憂、不レ知二老之將一至云爾」と、理の未だ會得せざる所あれば憤を發してその理を得んことを求め、食事をも忘るる程なり、すでにその理を得れば一途に之を樂みて憂をもち忘るる程なりとの意、

【文ヲ舞ス】(舞文)文は刑法の文なり、擅に刑法の文を玩びて、罪に致すをいふ、漢書汲黯傳に「好二興一事一、舞二文法一」

文法ニまた貨殖傳に「吏士ー〻ー弄法刻章偽書」

【文ヲ以テ詩ヲ爲ル】（以文爲詩）后山詩話に「黄魯直云詩文各有體、韓ー〻ー〻、杜以詩爲文、故不工爾」

【文ヲ以テ友ヲ會ス】（以文會友）文學のために友人相會するをいふ、論語顔淵篇に「曾子曰、君子以文會友、以友輔仁」の註に「學ヲ講ジテ以テ友ヲ會スルキハ、道益明カナリ、善ヲ取リテ以テ仁ヲ輔クルトキハ、德日ニ進ム」

【紛更】「ミダリ」に改め換ふるをいふ、漢書汲黯傳に「何空取高皇帝約束、ー〻之爲」

【文行忠信】論語の述而篇に「子以四教、ーーーー」とあり、孔子人に教ふるにこの四者を以てせしなり、文を學び行を修め、忠信を存するをいふ、忠は心を盡し、信は事を實にするなり、

【脗合】吻一番ピン兩唇の相合ふが如く、事のよく相合するをいふ、莊子齊物論に「爲其ーーこ

【扮戲子】俳優が種種の人物に打扮ヨソホフするをいふ、傳習錄卷上に「若只是那些儀節、求得是當便謂至善、即如今ーーー扮得許多溫清奉養的儀節是當、亦可謂之至善矣扮の字、扮戲打扮假扮等の義の時は音ハン又はヘンを正とすれども、俗諺に從ひここに收む、

【文魚】「モヤウ」あるうつくしき魚をいふ、山海經の中山經に「睢水其中多ーー」

【文君壚ニ當ル】（卓文君）を見よ、

【分外】己の身分の外をいふ、三國志魏志に「程曉疏曰、上不責非職之功、下不務ーー之賞」

【文官錢ヲ愛セズ武臣死ヲ惜マズ】宋史の岳飛傳に「或人天下ハ何ノ時カ太平ナラントト問フ、曰ク、文官不愛錢、武臣不惜死、天下平カナラントト」官一に臣に作る、

【刎頸之交】生死を共にし、頸を刎ねらるるも悔いざるをいふ、史記の廉頗藺相如傳に「廉頗肉袒負荊至門謝罪曰、鄙賤之人、不知將軍寬之至此、卒相與驩爲ーーーー」荊は笞刑に用ふる杖、古は「ニンジンボク」にて作る、

【文敎熙ル】文學の敎が興り廣まる、熙は說文に「興也、廣韻に「和也、廣也、長也」とあり、韓愈の河南府同官記に「武志既揚、ーー亦ー」

【文鰐】文は彷なり、鰐首に同じ、天子などの遊樂に用ひらるる舟をいふ、子虛の賦に「游於清池浮ーー（龍頭鷁首）を見よ、

【文獻足ラズ】（文獻不足）文は典籍、獻は賢人をいふ、徵證すべき典籍と賢人との乏しきをいふ、論語八佾篇に「子曰、夏禮吾能言之、杞不足徵也、殷禮、吾能言之、宋不足徵也、ーーー故也、足則吾能徵之矣」不足とは全く無きにあらず、唯缺くる所ろあるなり、杞國は夏の後、宋國は殷の後なり、

【文獻徵存錄】十卷、錢林字ハ東生）の輯むるところ、清初より道光頃に至る學者四百五十九人の傳記にて、その學說詩文の一班をも論ぜり、

【文獻通考】（通考）を見よ、

【文淹博】字は寬夫、宋の介休の人、進士に及第し、四朝に累仕し、出ては將、入りては相たること五十餘年、再び相たる時、富弼と並び命ぜらる、士大夫庭に相賀す、淹博朝に立つに端重にして威あり、契丹の使、望見して容を改め、手を拱して曰く、天下の異人なりと、官太師に至り、潞國公に封ぜらる、紹聖四年卒す、年九十二、忠烈と謚す、著すところ潞公集四十卷あり、

【賁鼓】大鼓なり、詩經大雅靈臺篇に「ーー維鏞」鏞は大鐘、

【紛紅駭綠】紛は亂るるなり、駭は驚くなり、紅は花の色、綠は草木の葉をいふ、花葉の風のために吹き搖かさるる狀をいふ、柳宗元の袁家渴記に「每風自四山而下、振動大木、掩冉衆草、ーーーー翁勃香氣陸游の詩に「人在ーーーーー中」

【粉骨碎身】身を「コナゴナ」にして「ハタラク」義、禪林類纂に「ーーーー難報此德」證道歌に「ーーーー未足酬一句了然超百億」

【文采】文章光彩をいふ、荀子に「此夫文而不采者歟」

【分歲】字典に「風土記除夜祭先、竣事長幼聚飲祝頌而散謂之ーー」

【分散】「ハナレバナレ」になる、離散に同じ、左傳に「國人ーー」

【文山ガ衣帶ニノコレル贊】駿臺雜話の「歲寒知松柏」に見ゆ、文山は、文天祥の號なり、燕京の柴市にて殺されし時、衣帶中に贊あり、曰く「孔曰成仁、孟曰取義、惟其義盡、所以仁至、讀聖賢書、所學何事、而今而後、庶幾無愧」と、孔曰成仁とは、論語の衞靈公篇に「志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁」とあるを斥し、孟曰取義とは、孟子の告子篇に「生亦我所欲也、義亦我所欲也、二者不可得兼、舍生而取義者也」とあるを斥す、

【文山集】 二十一巻、宋の文天祥撰す、凡そ詩文十七巻、指南前録一巻、後録二巻、紀年録一巻、天祥大節炳然必ずしも詞章を以て重しとせず、而かも詞章も亦實に卓然として傳ふべし、

【文字】（——）を見よ、

【文子】 二巻、一名を通玄眞經といふ、欽定四庫全書簡明目録に「——ハソノ名字ヲ知ラズ、漢志ニ、タダ老聃ノ弟子ト稱スルノミ、或ハ計然トイフハ誤ナリ、書凡十二篇皆聃ノ說ヲ述ブ、柳宗元ハ、ソノ多ク他書ヲ竊取シ、以テ之ヲ合スト稱ス、然レドモ要スルニコレ唐以前ノ古本ナリ」

唐の徐靈府の通玄眞經注十二巻、宋の杜道堅の——續義十二巻あり、

【文事有ル者ハ必ズ武備有リ】（有ル文事ノ者必有ル武備）文武は一方に偏すべからざるをいふ、史記の孔子世家に「孔子相ノ事ヲ攝セリ、曰ク、臣聞ク、有ル文事ノ者、必有ル武備、有ル武事ノ者必有ル文備ニ云云」家語相魯篇にも見ゆ、

【文質三統】 論語に「子曰、殷因於夏禮、所損益可知也、周因於殷禮、所損益可知也、馬融の注に「所因謂三綱五常、所損益謂文質三統」と、一說に、文質とは、夏は忠を尚び、商は質を尚び、周は文を尚ぶをいふ、三統とは、夏の正は建寅人統たり、商の正は建丑地統たり、周の正は建子天統たるを謂ふと、

【文質彬彬】 彬彬は猶ほ班々の如し、物の相雜りて適ひ均しき貌、即ち文と質と適當に雜れるをいふ、論語雍也篇に「質勝文則野、文勝質則史、——、然後君子ナリ」

【文人】 文德ある人、詩經大雅江漢に「告于——」注に「——ハ先祖ノ文德アル者、文王ヲ謂フ」

また廣く文學ある人をいふ、——墨客などと連用す、文士に同じ、

【文身】 肌に「イレズミ」して飾る、史記の周紀に「太伯虞仲知古公欲立季歷以傳昌乃二人亡如荊蠻——斷髮以讓季歷」淮南子に「民人被髮文身像鱗蟲」（斷髮）を見よ、

【開人】 名高き人、家語に「少正卯魯之——也」

【文人相輕ンズ】 文藝に從事する人は、自ら高くかまへて相互に輕侮する習あるをいふ、典論に「文人相輕、自古而然、傅毅之於班固、伯仲之閒耳、而固小之、與弟超書曰、武仲以善屬文、爲蘭臺令史、下筆不能自休、夫人善於自見、而文非一體、鮮能備善、是以各以其所長、相輕所短」

【文臣錢ヲ愛セズ】（文臣不愛錢）宋史岳飛傳に「或問、岳飛、天下何時太平、飛答曰、——武臣不惜死、則天下平矣、蓋有宋積弱、文臣愛錢、武臣惜死、岳飛所以致有斯言」

【文心雕龍】 十巻、梁の劉勰撰す、上篇二十五は主として文章の體裁を論じ、下篇二十四は文章の工拙を論ず、別に序志一あり、この書を著す由を言ふ、この書は論文の書の最も古くして且つ精しきものなり、その世に盛行せしは、獨りその行文の妙なるに由るのみならず、清の黃叔琳の——輯注十巻あり、

【氣祥】 天の氣なり、凶氣を氛と爲し、吉氣を祥と爲す、國語に「臺不過望氣——」

【文章】 「アヤモヤウ」荀子富國篇に「黼黻——」周禮冬官考工記に「畫繪之事、青與赤謂之文、赤與白謂之章」

また文字を連ねて篇を成せるもの、漢書に「——則司馬遷、和如杜甫の詩に「文章千古事、得失寸心知」

【文章一貫】 二巻、明人高琦等編す、琦は山東武城の人、丙戌の進士、嘉靖丁亥季夏、煙霧程獻の序あり、上巻は、立意・氣象・篇法・章法・句法・字法に分ち、下巻は、起端・敍事・議論・引用・譬喩・含蓄・形容・緒結に分ちて、古人論文の法則とすべきものを類輯せり、如蘭社鐫刻本あり、

【文章軌範】 七巻、宋の謝枋得撰す、擧業者の爲めに軌範とすべき文章凡て六十九篇を選集せしものにして、侯王相將有ル種乎の七字に配して七巻に分つ、一二巻を放膽文といひ、三巻以下を小心文といふ、その意に以爲らく、凡そ文を學ぶには、初はその膽の大なるを要し、終は心の小なるを要すと、採るところの文は陶淵明の歸去來辭、諸葛亮の出師表を除くの外は、皆唐宋作家の文なり、每篇批點評語あり、唯出師表と歸去來辭とのみこれ無し、蓋し枋得は宋の忠臣にして此書は宋の亡後に編せしものなれば、嘗に二子を尊重して然るのみにあらず、寓意の存ずるものあるならん、この書別に鄒守益（東郭ト號ス、明ノ正德ノ進士）の續——七巻あれども選擇宜しきを失せり、蓋し疲癃なる書肆の、名を守益に託せしものか、是に於て賴山陽は謝選拾遺六巻を選集して世に行へり、

【文昌星】 北斗星の魁前に在る六ッの星なり、魁といふ名に因りて科第をこの星に祈ることとなれり、五雜組に「俗以魁故祠文昌以祈科第、因其近斗也、故亦稱文昌司命云云、傅會甚矣」

【文章正宗】二十卷、續集二十卷、宋の眞德秀撰す、正編錄する所ろは皆唐以前の文なり、辭命・議論・敍事・詩歌の四類に分つ、續集は皆北宋の文にして、議論・敍事の二類のみ、蓋し猶ほ未成の稿本なるべし、收むるところ大抵理を言ふを以て主と爲す、故にその去取は古來文を論ずる者と迥に異なり、その說普く行はるべからずと雖も、選擇嚴正にして、正宗の名にそむかずと謂ふべし、

【文章鉅公】文章の大家をいふ、李賀の高軒過の詩に「馬蹄隱隱聲隆隆、入門下馬氣如虹、云是東京才子、——」

【文章四友】唐書杜審言傳に「少與李嶠・崔融・蘇味道、爲——、世號崔李蘇杜」

【文章ノ四體】文に散文・四六・韵語・時文の別あり、散文といふは、字數定まらず、平仄韵章もとよりかまひなし、また古文といふ、古は四六の體なし、六朝以來これあり、それ故に後世にても散文に書けば古の法なる故に、これを古文といふ、秦漢の文は、皆古文にて散文なり、六朝以來四六の體盛んに行はれ、古文廢絶せり、唐の韓文公、當時の弊をためて上代の體を又書きあらはせり、蘇軾が「文起八代之衰」といふは、この義を稱美したるものなり、四六また駢儷といふ、南北以來文を對對に書きて句數字數を同じやうにまくばり作る、最初を四字六字に作る故に四六といふ、中になりて色色變化して、或は三七或は五八、或は六八、字數定まらず、しかれども必ず對句と字數とを合するなり、其の內に隔句對あり、二句對あり、二句對を散聯といふ、隔句對を偶聯といふ、句の末に平仄を互にとる、韵語といふは、韵字をふみたる文なり、賦・贊・銘・頌の類の如きこれなり、時文といふは及第の文章なり、また制義ともいひ、制義ともいふ、程文・程墨ともいふ、近世明淸の時文の本は、宋の時、王荊公よりはじまる、宋以前及第にとるは、皆詞賦を以て試む、その無益なるを以て、經書の文句を題にして天下の學士を試む、是を經義といふ、宋の時の經義亡びて傳はらず、ただ張子叔が答經義二篇、宋文鑑にこれをのせたり元の時の經義も亦傳はらず、明の世、淸の世の經義多くあり、それも文法時時に變ずれども、大較首に二句破題といひて、末に必ず矣也焉等の字をおき、その次ぎに承題といふ一くさりあり、その次に長き對八段あり、畢竟四聯なり、是を八股といふ、又八比ともいふ、終りに結語あり、その內に少少變體あり、

右の外に、語錄體あり、東牕體あり、公移體あり、演義體あれども畢竟俗語なり、文章とするにたらず、以上伊藤東涯の操觚字訣の說に係る、

【文章宿老】文章家中の老先生といふ義、唐書に「李嶠字巨山、爲鳳閣舍人、文冊太號多主之、嶠富才思、然其仕前與王勃・楊盈川接、中與崔融・蘇味道齊名、晩諸人沒、而爲——一時學者取法焉」(李嶠)を見よ、

【文章之絕唱】文章の美なること、比なきをいふ、鶴林玉露に「太史公伯夷傳、蘇東坡赤壁賦、文章絕唱也」

【文章一小技】下に「於道未爲尊」の句あり、杜甫の句、文章はもと一小藝なれば道の上に於て尊きものといふを得ずとの意、洪容齋はこの語を評して杜甫が激するところに出でし失言なりといへり(文者貫道を參看せよ、

【文章ハ經國ノ大業】魏文帝の典論に「文章經國之大業、不朽之盛事、年壽有時而盡、榮樂止乎其身、二者必至之常期、未若文章之無窮」とあり、經國とは國を治むるをいふ、

【文章命達ヲ憎ム】(文章憎命達)文人は兎角不仕合の者多し、故にいふ、杜甫の句、

【文儒】文學に長じたる儒者、晉書に「遷于孝武、崇尙——」

【分手】(手ヲ分ツ)を見よ、

【分銖】少しの分量をいふ、錙銖に同じ、史記の大宛傳に「其人皆深眼多須髯、善市賈爭——」

【蚊首】微細の義、蚊は蚊の古文なり、淮南子に「權輕重、不差——」

【文春華ノ如シ】(文如春華)文辭の華麗なるをいふ、曹植の文に「——思若湧泉」

【粉飾】女子の紅・白粉等にて假粧するをいふ、史記滑稽傳に「視人家女好者、云當爲河伯婦、共——之」轉じて飾りて美しく見せる如く人を褒めて善き者にする義、韓詩外傳に「善辨治人者、故人安之、善——人者、故人樂之」

【文成ガ僞】太平記卷二十六に見ゆ、齊人李少翁、鬼神の方を以て武帝に見ゆ、帝幸する所ろの王夫人卒す、少翁方を以て夜、鬼を致す、王夫人の貌の如し、帝帷中より望む、乃ち拜して文成將軍となし、客を以て之を禮す、文成又上に勸めて甘泉宮を作らしめ、祭具を置き以て天神を致す、居る歲餘、その方益〻衰ふ、乃ち帛書を作り以て牛に飯せしめ、佯りて知らざるまね

し、言ひて曰く、この牛の腹中奇ありと、殺し視て書を得たり、書言甚だ怪し、上その手書たるを識りて之を誅す、時に元狩四年なり、詳しくは資治通鑑を見よ、

【蚊蚋山ヲ負フ】 蚋も亦蚊なり、説文に「秦晉ハ之ヲ蚋トイヒ、楚ハ之ヲ蚊トイフ」莊子 應帝王篇に「使」蚊蚋負」山」(蚊負)を見よ、

【文石】 西京雜記に「五鹿充宗學ヲ弘成子ニ受ク、成子少時人アリ授クルニ——ヲ以テス、大サ燕卵ノ如シ、成子之ヲ呑ミ、大ニ明悟シ、天下ノ通儒ト爲ル、成子後病ミ此石ヲ吐出ス、以テ充宗ニ授ク、充宗マタ碩學ト爲ル」

【文籍】 書物をいふ、書經の序に「由」是——生焉」

【憤セザレバ啓セズ、悱セザレバ發セズ】 (不」憤不」啓、不」悱不」發)論語述而篇、孔子の語、下に「舉」一隅」不」以」三隅」反、則不」復也」とあり、憤とは心通ぜんことを求めて未だ得ざるの意とありて、憤り懣ること、悱とは、口言はんと欲して未だ能はざるの貌とありて、その貌屈まり抑へられて伸びざるをいふ、啓はその憤懣の惑を開き知らしむるなり、發はその能はざる所ろの辭を達して言はしむるなり、學者をして反覆推究して、教を受くるの地を爲さしめ、而る後に啓發するをいふ、

【噴雪】 浪の散り亂るるに喩ふ、李白の詩に「潮似」連山」——來」

【蚊睫之蟲】 蚊の「マツゲ」に巢をくふ蟲なり、列子湯問篇に「江浦之閒、生」麥蟲」、其名曰」焦螟」、群飛而集」於蚊睫」、弗」相觸」也、栖宿去來、蚊弗」覺」也」とあり、麥は細小の義、

【芽然】 土の「モリアガル」貌、管子の地員篇に「——若」灰」註に「——ハ壤起ノ貌」

【文宣王】 唐の玄宗開元二十七年八月孔子を先聖と稱し、追諡して——といひ、南面に坐して王者の服を被らしめ、弟子に追贈して、公侯伯となす、唐書禮樂志を參看せよ、

【分疏】 「イヒワケスル」賓退錄に「世俗謂」自辨解」曰」——」品字箋に「——ハ卽チ條陳ナリ」

【文宗】 文人の宗師をいふ、晉書陸雲傳に「百代——一人而已」また唐書陳子昂傳に「是必爲」海內——」」

【文則】 二卷宋の陳騤字ハ叔通、嘉泰三年卒ス、年七十六撰す、この書上卷は多く文法を論じ、經傳の文を評す、下卷は主として句法文體を論ぜり、修辭の參考とすべし、我が國にては享保十三年、山井鼎校刊す(陳騤)を參看せよ、

【文其ノ實ニ過グ】 (文過」其實」)文飾の實地に過ぐるをいふ、後漢書馮衍傳に「以」文過」其實」、遂廢」於家」」

【紛拏】 亂れて相搏つをいふ、漢書霍去病傳に「漢匈奴相——」

【粉黛】 「オシロイ」と「マユズミ」と、假粧の義轉じて美人をいふ、白樂天の長恨歌に「六宮——無」顏色」」

【粉黛ヲ取ル】 (粉白)を見よ、

【文體三アリ】 (文體有」三)朱子の語錄に「有」治世之文、有」衰世之文、有」亂世之文、六經治世之文也、如」國語委靡繁絮、衰世之文耳、是時語言議論如」此、宜乎周之不」能」振起」也、至」於亂世之文」則戰國是也、然有」英偉氣、非」衰世國語之文之比」也、楚漢閒文字其是奇、豈易及」也」

【文體明辨】 八十四卷、明の徐師曾撰す、師曾字は伯魯、吳興の人、嘉靖二十六年の進士、官左給事中に至る、この書は、明の吳訥の文章辨體に據り之を取捨して著したるなり、分ちて文章綱領一卷、詩文六十七卷、附錄十六卷とす、體例蕪雜の嫌あれども、寬文十三年の刪刻ありて、頗る世に行はる、

【聞道】 「キクナラク」と讀む、聞說に同じ、道說は竝に助辭なれども、人ノ某事ヲ道フヲ聞ク」の意あり、詩に多く用ふ、孟浩然の洛陽訪」袁拾遺」不」遇の詩に「——梅花早已如此地」

【文蝡】 蝡は龍の屬「アマリヤウ」黃色にして角なし、——は「アヤ」ある蝡なり、王鑒七夕の詩に「六龍翥」瑤轡、——負」瓊車」」秦觀八駿圖序に「彪虎——之流」

【文忠公全集】 一百五十三卷、附錄五卷、宋ノ歐陽修撰す、固必大(字ハ子充、宋ノ廬陵ノ人、嘉泰二年卒ス、年七十九)編す、修の詩文、唯居士集五十卷は、その手定せしところ、その餘の諸集は皆他人の掇拾して、編せしところにして、諸州にて刻せし異本亦多し、必大參互考訂して合せてこの集を成す、諸本に比すれば特に精善となす、卷首に像贊年譜あり、その目は左の如し、

居士集五十卷　外集二十五卷　易童子問三卷——
外制集三卷　內制集八卷　表奏書啓四六集七卷
奏議集十八卷　雜著十九卷　集古錄十卷
書簡十卷

【文中子】 十卷、一に中說ともいふ、諸子中、儒家に屬す、舊本、隋の王通撰すと題すれども、その子福郊等の纂述せし所ろなり、通は王勃の祖父なり、居然として聖人を以て自ら居る、この書論語に擬し、夸張甚しと雖も、血要の言少からず、學者宜しく一讀すべし、文中子と名づけたるは、その謚を取りしなり、

中說注十卷は宋の阮逸の撰なり、

【文陣之雄師】（ブンヂンノユウシ）文章の大家をいふ、唐書蘇廋傳に「張九齡皆賢ニ廋ノ文ヲ、謂ヒテ同列ニ曰ク、蘇生之俊贍無ク敵、眞文陣之雄師也」陣とは文章を戰陣に喩へていひしなり、

【文場之元帥】（ブンヂヤウノゲンスヰ）文章の大將といふ義、事文類聚に「唐ノ張九齡ハ、詞人之冠ト號シ、又――――ト號ス」

【文徵明】（ブンチヤウミン）林の子、字は徵仲、衡山と號す、初の名は璧、字を以て行はる、明の長州の人、嘉靖の初、薦舉せられて翰林院待詔に任ず、致仕して鄉に歸り、詩文書畫を事とす、就中書は李應禎に學びてその名天下に高し、嘉靖三十八年卒す、年九十、著すところ甫田集三十五卷あり、文學德行、時の宗とする所ろとなる、子の彭・嘉俱に文名あり、名山藏に「沈周博學ニシテ畫ヲ善クス、徵明之ヲ師トシ、ソノ髣髴ヲ得、益スニ神采ヲ以テシ、更ニ周ノ上ニ出ヅ、人ソノ趙孟頫・倪瓚・黃公望ノ體ヲ兼有スト稱ス」丹青志に「文先生ノ畫、李唐・吳仲圭ヲ師トシ、翩翩トシテ室ニ入ル、大圖小軸奇致アラザルナク、海宇欽慕シ、縑素山積ス云云」

【噴嚏】（フンテイ）「クサメ」古語「ハナヒリ」氣の急に鼻を衝きて發するもの、野客叢書に「隨筆曰、今人――不止者、必云有人說、我按詩邶風、寤言不寐、願言則嚏注女思我心、則嚏也、今俗人嚏云人道、我此古之遺語、余觀類要編風篇正有是說ニ

【墳典】（フンテン）三墳五典の略、古書なり、魏書韓顯宗傳に「陛下耳聽法音、目翫――、口對百辟、心虞萬機、宜史丘巨源傳に「少好學居貧屋漏、恐濕――乃舒被覆書、書獲全而被大濕」（三墳五典ヘを見よ、

【文恬】（ブンテン）世の中安らかにして、文官事なく樂む義、韓愈の平淮西碑に「相臣將臣、――武嬉」

【文點ヲ加ヘズ】（ブンテンヲクハヘズ）文不加點文にすこしの疵もなきをいふ、書言故事に「文ヲ作リテ、全ク美ナルヲ、――レートイフ、李白翰林ニ在リ、白蓮花序及ビ宮詞ヲ草スルコトヲ詔ス、方ニ大ニ醉ヘリ、中貴人水ヲ以テ之ニ沃グ、稍ク醒メ筆ヲ索メテ一タビ揮フ、文點ヲ加ヘズ」とあり、中貴人とは、內臣の貴幸せらるる者、沃ぐとは冷水にて、其の面を浸す、其の醉の速かに醒めん事を欲してなり、文選禰衡鸚鵡賦序に「筆不停綴、――レー」南史王泰傳に「每預朝宴、刻燭賦詩、文不加點」

【文天祥】（ブンテンシヤウ）字は宋瑞、一の字は履善、文山と號す、宋の吉州廬陵の人、年甫めて弱冠、理宗親から進士第一に擢んず、咸淳九年、起されて湖南提刑となる、元兵頻に諸州を陷れ、國事日に急なり、天祥勤王の詔を捧げ、涕泣して兵を起す、德祐の初、右丞相兼樞密使となり、命を奉じて元軍に使し、その相伯顏と抗爭し、拘執せらる、逃れて眞州に入り、海に泛びて溫州に至る、ついで兵を江西に出す、兵敗れて執へられ、遂に屈せずして燕京の柴市に殺さる、忠烈と謚せらる、其の衣帶中ノ贊・正氣ノ歌は夙に人口に膾炙せり（文山ガ〻正氣ノ〻を見よ、

【文恬武嬉】（ブンテンブキ）恬は安なり、世の中、太平にして、文武の官人、安らかに嬉みて、禍亂の生ずるをも知らざる意、韓愈の平淮西碑に「相臣將臣、――――」（五車韻瑞、此ノ語ヲ引キテ嬉ヲ熙ニ作ル）

【糞土】（フンド）連文釋義に「三尺以上曰ク糞、三尺以下曰ク土」

【文同】（ブンドウ）字は與可、笑笑先生と號し、又石室先生、錦江道人と稱す、宋の梓潼の人、進士に擧げられ、仕へて太常博士司封員外郎充祕閣校理と爲る、山水は廢詰に減ぜず、頗る關仝に似たり、最も畫竹を善くし、瀟灑の姿に富む、詩文篆隸行草飛白皆その妙を得たり、人となも靖深、世故に渉せられず、文彥博嘗て之を稱して、襟懷瀟洒、晴雲秋月の如く塵埃犯すべからずといへり、元豐二年卒す、年六十二、著す所ろ丹淵集四十卷あり、

【糞土之言】（フンドノゲン）理にそむきて、賤しむべき言をいふ、左傳に「其言糞土也」

【糞土ノ牆ハ朽スベカラズ】（フンドノカキハクチスベカラズ）論語公冶長篇に「宰予晝寢、子曰、朽木不可雕也、糞土之牆、不可朽也、於予與何誅」とあり、牆は土屏なり、牆も堅固なれば鏝にて塗りて裝飾すべけれども、糞土もて築ける牆は、鏝塗して裝飾すべからず、人もまことに能く志を立て自ら強めば、敎ふるもその甲斐あれども、宰予の如く志氣昏惰して晝寢するが如きは、なほ朽木の如く、糞土の牆の如し、敎ふるも益なし、我又何ぞ之を責めんや、責むるに足らざるなりと、その實は深く之を責められし辭なり、

【分謗】（フンバウ）（謗ヲ分ツ）責め謗りを分ち受くる義、國語に「敢不分謗乎」

【聞望】（ブンバウ）連文釋義に「名ノ人ニ聞ユルヲ聞トイヒ、人ノ爲メニ仰ガルルヲ望トイフ」

【蚊蝱之勞】（ブンバウノロウ）蝱は「カアブ」といふ小蟲なり、細小なる技能をいふ、莊子天下篇に「由天地之道、觀惠施之能、其猶一蚊一蝱之勞」

【蚊蝱ハ牛羊ヲ走ラス】（ブンバウハギウヤウヲハシラス）（蚊蝱走牛羊）小能く大を制するに喩ふ、說苑の說叢篇に「蠭蝘仆柱梁、蚊蝱走牛羊」とあり、蠭は蚍蜉の子なり、淮南子にも類語あり、

【蚊蝱宵見】（ブンバウセウケン）智の明かなること明月の如くなれば、蚊

蝨の如き小人も悉く見ゆるをいふ、漢書中山靖王傳に「明月夜昭（ケイ）——」

【粉白黛黑】　次條に同じ、列子周穆王篇に「蛾眉曼（バン）者、——以滿之（ニ）」この語、淮南子修務訓にも出づ、

【粉白黛綠】　「オシロイ」や「マユズミ」にて化粧をこらせる美人の義、韓愈の送李愿歸盤谷序に「——、列屋而閑居（キョ）、妬（ト）龍而負（フ）、爭（ソウ）妍而取（シュ）憐（レン）」とあり、富貴の人の肉體の樂を求むる狀をいへり、

【粉白手ヲ去ラズ】　（粉白不去手）「オシロヒ」を手より離さぬ、男子の化粧に意を用ふることの甚しきをいふ、魏志何晏傳の註に「魏略ニ晏、性自ラ動靜ヲ喜ミ、粉白手ヲ去ラズ、行歩影ヲ顧ミル」

【文者貫道之器】　李漢の韓昌黎集序に「——也、不深於斯道（ニ）有至焉者不也」鶴林玉露に「文章ハ一小技、道ニ於テ未ダ尊シトナサズトハ、此レ後世ノ文ヲ論ズルナリ、文ハ貫道ノ器トハ、此レ古人ノ文ヲ論ズルナリ云云」

【文不ヲ草スベカラズ】　（文不可草）宋の許彦孫傳に「劉整元ニ降ラントシ、彦孫ヲ召シテ降文ヲ草セシム、彦孫曰ク、腕ハ斷ズベキモ、文ハ草スベカラズト、遂ニ藥ヲ仰ギテ死ス」（方孝孺）を參看せよ、

【憤發】　心通ぜんことを求めて未だ得ざるを憤といひ、發はその辭を達するをいふ（啓發）を見よ、

また發憤と同義にも用ふ（發憤）を見よ

【文ハ八代ノ衰ヲ起ス】　（文起八代之衰）東坡が潮州韓文公廟碑の中の句なり、韓愈が古文に復古せし功を稱していふ、八代とは東漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋をいふ、

【文法】　法律規則をいふ、漢書酷吏傳に「司馬安之——」註に「——ヲ以テ人ヲ傷害スルナリ」

【文ハ道ヲ貫クノ理ナシ】　李漢の「文者貫道之器也」の語を駁せし言なり、朱子語錄に「朱子曰這文是從道中流出、豈有文反能貫道之理、文是文、道是道、若以文貫道、却是把本爲末、以末爲本可乎」（文者貫道之器）を參看せよ、

【噴飯】　失笑する義「フキダス」瓚言に「東坡云、文與可見予詩云、料得清貧饒太守、渭川千畝在胸中、不覺失笑噴飯滿案」この事、山家清供にも見ゆ、

【紛披】　「ミダレ」開く義、杜甫の詩に「此節東籬菊、——爲誰秀」また亂るる貌、蘇軾の詩に「誰道茅簷劣容膝、海天風雨看——」

【憤悱】　（啓發）を見よ、

【文武】　文道と武道とをいふ、帝範崇文篇に「——二途、捨一不可、與時優劣、各有其宜、武士備人焉可廢也」また周の文王と武王とを示す（文王）を見よ、

【蚊負】　蚊をして山を負はしむる義にて、重任に耐へざるに喩ふ、莊子秋水篇に「是猶使蚊負山、商蚷馳河也、必不勝任矣」

【芬馥】　花などの香ふ貌、文選吳都賦に「光色炫晃——、盼貆盼貆は蚊の類、香氣積み來ること、盼貆の群飛する如きをいふ、

【文武兼備】　文と武とを兼ね備へたる士をいふ、唐書裴行儉傳に「帝曰、行儉提孤軍、深入萬里、兵不血刃、而叛黨夷、可謂——矣」

【文物】　禮樂典章の類をいふ、左傳桓二年に「火龍黼黻、昭其文也、五色比象、昭其物也」李白の詩に「朝野盛——、衣冠何翕翕（ソウ）」

【芬芬】　「カヲリ」よき貌、詩經大雅皇矣篇に「爝炎——」注に「——ハ香ナリ」

【紛紛】　事多くして煩はしきをいふ、孟子滕文公上に「何爲——然與百工交易」また衆なり、亂なり、文選神女賦序に「——援援」漢書禮樂志に「羽旄——」注に「——ハ其ノ多キヲイフ」

【雰雲】　雪ふる貌詩の小雅信南山篇に「上天同雲、雨雪

——」

【文文山】　文山は文天祥の號なり（文天祥）を見よ、

【文武兩道】　（忠孝兩全）を見よ、

【粉米】　書經益稷篇に「宗彝・藻火——、繡黻・絺繡」注に「——ハ白米ナリ、ソノ養ヲ取ル」

【分袂】　人と別るる義、分手、分首皆同じ、袂は「タモト」杜詩に「歲晚仍分袂、また「分手開元末」また「直到綿州始分首」

【墳墓】　墳は土を積みかさねて封ずるなり、墓は葬る穴なり、連文釋義に「高曰墳、平曰墓」禮記の檀弓に「古者墓而不墳」註に「土ノ高キ者ヲ墳トイフ」また禮記に「奈何去——也」管子に「親戚——之所在」

【粉本】　畫の「シタガキ」なり、事類全書に「畫論ニイフ、古人ノ畫藁、之ヲ粉本トイフ、前輩多ク之ヲ賓蓄ス、蓋シ其ノ草草意ヲ經ザル處、自然ノ妙アリ」草本ともいふ、

【文罔】　法禁をいふ、罔は網に同じ、史記游俠傳に「雖時扞（カン）文罔（ブンマウ）」

【文當ニ遷ヲ學ブベシ】　（文當學遷）事文類聚別集卷五に「六經以後便有司馬遷三百五篇之後、便有杜子美、

ーーレー、詩當學杜子美ニ唐庚の語なり、

【文無害】　文は刑法なり、刑法を用ひて人を害する所ろなきをいふ、史記蕭相國世家に「以ーーーー爲沛主吏掾ニ」

【文命】　文徳敎命なり、書經大禹謨に「ーー敷于四海ニ」

【文敬】　文敬に同じ、

【文明】　文理ありて光明なる義、書經舜典に「濬哲ーー溫恭允塞」

【憤懣】　「イキドホリ、モダユル」義、懣は煩悶の義、司馬遷の文に「不得舒ーーニ

【分野】　古昔の天文家が列國の領土を天體に分ち配してーーと名づけ、その分野に屬する分星に變あるときは、その分野の國に災ありといふ、周禮宗伯禮官之職に「保章氏、天星ヲ掌リ、以テ星辰日月ノ變動ヲ志シ、以テ天下ノ遷ヲ觀其ノ吉凶ヲ辨ズ、星土ヲ以テ九州ノ地ノ封ズル所ヲ辨ズ、封域皆分星アリ、以テ妖祥ヲ觀ル」國語周語に「歲之所在、則我有周之ード屬是也」

【汾陽】　西漢の太原郡ーー縣は、今の山西太原府陽曲縣の西北九十淸里に在り、晉の司州河東郡ーー縣は今の山西蒲州府榮河縣の北に在り、明の山西省汾州府ーー縣は、今の山西汾州府ーー縣治これなり、

【墳羊】　「バケモノ」、後漢書張衡傳の註に「土之怪曰ーーニ羵羊ニ同ジ、

【羵羊】　前條に同じ、國語の魯語に「土之怪曰ーーニ

【汾陽王】　唐の郭子儀をいふ(郭ーーニ)を見よ、

【扮楡】　社の名、漢書郊祀志に「高祖禱ニ豐ーー社ニ」の註に「ーー鄕名也」と、由りて故鄕の義と爲す、文選張衡の西京賦に「豈伊不ニ懷歸ーーニ

【奔湧】　奔は塵なり、塵の聚り起るが如く、さかんに湧き出づる義、後漢書禰衡傳に「飛詞駢辯、溢氣ーー」

【文與可】　(文同)を見よ、

【蚊雷】　蚊のあつまりて鳴く聲の盛んなるをいふ、南史梁武陵王紀傳に「季夏煩暑、聚蚊成ニ雷」

【分理】　「イヒワケスル」分疏に同じ、鄭氏家範に「子孫受ニ長上訶責一、不ニ論ニ是非一、但當ニ俯ニ首默受ニ毋ニ得ーーニ」

【文林】　宋史に「歐陽公ハ一代ノ文宗タリ後進ニ於テ、片言隻字ノ採ルベキ者アレバ、必ズ稱揚ヲ加ヘ、マタ盡ク之ヲ錄シテ別ニ一冊ト爲シ、名ヅケテーートイフ」

【分龍雨】　「ユフダチ」なり、坤雅に「今ノ俗、五月ノ雨之ヲーートイヒ、マタ隔轍雨トイフ、夏雨多ク至リ龍各ニ域ヲ分チ雨陽往往一轍ヲ隔テ而シテ異ナルヲイフナリ」葉炳文の詞に「六月天分牛背雨」

【文王】　姬姓名は昌、父季歷、太任を娶りて昌を生む、瑞あり、父卒し、昌立ちて西伯と爲る、西伯德を修め諸侯之に歸す、虞芮ノ訟ヲ參看セヨ、渼水の南、西伯に歸する者四十國、皆以て受命の君と爲す、天下を三分して其の二を有つ、西伯また呂尙を得て師と爲し、尊びて師尙父と謂ふ、西伯營て紂王の爲めに羑里に囚せられし時、易の卦辭を繫く、年九十七、都を岐下より豐に徙し、明年卒す、子發立つ、是を周の武王と爲す、西伯を追尊してーーと爲す、詳しくは史記の周本紀を見よ、

【文王之囿】　周の文王の囿なり、囿とは說文に「苑ニ垣アルナリ、一ニ曰ク、禽獸ニハ囿アリ」今の動物園の如きもの、孟子梁惠王下篇に「齊宣王問曰、ーーーー、方七十里有諸、孟子對曰、於傳有之」太平記に「神泉苑と申すは、大內始めて成りし時、周文王の靈囿に准へて方八町に築かれたりし園囿なり」(靈囿)を見よ、

【不ニ殿】　容貌の醜きをいふ、左傳昭二十八年に見ゆ(殿ーーズ)を見よ、

【巫陽】　「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無ニ人帝悲傷、讒吟下招遊ーーニ楚辭招魂に「帝告ーーニ曰、有ニ人在ニ下、我欲ニ輔ニ之、魂魄離散、汝筮予ニ之(中略)乃下招曰、魂兮歸來、去ニ君之恒幹ニ、何爲乎四方ニ、些王逸曰く、女ヲ巫トイフ、陽ハ其ノ名ナリ、ーー天帝ノ命ヲ受ケテ因リテ下リテ屈原ノ魂ヲ招クナリ」巫咸ともいふ、山海經海內西經の注に「巫彭・巫抵・ーー・巫履・巫凡・巫相ハ皆神醫ナリ」

【不夜城】　夜も晝の如く明かなる城の義、漢書地理志東萊郡の條に「不夜縣」註に「成山日祠アリ、莽ハ夙夜ト曰フ、師古曰ク、齊地記ニ云フ、古、日アリ夜出デテ東萊ニ見ハル、故ニ萊子此ノ城ヲ立テ不夜ヲ以テ名ト爲ス」轉じて燈燭の光、晝を欺く如き繁華熱鬧の市街を稱していふ、

【冬】　禮記の月令に「是月也、天子始ニ裘、命ニ有司ニ曰、天氣上騰、地氣下降、天地不ニ通、閉塞而成ニ冬、其帝顓頊、其神玄冥、祭邕曰く「冬ハ終ナリ、萬物是ニ於テ終ルナリ」と、梁元帝纂要に「冬ヲ玄英トイヒ、マタ安寧トイヒマタ玄冬・三冬・九冬トイヒ、天ヲ上天トイフ、風ヲ寒風・勁風・嚴風・厲風・陰風トイヒ、景ヲ冬景・寒景トイフ」また月令の「孟冬之月、天子命ニ將帥ニ講ニ武習ニ射」の注に「仲冬ニ大ニ之ヲ閱習ス」鶡冠子に「斗柄北ヲ指シテ天下皆冬ナリ」禮記月令に「孟冬之月、律中ニ應鍾ニ

【冬ヲ御ぐ】　(御ぐ)詩經邶風に「我有ニ旨蓄、亦以ーーニ冬

寒を防禦する義、

【冬ハ歲ノ餘】（三餘）を見よ、

【不豫】豫は悦なり、——は、心に悦びざるなり、孟子公孫丑下に「夫子若有——色」然」また人の疾病あるをいふ、書經金縢篇に「王有」病、弗豫」弗は不に同じ、

【扶餘】遼の縣名、上京道懷州に屬す、今の盛京奉天府開原縣治、

【芙蓉】芙蕖に同じ、淮南子本經訓に「——芰荷」（芙蓉）を見よ、

【附庸】諸侯に附屬する小國をいふ、禮記の王制に「天子ノ田ハ、方千里、公侯ノ田ハ、方百里、伯ハ七十里、子男ハ五十里、五十里ニ能ラザル者ハ、天子ニ合セズシテ、諸侯ニ附クヲ附庸ト曰フ」註に「此ハ、天子諸侯田里ノ廣狹ヲ言フ、天子ニ合セズトハ、王朝ノ聚會ニ與カラザルナリ、民功ヲ庸トイフ、其ノ功勞大國ニ附ケテ、天子ニ達ス、故ニ附庸トイフ」正義に「小城ヲ——トイフハ、庸ハ城ナリ、小國ノ城ヲ謂フ、自ラ通ズルコト能ハズ、其ノ國事ヲ以テ大國ニ附ク、故ニ——ト曰フ、此レ五十里ニ能ラズ、故ニ小國ノ城ト爲ス」

【芙蓉】山堂肆考に「一名木——一名木蓮、一名拒霜、一名芳譜に「一名華木、一名枙木、一名地——」石林燕語に「——有二種一出於水一者、謂之草——一出於陸一者、謂之木——」（卽木蓮也、樂天詩曰、水蓮開盡木蓮開謂」此（木——）を見よ、

草——は卽ち蓮花なり、爾雅に「荷芙蕖」の註に「芙蕖別名——」疏に「江東ノ人荷華ヲ呼ビテ——ト爲ス」文海披沙に「——ハ蓮花ナリ、一名ハ荷、一名ハ芙蕖、一名ハ菡萏、根ヲ藕トナシ、莖ヲ茄トナシ、葉ヲ蕸トナシ、實ヲ蓮トナス云云」

また美人の姿に喩ふ、李白の詩に「美人出南國、灼灼——姿」

【婦容】女子の身、「ヴクロヒ」周禮に見ゆ、女子四行の一、列女傳に「不必顏色美麗也、盥洗塵穢、服飾鮮潔是謂——」（四行）また（婦德）を見よ、

【芙蓉峯】芙蓉は蓮花なり、峯の形の似たるによりて名づく、文海披沙卷三に「——在衡山、芙蓉嶺在婺源」等、芙蓉と名づくる山山、八十餘種を列擧せり我が富士山を——といふもこれに本づく、荊州記に「衡山有三峯、極秀一峯名——、最爲竦桀、自非清霽素朝、不可望見」

【無覈】「ハデシラズ」史記の高祖本紀に「以臣無覈」の註に「賴ハ恃ナリ」とあり、倨放にして依り託すべきなきをいふ、孟子の趙岐の註には「賴ハ善ナリ」とあり、一解に賴は利なり、家に利なきなり、或は曰く、江淮の閒小兒多く狡猾を作す者を謂ひて——と爲すと、

【扶老】杖をいふ、歸去來辭に「策——以流憩」古僞考略に「老人持ツトコロノ杖ヲ——トイフ」（杖）を參看せよ、

【浮浪人】浪人に同じ、又單に浮人ともいふ、通典に「高齊ノ時、無貫ノ人、州縣ニ編セラルルヲ樂マザル者ハ、之ヲ——ト爲ス」と、——の字は隋書にも見ゆ、

【扶老竹】節高く中の實ちて虛ならざる竹の名、扶竹ともいふ、山海經の中山經に「龜山多扶竹」注に「扶竹ハ筯竹ナリ、高節實中ニシテ杖ニ中ル、之ヲ——トイフ」

【不老不死】人の極めて長壽なるをいふ、列子湯問篇に、海中の五山を述べて「珠玕之樹皆叢生、華實皆有滋味、食之皆——」

【部落】人の種類をいふ、唐書の李勤傳に「酋長率部落五萬、降于勣」

【浮嵐】山氣の浮べるをいふ黃庭堅の詩に「有人半夜出山去、頓覺——暝翠空」陸游の白塔院詩に「冷翠千

竿玉——萬幅屏」

【浮利】浮きて定めなき利益をいふ、後漢書逸民傳に「飾智巧以逐——」鄭雲叟の詩に「浮名——濃於酒、醉得人心死不醒」管道昇の詩に「人生貴極是王侯、——浮名不自由」

【富利】富める財利なり、史記李斯傳に「向使却客而不內、疏士而不用、是使國無——之實、而秦無彊大之名也」韓詩外傳に「耳不聞學行無正義、迷迷然以——爲隆是俗人也」

【膚理】肌膚の文理をいふ「ハダ」の「キメ」荀子榮辱篇に「骨體——、辨寒暑疾養、養は瘠に同じ、

【不律】筆をいふ、爾雅釋器に「不律謂之筆」註に「蜀人呼筆爲不律也」說文に「楚ハ之ヲ聿トイヒ、吳ハ之ヲ——トイヒ、燕ハ之ヲ拂トイヒ、秦ハ之ヲ筆トイフ」不律の二字の合音はヒツ（筆）なり（筆）を參看せよ、

【不立文字】意義を文字に書きあらはすを能はざる義にて、卽ち以心傳心を要するをいふ、高僧傳に「達摩曰、我法一心、——道は心を以て悟るべし、言傳すべからざるをいふ、五燈會元に「世尊在靈山會上拈華示衆、是時衆皆寂然、惟迦葉尊者破顏微笑、世尊云吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門、——教外

別傳、付囑摩訶迦葉ニ世尊は釋迦なり、祖庭事苑に「禪門自佛牧東流、後六百年、達摩祖師、方至漢地、不立文字、單傳心印、直指人心見性成佛」

【夫里之布】 夫布と里布とをいふ、布は錢なり、夫布は一夫力役の征(ネング)なり、里布は、里は居なり、居宅に桑麻を植ゑざる者を罰するなり、孟子「公孫丑上篇に「廛無ーーーー、則天下之民皆悅而願爲之民矣」

【浮梁】 支那江西省饒州の縣名、茶を産ずる地、白居易の琵琶行に「前月ーー買茶去」

【武陵】 西漢の郡名、今の湖南辰州溆浦縣の南三清里、また西漢・晉・南宋・南齊の縣名、今の湖北郢陽府竹溪縣の東に當る、また東漢・晉・南宋・南齊の郡名、今の湖南常德府ーー縣の西に當る、隋以後明に至るまでの縣名、今の常德府ーー縣治これなり、

【武陵桃源】 陶潛の桃花源記に「晉ノ太元中、武陵ノ人、魚ヲ捕ヘテ業ト爲ス、溪ニ緣リテ行ク、忽チ桃花林ニ逢フ、林盡キテ、水源ニ一山ヲ得、小口アリ、口ヨリ入ル、行クコト數十步、豁然トシテ開朗ナリ、其ノ間、男女怡然トシテ自ラ樂ム、漁人ヲ見テ大ニ驚ク、自ラ云フ、先世秦ノ亂ヲ避ケ、此ノ絕境ニ來ル、問フ今ハ何レノ世ソト、乃チ漢アルヲ知ラズ、魏晉ニ論ナシ、漁人辭シ去リ、太守ニ詣リテ說ク、即チ人ヲ遣シテ隨ヒ往カシム、竟ニ迷ヒテ路ヲ得ズ」(桃源)を見よ、

【不類】 類は善なり、ーーは、不善に同じ、晉書、元帝紀に「抗明威、以慢ーーー」

【故ヲ溫ネテ新ヲ知ル】 (溫故而知新)舊聞を溫習して、新知を發明するの義、論語の爲政篇に「子曰、ーーレーー、可以爲師矣」また漢書百官公卿表に「略表舉大分、以通古今、備ーーレーーーー之義云」

【富樓那ノ辯舌】 太平記卷三十六に見ゆ、富樓那は、具には、富樓那彌多羅尼子といふ、富樓那は滿願と譯し、彌多羅は慈行また知識と譯す、樓一に婁とも書く、尼は女なり、十大弟子の一にして、辯舌に長じ、說法第一と稱せらる、俚諺にも「ーーーーーー舍利弗の智惠」といへり、舍利弗は智に長ず、

【不祿】 其の俸祿を終へざる義にして、士の死するをいふ、禮記の曲禮に出づ、また諸侯の薨するとき、他國に訃くる謙辭なり、同書に「君訃於他國之君曰、寡君ーー敢告於執事」

【部勒】 勒は治なり「ヲサム」ーーは兵を部わけして治む、史記に「以兵法、ーーー賓客及子弟」

【武王】 周の第一世、姬姓、名は發、文王の子なり、嘗て東、兵を觀して盟津に至る、白魚王の舟中に入る、是の時、諸侯期せずして會する者八百、皆曰く紂伐つべしと、武王曰く、汝未だ天命を知らずと、可かず、師を引きて歸る、居ること二年にして紂過を改めず昏亂益甚し、武王乃ち紂を伐ち、西伯即チ文王の木主を載せて以て行く、進んで商郊の牧野に至り牧誓を作る、紂大兵を發して之を拒ぐ、紂の師戰ふの心なし、皆兵を倒にす、武王遂に紂を滅し、功を論じ賞を行ひ馬を華山の陽に縱ち、牛を桃林の野に放ち、干戈を偃せ、天下に復た用ひざるを示す、武王立ちて十三年、殷を亡し、後ち七年にして崩ず、太子誦立つ、是を成王と爲す、詳しくは史記の周本紀を見よ、

【不惑】 四十歲をいふ、論語爲政篇に「四十而ーーー」陶潛の詩に「行行向ーーー、淹留遂無成」また道理を知ることと明かなる義、論語子罕篇に「知者ーーー」(楊秉)を參看せよ、

風日 陶潛少 儕高尙、博學善屬レ文、穎脫不羈、環堵蕭然、不レ蔽二風日一、短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也 (晉書陶潛傳)

風月 徐勉嘗與二門人一夜集、客有二談盛一、求二爲舉五官一、勉正レ色答曰、今夕止可レ談二風月一、不レ宜レ及二公事一 (南史徐勉傳)

風塵 過江人士每レ至二暇日一、相要出二新亭一飮宴、周顗中坐而歎曰、風景不レ殊、舉レ目有二江山之異一、皆相視流涕、惟王導愀然變レ色 曰、當下共戮二力王室一、克中復神州上、何至下作二楚囚一相對泣上耶、衆收レ淚而謝レ之 (晉書王導傳)

風物 父居業、嘗過レ洛、遊二北山川風物一、曰晉得レ老於此一足矣、觀於是買二田宅一、營二林樹一、以適二其意一 (宋史張觀傳)

風韻 石秀幼有二令名一、風韻秀徹、博二涉群書一、尤善二老莊一、常與二處一室一閤一於應接一、時人方之 庾純二兼倫一閤文帝ノ所レ重

【兵】 說文に「械ナリ」增韻に「戎器ナリ」世本に「蚩尤以金作兵、兵有五、一弓、二殳、三矛、四戈、五戟」孟子梁惠王篇に「可使制梃以撻秦楚之堅甲利兵」

また兵器を執りて我に從ふものをいふ、禮記月令に「命將帥選士厲兵」漢書魏相傳に「救亂除暴謂之義兵」周禮夏官に「中秋教治兵」管子に「兵者外以誅暴、內以禁邪、故兵者脅王安國之經也、不可廢也」杜甫の詩に「函關猶出將、渭水更屯兵」

また敵を擊つを兵之といふ、左傳定十年に出づ、

【秉彝】 張九齡の詩に「明德有自來、奕世皆——」(彝ヲ秉ル)を見よ、

【敵愾】 「ヤブレ」たる、トバリ」說文に「在旁曰愾」也、一曰閑也」禮記に「——不棄爲埋馬也」

【米友仁】 宋の畫人、字は元暉、嫺拙老人と號す、仕へて兵部侍郎敷文閣直學士に至る、世繼に「——ハ芾ノ子ナリ、世ニ小米ト號ス、天機超逸、繩墨ヲ事トセズ、ソノ作ル所ロノ山水烟雲ヲ點滴シ、艸艸ニシテ成ル、而シテソノ天眞ヲ失ハズ、ソノ風骨乃翁ニ肖タリ、每ニ自ラソノ畫ニ題シテ墨戲ト曰フ、年八十ニシテ神明少壯ノ時ノ如ク疾ナクシテ逝ク」

【平易ニシテ民ニ近ヅケバ民必ズ之ニ歸ス】 (平易近民、民必歸之)史記の魯の世家に「魯公伯禽ノ初メテ封ヲ受ケ魯ニ之クヤ、三年ニシテ後、政ヲ周公ニ報ズ、周公曰ク何ゾ遲キヤト、伯禽曰ク、ソノ俗ヲ變ジ、ソノ禮ヲ革メ、喪三年ニシテ然ル後ニ之ヲ除ク、故ニ遲シト、太公亦齊ニ封ゼラル、五月ニシテ政ヲ周公ニ報ズ、周公曰ク何ゾ疾キヤト、曰ク吾レソノ君臣ノ禮ヲ簡ニシ、其ノ俗ニ從ヒテヲサムト、後ニ伯禽ノ政ヲ報ズルノ遲キヲ聞クニ及ビ、乃チ歎ジテ曰ク、嗚呼魯ハ後世北面シテ齊ニ事ヘン、夫レ政簡ナラズ易ナラザレバ、民近ヅクアラズ、平易ニシテ民ヲ近ヅクレバ、民必ズ之ニ歸スト」

【敵邑】 わが國といふ謙辭なり、敵は「ヤブル」左傳隱四年に「君若代鄭以除陳蔡從賦は兵賦なり、君害君爲主、——以賦與」

【平允之士】 公平誠實にして巧文慘刻をなさざる者をいふ、宋史の仁宗の贊に「刑法似縱弛而決獄多——」

【屛營】 惶るる貌、怔忪また征忪に同じ、また「ウロウロ」する貌、國語の吳語に「王親獨行——仿徨於山林之中」三日」また彷徨の貌、後漢書清河王慶傳に「夙夜——」

【屛翳】 廣雅に「雨師ナリ」「アメノカミ」一說に雷師をいふ、

【米廩】 米と、シホ」轉じて瑣末煩碎の義に用ふ、墨子非命篇に「吾昔——數天下書」漢書貢禹傳にも——の字あり、注に「至細ヲイフ」

【兵ヲ洗フ】 戰をやむること(洗兵)を見よ、

【兵ヲ伏ス】 (伏兵)を見よ、

【兵ヲ用フルノ道】 (用兵之道)戰を行ふの道なり、蜀志馬謖傳に「——攻心爲上、攻城爲下、心戰爲上、兵戰爲下」十六國春秋前燕錄に「——、敵彊則用智、敵弱則用勢、是故以大事小猶狼之食豚也、以治易亂、猶日之消雪也」

【兵ヲ勒ス】 (勒兵)勒は治なり、隊伍を配置し、點檢する義、史記孫子傳に「可以少試——乎」

【兵ヲ論ズ】 (論兵)兵事を談論する義、李白の詩に「莊周空說劒、墨翟恥——」

【陛下】 人臣天子を稱する辭、陛は堂にのぼる「キザハシ」なり、天子は必ず近臣あり兵を執りて陛側に立ちて不虞を戒む、故に群臣天子と言ふに、敢て指斥せず、陛下に在る者を呼びて之と言ふ、卑に由りて尊に達する意なり、この稱は秦の始皇の時より始まる、史記秦紀に「今陛下興義兵、誅殘賊、平定天下」始皇以前に諸侯の臣がその君を呼びて——といひし例あり、戰國策秦策に「——嘗軹車於趙矣」

【平衡】 人を拜する法式なり、磬折して頭と腰と、衡の如く平かなる義、荀子に「——曰拜、下衡曰稽首、至地曰稽顙」

【批亢擣虛】 批は一音ベツ、觸擊するなり、亢は吭に同じ、咽喉なり、虛は空虛なり、敵の肝要なる處を擊ち、空虛に衝き入るなりと、なほ異說あり(亢ヲ批キ)を見よ、

【兵革】 兵甲に同じ「イクサ」詩經の鄭風出其東門篇の序に「——不息」革は甲冑の類をもいふ、また革車は兵車なり、

【兵艦】 「イクサブネ」字彙に「艦戰船、四方施板以禦矢者」とあり、列仙傳に「大衆——、欲襲襄陽」戰艦・鬪艦に同じ、

【屛氣】 屛息に同じ(屛息)を見よ、

【屛棄】 退け棄つる義、書經に「——典刑」

【蔽賊】 草木繁茂して日光の缺くるなり、上林賦に「岑

差、日月——」

【蔽牛ノ木】 牛を「オホヒカクス」程の大木をいふ、莊子の人閒世篇に「匠石之齊、見櫟社樹、其大蔽牛、絜之百圍」

【丙魏姚宋】 四人は皆賢相なり（漢ノ丙魏）を見よ、

【丙吉牛喘ヲ問フ】 漢書列傳四十四に「丙吉字ハ少卿、魯國ノ人、宣帝ノ時、丞相ト爲ル、嘗テ出デテ道ヲ清メ、群鬪スル者、死傷道ニ横ハルニ逢フ、吉之ヲ過ギテ問ハズ、吉前ミ行キ、人ノ牛ヲ逐フニ逢フ、牛喘ギテ舌ヲ吐ク、吉止駐シ騎吏ヲシテ問ハシム、牛ヲ逐ヒ行クコト幾里ゾト、掾史獨リ謂ヘラク、丞相前後問ヲ失スト、或ハ以テ吉ヲ譏ル、吉曰ク、民鬪ヒテ相殺傷スルハ長安令、京兆尹、職當ニ禁備逐捕スベキ所ロ、歲ノ竟ニ丞相其ノ殿最ヲ課シ、奚シテ賞罰ヲ行ハン而已、宰相ハ小事ヲ親カラセズ當ニ道路ニ於テ問フベキトコロニアラザル也、春ニ方リ、未ダ太ダ熱スベカラズ、恐クハ牛近ク行キ暑ヲ用テノ故ニ喘グナランカ、此レ時氣節ヲ失ヒ、傷害スル所ロアルヲ恐ル、三公ハ陰陽ヲ調和スルヲ典ル、職當ニ憂フベシ、是ヲ以テ之ヲ問フト、掾史乃チ服シテ以ラク吉大體ヲ知ルト（漢ノ丙魏）を參看せよ、

【平羌】 隋の梁州眉山郡——縣、唐の劍南道嘉州——縣、卽ち今の四川嘉定府樂山縣の北四十清里、また宋の陝西永興軍延安府——砦は今の陝西延安府安塞縣の東、

【屛居】 屛は退なり、隱なり、退隱して居ること、漢書に「嬰謝病——」

【炳煥】 「アキラカ」に「カガヤク」をいふ、東京賦に「瑰異譎詭、燦爛——」

【俾倪】 邪に視るなり（睥睨）を見よ、また天子の馬車の上に立つる蓋（カサ）通雅釋詁に「唐鹵簿有——、宋志載睥睨、漢乘輿用之、如華蓋而小、顏師古注、急就——謂持蓋之杠、在軾中央、環爲之、所以止蓋弓之前却也、今曰——扇」

【埤堄】 城上の女牆（ヒメガキ）韓愈の雪詩に「城寒朔裝——、樹凍裹蒼苔」また睥睨に通ず（睥睨）を見よ、

【睥睨】 邪に視るなり、漢書息夫躬傳に「————兩宮閒」（睥睨）を見よ、

【睥睨】 衰視の貌「ヨコメニ、ニラム」俾倪また辟倪に作る同じ、正しく視ざるなり、史記信陵君傳に「侯生下見其客朱亥——故久立睥一本俾に作る、

また城上の「ヒメガキ」をいふ埤堄に作る、同じ、次條を見よ、

【睥睨梁欐】 柳子厚の小石城山記の字面、睥睨は一に埤堄に作る、釋名に「城上ノ垣ヲ睥睨トイフ」城の上の女牆をいふ、梁欐は屋棟なり、莊子の秋水篇に、欐を麗に作る、この四字並に下文に見ゆる堡塢等の字は、石城と名づけたる所以なり、

【陛戟】 戟を執りて陛下に衞るをいふ、陛は階なり、漢書霍光傳に「期門武士、——陳列殿下ニ」

【郎原】 魏志に「魏ノ郎原年十一ニシテ父ヲ喪フ、既ニ孤ニシテ且ツ貧ナリ、隣ニ書舍アリ、原其ノ旁ヲ過ギテ泣ク、師問ヒテ曰ク、汝何ヲ悲ムト、原曰ク、孤者ハ傷ミ易ク、貧者ハ感ジ易シ、少クシテ父ヲ失ヒ、未ダ嘗テ學ヲ知ラズ、中心惻然タリ、覺エズ涙零ツト、師之ヲ哀ミテ曰ク、何ゾ書ヲ讀マザルカト、答ヘテ曰ク、資錢ナキヲ苦ムナリト、師曰ク、汝果シテ學ニ志アラバ、我レ資ヲ須タズシテ敎フベシト、是ニ於テ原勉學シテ倦マズ、數月ニシテ遂ニ孝經論語ニ通ズ、長ズルニ及ビテ、單步笈ヲ負ヒテ千里ヲ憚カラズ、遠ク遊學シ、孫嵕陳仲弓、范孟博等ヲ師トシ、學大ニ進ム、時ニ北海ノ

見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「——漢廷」（睥睨）を見よ、

【睥睨梁欐】 柳子厚の小石城山記の字面、睥睨は一に埤堄に作る、釋名に「城上ノ垣ヲ睥睨トイフ」城の上の女牆をいふ、梁欐は屋棟なり、莊子の秋水篇に、欐を麗に作る、この四字並に下文に見ゆる堡塢等の字は、石城と名づけたる所以なり、

【陛戟】 戟を執りて陛下に衞るをいふ、陛は階なり、漢書霍光傳に「期門武士、——陳列殿下ニ」

【郎原】 魏志に「魏ノ郎原年十一ニシテ父ヲ喪フ、既ニ孤ニシテ且ツ貧ナリ、隣ニ書舍アリ、原其ノ旁ヲ過ギテ泣ク、師問ヒテ曰ク、汝何ヲ悲ムト、原曰ク、孤者ハ傷ミ易ク、貧者ハ感ジ易シ、少クシテ父ヲ失ヒ、未ダ嘗テ學ヲ知ラズ、中心惻然タリ、覺エズ涙零ツト、師之ヲ哀ミテ曰ク、何ゾ書ヲ讀マザルカト、答ヘテ曰ク、資錢ナキヲ苦ムナリト、師曰ク、汝果シテ學ニ志アラバ、我レ資ヲ須タズシテ敎フベシト、是ニ於テ原勉學シテ倦マズ、數月ニシテ遂ニ孝經論語ニ通ズ、長ズルニ及ビテ、單步笈ヲ負ヒテ千里ヲ憚カラズ、遠ク遊學シ、孫嵕陳仲弓、范孟博等ヲ師トシ、學大ニ進ム、時ニ北海ノ郷玄盛名アリ、當時文壇ノ領袖タリ、原寒貧ノ後輩ヲ以テ數年ノ閒ニ、名之ト相埒シキニ至レリ」

【陛見】 天子に謁見する義、北史張普惠傳に「自此之後、月一——」

【平原君躄者ニ謝ス】 史記の平原君列傳に「平原君趙勝者、趙之諸公子也、諸子中、勝最賢、喜賓客、賓客蓋至者數千人、平原君相趙惠文王及孝成王二王去相、三復位、封于東武城」平原君家樓臨民家、民家有躄者、槃散行汲、平原君美人居樓上、臨見大笑之、明日躄者至平原君門請曰、臣聞君之喜士、士不遠千里而至者、以君能貴士而賤妾也、臣不幸有跛癘之病、而君之後宮臨而笑臣、臣願得笑臣者頭、平原君笑應曰、諾、躄者去、平原君笑曰、觀此豎子、乃欲以一笑之故殺吾美人、不亦甚乎、終不殺、居歲餘、賓客門下舍人稍稍引去者過半、平原君怪之、曰、勝所以待諸君者、未嘗敢失禮、而去者何多也、門下一人前對曰、以君之不殺笑躄者、以君爲愛色而賤士、士卽去耳、於是平原君乃斬笑躄者美人頭、自造門、進躄者、因謝焉、其後門下乃復稍稍來」唐物語にこの一節を譯して曰く、

昔平原君と聞ゆる人、三千人のつかはれ人を集めて、

これを憐み懇切に思ひけるに、この主君の寵姫、高き樓の上に居て四方を見渡しけるに、跛へたる者の、はふはふゐざりつつ水をくみに行きけり、左右の膝よりも頭猶引き入りて、人の姿にも似ず、世にをかしげなりければ、この女、思ひわくかたもなくて打ち笑ひてけり、このかたは人笑ふ聲を聞きて、我かかる病に煩ひて、年月久しくなりぬ、今始て人の笑ひ嘲るべきにあらず、これ偏に君の色を好みて、つかはれ人を輕しめ給ふ故なり、若し我を棄てぬ心ならば、笑ひつる人を失ひ給ふべしと、強ひて主君に憂ふるに、おのれ憤怒をやむべしとは いひながら、さすがにあるべくもなきことなれば、その後月日を經るに、三千人のつかはれ人、やう〳〵數少くなりゆくを、我れ聊も過つことなし、然れども怨を抱きて遁れさる心知り難しと、各に言ひくだしけり、この中に事に詳なるもの、申していはく、君このかたは人を賺し給へり、これ我らが身の上にあらずや、若しかくの如くならば何をたのもしと思ひてか、身を捨て心を勵して君に仕へ奉るべきといへり、主君これを聞きて、淺からぬ年比のむつまじさをも顧みず、この女を忽に殺してけり、かたは人これを見て心ゆきぬ、又その外につかはれ人ども、もとの如くかへりにけり、

【米元章】（米芾）を看よ、

【平原督郵】 惡酒の異名（青州從事）を見よ、

【屛語】 屛は「シリゾクル」義、人を「シリゾケ」て語るを——といふ、漢書傅介子傳に「王起隨介子入帳中——」師古曰く「人ヲ屛ケテ獨リ共ニ語ルナリ」史記の日者傳にも「乃相引——」

【蹇鼓】「セメツヅミ」說文に「蹇ハ騎鼓ナリ」白樂天の長恨歌に「漁陽——動地來」

【閉口】（口ヲ閉ヅ）口を「ツグミ」て言はざる義、史記張儀傳に「願陳子——無復言」鹽鐵論に「——不言」

【弊袴ヲ愛惜ス】 信賞必罰をいふ、韓の昭侯に弊袴あり、命じて之を藏めしむ、左右曰く、一弊袴なり、何ぞ左右に賜はずして、之を藏めしむる、君も亦不仁者なりと、昭侯曰く、吾聞く明主は一顰一笑を愛むと、今袴は豈特に顰笑のみならんや、吾れ必ず有功の者を待たんと、

【閉戸先生】（戸ヲ閉ヂ）を見よ、

【丙午丁未之歲】「ヒノエウマ」「ヒノトヒツジ」の兩年は禍災多しとの古傳說あり、容齋五筆に「——」、中國過此輒有變故、非禍生於內、則夷狄外侮（中略）

總而言之、大抵丁未之災、又慘於丙午、昭昭天象見於運行、非人力之所能爲也」

【楨榦】 和名「クワリン」「花櫚」に似たれば轉呼すといふ、木の高さ一二丈に及ぶ、幹の皮一二寸毎に、鱗の如く落ちてその痕うるはし、葉は林檎に似て長大にして細かき刻みあり、質堅く互生す、春の末に淡紅の花開く、實は秋熟す「マクハウリ」に似て小さく、末廣く香多し、蜜に漬けて菓とす、木理密に淡紅色にして花櫚に似たれども、質やはらかにして、磨りて光澤なし、蘇頌圖經に「——木葉花實、酷類木瓜云云」

【閉藏】「トヂ」「カクルル」なり、淮南子天文訓に「萬物——」

【弊帚】 身の程を知らずして「ウヌボレル」に喩ふ、文選の魏文帝の典論に「里語ニ曰ク、家ニ弊帚アリ、之ヲ千金ニ享ス、斯レ自ラ見ザルノ患ナリ」とある註に「家ニヤブレタル帚アリ、自ラ以テ寶重ト爲ス者、乃チ千金ニ比ス、此レ自ラ見ザルノ患ナリ」

【幷州ノ兒】 己の第二の故郷ともいふべき地を戀ひ慕ふ情をいふ、唐の賈島の渡桑乾詩に「客舍幷州已十霜、歸心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却望幷州是故鄉」幷州に十年の久しき客寓して歸心が晝も夜も咸陽の都のことのみ思ひたりしが、今又遠く去りて他に行くが爲め、端無く桑乾河の水を渡れり、されば之れまでは旅と思ひし幷州を望めば、却りて故郷の如くなつかしき感ありとの意なり、

【敝蹝ヲ棄ツルガ若シ】（若棄敝蹝）蹝は草履なり、之を遺棄するも、毫も惜む所ろなきをいふ、孟子盡心上篇に「舜視棄天下、猶棄敝蹝也」

【嬖人】 身賤しくして君の寵愛を受くる者、妾などをいふ、左傳隱三年に「公子州吁——之子也註に「賤ニシテ幸ヲ得ルヲ嬖トイフ」禮記の緇衣に「愛妾ヲ嬖御人トイフ」とあるも同じ、

【平津館叢書】 清の孫星衍輯す、主として自ら校正せし古逸書を收め、自著及び近世學者の著書數種をも加へて甲より癸に至る十集に分つ、平津とは嘗て遊官せし地名を、その館に名づけたるなり、

【平章】 平は均なり、章は明なり、よく庶民を平かに治むる義、書經堯典に「克明俊德、以親九族、九族既睦、——百姓、百姓昭明」また公平に物を品評する義、陸游の詩に「——春韭秋菘味」また夫婦を媒合する義、太平廣記に「天寶中范陽盧子、

謁ス其従姑、姑問ヒ盧未ダ婚セ、曰、吾外甥有リ姓郭ノ者、甚ダ有リ容貎、當ニ爲ニ兒ノ婦ト一ス」

【平壌】　もと王倹城と稱し、一に西京といふ、朝鮮の平安道の首府なり、豊公征韓の役、明の大軍と激戰せし古跡にして、又日清戰役にわが第一軍、京城より北進して、この城に據れる清兵二萬餘を殲せし地なり、

【平城】　西漢の侯國、北海郡に屬す、今の山東萊州府昌邑縣の南、また西漢以後北魏に至るまでの縣名、今の山西大同府大同縣の東、また隋以後宋に至るまでの縣名、今の山西遊州和順縣の西一百里に在り、

【屏障】　「ベウブ」ツイタテ」の類、すべて內外の「ヘダテ」となるもの、晉書阮籍傳に「壊府舍ヲ一ヲ使內外相望ム」法令清簡」

【平出】　書式の用語、文中に敬ふべき、文字ある時は、次の行へ上げ出して、その文字を他の行の頭字と平等にするをいふ、

またその文字を他の行へ出し、他の行の頭字よりも一字若くは二字分、上げて書くを擡頭といふ、

【陛楯】　「タテ」を擁して陛下に守衛するをいふ、陛戟に同じ、史記滑稽傳に「秦始皇時置酒、而天雨陛楯者皆沾寒」

【兵書】　兵法の書をいふ、宋以後歷代の制、大學に武學を設け以て武生を養ひ、孫子・吳子・司馬法・六韜・三略・尉繚子・李衛公問對を以て七書と爲し、武學に頒行して講習せしむ、この內、六韜は舊本周呂望撰と題し、三略は黄石公撰と題すれども、二者共に後人依託の書なり、この外、黄帝の時、風后の撰と題する握奇經あれども、隋唐志共に著錄せず、宋史藝文志に始めて載するを見れば唐以後の僞書たること論なし、されば兵書中の最も古くして正しき者は孫子を推して第一とすべし、

【乘燭夜遊】　好景の過ぎ易きを惜み、晝日の遊行のみにては物足らずとして、燭火を乘りて夜遊する義、文選の魏文帝與ニ吳質一書に「年一過往、何可ニ攀援一古人思ヒ一レ乘レ燭良有ニ以也」（燭ヲ乘リ）を見よ、

【萍水相逢】　萍は浮草なり、偶然出逢ひたるを一一といふ、王勃の滕王閣序に「一一一一、盡是他鄉之客」

【瓶水ノ凍ルヲ見テ天下ノ寒ヲ知ル】　（見ニ瓶水凍一知ニ天下之寒一）北史崔浩傳に「夫レ一一一一一一一、嘗ニ肉一臠一識ニ鼎中之味一」

【平生ノ歡】　平素の情好をいふ、漢書の陳餘傳に「勞苦如ニ平生歡一」この註に「勞苦ハ、其ノ勤苦ヲ相勞問スルナリ」とあり、後漢書に「公孫述帝ヲ蜀ニ稱ス、隗囂馬援ニ往キテ之ヲ觀シム、援素ヨリ述ト里閈ヲ同クシテ相善シ、以爲ラク、既ニ至レバ當ニ手ヲ握リテ歡平生ノ如クナルベシト」

【兵燹】　燹は野火なり、一一は兵火に燒かるるをいふ、宋史神宗紀に「詔岷州界、經ニ鬼章一一者賜ニ錢帛一脅從來歸者釋ニ其罪一燔燹は、ノロシ」

【炳然】　炳は明なり「アキラカ」なる貌、廣雅釋訓に見ゆ、

【平泉ノ別墅】　四機活法に「唐ノ李德裕、平泉ノ別墅ニ於テ天下ノ珍木怪石ヲ採リ、園池ノ玩ト爲ス、醒酒石アリ、德裕最モ保惜スル所ロ、醉ヘバ卽チ之ニ踞ス」また曰く「李德裕平泉ニ山居シ、子孫ヲ戒メテ曰ク、平泉ヲ鬻グ者ハ、吾ガ子孫ニ非ズ、平泉ノ一樹一石ヲ以テ人ニ與フル者ハ此レ佳子弟ニ非ザルナリト」

【屏息】　屏は藏なり、氣を藏めて息をなさざるが如くするをいふ、恐れ謹む「サマ」論語鄉黨篇に「屏ニ氣似ニ不息者一」

【平臺紀略】　一卷、清の藍鼎元（鹿州）著す、聖祖の康熙六十年四月より雍正元年四月に至る間、臺灣の賊朱一貴を討平せし始末を紀す、鼎元の兄廷珍、時に命を奉じて征討軍に帥たり、故に書中紀するところ、實錄にして信ずべしといふ、

【平旦之氣】　平旦は天將に明けんとして未だ物と接せざる時なり、清明の氣をいふ、孟子告子上篇に「一一一一、其好惡與ニ人相近也者、幾希」

【兵連リ禍結ブ】　兵亂の久しくやまざる義、漢書匈奴傳に「一一一一、三十餘年」

【平頭】　「テウド」といふ義、白居易の除夜の詩に「火銷灯盡天明後、便是一一六十人」また等頭は同等の義、同人の贈劉夢得詩に「甲子等頭憐ニ其老一、文章敵手莫ニ相疑一」

【兵ニ醉ス】　（醉ニ兵ニ）酒食を以て、兵士を「ネギラヒ」養ふなり、史記淮陰侯傳に「百里之內、牛酒日至、以饗ニ士大夫一一一」

【兵ニ常勢ナシ】　（兵無ニ常勢一）孫子の虛實に「水因ニ地而制ニ流、兵因ニ敵而制ニ勝一、故ニ一一一、水無ニ常形一、能因ニ敵變化而取ニ勝者一、謂ニ之神一」

【米年】　わが國にて、八十八歳をいふ、米の字を析ては八十八となる故なり、夜航詩話に「邦俗八十八ヲ稱シテ一一ト爲ス、亦未ダ典ニ據ニ一ト爲サザルナリ」

【餅ノ罄クルハ罌ノ恥】　（餅之罄矣維罌之恥）餅は瓶に同じ、罌は和名「モタヒ」形は壺に似て大なり、一斛を受

くる者、餅は小にして、罌は大なり、皆酒器なり、罌は盡なり、餅は罌に資り、罌は餅に資る、猶ほ父母と子と、相倚りて命を爲すが如し、故に餅の罌きたるは、罌の恥なると同じく、父母の其の所を得ざるは、子の責なりとの意、詩經小雅蓼莪篇の句なり、また左傳昭二十四年に「詩曰、——王室之不寧、晉之恥也」とあるは、餅を周に比し、罌を晉に比したるなり、周は常に晉を恃む、今周に亂ありて晉之を助くるなきは是れ晉の恥なりとの意、

【兵者詭道也】 詭は正しからざるなり、兵を行るには正道のみに由らず、種種の奇計を用ふるをいふ、孫子始計篇に「——、故能而示之不能、用而示之不用」劉子に「兵者詭道、而行以其智勝也」

【兵者凶器】 人を害するによりていふ、國語に「勇者逆德也、——也、爭事之末也」また韓非子に「——也、不可不審用也」漢書鼂錯傳に「兵凶器、戰危事也、以大爲小、以强爲弱、在俛仰之閒耳」また淮南子に「怒者逆德也、——也、爭者人之所末也」老子に「兵者不祥之器、非君子之器」とあるも、義同じ、

【兵ハ詐ヲ厭ハズ】 (兵不厭詐)兵戰の上には敵を欺くことを咎めざる義、韓非子に「兵陣之閒、不厭詐僞」

【兵ハ神速ヲ貴ブ】 (兵貴神速)兵を用ふるは神速を要する義、魏志郭嘉傳に「太祖將襲袁尙、嘉言——」歐陽修の王彥章畫像記に「乃知古之名將必出於奇、然後能勝、然非審於爲計者、不能出奇、奇在速、速在果」とあるも亦この意なり、

【兵ハ拙速ヲ聞ク】 (兵聞拙速)兵を用ふるは拙くとも速かなるを貴ぶ義、孫子作戰篇に「——、未覩巧之久也」

【兵ハ猶火ノ如シ】 (兵猶火也)下に「不戒將自焚也」とあり、左傳に出づ、

【平反】 獄を斷じて、その罪をゆるし、活かしむるなり、漢書雋不疑傳に「不疑京兆尹ト爲ル、縣ヲ行リ、囚徒ヲ錄ス、還ルゴトニ其ノ毋問フ、——スル所ロ無ケレバ毋喜ビ、飮食ヲ爲シ言笑ス、或ハ出ス所ロ無ケレバ毋爲メニ食セズ、故ニ不疑ガ吏ト爲ル、嚴ニシテ酷ナラズ」

【屛風】 唐書の房玄齡傳に「治家有法度、嘗恐諸子驕侈、席勢凌人、乃集古今家誡書爲——令各取一具、曰留意於此、足以保家矣」(——)を見よ、

【平復】 病氣の全快する義、韓詩外傳に「上古醫曰弟父」(中略)諸扶輿而來者——如常」

【米芾】 字は元章、宋の襄陽の人(一ニイフ吳ノ人)南宮、また海嶽外史また鹿門居士と號す、文を爲る奇險、特に書に工にして、又畫を能くし山水人物に妙なり、鑒識に精しく、古器物書畫を愛す、官禮部員外郎に至り、淮陰軍に知たり、大觀元年卒す、年五十七、著す所ろ米芾書畫史、海岳名言等あり、法帖には、天馬賦、西園雅集記等數十種あり、子友仁字ハ元暉その文詞書畫、深く家法を得たり、芾性好潔癖を成す、人と巾器を同うせず、多く奇石を蓄ふ、世と俯仰する能はず、故に仕途數ゝ困せり(奇石ヲ)を參看せよ、

【弊衣】 經營の貌、また心力をつからす貌、莊子逍遙遊に「執ト——然以天下爲ル事」

【平民】 庶人をいふ、書經呂刑に「蚩尤惟始作亂、延及于——」一說に、平は善なり、農民をいふ、先王農を以て本と爲すに由る、

【屛面】 面を蔽ふ物なり、便面に同じ、漢書王莽傳に「莽常ニ露ニ——一非親近ニ莫得見也」

【聘問】 禮記の曲禮に「諸侯大夫ヲシテ他ノ諸侯ヲ問ハシムルヲ聘トイフ」儀禮の聘禮に「大聞ヲ聘トイヒ、小聘ヲ問トイフ」

【丙夜枕ヲ安ンゼズ】 天子の深夜まで國事を憂ひて安眠したまはざる義、唐書循吏傳序に「太宗嘗テ曰ク、朕天下ノ事ヲ思ヒテ、丙夜不安枕、永ク治人ノ本ヲ惟フニ、刺史ヨリ重キハ莫シ、故ニ姓名ヲ屛風ニ錄シ、臥興之ニ對シオ否ノ狀ヲ得テ輒チ之ヲ下方ニ疏シ、以テ廢置ヲ擬ス」丙夜は夜の十二時なり、

【柄用】 重く用ひられて、政の權柄を握るをいふ、漢書谷永傳に「永知鳳方見——、陰欲自托ニ鳳ハ王鳳、

【猱牢】 牢獄をいふ、猱は一に隄に作る、牢なり、易林に「失意懷憂如幽——」

【平涼】 北魏の涇州——郡は、今の甘肅——府——縣の西南に在り、隋の雍州——郡は、今の——府固原州治これなり、隋以後は、縣名にもあり、元、明の陝西省——府——縣は卽ち今の平涼縣治これなり、

【蓍筮】 和名「イタビカヅラ」一種の蔓草、その實食ふべし、木饅頭といふ、祕傳花鏡に「——一名巴山虎、無根可以緣木而生、藤蔓葉厚實而圓勁如木、四時不凋、在石曰石綾、在地曰地錦、在木曰長春藤、好敷岩石與墻上、紫花發後結實云云」方干の詩に「隱戶涼生——風」

また屈原の離騷に「貫——之落蘂」註に「——、香草ナリ」とあるは別種の草に似たり、